

名 称	寺 内 正 毅 文 書
標 題	附 錄 推 件 綴

分 類 番 号	
	439
	26

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

第廿號

附錄雜件

共進會_三降_二朝鮮統治_三對_二記者大會_三
決議

大正水利組合件

朝鮮皮革會社件

平壤砲兵工廠設置法件



乙未年正月廿一日

決議

始政五年記念朝鮮物産博進今
機上皇國記者大會ヲ開クニ
當リ支人ハ朝鮮保合以來官民
一致ノ努力、依リ諸般施設

改良進歩、實に頗る見可なり

ア、^ル認、將來益々半島進

歩發展セシコトヲ望

大正四年九月二十三日

全國記者大會

謹啓

過日、推系御健勝、上尊容、
拜シ為邦家必悦至極、幸存候

不肖寛太郎

恐懼、至リ堪へず候得共、我

大正水利組合事業、為熱誠

ヲ注ギ謹デ、總督閣下、奉謝候

大正水利組合、事業、ニ関シテハ

既ニ屢々承配慮、仰ギ且時々

狀況ヲモ奉届申上置候間、定メ

其概要、法承知被成下候事

奉恐察候、不肖寛太郎敢テ自ラ

揣ラ、此事業ヲ計劃シ、経営

慘澹今日、至レルモ、決シテ只一

奉陪察候不肖寛太郎敢テ自ラ

揣ラズ此事業ヲ計劃シ経営

慘澹今日ニ至レルモ決シテ只一

身一社ノ利ヲ是思フガ爲ノミニ

無之一ニ在鮮事業家ノ如カ

トシテ荒地ヲ変ジテ美田タラシメ

年産實ニ叔斗拾五萬石其價

格百五拾萬圓聊カ朝鮮産

業開拓ノ爲ノニ貢獻スルヲ得

ルノミナラズ滿鮮國境ニ於ケル此

事業ノ成功ハ一面亦滿鮮地方

民心ニ與フル影響必ズ良好

ナルベキヲ念トシ着手以來心無

傾注シ寢食ヲ忘レテ奔走努

力致来候處不二興業株式會
社、事業タル数里、築堤及
幾多、閘門等既ニ竣工ニ
近ク是が爲メニ投ゼル資金既
四拾五萬圓年内正ニ五拾萬
圓、投資額ニ達シ四千町歩即
貳方里以上、一大新地、出現ヲ
見ルニ至レルモ是しが灌漑目的
トセル大正水利組合ハ昨年組
合ノ承認可ヲ得タル以來既ニ一
年貳ヶ月未ダ資金、調達ヲ得
ズシテ徒ラニ東奔西走精力ヲ空
費スルノミ前途茫漠歸着スル
所ヲ知ラズ轉憂心集慮相極

ノ居候

現今朝鮮唯一、拓植金融
機關タル東洋拓植株式會社
ハ其爲ス所世ニ定評アルカ如ク諸
事殆ンド言フニ足ル我大正水利
組合資金、如キモ昨年拾月借
入、申込ヲ爲シタル以來一々年後
、今日尚夷地、調査ヲ爲サズ
枳上、宣誨ニ没頭シテ無益、書
類往復ニ、貴重ノ光陰徒
消致居候實況一々其誠意
ヲ認ムル能ハズ候思フニ東洋
拓植株式會社、如此帝國

農界空前、大事業が不肖寛太郎
の手ニ依リテ成功セラル、ヲ喜バザルが
如ク故意ニ口實ヲ設ケテ遷延シ
居レルモ、ト思ハシムベキ理由二三ニシテ
止マラズ候如斯ニシテ徒ラニ遷延セ
シカ不二興業株式會社、數十萬
圓ヲ投ジテ築造セル新地宜シク
蘆荻ノ生ズルニ委シ或ハ倒産
不幸ニ遭遇スルヤ未ダ知ルベカラザ
ル次第ニ未座候既ニ去九月中
不二興業株式會社、重役等
シテ親シク西郷ニ伴ナヒ事業
地ヲ實見セシメ候處其壯大
ナル事業、光景ニ驚嘆スルト

同時ニ水利ノ未ダ起工セラザル
ヲ悲觀シ再未頓ニ資金ノ
払込ニ躊躇スルニ至リ事業
経営上進退維谷ノ窮境ニ
陥リスル場合ニ至リ申候此
種事業ハ最後迄其目的ヲ
遂行セバ必ず成功シ得ベキニ及ミ
中途ニシテ挫折セバ寧シク有利
事業ヲ抱キテ失敗セザルベカラサル
事彼神野新田ノ場合及肥
後八代郡築新地ノ前例依
リテ明瞭ニ有之況ンヤ其有利
ノ程度到茲同目ノ談ニ及ミ
要ハ只資金供給ノ點ニ帰

着致候次第ニ未座候

大正水利組合事業、良否及
其設計、当否等、既ニ再三
当局、調査セラレシ所ニ有之
且企劃以來既ニ三年有半
組合ニ於テモ研究ニ研究ヲ加ヘ
タルモ未タ何等、進歩ヲ發見
セズ只米價が一時異常、低落
ヲ示シタルモ元ヨリ一時現象ニ過
ギズ既ニ回復ニ向ヘルミナラズ數年
ナラズシテ食料米、欠乏ハ是レヲ外
國、供給ニ仰ガザルベカラザルニ至ル
ベキハ明瞭ニ有之彼歐州戰
乱、實騷ニ徴スルモ一國食料

問題ハ國勢上重大ノ關係

アルニ鑑ミ新地ノ開墾未作、

増進ニ益々奨勵セザルバカラザル

モト奉存候、彼、藤田家、

兎島灣ニ於テ千貳百町歩、

開田ニ對シテ叁百貳拾萬圓

ヲ支セセルニ比シテ事業ハ七千町

歩、水利ニ三ヶ年間、利息ヲ合シ

僅カニ百叁拾萬圓不二興業株

式會社四千町歩、開田ニ對シ僅

カニ六拾萬圓ヲ要スルニ過キテ候

處若シ水利遷延、爲メニ事業

失敗ニヨリセンカ將來朝鮮事業

振興上少ナカラザル惡影響ヲ見ルハ

キミナラズ壹千貳百名、鮮人組合
員が總督府、施設に對せん
信賴ヲ傳弱ナラシムルニ至ルベキ事ト
幸存候、今田山岡技師、特命
ヲ以テ事業地ヲ調査せし去六日
歸任せしタル由定メテ事業地、實
情ハ委曲未復命有之候事ト
奉存候處、若シ此未復命ニシテ
事業上、疑問アラバ組合、更ニ
慎重研究ヲ加ヘ設計ヲ改メ、實
行可致ス幸ニシテ確實安全ナリト、
断定ヲ得バ何卒、總督閣下
特別、速詮議ヲ以テ、或ハ朝鮮
銀行、資金ヲ以テ、各道農工

往年、臨益水利組合、如く或
其他、方法ニ依リ敏速快決
資金、調達ヲ得直チニ起工、
運びニ至ラシメラレシ事ヲ伏
奉、惓願候茲ニ直接

閣下ニ訴願スルノ不敬誠ニ恐
懼ニ堪ハズ候得共從來屢々
各部長官以下當局迄配
慮ヲ仰ギ候得共未ダ其目的
ヲ達ス能ハズ茲ニ不得已

閣下、尊嚴ヲ冒シ候多罪
謝スル處ヲ知ズ候大正水利組
合七千町歩、灌漑ト不二興業

株式會社四千町步、開墾、其
規模、大ナル契ニ於テ帝國農
界空前、事業ニ有之幸ニシテ水
利資金、調達ヲ得バ起工後
拾六ヶ月間ヲ以テ盟テ其完成
ヲ期シ粉骨碎身組合爲ニ
相成ラシ事業、効果事ヲ國利
民福ヲ計リ聊

閣下朝鮮統治中、一事
績ヲ得ベキ様熱血ヲ注ギ奉
公可申上覺悟ニ達座候我大正
水利、命名決シテ只年號ヲ
冠セシメタル儀ニ多ク之實ハ

大將閣下未統治中、事業

先事ヲ紀念センガ爲メニ外ナラズ
候右大正水利組合事業、
爲メ満腔ノ熱誠ヲ披瀝シ謹
テ閣下ニ遠高配ヲ仰ル候
恐惶謹言

大正四年拾貳月八日

大正水利組合長

藤井寛太郎

朝鮮總督

伯爵寺内正毅殿

閣下

主管

電

受

總督

政務總監

總務局長

秘書官

主任。

大正四年十二月十一日午後七時

十五分 東京 發

池邊祇書官

宇佐美長官

第九

號

暗号

未電拝承大正水利組合ノ件
ハ過日書面ヲ以テ總督ニ上
申シタル如ク土木局長ノ意
見モ有リ為念山岡技師ヲシ
テ實地調査ヲ遂ケシムルコトナ
リ既ニ調査ヲ了セリ其ノ結果

ノ大要ハ秋山参事官ニ總督へ報告
 方傳言ヲ托シ置ケリ尚東拓會社
 村田理事ニ對シ同會社ヨリ出資方
 交渉シタルニ同理事ノ言ニ據レハ同
 理事ハ可成出資ノ見込ヲ以テ七八月
 ノ頃ヨリ調査ニ從事シ不備ノ点藤
 井ニ説明ヲ求メタルモ藤井ハ多ク
 不在勝ナルト又^{ウシヨ}調書ヲ提出セサルトニ
 因リ調査ヲ了スル能ハス荏苒今日
 ニ及ヘリ再三督促ノ上不完全ナカラ

畧、書面上ノ調査ハ纏マリタルニ付諸
事準備ヲ整ナヘ来ル十四日實地
調査ノ為係員ヲ派遣スト確言セリ
昨日村田ヨリ藤井トノ交渉日誌ヲ
提出セルカ之ニ據ルトキハ藤井カ工
事設計其ノ他ニ関シ東拓ノ質問ニ
對シ満足ヲ與ヘ居ラサルハ事實ニ
シテ東拓理事トノ交渉圓滑ナラ
サリシニ就テハ其ノ罪ノ一半ハ藤井
ニ在リト認ノラル右経過ノ大要總督

へ御上申アリタク尚荒井長官ニ於
テモ豫テ東拓ヨリ出資セシムヘシトノ
意見ニ付同長官ヨリ東拓總裁ニ可
然談セラルル様御傳言ヲ乞フ

電信（親展）

二六

午後三時四十分

藤井寛太郎宛

現王総務局長

本月八日附貴簡ハ総督閱視セラル由ニ先

タチ總督ヨリ本件ヲ速ニ相當処理スル旨

本府ハ申送ラレタルニ本府ハ技師ヲ派遣シ実

地踏査ノ結果組合ノ設計ハ大体ニ於テ不

適當ノ矣ナレトノ意見ヲ有ルニ報告ニ来レリ

又東拓ニ對シテ元暴ニ同様ノ意味^{ニテ}申入レシ

タルガ同社ニテモ先般末種々調査ノ事實出

ニ異存ナキコトニ決定スル趣^ナ御意知

ニ付不遠何分ノ処置ヲ見ルト、愚料ス尚

~~御意~~ 本件ノ処分遷延セルハ從來同

社ニ對スル貴殿ノ態度稍明瞭ニ缺^キ

昭和七年七月

米方 回

其

殊：最近、問合の事項に對し御不在

第413号に於てお集り

中上之未々満足ナル回答ヲ與ヘラレタル事

事情ニ由リ此等ノ事項角々將來

近刀お集り可半_{促カニ}速ニ返シノ極限

御注意ヲ貴 右命、依、回答旁申

進ス

主管

電

受

總督

政務總監

總務局長



秘書官

主任

三十三日

大正四年十二月十三日 午後七時

五十分

川口 東 發

児玉局長

藤井寛太郎

第 平文 號

御懇篤ナル尊電ヲ拝讀
ニ感激ニ堪ヘス尚以上共御
配慮ヲ仰ク
總督閣下ヘモ宜敷御傳達
乞フ

このうち二

寺内総務長

パトログランド

小田切

(世田谷区役所)

四月廿二日午後三時半頃

(午後)

朝鮮皮革会社、佐渡ト昨日面会、
御書面要領セリ昨日佐渡經理本部
至リ交渉ノ結果、依ニ都合能ク運フヘキ
様子ナリハ官モ近ク陸運次官ト面会、
セニ付キ談話スル等

總督了

總務局長



皮草會社
役員

見

總督

大正五年四月二十日午前七、一〇接

露都

小田切

朝鮮皮革會社、文部、一時絶望ニ

至リ、小官經理、本部長ニ對面

ノ上依頼セシニ、彈藥出金二百萬ノ注文定メ

ル靴、大倉組ノ見本ト同一ニテ受領ス

コトニ該列殆レド決定セリ

永
生
月

布
施
法
治

大
阪
市
立
大
学
医
学
部
附
属
病
院
内
科
第
一
病
房

of
August 25th

"*Hyphomyscus*" "Mekis" "Harmattan" "Cabo-Maurice"

十月廿三日

謹此金以情詳與各師者本書
持系，布施勝法，其久，大坂每日
新聞通信員トシテ青地、佛土之先
次、寺符兒王總務局長ト電報ト以
テ京城、天日精米所代表者トシテ紹介
相成リ、朝鮮米賣込、關係ニ先ニ
有者、交令回歸朝鮮、途次、青地
經由、以テキチ付、日人等、地著、際、少引
見、上、第、閣下、布施、鮮米賣
込、関、先、事情、詳細、日人、界、中、聞、取

本國之權收放以如照以旁以米
意候教書

大正五年九月三十日

本國

元帥伯爵壽內正毅殿

(主管)

電

送

大正五年 十月二 日 午 二 時

分發

總 督

政務總監

總務局長

秘書官

主任

第 一 號

重南

工務局長

池田

砲兵工廠ノ手帳ニ設置セラルキ旨ニ
民大令ノ名ヲ以テ昨ヨリ電報ヲ發出ス
茲ニ奉答ノ事ニ既ニ此旨ヲ下シ存スル
以テ此ノ旨ニ奉答シ運動等ニ切實留
心此措置アリトシ依命

總結

平壤市民大會

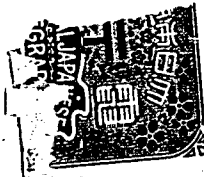
砲兵工廠是非我平壤

設置サレシコトヲ執望大御

配慮ヲ仰グ

七月五日午後接文





紙 達 送

●注意

万 他人に宛てたる電報の断絶を受けたる場合は其由を付箋し直に之を配達したる電信局所に返展せらるへく決して其受取本人へ直送し又は手渡しせざることを

●注意

受付月日の記入を省略したるものは受付の當日著局に於て受領したるものとす

局 著		局		發		名氏所居人信受	
第 三	第 三	第 三	第 三	第 三	第 三	第 三	第 三
時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分
字	字	字	字	字	字	字	字
日	日	日	日	日	日	日	日
號	號	號	號	號	號	號	號
定 額				名氏所居人信發			
事 記				印 附 日 局 著			
印 附 日 局 著				印 附 日 局 著			

印刷局製造

名 称	寺 内 正 毅 文 書
標 題	総督府施政歴史調査類

分 類 番 号	
	439
	27-1

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

孤
調

查

音

卷

五

音

前

視

鴻

集

總說
之
部

朝鮮施政方針及施設經營

總說

古來帝國ト韓土トハ特殊ノ關係ヲ有シ夙ニ一統ノ國家ヲ成スヘキモノナリシニ其ノ離合常ナク中世以來全然相別ルルニ至リタルハ其ノ當然ノ結合ヲ妨クヘキ外部ノ事情アリタルカ故ノミ蓋シ國家ノ離合集散ニハ自カラ法則ノ存スルアリ地域相接スルカ人種相同シキカ文化相均シキカ將タ利害相倚ルカ縱令ニ其ノ一アルモ尚ホ合シテ一團

ノ國家ヲ構成スルニ足ル況ニヤ日韓關係ノ如ク
此ノ四者ヲ併セ有スルニ於テヲヤ其ノ漸ク今日ニ
於テ一家タルニ至リタルハ寧ロ其ノ晚ヲ嘆スヘキ
ノミ按スルニ桓武ノ朝日韓同族ノ言説アル載籍
ハ擧ゲテ之ヲ燒棄シ加フルニ韓土ニ於ケル古代文
獻ノ散逸シタル結果トシテ往昔ノ實情ヲ確
知スルニ由ナシト雖而カモ今日ニ現存セル彼我ノ
史書ニ據ルモ尚ホ相互密接ノ予繫ヲ髣髴スル
ニ難カラス但タ我カ天智帝專ラ力ヲ内治ニ效セ
シヨリ以來兩國ノ間漸リ疎隔ニ赴キテ終ニ分立

スルニ至リ近代ニ及ヒ帝國ハ韓國ヲ扶植シテ自衛ノ
途ヲ講シ且東洋ノ平和ヲ維持スルヲ以テ其ノ國是
ト定メ甲午甲辰兩役ニ於テモ亦此ノ旨趣ニ基キ
韓國ノ獨立ヲ保障シ唯々從來對外關係上幾多
ノ禍根ヲ發生シタル事實ニ鑑ミ韓國ノ外文權
ヲ我ニ收ムルト共ニ其ノ内政ノ改善ニ努メムト欲
シ之カ爲メ故統監伊藤公爵ハ心血ヲ瀝キテ其ノ
任務ノ遂行ニ竭シタリ然ルニ韓國ノ腐朽ハ既ニ
其ノ極度ニ達シ邦土ハ荒廢シ民衆ハ疲憊シ之
ニ加フルニ其ノ政府ハ積弊纏綿如何ニ忠言戒告

ヲ與フルモ自ラ改進ノ途ヲ開クニ由ナク内ニハ匪
徒草賊横行スルモ克ク之ヲ鎮壓スル能ハス外ハ依
然トシテ權謀術數ヲ弄シ或ハ竊カニ求援狀ヲ
列強ニ發シ或ハ海牙萬國平和會議ニ密使ヲ派遣
スル等益ニ事端ヲ醸生セムトスルノ狀アリ斯クノ如クニ
コレ韓國ハ到底自立獨行スル能ハサルノ境遇ニ陷リ如
何ニ帝國カ誠心銳意其ノ扶持ニ盡瘁スルモ遂ニ所
期ノ效果ヲ收ムルノ見込ナキニ至レリ是レ實ニ韓國
併合ノ止ムヲ得サリシ所以ナリ而カモ其ノ併合タルヤ
歐洲諸國カ半開又ハ劣等ノ民族ヲ併吞シタモノト

全然其ノ類ヲ異ニセリ彼ニ在リテハ孰レモ強制的ノ
手段ニ依リタルノミナラス形式カ將タ實質ニ於テ宗
屬ノ關係ヲ存シ母國ト殖民地トノ間ニ一定ノ畛域ヲ
置カサルハナク殊ニ根本的ニ地勢人種ヲ異ニシ風俗
習慣モ亦懸絶セルカ為メ政治上ニ於テモ社交上ニ
於テモ遂ニ混和融合スルヲ得サルノ運命ヲ有スルモ
ナレトモ日韓ノ關係ハ之ニ反シ帝ニ其ノ地域ノ唇齒相倚
リテ古來密接ノ利害關係ヲ保ラルノミナラス同種同
文ニシテ習俗風教モ亦大差ナキヲ以テ相融合同化ス
ルヲ得ヘシ但タ帝國ハ四方環海ノ島國ニ位シ内訌

外患ノ虞少ナク專ラ世界ノ大勢ニ伴ウテ進展シ
得タルニ及シ韓國ハ不幸ニシテ外強鄰ノ壓迫ヲ
受ケ内徙ラニ政争ヲ事トシ遂ニ時世ノ進運ニ遅
レタルノ差アリ故ニ今日ニ於テモ其ノ間自ラ先覺
後進ノ別ナキヲ得ス是ニ於テ當面ノ急務ハ朝
鮮人ヲ誘掖啓發シテ文明ノ域ニ進メ以テ忠良ナ
ル帝國臣民タラシムルニ在リ是レ韓國併合ノ本旨
シテ他國ノ事例ト異ナル所以ナリ故ニ韓國ノ併合
ハ帝ニ國際上ノ禍根ヲ除キテ東洋ノ平和ヲ維
持スル所以^{ナリ}ハ^{ナリ}ナラス遽ニ八萬餘方哩ノ邦土ト一

千三百餘萬ノ人口ヲ加ヘ帝國ノ擴大安固ヲ致シ
タルモノト謂フヘシ

韓國併合ノ當時其ノ統治方針トシテ最モ縝密ノ
考究ヲ要シタルハ帝國憲法カ朝鮮ニ施行セラ
ルヘキヤ否ヤヲ決スルニ在リ蓋シ帝國憲法ノ明
治二十二年ヲ以テ制定セラルルヤ將來帝國ノ版
圖擴張ノ場合ノ如キ固ヨリ豫想ノ外ニ在リタルヤ
疑フヘキニ非スト雖旣ニ憲法カ大日本帝國ニ施
行セラルルコトヲ規定シ而シテ朝鮮カ帝國ノ版
圖ニ歸シタル以上ハ理論上此ニ憲法ノ及フヘキハ

當然ノ事ニ屬ス然レトモ朝鮮ノ事情頗ル内地
ニ異ナル所アリ今俄ニ帝國憲法ヲ實施シ朝鮮
人ノ權利義務ヲ規定スルニ悉ク法律ヲ以テスルカ
如キハ事實上到底實行シ得ヘカヲサル所ナルニ
因リ帝國政府ハ明治四十三年七月十二日ノ閣議ニ
於テ韓國併合ノ上ハ帝國憲法ハ當然此ノ新領
土ニ施行セラルルモノト解釋スルモ事實上新領土
ニ對シ憲法ノ各條章ヲ施行セサルヲ適當ト認
メ憲法ノ範圍ニ於テ除外法規ヲ制定スルコト
トシ左ノ通り決定セリ

一 朝鮮ニハ當分ノ内憲法ヲ施行セス大權ニ依リ
之ヲ統治スルコト

二 總督ハ天皇ニ直隸シ朝鮮ニ於ケル一切ノ政務ヲ
統轄スルノ權限ヲ有スルコト

三 總督ニハ大權ノ委任ニ依リ法律事項ニ關スル命
令ヲ發スルノ權限ヲ與フルコト但シ本命令ハ別
ニ法令又ハ律令等適當ノ名稱ヲ附スルコト

四 朝鮮ノ政治ハ努メテ簡易ヲ旨トシ政治機關モ
亦此ノ主旨ニ依リ改廢スルコト

五 總督府ノ會計ハ特別會計トナスコト

六 總督府ノ政費ハ朝鮮ノ歲入ヲ以テ之ニ充ツ
ルヲ原則トスルモ當分ノ内一定ノ金額ヲ定
メ本國政府ヨリ補充スルコト

七 鐵道及通信ニ關スル豫算ハ總督府ノ所管
組入ルルコト

八 關稅ハ當分ノ内現行ノ儘ニ爲シ置クコト

關稅收入ハ總督府ノ特別會計ニ屬セシムルコ
ト

九 朝鮮ニ於ケル官吏ニ其ノ階級ニ依リ可成多
數ノ朝鮮人ヲ採用スル方針ヲ採ルコト

總督府ハ叙上ノ方針ニ依リ併合後必要ナル措置ヲ
執リ遺算ナキヲ期シタリ將來ニ於テモ亦特殊ノ
事情ノ發生セサル限リ此ノ旨趣ヲ遵奉シテ渝ル
所ナカルヘシ尚ホ併合ト同時ニ總督府ヲ置カレ
タリト雖直ニ職員全部ノ任命ヲ行フ能ハサル事
情アリレヲ以テ先ツ勅令ヲ以テ當分ノ間統監
府及其ノ所屬官署ヲ存置シ朝鮮總督ノ職務
ハ統監ヲシテ之ヲ行ハシメ而シテ總督ハ委任ノ
範圍内ニ於テ陸海軍ヲ統率シ一切ノ政務ヲ統
轄セシムルコトニ定メラレタリ尋テ明治四十三年

九月總督府官制：依り總督ハ陸海軍大將ヲ以
テ之ニ充ツルコトニ定メラレタリ想フニ總督ハ
天皇ニ直隸シ委任ノ範圍内ニ於テ陸海軍ヲ
統率シ及朝鮮防備ノ事ヲ掌リ且憲兵司令
官ヲ以テ警務總長ニ充テ治安ノ維持ニ於ケル
共同任務ニ関シ憲兵及警察ヲ統一合同シ
ル結果總督ハ直接陸軍將校ヲ指揮スルノ任
務ヲ有スルノミナラス朝鮮ニ在テハ臺灣又ハ
樺太ト其ノ趣ヲ異ニシ嘗テ文武權ヲ總統セ
ル皇帝ノ下ニ統治セラレタル疆土ニ於ケル總督

ハ宜シク總テノ文武官ノ上ニ立テ以テ民衆ヲレテ
歸嚮信賴スル所ヲ知ラシムルノ必要アリ是レ陸海
大將^軍ヲ以テ朝鮮總督ニ充ツルコトニ定メラレタ
ル主ナル理由ナリトス

一般ノ政務ニ關シテハ繁縟ヲ省キ簡捷ヲ主トスル
ノ目的ヲ以テ大ニ政治機關ノ改廢ヲ行ヒタリト雖
其ノ改廢ノ必要アリシハ專ラ中央ノ行政機關ニシ
テ地方行政ニ至テハ從來全ク等閑ニ附セラレタル
ヲ以テ却ツテ振作擴張ヲ要スルモノアリ是レ政
治機關ノ整理上先ツ中央ニ減シ地方ニ加フルノ

方針ヲ執リタル所以ナリ

又韓國併合後ニ於テハ朝鮮人ノ國法上ノ地位ヲ
定ムルノ必要アルヲ以テ明治四十三年七月八日
閣議ニ於テ左ノ通り決定セリ

一 朝鮮人ハ特ニ法令又ハ條約ヲ以テ別段ノ取
扱ヲ為スコトヲ定メタル場合ノ外全然内地
人ト同一ノ地位ヲ有ス

二 間島在住者ニ付テハ前項ノ條約ノ結果ト
シテ現在ト同様ノ地位ヲ有スルモノト看做
ス

三 外國：歸化し現に二重ノ國籍ヲ有スル者ニ付テ

ハ追テ國籍法ノ朝鮮ニ行ハル迄我國ノ利
害關係ニ於テ日本臣民ト看做ス

併合後ニ於ケル朝鮮人ノ待遇ニ付テハ一ニ叙上ノ方
針ニ依リ總テ日鮮人間ニ差別ヲ置カス特殊ノ
事情アルモノヲ除クノ外平等ノ取扱ヲ為スコトトシ
民刑ニ關スル法規モ亦此ノ旨趣ヲ以テ制定シタ
リ

間島：於ケル朝鮮人ニ付除外例ヲ設ケタルハ明
治四十二年間島ニ關スル日清協約ニ依リ商埠地

外ニ居住スル朝鮮人ハ從來ノ例ニ依リ清國法律
ノ管轄ニ服スヘキ旨ヲ規定シタルヲ以テ若シ朝
鮮人ヲ日本臣民ト看做スノ主義ヲ之ニ適用スル
トキハ他ノ純然タル帝國臣民ト均シク我カ治外
法權ニ服スルコトトナリ該協約ノ旨趣ニ反スル結果
ヲ來スヘキカ故ナリ又歸化ニ付テハ從來舊韓國
ニ於テハ之ニ關スル法令ナキヲ以テ韓國人カ外國
ニ歸化スルモ本國ノ國籍ヲ失ハサルニ依リ歸國
スルトキハ依然韓國人トシテ取扱フヲ例トセリ而シ
テ依然此ノ舊例ヲ認メタル所以ハ韓國人中米

國及ハ露領ニ在ル者往往不逞ノ企畫ヲ起シ内外
相呼應シテ治安ヲ害スルノ言動ニ出ツル者尠カラ
ス故ニ若シ此等ノ韓國人ニシテ歸化ノ後々本國ニ
歸テ外國人タル權利義務ヲ行使スルトキハ其ノ取
締上不便尠カラサルヲ以テ總テ韓國人ノ外國歸化
ハ本國ニ於テ之ヲ認メサルヲ得策ト認メヨリルニ
由ル

韓國併合當時ニ於ケル外交關係ニハ何等緊累ノ
伴フモノナク既ニ日清日露ノ兩役ニ依リ韓國ヲ
シテ全然鄰強ノ羈絆ヲ脱セシメタルノミナラズ

日英協約、依り帝國ハ韓國ニ於テ政治上、軍事上
及經濟上卓絶ナル利益ヲ有スル旨ヲ宣明シ且
明治三十八年十一月ノ日韓協約ヲ以テ韓國ノ外
交權ヲ我ニ收ムルニ方リ歐米各國ハ直ニ我カ
保護權ヲ承認シ韓國ヨリ其ノ外交代表者ヲ引
揚ケタルヲ以テ韓國併合ノ實行ニ際シテ、唯々
在東京各國代表者及在京城各國領事官ニ對シ
一片ノ通告ヲ與フルニ止マリ別段ノ交渉ヲ遂クルノ
必要ナカリシト雖併合後ニ至リ朝鮮在留外國人
ハ取扱ニ關シ多少ノ提議ヲ爲シタル國ナキニ非

ス其ノ正當ナルモノ及我ニ損害ヲ及ボササルモノハ
大概之ヲ容認セリ其ノ中英國政府ノ希望
ニ係ル從來ノ関稅率ヲ再後十年間拓置ノ事
如キ最も重要ナルモノトス又既ニ朝鮮ニ於テ先
外法權ヲ撤回セシメタル以上外國居留地制度ヲ
モ廢止スルハ當然ノ結果ナリト雖其ノ廢止ニ
伴フテ外國人ノ私權ニ関スル處理ヲ要スルモノ
アルヲ以テ相互ノ便宜上此等ノ細目ニ関シ別ニ
協定ヲ遂クルコトトセリ而シテ此等外國居留
地ノ整理方針トシテハ外國居留地ヲ我カ地方

行政區域ニ編入シ各國居留地會ノ事務ヲ我カ當
該官廳ニ引継キ永代借地權ハ借地者ノ希
望ニ依リ之ヲ所有權ニ代ヘ否サルモノハ依然永
代借地權トシテ之ヲ存続スルモ課税及處分ニ
關シテハ内國臣民ト大體同一ナラシムルコトニ定メ
大正三年四月一日ヨリ之ヲ實行シ茲ニ全ノ外國ノ
司法及行政ノ事務ヲ我ニ回收スルヲ得タリ故
ニ將來ニ於ケル外國人ノ取扱ニ付テハ其ノ鑛
業及土地所有ニ關シ従前正當ニ獲得シタル
權利ヲ除ク外ハ何等ノ特典ヲ設定スル必要

ナキニ至レリ

舊韓國ノ財政ニシテ外國ニ關係ヲ有スルモノ殆ト絶
無ナリシハ朝鮮ノ統治上洵ニ幸ナリト謂フヘシ但夕外
國ニ對スル債務ト看做スヘキモノハ清國招商局ヨリ
韓國ノ商務興利ノ為メ規銀二十一萬兩及電報局
ヨリノ郵便電信ノ設備ニ關シ庫平銀十萬兩ヲ
借入レタルモノアリシニ過キス尤モ帝國政府ハ韓國
ニ保護制度ヲ實施シ次ヲ日本人ヲ韓國官吏ニ任
用スルコトトシ其ノ施政ノ改善ヲ圖ラムカ為メ行政
各部ノ擴張、裁判所ノ構成等ニ要スル經費ノ不

足ヲ填補スル目的ヲ以テ明治四十年年度ヨリ同四十
五年度ニ亘ル六箇年間ニ總計一千九百六十八萬餘
圓ヲ限リ無利子無期限ニテ韓國政府ニ貸與スル
コトヲ約シ再來併合當年迄一千四百二十餘萬圓
ヲ交付シタリ是レ韓國ノ唯一國債ニシテ而カモ此
ノ貸付金ハ併合ノ結果トシテ消滅シ又内國債ト
稱スヘキモノナク勿論外國ニ對スル債權モ存在
セカリシヲ以テ併合ト同時ニ帝國政府ハ朝鮮
ノ債權債務ヲ引受ケタルニ拘ハラズ事實上格別
ノ處理ヲ要スルモノナカリシナリ但チ舊韓國政府

ハ國家ノ形式ヲ具備シタルニ止マリ何等積極的ノ施設
ヲ爲ス所ナク助長行政ノ如キハ全然缺如セル狀態
ナリシヲ以テ併合後諸般ノ整理及改善ヲ圖ラムカ
爲ニハ當時ノ歲入ヲ以テ足レトセス因テ再來毎年
一定ノ金額ヲ本國政府ヨリ補充スルコトト定メ此ノ補
充額ハ明治四十四年及大正元年度ニ於テ各一千二百
三十五萬圓ナリシカ大正二年度ニ於テ之ヲ一千萬圓ニ
減シタリ而シテ大正三年ニ於テ再後五年間ニ於テ
漸次此ノ補充金ヲ遞減スルノ目的ヲ以テ地稅ノ
増率並市街地稅及煙草稅ノ新設等ニ依リ其ノ

財源ヲ求ムルノ計畫ヲ樹ラタリ此ノ計畫ニシテ
文障ナリ進捗スルニ於テハ自今五年ノ後ニ至リ帝
國一般會計ヨリノ補充金ヲ要セサルヘシ

韓國併合ノ當初ニ於テ最モ慎重ナル考量ヲ

要シタルモノハ韓國皇室及功臣ノ處分ナリトス蓋

シ其ノ措置ニシテ宜ラ得サルトキハ當ニ内外ノ

非難ヲ招クノミナラス將來ニ禍根ヲ貽シ意外ノ

紛擾ヲ醸スノ虞ナシトセサレハナリ是ヲ以テ併合

後ニ於テハ舊皇帝、太皇帝及皇太子ニ宮及

王號ヲ授ケ特ニ皇族ノ待遇ヲ賜フコトニ決セラ

レタリ然レトモ其ノ尊稱ニ至テハ皇族令ニ依ル
親王ト稱スルヲ得ス去リトテ舊皇帝ヲ單ニ王
ト稱スルハ之ヲ帝國皇太子ノ次、各親王ノ上ニ置
カムトスル 聖慮ニ副ハサルヲ以テ歐洲ニ於ケル
例ニ倣ヒ新ニ太公ノ尊稱ヲ授クルコトニ定メラレ
シモ併合條約ノ締結ニ當リ韓廷ハ斯ノ如キ稱
號ハ世界ノ事例ヨリ觀ヒ美ナラムモ韓國ノ歷
史上斯カル尊稱ナカリシヲ以テ寧ロ古來ヨリ用ヒタ
ル王號ヲ復活セラルヲ可トス殊ニ是ハ往昔艾那ニ
隸屬シタル時代ニ用セラルモノヲ踏龍衣スルニ過

キスレテ世人ノ耳目ニ慣レタルカ故ニ一般ノ感
想ヲ融和スルノ便アリトテ強ヒテ王號ヲ擇フノ
希望ヲ申出タリ是ニ依テ舊皇帝ヲ昌德官李
王、舊太皇帝ヲ德壽宮李太王、舊皇太子ヲ王世子
トシ其ノ嬪匹ヲ王妃、太王妃、及王世子妃トシ舊親
王李堧及李熹ヲ共ニ公トシ其ノ配匹ヲ公妃トシ總テ
待ツニ皇族ノ禮ヲ以テし殿下ノ敬稱ヲ用フルヲ許サレタリ
舊韓國當時ノ宮内府豫算ハ百八十萬圓ニシテ
其ノ内譯ハ皇室費五十萬圓、宮内府費七十萬圓、
親衛府費三十萬圓、皇族費十萬圓、承

寧府費十萬圓ナリシカ此ノ外各種ノ不動産及租
税ノ實質ヲ有スル收入ハ百萬圓内外ヲ算セリ
依テ從來ノ皇室收入ニシテ其ノ性質上當然國庫
ニ歸屬スヘキモノ之ヲ整理シテ其ノ所屬ヲ確
定シ李王家ノ經費トシテハ我カ國庫ヨリ壹百五十
萬圓ヲ支出シ義親王以下ノ皇族ニ對シテ其ノ班
位ニ應シ公侯伯ヲ授ケ從來ノ歲費ノ約五割増ヲ
標準トシ此ノ收入ヲ得ヘキ公債證書ヲ下賜セラレ
又功勞アル内閣員以下ノ職員及前在官者ニ對シ
テハ伯子男ヲ授ケ伯爵ニ十萬圓、子爵ニ五萬

圓・男爵ニ三萬圓ヲ公債證書ヲ以テ下賜セラレ
内閣員其ノ他重職ニ在テ廢官トナリタル者及從
前重職ニ在リタル者ハ中樞院顧問又ハ贊議・
副贊議ニ任命スルコトニ決定セラレ以テ李家ノ懿
親及其ノ邦家ニ大勞アリタル者ニ殊遇特典ヲ與
ヘ舊德前功ヲ表彰スルノ 聖旨ヲ昭ニセラレタ
リ

韓國ノ併合ハ外東洋ノ平和ヲ鞏固ニシ内朝鮮
生民ノ幸福ヲ圖ル所以ニ外ナラスト雖國家統治
權ノ授受ニ方リテハ此ノ真意ノ未タ普ク徹底スルニ

蓋ラスレテ一時民心ノ動搖ヲ來スナキヲ保セス斯ノ
變革ノ際ニ處シ一步ヲ誤ラハ遂ニ收拾スヘカラサルノ
煩擾ヲ醸シ之ヲ鎮撫ニ年所國帑ヲ費スノミナラ
ズ延イテ怨恨ノ情ヲ惹起スニ至ラハ將來ノ統治
上多大ノ支障ヲ生スルヤ必セリ自ラ韓國併合ヲ
唱道セル朝鮮有識者中平穩無事ノ間ニ併合
ヲ遂行セムトセハ少クモ一億圓ヲ要スヘシト稱道
シタル者アリタレトモ當時帝國ノ財政ハ斯カル巨
額ノ支出ヲ容ササルノミナラス當面ノ撫恤ニ充ツ
ルニハ三千萬圓ヲ以テ適當ト認メ勅裁ニ依リ之

ヲ支出スルヲ得タリ此ノ内李朝ノ王族、貴族及功
勞者ニ對スル恩金合計八百二十四萬六千八百圓、
班族儒生ニ對スル尚齒恩金合計三十萬圓、孝
子節婦ノ表彰及鰥寡孤獨ノ救恤ニ係ル賜
金合計二十三萬五千九百圓ニシテ斯ノ如キ至仁
ノ惠澤ニ浴シタル者上下舉テテ感泣セサルハ莫カ
リト雖是レ皆一時ノ恩與救養ニ止マレルヲ以テ
別ニ金般ノ民衆ヲシテ永遠ニ無限ノ天恩ニ
浴被セシメムカ爲メ一千七百三十九萬八千圓ヲ朝
鮮全土三百二十府局ニ分與シ之ヲ基金トシテ

永久ニ保存シ其ノ利子ヲ以テ府郡所在士民ノ授
産、教育及備荒ニ関スル資金ニ充テシムタリ
斯ノ如クニシテ從來無為徒食ノ士女ニ相當ノ
職業ヲ傳習シ生業ニ就クノ便ヲ與ヘ且從來缺
如セル教育事業ヲ助長シ又凶歉ニ際シ適當ノ
救助ヲ求ムルノ資源ニ供シタリ再來此等各種ノ
事業ニ政府ノ施設ト相俟テ著著トシテ其ノ效
果ヲ舉ケツツアリ又五十萬圓ヲ以テ孤兒ノ教
養、盲啞者ノ教育及精神病者ノ救療ニ充テ二
百八拾五萬五千八百圓ヲ以テ一般貧民ノ救療

基金トシ尚ホ二十五萬圓ヲ經學院基金トシテ
文廟ノ祭祀・經學ノ講究ヲ繼續セシメ以テ風教
ノ德化ニ資シ又二十一萬三千五百圓ヲ以テ行路病
者救療基金ニ充當シタリ

叙上ノ措置ハ上下士民全般ニ對シ海聲ノ皇澤
ヲ示シ新政ノ本旨ヲ明カニセルモノニシテ實際
上萬衆ノ急苦ヲ拯クノミナラス之カ爲メ民心ニ及
ホセム感化モ亦至大ナルモノアリ併合カ大變革カ
人心ニ格別ノ刺激ヲ與ヘス再來何等紛擾ノ
見ルヘキモノナクシテ今日ニ至ルニ此等ノ措置

與ツチカアリト謂フヘシ然レトモ是レ固ヨリ單ニ一時ノ民情ヲ緩和スルヲ以テ其ノ目的ト爲セルモノ非スレテ之ニ依リ將來朝鮮人ノ福利ヲ增進セムトスル旨趣ニ外ナラズ當局者ハ常ニ此ノ本旨ヲ體シ益々各關係事業ノ維持及發展ヲ圖リ以テ皇化普及ノ目的ヲ達スルコトニ努メツツアリ

舊韓國時代ニ於テ久シク行政司法ノ區別ヲ存セス一切裁判事務ニ總テ行政官吏ノ兼掌ニ屬セシカ爲メ續弊ノ赴ク所苞苴又ハ權勢ニ依リ斷獄ヲ左右シ甚シキハ無辜ノ民ヲ捉ヘ入有罪ノ囚ヲ放テテ財物ヲ貪ルニ至リ裁判事務ノ紊亂洵ニ名狀スヘカラサルモノアリ明治三十八年始メテ裁判所構成法ヲ制定シテヨリ制度ノ上ニ於テ各種裁判所ノ名アリシモ事實上唯漢城裁判所及平理院ヲ持設シスニ止リ而カモ其ノ裁判ナルモノモ實質ニ於テハ毫モ舊態ヲ改ムルニ至ラザリシカ明治三十九年保護制度施行セラルルヤ故伊藤統監ハ韓國政府ヲシテ法典ノ調査ト共ニ漸次裁判事務ノ整理ヲ行ハシメ尙明治四十年ノ協約ニ依リ特ニ司法行政ヲ分離スヘキ旨ヲ規定シ之ニ基キ韓國政府ヲシテ翌明治四十二年一月以降新ニ裁判所構成法ヲ施行シ且日本人ノ司法官ヲモ任用セシメタリ然ルニ韓國當時ノ財政ハ到底行政及司法ノ經費全部ヲ負擔スル堪ヘザリシヲ以テ韓國政府ハ明治四十二年七月司法及監獄事務ヲ舉ゲテ之ヲ帝國政府ニ委託スルニ及ビ始メテ司法制度ノ完備ヲ見ルニ至リ併合以後更ニ朝鮮ノ實情ニ適應セシメカ爲メ續密ナル調査ヲ遂ケ明治四十五年三月ヲ以テ裁判所令ヲ改定シ之ト同時ニ民事及刑事ニ関スル實體法及手續法ヲ整理統一シ朝鮮民事令、朝

舊韓國時代ニ於テ久シク行政司法ノ區別ヲ存セス一切裁判事
務ハ總テ行政官吏ノ兼掌ニ屬セシカ爲メ續弊ノ赴ク所苞直
又ハ權勢ニ依リ斷獄ヲ左右シ甚シキハ無辜ノ民ヲ捉ヘテ有罪ノ
囚ヲ放テテ財物ヲ貪ルニ至リ裁判事務ノ紊亂洵ニ名狀スヘ
カラサルモノアリ明治三十八年始メテ裁判所構成法ヲ制定シテヨリ
制度ノ上ニ於テハ各種裁判所ノ名アリシモ事實上唯漢城裁判所及
平理院ヲ持設シスニ止リ而カモ其ノ裁判ナルモノモ實質ニ於テハ
尙モ舊態ヲ改ムルニ至ラザリシカ明治三十九年保護制度施行
セラルルヤ故伊藤統監ハ韓國政府ヲシテ法典ノ調査ト共ニ漸次
裁判事務ノ整理ヲ行ハレメ尙明治四十年ノ協約ニ依リ特ニ司法

行政ヲ分離スヘキ旨ヲ規定シ之ニ基キ韓國政府ヲシテ翌明治四十年一月以降新ニ裁判所構成法ヲ施行シ且日本人ノ司法官ヲモ任用セシメタリ然ルニ韓國當時ノ財政ハ到底行政及司法ノ經費全部ヲ負擔スル堪ヘサリシヲ以テ韓國政府ハ明治四十二年七月司法及監獄事務ヲ舉ケテ之ヲ帝國政府ニ委託スルニ及ビ如ク司法制度ノ見備ヲ見ルニ至リ併合以後更ニ朝鮮ノ實情ニ適應セシムカ為テ續密ナル調査ヲ遂ケ明治四十五年三月ヲ以テ裁判所令ヲ改定シ之ト同時ニ民事及刑事ニ関スル實體法及手續法ヲ整理統一シ朝鮮民事令、朝鮮刑事令其他ノ關係法規ヲ制定發布シナリ是ニ至リテ朝鮮ノ司法制度始メテ確立セリト云フモ蓋シ過言ニ執ス尙ホ明治四十四年以降輕微ナル事件ニ関シ民事訴訟調停ニ関スル制及犯罪即決令ヲ制定施行シタルニ頗ル民情ニ適シ其ノ效果見ルヘキモノアリ

[illegible]

教育事業ニ付テハ舊韓國政府ニ於テモ多少施設スル所アリシト雖其ノ制度ハ單ニ形式ニ流シ殆ト有名無實ノ狀態ニ在リタリ蓋シ往昔新羅ノ韓土ヲ一統シテヨク約三百年ニシテ高麗王氏ノ

亡おス所トナリ高麗モ亦約五百年ニシテ李朝起
リ更ニ五百餘年ノ間政柄ヲ執レリ而シテ新羅ハ
創始ノ時代ニシテ高麗ハ中興ノ時代ニ属セシカ
李朝ニ至リ徒ラニ政争ヲ事トシ文物技藝ハ漸
ク衰微ニ赴キ其ノ末迭ニ至リテハ殆ト廢絶ニ歸
セリ殊ニ李朝ニ於テハ佛教ヲ擯斥シテ專ラ儒學
ヲ推奨シ中央ニ成均館ヲ置キ地方ニ鄉校書堂
アリシモ或ハ單ニ經史ノ講究ヲ主トシ或ハ纔力ニ
習字讀書ノ力ヲ傳フルニ過キス日清戦争後ニ
至リ日本ノ盛運ニ鑑ミテ大ニ覺醒スル所アリ

諸般制度ノ改革ヲ行フト共ニ大ニ教育機關ノ設
備ニ留意シ京城ニ中學校、師範學校、醫學校、
外國語學校等ヲ置キ地方ニ少數ノ小學校ヲ
設立セリ次イテ保護制度ノ施行セラルヤ統
監府指導ノ下ニ更ニ學制ノ整理ヲ行ヒ普通學
校ノ擴展ニ努メタル結果其ノ數ハ併合當時ニ於テ
一百校ヲ算シタリ併合後ニ至リ銳意教育ノ發
展ヲ圖リ各種ノ高級學校ニ改正ヲ加ヘタル外普
通學校ヲ増加スルコト實ニ二百六十餘校ニシテ目下
其ノ總數ハ三百六十餘校ニ上リ就學兒童ハ約五

萬人ヲ算シ之ヲ舊韓國時代ニ比スレハ非常ノ進
境ヲ見ル然レトモ外國傳道教會ノ設立ニ係ル普
通學校八百餘校アリ其ノ生徒約ニ萬五千人ヲ算
セリ而シテ此等ノ普通學校ハ教育ヲ以テ其ノ目
的トスルモノニ非スレテ畢竟之ヲ宗教傳播ノ方
便ニ供スルモノナルヲ以テ其ノ學科ハ普通學校
令ノ規定ニ準據セリト雖其ノ德育トシテハ基
督教ヲ注入スルヲ主眼トセリ方今世界ノ文明國
ニ於テハ教育ト宗教トヲ劃然分離スルヲ常ト
スルモ朝鮮ニ於テハ從來普通教育機關ヲ缺如

外國宣教師ハ其ノ傳道ノ方便トシテ此ノ缺陷
ヲ補フノ必要ヲ感シ全土ニ普通學校ヲ創設シ
タルモノニシテ今俄カニ之カ變革ヲ決行スルヲ得サ
ルノ事情アリ故ニ公立普通學校ノ設立ニ依リ兒童就
學ノ便ヲ缺カサル地方ニ於テハ外國傳道教會ニ屬
スル同種學校ノ新設ヲ許サス尙ホ將來公立普通學
校ヲ増設シ右等ノ教會學校ニ代リ得ヘキ時機
達スルニ至ラハ教育宗教分立ノ原則ヲ勵行シ以テ
國家教育ノ本旨ヲ完ウセムトス

明治四十四年十一月朝鮮教育令ノ公布セラルルヤ

朝鮮總督ハ特ニ諭告ヲ發シ朝鮮ニ於ケル教育
モ亦教育ニ關スル勅諭ノ趣旨ヲ遵奉シ忠良ナル
帝國臣民ヲ養成スルヲ目的トシ朝鮮特殊ノ事
情ニ照ラシ重テ實業教育ニ置キ浮華放逸ノ
宿弊ヲ矯メ勤勉力行ノ氣風ヲ涵養スルニ努ム
ヘキ旨ヲ明示シ以テ一面ニ於テハ内地人ト異ナラサル
ノ教修ヲ授ケント共ニ他方ニ於テハ空理ヲ避ケ
實學ヲ尚フノ精神ヲ鼓吹セリ蓋シ現在ノ朝鮮
ニ於テハ高尚ノ學理ヲ講究セシムルヨリモ寧ロ子
弟ノ處世就業ニ資スヘキ普通教育及實業教育

ニ留意スルノ必要ヲ認メタレハナリ然レトモ此等ノ
教育ニ関スル施設完成スルニ至ラハ更ニ進ニテ各種
専門學校ノ改善擴張ヲ圖リ以テ時勢ノ要求ニ
應スヘキ適當ノ人材ヲ養成スルニ於テ遺憾ナカラシ
ムトス

舊韓國時代ニ於テ一般綱紀ノ弛廢ニ伴ヒ民業ノ
助長ヲ忽諸ニ附シタルハ顯著ナル事實ナリ由來
朝鮮ノ土味ハ大概不肥沃ニシテ農耕ニ適スルモ民
衆ハ只天恵ニ依頼シテ人工ヲ施スヲ知ラス隨テ
農作物ノ數量ヲ減ルト共ニ品質モ亦粗惡ニ

流レ之ニ加フルニ樹木濫伐ノ結果竟ニ水旱ノ慘害
ヲ生スルト同時ニ材木燃料等ノ缺乏ヲ來シ民衆
ハ益々貧病ニ陷ル是ニ於テ新政施行ノ始ヨリ農
業ノ改良ヲ以テ急務ト認メ各道ニ專門技
術員ヲ配置スルハ勿論農業ニ關スル諸種ノ學
校、模範場、傳習所等ヲ設立シ普通農作、
外^{養蠶}蠶、牧畜、殖林、水利等ニ關スル智識ヲ授
ケ且實習ヲ為サシメ殊ニ米穀ノ耕作、陸地棉
ノ栽培、畜牛ノ改良増殖等ニ付指導獎勵ノ
方法ヲ講ニ尚ホ土味氣候ノ異同ニ鑑ミ適種ヲ

適處ニ施スノ方針ヲ以テ大豆、小豆、粟、黍、稗、蕎麥、甘藷、馬鈴薯、果實等ノ改良試作ヲ獎勵シタルカ再來其ノ效果大ニ觀ル（キモノアリテ品値ハ次第ニ優良ニ赴キ產額モ亦益々増加スルノ狀アリ）農業ト密接ノ關係アルノミナラス國土ノ保全上緊急ノ必要ヲ感シタルモハ殖林ノ施設ナリトス保護制施行時代ニ於テモ茲ニ留意スル所アリ一般ノ林政及國有林經營ニ關スル規定ヲ設ケ大體ノ方針ヲ定メタリレカ併合後、至リテハ一屬國有林野ノ整理ヲ完全ニシ且一般人民ヲシテ森林愛護ノ

觀念ヲ涵養せしむる目的ヲ以テ森林令ヲ制定
シ又國費地方費及恩賜金ヲ以テ造林計畫ヲ
樹テ各道ニ設置しタル苗圃ノ數ハ大正三年ニ於
テ三百餘箇所ヲ算スルニ至リ尚ホ併合後第一
回ノ神武天皇祭日ヲトシ各地方官民ノ記念植
樹ヲ爲スノ例ヲ開キ爾來毎年一千有餘萬本
ヲ植付テ以テ一般ノ植林思想ヲ鼓吹セリ然レト
モ數百年來濫伐ニ委シタル山林ヲ回復セムトスル
ハ一朝一夕ノ事ニ非ス殖樹造林ノ事業ハ如何ニ
力ヲ致スモ常ニ其ノ足ラサルヲ憂フルノミ前途

向小遠ナリト謂フヘシ

朝鮮ノ北部ハ鑛物ニ富シ金鑛最モ多シ無煙炭、鉄
及黒鉛之ニ次リ朝鮮人ハ由來採鑛ノ方法ヲ知ラスシテ
鑛力ハ砂金ノ採收ニ從事シタルノミ明治二十八年以來
諸外國力漸シ韓土ノ利源ニ注目スルニ及ビ各國爭ウ
テ鑛山ノ特許ヲ求テ韓國政府ハ止ムヲ得スシテ有
望ナル金鑛ヲ英、米、獨、佛、伊諸國ノ企業家ニ
分與シタリ統監府設置後鑛業法ヲ制定シタルモ
内地及他國ニ於ケル例ニ倣ヒ外國人ノ鑛業權ヲ制
限スル能ハサリシハ此等ノ事情ニ由リ又大規模ノ

鑛山事業力大抵外國人ノ經營ニ係ルノ狀況ヲ呈セ
ルモ亦之ヲ爲ナリ近來ニ至リ内地人ニシテ稍々大
規模ノ計畫ヲ以テ金鑛、鐵鑛、亜鉛鑛及石炭ノ
採收ニ從事スル者漸ク多ク加ヘ成功ノ望アルモノ
亦寡ニトセ入目下鑛產物ノ概々内地ニ移出スルヲ
常トシ殊ニ金ノ如キハ外國ニ輸出スルモノ絶無ナリ
且其ノ事業ニハ多數ノ内鮮人ヲ使役スルヲ以テ鑛山
ノ開發ハ其ノ企業者ノ内外人ニ論ナリ一般經濟ニ
裨益スル所多大ナリト雖採鑛ノ如キ特殊ノ事業
ハ世界孰レノ國ト雖無條件ニ外國人ニ許可セサル

ヲ例トス殊ニ朝鮮ノ如ク既ニ重要ナル鑛業權ヲ外國人ニ
許與シ此ノ上其ノ投資企業ニ俟ツノ必要ナキ地方ニ於
テハ之ニ相當ノ制限ヲ加ヘ以テ内鮮企業者發展ノ餘
地ヲ作ルヲ以テ機宜ノ措置ト認メ漸次鑛業法ノ改
正ヲ行ハムトス尚ホ明治四十四年度ヨリ全土ノ鑛床
調査ニ着手シ之ニ由リテ一般企業者ノ便宜ヲ圖ルト
共ニ再來既ニ調査ヲ完了セル地方ニ付必要ト認め
金鑛及石炭鑛ヲ保留シ他日官營其ノ他適當ノ
方法ヲ以テ採鑛事業ヲ經營セムトス
朝鮮ノ現状ハ未タ專ラ工業ノ發展ヲ促カスノ時機

ニ至ラスト雖各種ノ工藝ハ殆ト滅絶ニ瀕シ日常ノ
生活資料スラ其ノ大部分ヲ輸入品ニ依頼スルノ
状態ナルヲ以テ簡易ナル工藝ヲ獎勵スルハ洵ニ
焦眉ノ急務ニ屬セリ是ヲ以テ染織、陶窯、金石、
木工、應用化學等ニ関スル技術ヲ授ケムカ為メ
或ハ工業傳習所、試驗所等ヲ設置シ或ハ必要
ナル補助ヲ興ヘ技術員ヲ派遣シテ指導ニ當ラ
シメ又恩賜金ヲ基本トセル授産事業トシテハ
製絲、機業、製紙、製麻、製筵、製炭等ニ関
スル傳習ヲ獎勵セリ近來内地人ニシテ諸種ノ

製造事業ヲ經營スル者多ク之カ為メ工藝上、於テ朝鮮
人ノ啓發ニ資スル所亦少カラズ工業モ亦農業ノ改良ト相
俟ツテ漸次進步ノ域ニ迄ケリト謂フヘシ

一般產業ノ發達ヲ圖リ且文化ノ普及ニ資セムカ為メ交
通運輸機關ノ重要ナルハ言フ俟メサル所ナリ而シテ道
路ノ改修ニ付舊韓國時代、於テ留意セサルニ非カリシ
ト雖具體的ノ計畫ヲ樹テタルハ統監府設置ノ翌年
即明治四十年ニシテ始メ六箇年ノ繼續事業トシ主
要道路線ヲ選定シ約百五十萬圓ヲ計上シ其ノ後
之ヲ四箇年ニ短縮シテ約二百四十萬圓ヲ追加セリ

然レトモ是レ唯モ一小部分ノ改修ヲ目的トセルニ過キサ
リレヲ以テ總督府設置後、至リ朝鮮全土ニ亘リテ
道路改修ノ方針ヲ以テ道路規則及道路築造標
準ヲ制定シ道路ヲ分ケテ一、二、三等及等外道路ノ四
種トシ一、二等道路ノ築造及維持修繕ハ國費ヲ
以テ之ヲ施行スルヲ原則トシ慣行アルモノハ其費
用ノ全部又ハ一部ヲ地方廳ニ於テ負擔スルコトトシ
三等道路ハ地方廳ニ於テ其ノ築造修繕ニ當ルコ
トトシ唯モ其ノ費用ノ一部ヲ國庫ヨリ補助スルコト
アルヲ又等外道路ニ付テハ關係部落ニ於テ之ヲ負

據スルところニ地方廳ヨリ補助ヲ興フルコトニ定メタリ而シ
テ一二等道路トシテ指定シタルモノ全土ニ亘リ合計九十
五線三千三百餘里ニシテ其ノ中三十五線七百七十里ヲ
選定シ明治四十四年度ヨリ大正五年度ニ至ル箇年
繼續費トシテ一千萬圓ヲ計上シ第一期計畫トシテ之
カ改修ニ從事シ其ノ中二百八十二里ハ既に竣工ヲ告ケ
タリ尚一、二等道路中從來地方廳ニ於テ改修ヲ施
行シタルモノ五百八里又大正三年度ヨリ同五年度ニ
亘ル三箇年内ニ國庫ノ補助ニ依リ改修スヘキモノ二
百八里此等ヲ總計スルトキハ大正五年度末ニ於ケル

改修總里數ハ二千二百二十七里ニ達スヘシ殘餘一千七百四里ノ中七百八十五里ハ第二期計畫トシテ大正六年度ヨリ十箇年繼續費一千万圓ヲ以テ之ヲ改修スルノ見込ナリ尚殘餘二百八十九里ノ改修ニ甚ク急要ナルモノト認メ難キヲ以テ地方資力ニ依リ適宜改修ヲ加ヘムトス又三等道路ハ大正元年各道長官ニ於テ總督ノ認可ヲ經テ之ヲ指定シ其ノ總延長三千四百三十一里ニシテ其ノ中千二百餘里ハ大正二年度迄ニ改修ヲ了シ尚繼續キ地方資力ト夫役トノ許ス限リ之カ改修ニ努メツツアリ

鐵道ノ敷設ニ付テハ其ノ事業ノ複雑ニシテ多額ノ
資金ヲ要スルニ依リ韓國政府ニ於テ自ラ之ヲ經營
シ企畫シタルコトナク明治二十九年中米國人「ビー
アール・モールズ」ニ對シ京城仁川間鐵道敷設ノ特
許ヲ與ヘ起エテ明治三十四年滋澤榮一、益田孝及
瓜生震等ノ設立ニ係ル京釜鐵道株式會社ニ對シ
京城釜山間ノ鐵道敷設ヲ特許セリ同會社ハ其ノ
設立ノ際右「モールズ」ノ敷設ニ係ル京仁鐵道ヲ買
収シ草梁永釜浦間ノ線路ヲ敷設セリ明治三十九
年三月ニ至リ京釜鐵道買収法ニ依リ京釜鐵

道株式會社ニ屬スル鐵道全部ヲ國有トシ同年
新設セラルタル統監府鐵道管理局ニ於テ之ヲ管
理經營シ次テ陸軍省ノ所管ニ屬セル京城新義
州線及三浪津馬山線ノ引継ヲ了セリ明治四十二
年統監府鐵道管理局廢止セラレ其ノ事務ハ鐵
道院ニ移リシモ翌四十三年併合ノ後朝鮮總督府
ノ設置セラルルヤ朝鮮ノ鐵道事務ハ總督府鐵
道局ノ所管ニ歸屬セリ釜山新義州間ノ縱貫
線ハ明治四十四年十月ヲ以テ竣工セル鴨綠江橋梁
ニ依リテ南滿洲鐵道トノ聯絡完備セルヲ以テ爾

來線路：改良工事ヲ施シ金山長春間ノ直通列車ヲ運轉
スルニ至リレヲ以テ本鐵道ハ帝ニ朝鮮内ノ交通機關ナル
ニ止マラス歐亞交通上最重要ナル地位ヲ占ムルニ至レリ尚
此ノ縱貫線ヲ接續スヘキ京元線及湖南線ノ兩鐵道
ハ明治四十三年度ヨリ六箇年繼續事業トシテ起工シ
湖南線ハ大正三年一月京元線ハ同年九月ヲ以テ全線
ノ開通ヲ見ルニ至リ朝鮮鐵道ノ延長ハ殆ト一千哩ニ達
セムトス尚將來ノ計畫トシテハ各線ノ改良工事外元
山ヨリ咸鏡南北道縱貫シ會寧ニ至ル一線ノ急設
ヲ要スルモ財政ノ緩急ニ鑑シ先ツ第一期計畫トシ

テハ元山水興間及清津會寧間ヲ敷設スルコトニ
決シ既ニ其ノ測量ニ著手セリ

道路ノ改修及鐵道ノ敷設ト共ニ緊要ノ事業タル港
灣ノ修築ニ關シテハ外國貿易上ノ關係ヨリ韓國政府
ニ於テモ夙ニ注意ヲ拂ヒ其ノ修築ノ計畫ヲ樹テ
又ハ實行シタル所アリ

初明治三十九年以降五箇年繼續事業トシテ經費總
額三百六十四萬餘圓ヲ以テ税關改良工事ヲ起セシカ
ル明治四十一年更ニ之ヲ擴張延期ニ經費百二十五萬圓
ヲ増加シ八箇年繼續事業ト爲シ更ニ同四十三年經費

五萬餘圓ヲ増シ以テ京城、仁川、平壤、鎮南浦、新義州、大邱、群山、木浦、馬山、釜山、元山、城津及清津ニ於ケル港灣及税関設備ヲ改良スルコトトシ仁川、釜山及鎮南浦ヲ除ク外ハ明治四十三年度ニ於テ豫定ノ計畫ヲ了リタリ依テ併合後前記繼續事業ノ殘餘ハ同年度ヲ以テ一旦之ヲ打切り新ニ明治四十四年度以降六箇年繼續事業トシテ釜山、仁川、鎮南浦及平壤ノ港灣ヲ改良スル計畫ヲ立テ既定ノ殘餘工事豫算額百十三萬餘圓ト併セテ總經費八百二十七萬餘圓ヲ以テ之ヲ遂行スルコトトシ平壤ハ既ニ竣工シ鎮南浦モ亦

本年度中ヲ以テ竣工スル豫定ナリ釜山ハ開釜聯
絡船ヲ繫留セシムヘキ第一棧橋及之ニ沿ヘル突堤
ノ築造並突堤上ニ於ケル設備完成シ聯絡船ト汽
車トノ接續ヲ全カラシムルニ至レリ尚目下第二棧橋及
釜山鎮方面ノ船溜波除堤ノ築造及港口、港内ノ浚
渫中ナク又仁川ハ開船渠築造ノ為ニ要スル潮止堤及
陸上諸備ヲ竣リ目下水路ノ浚渫、馴導堤ノ築造及
船渠岸壁根堀工事ノ施行中ニ屬ス

舊韓國遞信事務、明治三十九年本邦ヨリ郵政顧問ヲ傭聘
セシヲ始トシ同三十三年萬國郵便聯合ニ加盟スル頃ニ及ビ
稍々其ノ體ヲ具ヘタリト雖設備ノ不完全、事務ノ粗雜ナ
ルハ勿論年々尠カラサル缺損ヲ招キ韓國政府ノ手ニ依
リテハ到底改善擴張ノ望ナキニ至レリ依テ同三十八年
四月韓國政府ヨリ全國ノ通信機關ヲ帝國政府ニ委託
スルコトナリ從來我政府ハ韓國ニ設置シタル我通信
機關ト合同シテ之ヲ統一整理シ明治三十九年保護制度
設置後ハ統監府通信官署ニ於テ之ヲ管掌シテリ
併合後ニ至リ統監府通信官署ヲ朝鮮總督府通信

官署ト改メ通信事務ノ外新ニ航路標識及氣象ニ関
スル事務迄電氣事業ノ監督ニ関スル事務ヲ之ニ移屬
シ明治四十五年四月以降更ニ朝鮮總督府逓信官署ト改
メ氣象ニ関スル事務ヲ内部ニ移スト同時ニ海事行政
ニ関スル事務ハ舉テ之ヲ逓信局ノ所管ト為セリ併合
以降特ニ銳意逓信事務ノ改善擴張ヲ圖リタル結果現
今ニ於テハ全土ニ亘リ約五百箇所ノ郵便機關ヲ設置
シ交通至難ノ島嶼ヲ除クノ外各郵便局所所在地ニハ
毎日一回以上逓送郵便物ノ到着セカル所ナク大正三年三
月末ニ於テハ平均一日ノ逓送延里程、道路、鐵道及

水路ヲ併セテ約九千四百餘里即チ明治三十八年郵政
合同當時ニ比シ約二倍トナリ電信線モ亦同シク合同當
時ニ倍加シ電話線ノ如キハ併合當時ニ比スルモ尚ホ二
倍以上トナレリ又郵便為替、邦便貯金及郵便振替貯
金モ併合後益々發達シ殊ニ朝鮮人ノ郵便貯金ノ
如キハ併合前年度末ニ於テハ預入人員二萬ニ達セズ
預金額十二萬圓ニ足ラサリシカ大正二年度末ニ於
テハ預入人員四十八萬餘人預金額一百一萬餘圓ニ
上ルノ盛況ヲ呈セリ

製造事業ヲ經營スル者多ク之ヲ爲メ工藝上ニ於テ朝
鮮人ノ啓發ニ資スル所亦尠カラス工業モ亦農業ノ改
良ト相俟ツテ漸次進步ノ域ニ近ケリト謂フヘシ

凡ソ一郡一縣ノ行政ニ於テモ一定ノ方針ト之ニ伴フヘ
キ計畫ナカルヘカラス況ニヤ新領土タル朝鮮ノ統
治ニ於テシヤ其ノ根本方針ハ韓國併合ノ際ニ於
テ勅定シ給ヒシ所ニシテ再奉一意專心聖旨ヲ
遵奉シテ秋毫モ遺算ナキヲ期シ幸甚ニシテ多
少ノ實績ヲ觀ルヲ得タリ然レトモ殆ト全ク荒廢
ニ歸シタル邦土ノ復興ハヲ圖リ著シク時世ノ進運ニ

遅レタル貧弱ノ民衆ヲ指導シテ之ヲ文明ノ域ニ
進メムトスルハ固ヨリ容易ノ業ニ非ス今ヤ總督府
開始以來茲ニ四週年纔ニ統治經營ノ端緒ヲ
啓キタルニ過キス前途ノ遼遠ナル固ヨリ知ルヘキナリ
然レトモ凡ソ施政治民ノ成敗ハ先ツ之ヲ始ニ慎ム
ト否トニ在リテ決ス刻下ノ時機ハ朝鮮ノ統治
上最モ重要ナル時ナリトス是レ本總督力特ニ
茲ニ朝鮮ノ施政方針及施設經營ノ狀況ヲ叙述
シ以テ自ラ守ル所ヲ瞭カニシ且下僚ノ遵據スヘ
キ所ヲ示ス所以ナリ

朝鮮後統制方針及行政整理

第一章

舊韓國皇室及宮內府整理

第一節 制度及經費

舊韓國ニハ宮中府中、別明カナラス明治二十七年一般制度
改革、際始メテ宮內府ヲ設ケタル以來幾多ノ變遷ヲ重
シ明治三十八年三月ニ至リ全體ニ亘リテ改正ヲ加ヘタルモ尚
ホ大臣官房、外經理院、內藏司、尚方司、營繕司、親王府等
二十有餘ノ院司雜然併立シ其ノ間事務ノ聯絡ヲ缺キ各
財産ヲ分管シ獨立ノ會計ヲ組織セル等殆トク多數小官廳ノ
集合體ニ異ナラス加フルニ君主ノ直接命令ノ名ノ下ニ宮中ノ權力

ハ全ク府中ニ壓倒シ卑官微職ノ進退ト虽君主之ヲ親ラシ政府
ハ殆ト興リ知ラサルノ状アリ殊ニ國庫ノ支出ニ係ル皇室費ノ存
スルニ拘ラス宮廷ハ國家以外恰モ徵稅ノ一主體ヲ為シ自ラ諸
種ノ雜稅ヲ徵收シ或ハ陵園墓等ノ修築費ヲ所在地附近
ノ人民ニ賦課シ甚シキニ至リテハ國庫收入ノ資源タル或稅種
ヲ宮内府ニ移シテ其ノ收入ノ増加ヲ圖リ或ハ宮中ニ關係ヲ結ハ
ムトスル外國人ト諸種ノ契約ヲ為シ又之ニ鑛山、電氣、水道
等ニ關スル特許ヲ與フルニ至レリ而シテ宮廷ニ在リテハ狹難徒
妄ニ君側ニ近キテ國政ヲ左右スルノミナラス幾千無用ノ冗員
其ノ内ニ充滿シ或ハ内廷ノ迷信深キヲ奇貨トシ恣ニ妖言ヲ

放チテ除魔禁厭ノ資ヲ貪リ或ハ皇帝ノ虛榮心ヲ迎合シテ種
種ナル口實ノ下ニ兩幣ヲ濫費シ皇室費ノ大部分ハ殆ト此等雜
輩小人ノ私腹ヲ肥スノ料タルニ過キサリキ明治三十九年饒監府設
置以後ハ表面上外國人ニ関スル宮中專擅ハ漸ク止ミタレトモ
尚ホ陰然對外關係ニ干與セロトスル狀アリ其ノ間帝國ノ保護
ニ慚焉タル民間ノ不平分子ハ暗ニ宮中ト聯絡ヲ通シ種々ノ
煩累ヲ生スルアリ是ニ於テ伊藤饒監ハ先ツ宮中府中ノ分界
ヲ明カニシ政府責任ノ所在ヲ確定シ之レト同時ニ宮中ヲ肅清
シテ雜輩ヲ驅逐シ舊弊ヲ一洗スルノ必要ヲ認メ明治三十九
年七月韓皇ニ勸告シテ宮禁令ヲ發布セシメ日本人警察

官ヲ宮中各門ニ配置シ韓國巡檢及兵士ト共ニ宮門ノ取締任
セシメ一定ノ官職ヲ有スル者ノ外宮中ニ出入スルフトヲ禁シ其ノ
出入ニ必ス規定ノ門票ヲ提示セシムルフトト定メタリ尋テ明
治四十年七月現李王殿下皇位ヲ繼承シ皇居ヲ昌德宮ニ移
サルルヤ先ツ宮内府官制ヲ改正シ無用ノ院司ヲ廢シ皇室
ニ関スル一切ノ事務及所屬官吏ノ監督ハ全然宮内府大
臣ノ責任ト爲シ以テ名實共ニ一官廳タル體用ヲ完カラシメ
尚ホ冗員ノ淘汰ヲ斷行シ翌年三月迄前後五面ニ分テテ約一
萬人ノ減員ヲ行ヒタリ又明治四十年七月帝室有財産ト國
有財産ト區別ヲ明カニシ之ヲ整理セシムル爲メ調査局ヲ

設置シ委員ヲ任命シ委任會ノ決議ハ閣議ニ付シタル後上
奏裁可経ヘキ制ヲ定メ該調査ノ結果同年十一月宮内府収
租官ヲ廢シ十二月從來宮内府ノ所管ニ屬セシ紅蔘專賣事
業蔘稅沿江稅及土地附帶ノ諸雜稅庖稅銅鑄鑛稅
等ヲ國庫ノ收入ニ移シ翌四十一年六月驛屯土賭租及賭錢
魚磯狀稅其他從來宮内府ニ於テ徵收セシ雜稅ヲ總テ
國庫ノ收入ト爲シ又各驛屯土其他宮内府所管及慶善
宮所屬不動産中宮殿太廟ノ基址並陵園墓ノ内坂宇
内ヲ除キタル殘餘ノ全部ヲ國有ト爲シ更ニ帝室ノ債務
ヲ整理シ明治四十二年五月ニ至リ全部ノ仕拂ヲ了リ茲帝

皇室財産ノ整理ヲ完結セリ以上ノ改革ト同時ニ皇室費額ハ
漸次之ヲ増加シ明治三十八年七十二萬圓ナリシモノヲ明治四十
一年迄二百五十萬圓ト爲シ爾後之ヲ以テ永久ノ定額ト爲セリ
而シテ整理以前ノ宮廷ノ諸經費ハ政府ヨリ受クル皇室費
外前記ノ鑛山人蔘驛屯土收入諸種ノ雜稅及利權ノ特許
賣官等ニ依リテ獲ル收入ヲ以テ支辨シ年額二三百萬圓ニ
達シタルカ故ニ見當時ノ内帑ハ豊富ナリシモノノ如クナルモ其
ノ實經理ノ方法確實ナラス冗費夥多ナリシ爲メ常ニ収
支相償ハサルノ状態ニ在リシカ整理以後ニ至リテハ會計經
理ノ基礎始メテ確立シ從來有名無實ナリシ宮内府豫算

モ漸ク其ノ實行ヲ見ルヲ得タリ

明治四十三年八月日韓併合條約締結セラルルヤ韓國皇
帝ハ王ニ封セラレ皇族ノ待遇ヲ賜ハリ殊ニ其ノ歲費ハ皇
位在リシ時ト異ナル所ナク年々百五十萬圓ヲ給與セラレ日常
ノ供御モ従前比シ何等ノ差異ナク其ノ祭祀典例ノ如キモ亦
削減ヲ加ハスシテ祖宗崇敬ノ道ヲ盡スニ遺憾ナカラシメラレタリ
同年十二月皇室令ヲ以テ李王家ノ家政ヲ處理セシムル為メ新
李王職ヲ設ケテ宮内大臣ノ管理ノ下ニ置キ從來ノ宮内府ノ
事務ヲ之ニ移サシメ其事務及職員監督ハ總督ノ所管
トセラレタリ依テ同職員ノ詮衡ニ付テハ特ニ慎重ノ注意ヲ

加へ舊宮内府職員中温良淳朴ナル人物ヲ選擇シテ之ニ任シ
タルヲ以テ今ヤ其身邊ニ從前ノ如キ便佞ノ徒ナク李王及李
太王殿下ハ國事ノ煩累ヲ免カレ優悠自適最モ幸福ナル境
遇ニ在リ昌德宮及德壽宮内殿及王世子邸ニ関スル經費ハ
併合後ニ於テ全部舊ニ依リタルモ其他ノ費目ニ就テハ孰モ
慎重ノ審査ヲ遂ケ取捨増減ヲ加ヘタリ又大正二年三月事務
官以下三百餘人ヲ淘汰シテ俸給年額七萬一千百餘圓ヲ
節約シ同時ニ實行豫算ヲ調製シテ内殿費及王世子費
以外ノ各費目ニ減額ヲ斷行シ次年度ヘノ繰越金二十七萬
三千餘圓ヲ得タリ而シテ大正三年度以後ニ於テモ節約

ノ方針ニ依リ多額ノ剩餘金ヲ得テ以テ王家臨時ノ準備金
ヲ充テ且將來適切ナル事業ノ經營費ニ使用スヘキ見込
リ現今王家資産ハ宮殿其他ノ土地建物（此ノ價額約
四百萬円）外有價證券拂込額三十五萬円ニシテ此ノ有
價証券別途資金トシテ取扱ヘリ

第二節 各種事業ノ經營

明治四十一年九月舊宮内府ニ於テ御苑事務局ヲ設ケ
昌德宮ニ隣接セル舊昌慶宮ノ建物ヲ修理又ハ改築シ
テ博物館及動植物園ヲ新設シ銳意朝鮮古美術品
標本類及動植物ノ蒐集ニ勉メ約一箇年ヲ以テ諸般ノ

設備漸々成リ同四十二年十一月偕樂ノ趣意ヲ以テ之ヲ
公開セラレタリ併合後ハ李王職ニ於テ之ヲ管理シ益々
設備ヲ整ヘ現今ニ於テハ博物館ニ於テル所藏品一萬
四千三百餘點、動物園飼養禽獸約一百種、植物園培
養植物約八百八十種ニ及ヘリ博物館ニ於テハ尙ホ朝鮮
ニ關係アル和漢ノ物品並朝鮮古風俗ヲ代表スヘキ物品ノ
蒐集ヲ為スト共ニ現在ノ所藏品ニ對シテモ充分ノ考查研
究ヲ為シツヽアリ

併合後李王家所屬森林ノ区域ヲ限定シ始祖並五世
ノ祖ニ至ル王及王妃ノ陵ニ附屬セル森林ハ其ノ全部ヲ

王家ノ所屬トシ其他ノ各陵園ハ舊態ヲ維持シ祭祀ニ必要ト
認メラルル範圍内ニ於テ其ノ森林區域ヲ定メ王家ノ所屬ト爲
セリ早其ノ保護經營ニ着手シタルモノハ京畿道水原郡内隆
健陵附屬花山森林約一千八百町歩ヲ最トシ洪陵裕陵東
九陵献仁陵等ヲ併セ合計三萬二千二百餘町歩ナリ花山
森林ノ如キ老樹多キモノニ對シテハ其ノ林相ヲ維持セ
ハカ爲メ風致及水源涵養ヲ妨ケサル程度ニ於テ輪伐
補植ヲ行フコトトシ大正元年以降毎年伐採ヲ爲セリ而
シテ其ノ方法ハ舊慣ヲ參酌シ附近洞民ヲシテ伐採並製材、
運搬等ニ當ラシメ其ノ報酬トシテ伐採木ノ枝葉ヲ付與スルコト

トシタルニ結果頗ル良好ニシテ大正元年度及同二年度ニ於ケル
伐採面積約六十五町歩、同材積四萬四千三百尺締外ニ大正三年
度ニ於ケル同森林ノ間伐ヲ行ヒタルモノ四千六百尺締ナリ前記伐
採跡地ハ直ニ造林作業ニ着手シ既ニ約二十九町歩ハ植付ヲ了シ其
他ハ漸次植付ヲ為ス見込ヲ以テ同森林内ニ約四町歩ノ苗圃ヲ設置
セリ花山森林以外ニ於テハ樹齡未タ伐採期ニ達セサルヲ以テ適宜
間伐ヲ行ヒ林相ノ整理ヲ為シツツアリ今王家所有森林全部ニ
関スル収支ヲ舉グレハ大正元年度ニ於ケル収入額三萬四百餘圓、
同支出額九千二百餘圓、大正二年度収入額四萬一千三百餘
圓、同支出額一萬七千二百餘圓、兩年度ヲ通シテ差益五十二百餘圓ナリ

第二章 行政制度

第一節 韓國行政、整理及總督府、

設置

舊韓國、中央行政制度ハ明治二十七八年改革、
際從來、議政府中樞府及各衙門ヲ廢シ畧シ
日本ノ制ニ倣フテ內閣中樞院及外部內部度支
部軍部法部學部農商工部、七部ヲ設ケ爾來多
少、改正ヲ加ヘタレトモ大體ニ於テ變更ヲ見
ルコトナク唯、明治三十八年十一月日韓協約
ノ結果帝國政府ニ於テ韓國ノ外交事務ヲ監理

指揮スルコト、ナリタル為メ統監府ノ開設ト
同時ニ外部ヲ廢止シタル、ミ斯ノ如ク制度ノ
上ニ於テハ甚シキ變動ナカリシモ内閣員ノ交
送ハ極メテ頻繁ニシテ殆ト朝夕ヲ測ラサルノ
状アリ是レ韓國古來ノ弊習タル宮中ノ勢力常
ニ府中ヲ左右セルト權臣勢家ノ爭鬭寧日ナキ
トニ基因セリ是ニ於テ伊藤統監ハ明治四十年
六月韓國政府ヲ勸告シ内閣官制ヲ改正シ議政
府ヲ改メテ内閣ト為シ總理大臣ノ權限ヲ明カ
ニシ内閣會議ヲ經ヘキ事項ヲ改定シ以テ國政

基礎ヲ確實ナラシメ尋テ同年七月韓國施政
、改善ニ関スル協約ニ依リ日本人ヲ各部次官
以下直接責任ノ地位ニ任用セシメ且各部官制
竝地方官制、改正ヲ為シ行政機關ノ統一ヲ圖
ルト共、其ノ職守ヲ明確ナラシメタリ同年八
月宮廷護衛ノ任ニ當レル親衛隊歩兵一大隊及
騎兵一中隊ヲ除ケ、外總テ軍隊ヲ解散シ明治
四十二年七月ニ至リ軍部ヲ廢シ新ニ新衛府ヲ
置キテ親衛隊ノ事務ヲ掌ラシメタリ又同年七
月韓國政府ヨリ司法事務ノ委任ヲ受ケタル結

果十月ヲ以テ法部ヲ廢シ其ノ事務ヲ統監府司
法廳ニ引繼キタリ如斯ニシテ併合當時ニ於ケ
ル韓國、統治機關ハ中央ニ內閣以下內部度支
部農商工部學部中樞院アルニ過キス又地方ニ
道府郡、各官廳財務監督局財務省等アリシカ
帝國政府ハ別ニ韓國政府ニ委託ニ係ル政務ヲ
執行シ且在留帝國臣民ヲ管轄スルヲ統監府以
下理事廳裁判所鐵道管理局通信管理局特許局
等ヲ設置セリ統監ハ韓國政府ヲ指導監督ヲ為
スル共ニ帝國官署、政務ヲ統轄シタリ

明治四十三年八月二十九日併合條約、公布ト
同時ニ帝國政府ハ臨時、措置トシテ勅令ヲ以
テ朝鮮總督府ヲ設置シ當分、間統監府及其、
所屬官署ヲ朝鮮總督府ト看做シ統監ヲシテ總
督、職務ヲ行ハシメ且從來、韓國政府及所屬
官署ハ內閣及表勲院ヲ除ク、外總テ之ヲ總督
府所屬官署ト看做シテ政務、執行ニ當ラシメ
越エテ十月一日ニ至リ朝鮮總督府及所屬官署
官制ヲ施行セリ此、官制ニ依リ總督府ハ總督
官房及總務、內務、度支、農商、工、司法、五部ヨリ成

所屬官署ハ中樞院取調局地方廳裁判所警察
官署監獄鐵道局通信官署臨時土地調查局税関
專賣局印刷局營林廠醫院平壤鑛業所勸業模範
場工業傳習所及中學校トシ總督ノ下ニ政務總
監ヲ置キ其ノ次ニ各部長官アリ總督ヲ輔佐シ
府務ヲ統理セリ而シテ新官制ノ要旨ハ各種行
政機關ヲ統一シ中央ニ於テ縮小ヲ加フルト同
時ニ地方ニ於テ擴張充實ヲ圖ルニ在リタルヲ
以テ多數ノ職員ヲ減スル能ハサリシト雖モ尚
ホ整理ノ結果全般ニ亘リ一千四百餘人ヲ淘汰

シ之カ為經費ヲ節約セルトト七十六萬五千圓
ニ及ヘリ其ノ中々樞院ハ主トシテ名望材能尸
ル朝鮮人ヲ以テ之ヲ組織シ以テ總督ノ認同ニ
應テ議長ハ政務總監ヲ以テ之ニ充ツ又取調局
ハ朝鮮ノ舊慣遺制ヲ攻讞シテ施政ノ料ニ供シ
特ニ總督ノ播定シタル法令ノ立案及審議ヲ為
スルノニシテ取調事項ハ土地制度親族制度兩
班其ノ他四色ニ関スル制度面及洞ノ制度宗教
制度教育制度其ノ他廣ク法典經濟及社會上ノ
事項ニ亘リ歐米諸國ノ殖民地ノ制度ヲ參酌考

查シ尙ホ朝鮮辭典、編纂ニ著手セリ爾後一年
餘、實驗ニ依リ明治四十五年四月更ニ中央行
政機關ヲ緊縮シ總務部ヲ廢シテ其ノ事務ヲ官
房ニ移シ取調局、印刷局、專賣局、各部庶務課及鐵
道局並警務總監部、印刷工場等ヲ廢シテ其ノ
事務ヲ他ノ部局ニ分屬シ官房ニ土木局ヲ新設
シテ築港、道路、治水、營繕等ニ関スル土木行政事
務ヲ統一管掌セシメ又各部局ニ分屬セシ衛生
事務、海港、檢疫、並輸出牛、檢疫事務、密漁、取締、及港
則執行事務ヲ警務總監部ニ移屬シ新ニ中央試

驗所ヲ設ケテ醸造試驗其、他工業ニ関スル試
驗分拆及鑑定事務ヲ管掌セシメ且從來ノ工業
傳習所ヲ之ニ附置シ通信局所管ノ觀測事務ヲ
內務部ニ度支部所管ノ海事々務ヲ通信局ニ移
屬シタリ

第二節 職員任用ノ方法

明治四十三年十月朝鮮總督府及所屬官署ニ於テ旧統
監府及旧韓國政府ニ屬スル政務ヲ繼承スルニ方リ其
ノ職員ヲ按排淘汰シ高等官三百二十六人判任官五百八
十二人雇員約五百人ヲ減少シ次テ明治四十五年四月中央
及地方ニ涉リ行政並司法機關ノ整理統合ヲ行ヒ更ニ高等
官二十八人判任官七千人ヲ罷免セリ斯ノ如ク行政上ニ刷新
ヲ施スト共ニ職員採用方法ニ関シテモ一定ノ方針ヲ立テ優
秀ナル行政官ヲ得ルノ必要ヲ認メタリ從來官吏採用ノ方法
ニ付テハ任用令ニ依ルノ外別ニ何等ノ規定ナク内地人ニ在リ

テハ考試ノ方法及養成ノ機關ナク朝鮮人ニ在リテモ旧
韓國政府時代ニ於ケル官吏ヲ襲用スルノミニシテ新ニ詮衡
ノ道ナカリシヲ以テ職員採用ノ根本方針トシテ朝鮮ニ於ケル
官吏ハ之ヲ朝鮮ニ於テ養成シ技術官ノ如キ特殊ノ技能ヲ要
スル者ノ外ハ總テ之ヲ他ニ求メサルコト、シ以テ朝鮮ノ現
狀ト其ノ民度トニ適應スヘキ行政ヲ施行シ得ヘキ官吏ヲ
任用スルコトニ努メタリ又特殊ノ場合ヲ除クノ外原則トシ
テ内地人朝鮮人ノ別ナク委任官ハ試補判任官ハ見習ヨリ之
ヲ採用スルノ制ヲ定メ殊ニ判任官ニ在リテハ毎年四月及
十月ニ於テ見習採用試験ヲ行ニ判任文官タルノ資格ヲ有

スル者ニ就キ相當科目ヲ以テ學力ヲ試驗シ内地人ニ在リテハ朝鮮語、朝鮮人ニ在リテハ國語ノ試験ヲ行ヒ其ノ合格者ヲ見習ニ採用シテ各官廳ニ配屬シ行政事務ヲ練習セシマルコト一年以上ヲ經テ初メテ之ヲ本官ニ任用スルコトト定メタリ

朝鮮總督府判事及檢事ノ任用ニ関シテハ初メ裁判所構成法ニ依リ判事檢事又ハ司法官試補タル資格ヲ有スル者ノ中ヨリ任用スルノ制ナリシモ大正二年四月制令第五号ヲ以テ朝鮮總督府判事及檢事ハ裁判所構成法ニ依リ判事若ハ檢事タル資格ヲ有スル者又ハ朝鮮總督府司

法官試補トシテ朝鮮總督府裁判所及檢事局ニ於テ一
年六月以上實務ノ修習ヲ爲シ試驗ニ合格シタル者ノ中
ヨリ之ヲ任用スルコトニ改正セリ

郡守ハ併合以後ニ於テモ依然旧職員ヲ存置シ且其ノ選
任ニ付テモ一般ノ任用令ニ依ラス唯ニ曰韓國政府高等
官ノ職ニ在リテ相當ノ技能ヲ有シ且國語ヲ解スル者ノ
中ヨリ採用スルコト、定メタリ而シテ郡守ノ良否ハ地方
ノ行政上ニ多大ノ影響ヲ及ボス力故ニ其ノ選任ニ付
特別ノ考量ヲ加ヘ先ツ國語ニ精通シ能ク新政ノ本旨
ヲ了解シ且地方行政事務ニ經驗アル人材ヲ登用スル

方針ヲ以テ明治四十五年四月以降各道長官ヲシテ每
年一回五級以上、地方廳判任官ヨリ郡守候補者ヲ選
任シ其ノ人物素行、建康、並地方行政官トシテノ技能他官
廳又ハ人民ニ對スル態度、資産、有無等ヲ調査報告セ
シメ之ニ依リ郡守補缺ノ選任ヲ定ムルノ制ヲ設ケタ

曰韓國時代ニ於ケル官吏任用ノ方法ハ科擧ノ制アリ
シニ過キス此ノ制ト雖年所ヲ經ルニ隨ヒ有名無實ト
ナリ之ニ應スル者ハ名門ノ出ニ止マルルノミナラス
其ノ多寡ニ由リテ採否ヲ決スルノ弊ヲ生セリ然ルニ

併合後新ニ制定シタル朝鮮人判任官試験規則ハ其ノ
方法最モ嚴正ニシテ何人ニテモ其ノ實力ヲ有スル者ノ
合格ヲ許ス力故ニ一般ノ歡迎スル所トナリ明治四十四年
九月各道ニ於テ施行セシ第一回試験ノ效果トシテ朝
鮮人中官吏ヲラントスル者ヲシテ受験ニ必要ナル智識
技能ノ修養ニ留意セシタルニ至レリ雇員採用ニ関シ
テモ新ニ規定ヲ定メ品行方正年齡十六歲以上五十歲
以下ニシテ一定ノ試験ニ合格シタル者ヨリ之ヲ採用スル
コト、爲シ其ノ試験科目中判任官見習試験ト同シク内
地人ニ對シテハ朝鮮語、朝鮮人ニ對シテハ國語ヲ必須

科目ト爲セリ

官吏カ其ノ服務上心得ヘキ規定ハ舉ゲテ官吏服務規
律ニ在リト雖朝鮮ノ如キ新領土ニ於ケル官吏ハ一層
其ノ規律ヲ嚴肅ニスルノ必要アルヲ認メ明治四十五
年四月服務心得ヲ訓示シ官吏新任ノ際ハ必ズ服務
心得書ニ署名セシメ且毎年政治始ノ日ニ於テ官吏服
務規律ト共ニ之カ誦讀式ヲ行ハシムルコト、爲シ尚ホ
各官廳監督官ヲ會同スル毎ニ官紀ヲ守リ品位ヲ保ツ
ニ於テ遺漏ナキ旨ヲ反覆訓達セル結果近來官吏ノ
風紀頗ル面目ヲ改メ殊ニ朝鮮人官吏ニ於テ從前ノ

如キ放逸ノ風ヲ絶ツニ至レリ

第三章 地方行政

第三節

行政區域ノ整理及職員ノ配置

明治三十九年保護制度施行當時ノ韓國地方制度ハ全國ヲ分チテ漢城府及十三道トシ更ニ各道ヲ通シ一牧、三府及三百四十一郡ニ分チ道ニ觀察使、牧ニ牧使、府ニ府尹、郡ニ郡守ヲ置キ別ニ開港地ニ監理ヲ置キタリ而シテ此等官吏ノ職務ハ各官制ニ依リテ定メラレタリト雖多クハ空文ニ歸シ勸業、教育、土木、衛生等ノ地方政務ハ一モ實績ノ見ルヘキモノナク賣官ノ餘弊トシテ中央政府ハ此等官吏

ニ對シテ殆ト何等ノ監督ヲ加ヘス租税ノ賦課徵收ニ
關シテモ確的ナル規定ヲ設ケス爲ニ諸種ノ弊害百出スル
ニ至レリ明治三十九年二月統監府開設後地方弊政
ノ改善一日モ緩ウスヘカラサルヲ認メ韓國政府ヲシテ地方
制度調査委員ヲ設ケレメ日韓兩國官吏ヲ任命シテ
調査セシメタル結果同年九月地方官官制及關係法令ヲ
發布シ第一四ノ整理ヲ行ヒタリ尋テ翌年七月ノ施政改
善ニ關スル日韓協約ニ基キ同年十二月更ニ地方官制ヲ
改定シ勸察使ノ權限中兵事、司法、收税、鑛業、度量
衡等ノ事業ヲ他ニ移屬シ警察事務ハ特ニ内部ニ警

藩局ヲ新設シテ之ヲ監督セシムルコトニ定メテ明治四十二
年始メテ地方費法及民籍法ヲ制定シ行政區劃モ亦隨
時多少ノ改正ヲ加ヘ併合當時ニ於テハ十三道十一府三
百廿七郡トナレリ

明治四十三年總督府設置ノ際更ニ地方官官制ヲ制
定シ財務監督局及財務署ヲ廢シテ之ヲ道府又ハ郡
ノ地方廳ニ併セ又理事廳ノ事務ヲ各關係地方廳ニ
分屬シ從來農商工部ニ屬セシ種苗場其ノ他地方
産業獎勵ニ關スル事務モ亦地方廳ニ移屬セタリ而
シテ十三道長官中七名ハ内地人官吏ヨリ任命シ他ノ六名ハ

舊觀察使タリシ朝鮮人ヲ以テ之ニ充テ書記ニハ朝鮮人
ヲ僱用シ且右道ニ朝鮮人叁與官一名叁事叁名ヲ置キ
道長官ノ諮問ニ應セシムルコトセリ府ハ大抵内地人ノ集
團地ニ在ルヲ以テ府尹ニ從來理事官ノ職ニ在リタル者又
ハ内地人高等官ヲ任用シ郡守ニ總テ舊郡守ノ職ニ
在リタル者又ハ學識名望アル朝鮮人ヲ任用シ右府郡共
ニ諮問機關トシテ朝鮮人叁事二名ヲ置ケリ又同官
制中ニ面及面長ニ關スル規定ヲ設ケ面長ハ判任待
遇ト爲シ府尹又ハ郡守ノ指揮監督ヲ受ケ行政事
務ヲ補助執行スル下級行政機關タルコトヲ認メタリ

而シテ中央ニ於テ緊縮ヲ加フニ同時ニ地方行政機關ノ
充實ヲ圖リ右道ニ事務官内地人二人、書記内地人十六人
乃至二十二朝鮮人八人、技手内地人二人乃至八人ヲ配置
シ、尚ホ京畿道ニ通譯官内地人一人、忠清南道、全羅南
北道及咸鏡北道ニ技師内地人各一人、慶尚南道ニ技師
内地人二人、京城府ニ事務官及通譯官各一人、書記内地人
各十二人、仁川府及釜山府ニ事務官各一人、書記内地人
各五人、其ノ他ノ府ニ書記内地人各四人又ハ五人ヲ配置シ、尚
郡ニ對シテハ人口ヲ標準トシテ之ヲ四等ニ分チ甲ニ書記内
地人四人、朝鮮人五人、乙ニ書記内地人三人、朝鮮人四人

丙ニ書記内地人二人、朝鮮人四人、丁ニ書記内地人二人、朝鮮人三人ヲ配置シタリ。尋テ明治四十四年及同四十五年、兩回ニ互リ更ニ地方廳ノ増員ヲ圖リ、右道ニ事務官内地人一人、書記内地人二人乃至九人ヲ増配シ、又道技師及技手ハ別ニ定員ヲ設ケス。豫算定額内ニ於テ之ヲ置クヲ得ルコトトセリ。

從來府郡ノ區域ハ其ノ廣狹ニ甚シキ差異アリテ大ナルモノハ數百方里ニ互リ、小ナルモノハ數方里ヲ出テス。從テ其ノ戸口數モ亦甚シク權衡ヲ失セルヲ以テ交通及經濟上ノ關係ヲ考查シ之ヲ分合整理スル爲メ併合以來慎重ナ

ル調査ヲ重キシカ大正三年三月ニ至リ漸ク之ヲ實行スルヲ
得其ノ結果郡數ニ於テ九十七ヲ減シ之ト同時ニ道界
ニ於テモ多少ノ變更ヲ加ヘタリ而シテ地方官吏ノ定員ニ
餘剩ヲ生シタルモノハ概テ之ヲ右府郡ニ配置シ尚ホ同年
四月府制、市街地稅令、煙草稅令及登記令等ノ施行ニ
伴フ必要上書記内地人三十六人朝鮮人四十人ヲ増員シテ
關係府郡ニ配置シ府事務官ハ明治四十五年四月一旦
之ヲ廢止シタルトモ大正三年四月ニ至リ再ヒ之ヲ復活シタ
リ將來ニ於テモ尚ホ地方行政區畫ニ變更ヲ加フル必要
ヲ生スヘキモ行政吏員ノ數ハ其ノ事務ノ繁劇ヲ加フルニ

隨ヒ漸次之カ増加ヲ見ルニ至ルヘシ

第四節

面ノ整理

府郡ノ下ニ在ル面ノ區域ハ併合ノ際總テ舊ニ依ルヲト
爲シタルカ是モ亦大小不同ニシテ最モ大ナルモノ中ニハ面積
百七十餘方里ニ互リ内地ノ一府縣ヲ超スルモノナキニ非ス最
小ナルハ僅ニ一方里ノ三分ノ一ニ足ラス其ノ戸教ニ就テ見ルモ
多キハ七千餘戸ニ及ヒ少キハ九ノ一ニ止ラズ是ヲ以テ府
郡ノ廢合ヲ行フト同時ニ大約戸教八百、面積四方里ヲ
標準トシテ之ヲ整理シ總數四千三百二十二ノ中千八百ヲ
減シテ二千五百二十二面ト爲セリ面吏員ノ整理及監督

ニ關シテハ併合以來漸次周到ヲ加ヘ從來公錢領收負、
守直、執綱、有司、領座其ノ他地方ニ^振種々ノ名稱
ヲ付シタル吏員アリクレトモ漸次之ヲ廢止シ面長、面書記、
洞里長、面主人、面下人ノ外ハ止ムヲ得サルニ非サレハ之ヲ設ク
ルヲ許サズ且其ノ給與ノ標準ヲ一定シ面事務ノ指導
監督ニ關スル^ニ標準則ヲ定メ以テ公私混淆ノ弊ヲ除ク
コトニ努メタリ

面ノ財務ニ關シテハ舊韓國政府時代ニ於テハ何等據ル
ヘキ規準ナク面職員ハ面民ヨリ隨意金品ヲ徵收シ
其ノ間弊害少カラサリシヲ以テ併合後ハ無名ノ徵收

ヲ避ケシムルト共ニ面費ノ節約ヲ圖リ面民ノ負擔ヲ
輕減セシムルノ方針ヲ採リ府尹郡守ヲシテ道長官ノ
認可ヲ經テ面費負擔及支出ノ方法ヲ定メセシメ更ニ
大正二年三月總督府令ヲ以テ面經費負擔方法ヲ
定メ面賦課金トシテ賦課シ得ヘキ種目ヲ戶別割、
地稅賦課^金稅ノ二トシ戶別割ハ一戶三十錢以内、地稅
賦課金ハ平安南北道、咸鏡南北道ニ在リテハ本稅一
圓ニ付八十錢以内、其ノ他ノ各道ニ在リテハ本稅一圓
ニ付五十錢以内ヲ制限課率トシ特別ノ種目ヲ設ケ又ハ
制限外賦課ヲ爲サムトスル場合ニハ道長官ノ許可ヲ受

ケシムルコトトシ道長官ハ是等ノ許可ヲ與フニ際シテハ
豫メ總督ノ承認ヲ受クヘキ事トシ以テ負擔ノ自然
膨大ヲ防止セタリ尚ホ以上ノ制限課率ハ面廢后並地
地稅ノ增徴ニ伴ヒ一層緊縮ノ要ヲ認ムルニ至リタルニ以テ
本年三月地稅賦課金課率ヲ平安南北道、咸鏡南北
道及江原道ニ在リテハ本稅一圓ニ付四十錢以内、其ノ他
各道ハ二十錢以内ニ改正シ大正三年度ヨリ之ヲ實施セリ
又前掲面經費負擔方法ノ制定ト同時ニ面賦務取扱
心得ヲ發布シ以テ面ノ歲入歲出豫算決算ノ方法ヲ
定メ又現金ハ郵便局所若ハ銀行ニ預入レシムルヲ原則

トシ特殊ノ事情ノ爲ニ預入ヲ爲シ難キモノハ府尹郡守ノ
許可ヲ受ケシメ又出納上備フヘキ帳簿ノ種類ヲ定メテ
面經費經理ノ方法ヲ明シ尙ホ面經費以外ノ協議費支
出ヲ廢止セシメ之ト同時ニ面職員ノ定員並給與ヲ制限
シ歳入歳出相俟ツテ面費ノ節約ヲ期シツツアリ其ノ
結果面費ニ關スル負擔ハ之ヲ併合當時ニ比シ著シク減
額セララルニ至レリ

面ハ現時單ニ最下級ノ行政區域タルニ止マリ自ラ一般
的ニ公共事業ヲ經營スルノ能力ヲ有セスト雖其ノ中
方ニ依リテハ舊韓國政府時代ヨリ財産ヲ所有スルモノアリ

是等ノ財産利用上必要ナル行為ハ元ヨリ之ヲ認メサルヲ得ス
又輓近墓地規則ノ如キ法令ニ依リ或ル種類ノ事業ニ限
リ面ヲシテ經營セシムルコトヲ認メタルモノアリ又面ヲシテ地方
ニ模範ヲ示シシムルト共ニ面財源ノ涵養上小規模ノ殖林
ヲ爲サシムルカ爲メ國有山野無代讓與ノ途ヲ開キ既ニ
幾多ノ面ニ於テハ其ノ實行ニ着手セルモノアリ其ノ他係
合以前ニ於テモ共同ノ費用ニ依リ道路橋梁等莫ク
地方ノ公共事業ヲ經營セシ慣例アリ又現在ニ於テモ
面苗圃等ヲ經營セシムルモノアリ故ニ事實ニ於テハ面モ亦今
日極メテ狭小ナル目的ノ範圍内ニ於テハ地方團體ニ直ニ

性質ヲ有セリ故ニ將來適當ノ時機ニ於テ其ノ法人格
ヲ認メ以テ事業經營ノ賦與シ地方ノ開發ニ資セリ
ムトス又洞里ニモテ從來財産ヲ所有スルモノ斯カラズ
然レトモ往々ニモテ其ノ管理ノ方法ヲ誤リ又ハ收入ノ費
途適當ナラサルモアリシヲ以テ其ノ準則ヲ示シ道長
官ヲシテ管理ノ方法ヲ定メシムルト共ニ收益ハ總ニ面費
收納ニ又ハ公共ノ費用ニ充當セシメ以テ其ノ利用ノ増進

第五節

新府制、施行

朝鮮ニ於ケル本邦在留民ハ初メ日本人會又ハ居留民會等ヲ組織シ必要ナル公共事務ヲ處理シタリシカ明治三十八年居留民團法施行セリル、ヤ京城、仁川、釜山、平壤、鎮南浦、群山、木浦、馬山、元山、大邱、新義州ニ於テハ相次イテ居留民團ヲ組織シ教育、衛生、土木、救助等、事務ヲ處理スルコト、ナリ其、他、内地人集團地ニ於テモ明治四十二年學校組合令發布以來漸次日本人會組織ヲ學校組合ニ改メ教育並衛生事務ヲ處

理スルニ至レリ又居留民團、外仁川、鎮南浦、群山、木浦、馬山及城津ニハ各國居留地アリ仁川、釜山及元山ニハ支那居留地アリ一定ノ地域ヲ限リ其ノ地域内、行政ハ各國居留地ニ在リテハ當該地方官各國領事及永代借地人代表者ヨリ成レル居留地會支那居留地ニ在リテハ當該領事官之ヲ執行セリ此等、行政機關ハ併合ト同時・整理スヘキモノナリシト雖當時俄國之ヲ廢シテ一般ノ地方行政區域ニ編入スルヲ得ザリシ事情アリシヲ以テ暫ク其ノ存在ヲ認メ各

般、調査ヲ行ハト同時ニ關係諸外國ト協商ヲ
遂ケ大正三年四月一日ヨリ此等ノ諸制度ヲ撤
廢シテ府制ヲ施行シ内鮮人ハ勿論曰居留地内
ニ居住スル外國人ヲモ一般行政ノ下ニ統轄ス
ルニ至レリ

府ノ行政ハ府尹之ヲ擔任シ尙ホ諮問機關トシ
テ協議會ヲ置キ恒産ヲ有シ府ノ實情ニ通シ常
識ニ富ミ名望識見アル人材ヲ舉ケ協議會員ニ
選任シ府ノ施設ヲシテ其ノ地方ノ實狀ニ適應
セシムルニ於テ遺憾ナカラハコトヲ期シタリ

府ノ發達ヲ計リ府住民ノ福利ヲ増進スルニ必
要ナル事業ハ皆府ノ經營ニ俟ツヘキヲ以テ府
行政ノ將來ハ極メテ多端ナルヘク常ニ民度ト
財力トニ鑑ミ緩急宜ク割スルヲ要ス目今ニ於
ケル府ノ事業ハ公共的施設中水道、下水道、汚物
掃除、避病院、墓地、如キ都市生活ノ安全ヲ期ス
ル上ニ於テ必要缺クヘカラサルモノアリ又市
街ノ改良、道路ノ改修、公園、感化、救済等ニ関スル
事業モ漸次完成ヲ圖ラサルヘカラズ之カ為ニ
多額ノ經費ヲ要スヘキハ勿論ナリ而シテ府ノ

経費ハ使用料、手数料、財産収入等ヲ以テ之ヲ支
辨スルヲ本則トシ尚足りサルトキハ府税ヲ徴
収シテ之ニ充ツルヲ得ルコト、セルモ使用料、手数料
、如キハ財源トシテ殆ント云フニ足ラズ財産
其、他ノ収入亦豊富ナラサルヲ以テ勢ヒ止ム
ヲ得ズ府税ニ財源ヲ求メ又ハ起債ヲ以テ其ノ
急ニ應ジツ、アリ然レトモ市民ノ負擔力ニハ
一定ノ限度アルノミナラズ府税ニ依リ経費ノ
増加ニ應セムトスルハ永久ノ得策ニ非ラサル
ヲ以テ府ノ財政計劃ニ於テハ基本財産ノ造成其

、他財力ノ充實ヲ圖ルヲ主眼トシ止ムヲ得カ
ル府税ノ賦課ニ付テハ將來内鮮人ヲ通シ公平
ニ且成ルヘク容易ニ徵收シ得ヘキ税種ニ付確
實ナル調査ヲ遂ゲタル後ニ各府ノ財力ニ應シ
適切ナル税制ヲ定メシメムトス

第~~四~~節

地方費

舊韓國政府時代ニ於テハ殆ト助長行政ナルモ
バナク地方ニ於ケル公共事務ハ概ネ開却セリ
レタルニ拘ハラス種々ナル名目ノ下ニ賦課ヲ
為ス、例アリ地方事業ナクシテ地方税、ニ存

スルカ如キ奇觀ヲ呈シタリ明治四十二年統監
府ハ韓國政府ヲシテ地方費法ヲ制定セシメ從
來ノ弊害ヲ矯正セムコトヲ期シタリ併合以後
ニ於テモ地方公共事業ヲ舉テ政府ノ施設ニ俟
タムトスルハ國家財政ノ許ササハ所ナハヲ以
テ該法ノ存續ヲ認メ從前ノ稅目ヲ踏襲シ當分
新設又ハ増率ヲ行ハサハ、方針ヲ採リ整理又
ハ統一上必要アルモノニ限り改正ヲ行フニ止
メタリ而シテ併合以來改正ヲ行ヒタル重ナル
モノヲ舉グルハ從來各道屠場ノ稅率ヲ異ニセ

ルヲ改メ其ノ最高率一圓五十錢ヲ程度トシ低
率ナル各道ニ對シテハ特ニ稅率ノ改正ヲ認可
シ又本年度ヨリ市街地稅令實施ノ結果其ノ施
行地域ニ對シテハ市街地稅附加稅ヲ設ケシメ
又京城府ニ於ケル從來ノ土地家屋所有權取得
稅及抵當權取得稅ヲ廢止セシメタル等ナリト
ス

地方費賦課金ハ併合以前ニ在リテハ其ノ收入
確實ナラズ往々豫定ノ實收ヲ見ル能ハザリシ
力併合以來新政ノ普及ト共ニ漸次確實トナリ

年々十數萬圓、增收ヲ見ハニ至リ併合以前ニ
在リテハ其ノ收入總額六十萬圓ニ滿タサリシ
モ、今ヤ百萬円以上ヲ算スルニ至リ之ニ國庫
補助金ヲ加フルトキハ全土ヲ通シテ二百四十
萬圓ニ上ルヘキモ未タ内地ノ大ナル一府縣ノ
歲入額ニモ及ハス之ヲ各道ニ分ツトキハ一道
平均僅ニ十數萬圓ニ過キサルヲ以テ緊要ナル
施設モ容易ニ之ヲ實施スルヲ得ス地方開墾工
財源ノ不足ヲ感スルニ依リ一面民力ノ増進ヲ
圖ルト共ニ之ヲ資源ヲ講究スルノ要アリ殊ニ

現在歲入額、約半額ハ國庫補助金ナレトモ補助金、如キハ固ヨリ永久的財源ト見ルヘカラ
サルヲ以テ漸次自給ノ途ヲ講スルト共ニ之カ
整理ヲ圖ルコト亦必要ナリトス

併合以來大正二年度ニ至ル三箇年間ニ於テ也
方公共事業、為支出セル地方費、金額ハ總計
五百八十一萬三千餘圓(內國庫補助金二百九十
八萬二千圓)ニシテ之ヲ細別スレハ勸業費百三
十八萬八千餘圓(內國庫補助金六十九萬三千圓)
土木費二百四十三萬二千餘圓(內國庫補助金九

十九萬五千圓）教育費百七十二萬八千餘圓（內國
庫補助金百二十六萬六千圓）衛生費二十六萬四
四千餘圓（內國庫補助金二萬六千圓）ニシテ其ノ
金額敢テ多大ナラズト虽其ノ施設ハ地方公共
事業ノ各般ニ涉リ效果頗ル見ルヘキモノアリ
各事業ノ概要ヲ述ブレハ勸業ニ在リテハ普通
農業、灌溉、養蠶、畜產、水產、殖蠶、機業、製紙其ノ他地
方産業ノ殆ト全般ニ涉リテ其ノ助長ヲ圖リ又
道路、橋梁及港灣ノ新築修繕ヲ行ヒ夫役ニ依ル
道路工事ニ對シテハ土工用器具ヲ配付シテ其

、事業ヲ幫助スル等主トシテ交通運輸、便ヲ
圖ル、外河川堤防ヲ修築シテ治水、法ヲ講シ
尚ホ普通教育、普及ヲ圖ル、外農業及商業ニ
関スル實業學校ヲ經營シ更ニ屠畜、検査、種痘
施行、飲料水、改良、下水、排除、隔離病舎、新
築等衛生上、施設ヲ為シ地方開發上ニ貢獻セ
ル所鮮少ニ非サルナリ

第七節

臨時恩賜金事業

韓國併合ニ際シ我々天皇陛下ハ特ニ國帑一千
七百三十九萬八千圓ヲ支出シ之ヲ府郡ニ下付

シテ授産、教育及凶歉救済ノ資ニ充テシメラレ
グリ而シテ此恩賜金ノ分配及管理活用ノ方法
ニ関シ本府ニ於テ細密ナル講究ヲ遂ケタル結
果分配ニ関シテハ京城府ハ恒産ナキ兩班儒生
甚タ多キニ依リ特ニ百萬圓ヲ配與シ其ノ他ノ
府郡ニハ平均五萬圓トシ其ノ内二萬五千圓ハ
平均割ヲ以テ殘額二萬五千圓ハ人口割ヲ以テ
配與スルコトニ定メ其ノ管理ハ道長官ヲシテ
之ニ當ラシメ事業ノ種類及経理ノ方法竝豫算
ニ関シテハ本府ノ認可ヲ受クヘキモノトシ資

金、元本ハ之ヲ費消セス基金トシテ永遠ニ傳
ハ年々利子ヲ以テ事業ヲ施設シ以テ土民ヲシ
テ恒久ニ至仁ノ皇澤ニ浴セシムルノ方針ニ採
リ利子使用ノ標準ハ投産ニ十分ノ六、教育ニ十
分ノ三、凶歉救済ニ十分ノ一ト定メ地方ノ事情
ニ應ジ從來素地アル事業ヲ選擇シ若ハ最其ノ
地方ニ適應シタル事業ヲ選擇シテ之ヲ普遍的
ニ全土ニ及ホシ明治四十四年度ヨリ各道共ニ
事業ノ實施ヲ見ハニ至レリ各事業ノ經過及將
來ノ計劃ヲ舉ケレハ大畧尤ノ如シ

(一) 授産事業

授産事業、重十九元、ハ養蠶農業、機業、製炭、製紙、製麻、及水産等ニ関スル傳習實業教師、配置、農蠶、林業、畜産、水産、及各種工業ニ関スル種苗、器具材料、配付等ニシテ傳習所、數ハ各種類ヲ通シ明治四十四年度ニ於テ百八十六箇所其ノ生徒數二千五百十二人、大正元年度ニ於テ百三十八箇所其ノ生徒數二千六百七十一人、大正二年度ニ於テ百三十六箇所其ノ生徒數二千七百五十六人、大正三年度ニ於

テ百三十六箇所其ノ生徒數二千二百七十九
人、以上生徒數通計一萬二百十八人ニ達シ此
ノ外短期簡易ノ傳習亦到ル所ニ行ハレ其ノ
傳習ヲ受クル者毎年數千人ヲ算シ而シテ是
等傳習ヲ受ケタル者ハ今ヤ出テテ其ノ履修
事項ヲ實地ニ應用シ種苗配付等ノ施設ト相
俟テ地方産業ヲ改良シ若ハ新ニ物産ヲ興セ
ル等顯著ナル成績アルヲ認ム

己教育事業

教育事業ハ主トシテ普通學校ノ設立維持ヲ
ハ

圖ヲシムルヲ以テ方針ト爲シ從來教育ニ充
ツヘキ金額ハ已ムヲ得ル事情ニ依リ特ニ
私立學校等ニ補助スル必要アルモノ、外總
テ之ヲ公立普通學校ノ設立又ハ維持ニ對ス
ル經費ニ補助シツ、アリ而シテ現ニ以テ補
助ヲ受クル公立普通學校ハ三百八十校ニ及
ビ又以テ補助ニ依リ公立普通學校ヲ設立ス
ルニ至リシモノ大正三年度迄ニ二百八十一
校ニ達セリ

(八) 凶歉救濟事業

凶歉救済ニ関シテハ旱魃又ハ水害等、為救
済、必要アル場合ニ於テ種穀、給與其ノ他
生業ヲ扶助スヘキ方法ヲ採ラシムルト共ニ
救助ヲ濫施スル弊ナキヲ期セリ而シテ毎年
度凶歉救済費ニ充ツヘキ金額ハ約八萬七千
円ナルカ既往支出、實況ニ依レハ比較的救
済ヲ要スルコト多カリシ年度ニ在リテモ其
、支出額一萬円ニ過キヌミテ年々其ノ大部
分ヲ餘シ大正二年度迄ニ既ニ三十萬ニ近キ
剩餘額ヲ生シタルヲ以テ將來相當、時機ニ

於テ本費ニ関シテハ府郡別ノ經理ヲ廢シ之
ヲ道ニ統一シ明治天皇及昭憲皇太后崩御ノ
際下賜セラレタル朝鮮恩賜罹災救助基金ト
併セテ救済ノ目的ヲ遂ケルニ遺憾ナカラシ

メムトス

第八節 學校組合

從來朝鮮ニ於ケル内地人教育ハ居留民團所在
地ニ在リテハ居留民團其ノ他ノ地方ニ在リテ
ハ學校組合之ヲ經營シ來リシカ府制ノ施行ニ
伴フ學校組合令ヲ改正シ旧居留民團所在地々

ル府、區域ニ於テモ亦内地人教育ニ関スル學
校組合ヲ組織セシメ全土ヲ通シテ其ハ制ヲ統
一セリ

内地ヨリ来ル移住民ノ第一ニ要望スル所ハ其
ノ子弟ヲ教育スヘキ小學校ノ設備ニ在リ學校
組合ノ事業ハ少数ノ組合ニ於テ高等女學校及
實業學校ヲ經營スルモノ、外總テ小學校ノ維
持經營ニ在リ而シテ一小學校ノ經費ハ單級小
學校ニ於テモ尚ホ少クモ一千圓ヲ下ラサレカ
故ニ之ヲ組合ノ獨力ヲ以テ經營セシメムトセ

ハ到底組合負負擔力、堪ユル所ニ非サルヲ以
テ從來若干、新設備、外一名、教員給ニ相當
スル額ヲ補助シ来レリ以、種ハ補助ハ多数ノ
組合ニ在リテハ今後ト虽尚ホ缺クヘカラスト
雖来住内地人、數増加スルニ從ヒ組合ノ財力
増加ムヘキヲ以テ斯ノ如キ經常費ノ補綴ハ將
来ニ於テ其ノ必要ヲ見サレニ至ルヘシ尺市邑
ニ於ケル内地人、増加ハ頗ル急速ニシテ負擔
力ノ増加之ニ伴ハサルモノアリ年々非常ナル
速度ヲ以テ増加スル就學兒童ヲ收容スヘキ校

舎ノ建築ハ概ネ起債ヲ以テ其ノ急ニ應シツ、
アルカ為組合ノ財政ニ影響スルコト鮮少ナラ
ス徒テ是等ノ組合ニ對シ校舎建築ノ如キ比較
的多額ヲ要スル臨時費ニ對シ相當ノ補助ヲ與
フルハ現時ノ狀況ニ在リテ亦止ムヲ得サル所
ナリ

從來學校組合ハ教育事務ノ外附帶事業トシテ
衛生事務ヲ處理スル権限ヲ有シタレト改正組
合令ニ於テハ專ラカヲ教育事業ニ注カシムル
方針ヲ採リ只從來屠場、水道、火葬場、墓地等ヲ

經營シ来リタル組合ニ對シ俄カニ之カ停止ヲ
命スルトキハ組合財政ノ基礎ヲ動搖セシメ且
住民ニ著シキ不便ヲ感セシメムコトヲ慮リ當
分其ノ經營ヲ繼續セシメタルモノアリ然レト
モ將來之ニ代ハリ適當ナル經營ヲ為スヘキモ
ノルニ至リ又ハ組合財政ニシテ此ノ種事業
ノ經營ヲ必要トセサルニ至ラハ直ニ之ヲ廢止
セシメム

第九節

水利組合

從來朝鮮ニ於ケル水利事業ハ概ネ政府直接ノ

施設カ又ハ民間有資力者、經營ニ係リ利害関
係ヲ有スル土地所有者、共同經營ニ屬スルモ
、ハ殆ト稀ナリシカ明治三十九年水利組合條
例、發布以來全羅北道及慶尙南道地方ニ於テ
水利組合ヲ設ケタルモノハ箇所其ノ工費總額
百十八萬二千餘円灌漑面積合計一萬二千餘町
歩ニ及ヒ大體ニ於テ好成績ヲ収メツ、アルハ
産業開發上注目スヘキ現象ナリトス但テ此等
組合ノ理事者ハ多クハ未タ公共組合ノ事務ニ
熟練セザルヲ以テ事務ノ處理充分ナラザルカ

故ニ暫ク政府ノ指導監督ヲ要スルモノアルヲ
認ム

第十 第九節 社還米

社還米ノ制度ハ高句麗朝ニ濫觴シ爾來軍糧ニ
供スル目的ヲ以テ官ニ於テ穀物ヲ貯藏シ其ノ
一部ヲ人民ニ賑貸セリ高麗朝ニ於テハ人民共
同貯穀ヲモ見ルニ至リシリ李朝ニ至リ民穀
ニ關スル制度漸次廢絶ニ歸シ官穀ノミトナリ
之ヲ還穀ト稱シタリ爾來其ノ貸與上偏頗ニ流
レ或ハ田收ノ方法往々苛酷ニ失スルノ弊害ヲ

生ミタルヲ以テ明治二十八年韓國政府ニ於テ
現行社還條例ヲ制定シ各道所在ノ還穀ヲ社還
ト改稱シ之ヲ各面ニ分置シ面ノ公穀トシテ窮
民賑貸ノ用ニ供セシメ其ノ管理運用共ニ面ノ
自治ニ任セタリ然レトモ該條例ノ實施モ未タ
充分ニ其ノ效果ヲ舉グルニ足ラズシテ從來ノ
弊竇ヲ絶ツニ至ラス舊宮内府ノ官吏カ咸鏡北
道ノ一部及平安南北兩道ノ各郡ニ於ケル貯穀
ヲ収捧シ又間島管理李範允カ日露戰役中檀
咸鏡北道數郡ノ貯穀ヲ露軍ニ給與シタルカ如

キ貯穀ノ目的ニ反スルノ措置ヲ見ルニ至リ貯
穀モ亦著シク其ノ數量ヲ減シ殊ニ韓國併合ノ
際明治四十二年以前貸付ノ社還米約五萬石ヲ
特免セリタル結果慶南、黃海、平南、平北、咸北、
五道ニハ全ク其ノ跡ヲ絶テ又當時ノ三百二十
九府郡ノ内之ヲ存スルモノ百十九府郡ニ過キ
升ルニ至リ然レモ其ノ残存額ハ全體ヲ通
シ米一萬九千五百十六石、粳千五百三十九石、麥
二千五百六十三石、大豆二百四十五石、粟二百八
十二石ニ達スルニ依リ之ヲ保全及利用ニ関シ

注意ヲ拂フノ必要アルヲ言フ俟タズ然ルニ社
還米ニ関シテハ尚昔日ノ情弊ヲ存シ特ニ貸付
及回收方法不完全ナル為回收不能ノモノヲ生
シ且品質年々共ニ粗惡ニ流ル、傾向アルヲ以
テ其ノ貸付及回收上特ニ注意スルハ要項即チ
三回收ノ見込ナキ者ニハ貸付セサルコト三貸
付ノトキハ證書ヲ徴シ且信用アル者二人以上
ノ保証人ヲ立テシムルコト三規定ノ利子ヲ付
スルコト四一人當貸付制限ヲ定ムルコト五回
收期限ハ次期収獲期ハ超ヘサルコト六回收ノ

際ハ品質及數量ヲ嚴查スルコト等ヲ指示シ且
同時ニ之ニ對スル監督ノ勵行方ヲ促シ以テ其
ノ管理ノ確實ヲ期シ又社還米ヲ常時貸出ノ必
要ナキ地方ニ在リテハ之ヲ賣却シテ金員トナ
シ且其ノ金員ハ必要ニ依リ細民ノ農業資金ニ
對シ貸出ヲ為シ得ルモノトシ以テ其ノ管理及
運用ノ便ヲ圖レリ
社還米ノ旧慣ハ之ヲ存續スルモ可ナリト虽モ
凶歉救濟基金及罹災救助基金ノ設置アル今日
貯穀販賣ノ必要ナキニ至レルヲ以テ將來適當

、時機ニ至リ之ヲ救助基金ニ編入スルカ或ハ
直ニ之ヲ面、所有ニ移シ其ノ基本財産若ハ
有益ナル事業資金ト為サシメムトス

第十節 勤儉貯蓄、獎勵

朝鮮、人民ハ古來秕政ノ結果自ラ遊惰放逸、
弊風ヲ馴致シ相率テ勤勉力行ノ氣象ヲ失フ
ニ至レルヲ以テ併合後ハ有ラユル機會ヲ利用
シ勤儉貯蓄ノ風習ヲ鼓吹スルニ努メタリ司法
及警察機關ノ普及ニ伴ヒ一般ニ生命財産ノ安
固ヲ得タルト時勢ノ推移ニ從ヒ生計ノ向上ヲ

求ムトスル希望ト相俟テ漸次良好ノ結果ヲ
見ルニ至リ常業以外ニ養蠶養雞養蜂養豚製紙
機械果樹栽培其ノ他諸種ノ副業ニ從事スルモ
續出シ之ト同時ニ収益ノ幾分ヲ貯蓄スルモ
次第ニ多ヲ加ヘ大正二年末ニ於ケル貯蓄及
副業額又ハ組合ノ數ハ全土ヲ通シテ八千餘其
ノ人員五十五萬餘人其ノ貯金額五十八萬餘圓
ニ上リ又郵便貯金八九十餘萬圓其ノ人員四十
四萬ヲ越ヘ之ヲ無為徒食一錢ノ貯蓄ナカリシ
昔日ニ較フレハ隔世ノ感アルヘシ依テ將來益

此、美風ヲ獎勵助長スルト同時ニ貯金、保管
及利用上遺憾ナキヲ期セムトス

第三章 警察事務

第一節 警務機關

朝鮮舊來ノ警務機關トシテハ漢城ニ左右捕盜廳アリ各道ニ於テハ觀察使地方治安ノ任ニ膺リタルニ過キズ所謂警察制度ト稱スヘキモノハ明治二十七年捕盜廳ヲ廢シテ警務廳ヲ置キ漢城府内ニ於ケル警察及監獄ノ事務ヲ掌ラシメ其ノ下ニ五個ノ警察署ヲ設ケ又各道觀察廳ニ警察官ヲ置キテ警察事務ヲ擔任セシメ尙ホ各開港場ニ警察署ヲ

置キタルニ始マレリ爾後屢々制度ニ變更ヲ加ヘタルモ
其ノ實績ノ觀ルヘキモノナカリシヲ以テ韓國政府ハ全
土ニ於ケル警務ノ刷新擴張ヲ圖ラムカ為メ明治三
十八年本邦ヨリ警務顧問ヲ傭聘セリ該顧問ハ明
治三十八年二月我外務省ノ仲介ニ依リ韓國政府ト傭
聘契約ヲ締結シ先ツ日本ヨリ警部七名ヲ聘用シテ之
ヲ警務廳及漢城五警務署ニ配置シ專ラ韓國人警
察官ヲ指導シ舊來ノ積弊ヲ一洗シ道路衛生等ニ
關スル警察ヲ更張シ刑事被告人ノ拷問罪囚ノ待遇
等ヲ改善シ漸次經費ノ許ス範圍内ニ於テ日本人警

視、警部、巡查ヲ増聘シテ顧問部附トシ其ノ職務ヲ
幫助セシムル傍韓國人警察官ノ教養ニ努メ又地
方ニ對シテハ各道觀察府ニ警務顧問補佐官ヲ置キ
日本警察官吏ヲ配置シテ之ニ充テタリ

統監府設置後明治三十九年六月第一期警察擴張
ヲ實行シ各道觀察府所在地ニ警務顧問支部ヲ設
置シ其ノ下ニ全國ヲ通シテ二十六箇所ノ分遣所ヲ設
ケ更ニ之ヲ細劃シテ百二十二箇所ノ分派所ヲ置キ之ニ
日本人警視十一人、警部二十六人、巡查五百二十人ヲ配置ス
ルコトトシ此等日本人警察官ハ各補佐官、補佐官補及

補助員ノ名義ヲ以テ韓國警察事務ヲ執行シタリ又韓
國人警察機關ハ全國ヲ通シテ警察署十三箇所警
務分署二十六箇所分派所百二十二箇所ヲ置キ警務官
十三人總巡二十六人巡檢二千七百餘人ヲ之ニ配置セ
リ此、警察署、警務分署及分派所ハ事實ニ於テ顧問
支部分遣所及分派所ト異名同體ニシテ相表裏セルモ
ノニ過キス尋テ明治四十年七月新協約ニ依リ日本人ヲ
韓國官吏ニ任用スルコトナリタルニ依リ前記顧問部
員ハ舉クテ韓國政府ニ任用セラレ顧問警察制度ハ
茲ニ終リテ告ケタリ此、機ニ於テ更ニ第二期ノ警務

擴張ヲ圖リタル結果同年十月ニ於テハ警察職員數日本警察
視二十二人警部七十八人巡查千二百餘人韓國人警視以下三
千餘人ニ上リタリ以上ノ外尚ホ本邦在留民ヲ管轄保護スヘキ
韓國駐在日本警察官ハ五百餘人ヲ算セシカ彼我警察事務ノ
統一普及ヲ圖ラムカ為メ日本警官ヲ廢止シテ韓國警察ニ合
併シ在韓帝國臣民ニ関スル警察事務モ亦日本人韓國警察
官ヲシテ當該上級帝國官憲ノ指揮監督ヲ受ケテ執行セシム
ルコトト爲セリ尋テ明治四十一年地方官々制ノ一部ヲ改正
シ各道ニ警察部ヲ設ケ警察、衛生、民籍、移民ニ関スル
事項ヲ管掌セシメタリ尤モ漢城府内ノ警察事務ハ

事首都ニ係ルカ故ニ特ニ從來ノ警視廳ヲ存シテ之ヲ掌
ラシメタリ

是ヨリ先キ帝國政府ハ日清戰役後我軍用電信線守備
ノ目的ヲ以テ臨時憲兵隊ヲ韓國ニ派遣シタリシカ明
治三十六年十二月ニ至リ日露ノ國交切迫スルニ及ヒ新
ニ韓國駐劄憲兵隊ヲ編制シ駐劄隊司令部ニ屬セシメ
タリ明治三十七年十月京城ニ駐劄軍司令部ヲ置クニ
方リ憲兵隊モ亦其ノ指揮下ニ入リシカ當時一派ノ韓
人動モスレハ我カ軍事及外交ヲ阻障セサトスル行動ニ出
ツル者アリ之カ防遏ヲ圖ルニハ到底不完全ナル韓國警察

一 信賴スル能ハサルヲ以テ當時成鏡道ニ軍政ヲ布ケル
外京城及其ノ附近ニ軍事警察ヲ施行スルニ際シ專ラ憲
兵ヲシテ其ノ實行ニ當ラシメタリ爾來憲兵隊ハ韓國各
地ニ駐屯シ主トシテ電信及鐵道ノ保護ニ當リ且一般ノ
警察事務ヲモ執行シ殊ニ暴徒蜂起ノ際ノ如キ韓國ノ安
寧ハ事實上我々憲兵隊ニ依テ維持セラレタリト云フモ
不可ナシ韓國ノ治安維持上憲兵隊ノ效力此ノ如ク大ナ
リシト雖初メハ其ノ軍司令官ノ指揮下ニ在ル關係ヨリ
全然警察トノ聯絡ヲ缺ケル憾アリタルヲ以テ明治三十
九年二月勅令ニ依リ韓國駐劄憲兵ハ軍事警察ノ外行政

警察及司法警察ヲ掌リ行政警察及司法警察ニ付テハ統
監ノ指揮ヲ受クヘキ規定ヲ設ケ又明治四十一年六月ノ
暴徒ノ鎮壓及安寧秩序維持ノ為メ前年解散ヲ命シタル
韓國兵中ヨリ憲兵補助員四千人ヲ募集シ八月ヲ以テ其
ノ選拔採用ヲ了リタリ此等補助員ハ日本憲兵一人ニ對
シ二人乃至三人ヲ配屬シ其ノ指導監督ノ下ニ暴徒ノ搜
索民情ノ偵察其ノ他諸般ノ警察事務ニ服セシメタルニ
概シテ良好ノ成績ヲ得タリ

如斯韓國警察ト帝國駐劄憲兵隊ト相俱ニ統監ノ下ニ在
リテ治安ノ維持ニ任シタルニ各自其ノ系統ヲ異ニセハ

ヲ以テ共通職務ヲ執行スルニ當リ步調ノ一致ヲ保ツニ
便ナラス往々ニシテ扞格ヲ生スルコトアリ殊ニ匪徒草
賊ハ未タ竄滅スルニ至ラズ併合ノ議將ニ起ラケトスル
際一層警務ノ統一敏活ヲ要スルヲ認メ明治四十三年
六月韓國ノ警察事務ヲ舉ゲテ之ヲ帝國政府ニ委託セシ
メ之ト同時ニ憲兵隊及警察官ヲ合同シ警務總長ニハ憲
兵隊司令官タル陸軍將官ヲ、各道警務部長ニハ所在憲兵
隊長タル憲兵佐官ヲ充テ憲兵警察ヲシテ同一系統ノ下
ニ警備ノ任ニ膺ラシムルコトセリ又新官制ノ實施ニ
伴ヒ其ノ配置區劃モ大渡革ヲ加ヘ秩序略々整頓セリ地

警務機關
配置

5

務行憲兵

七七

五・二

六一

六四〇

七七

一八

七四二・一・二・三・六・九

本表中朝鮮人ノ職員ハ警務官一人警視十四人警部百一人、巡查百八十一人、巡查補全部三千百三十一人、總計三千四百二十八人アリ而シテ憲兵ニ在リテハ補助員一千十二人ハ全部朝鮮人ナリ

尚ホ併合後暴徒草賊其ノ跡ヲ絶テ全ク平穩ニ歸シタルヲ以テ明治四十四年十一月以降ハ警察力ヲ分散シテ其ノ配置ヲ周密ナラシムル方針ヲ執レリ而シテ大正三年三月末ニ於ケル現狀左ノ如シ

種別	官 署 數				職 員 數			
普通	警務部	警務部警察署	警察水上巡查	巡查計	警務部長	警務部警務官	警務部巡查	警務部警務補計
警察	一	三	一〇二	四一	一	三	三	三六二九二六二九二六二九
警察官職	憲兵司令部憲兵隊	憲兵司令部憲兵隊	憲兵司令部憲兵隊	計	司令官	將校	下士	警務補助員計
警務憲兵	一	一三	七八	九三	一	一二	七三三	五二五二四七九
								八二九

如斯現在、警察官署數ハ警察署憲兵隊署警察分署憲兵分隊及同分遣所ヲ併セ合計二百八十二箇所ニシテ全人口ヲ一千五百萬人トスレハ一警察官署ノ管轄人員ハ平均五萬餘人トナリ之ヲ内地ニ比スレハ尙ホ未タ著シキ往庭アリ殊ニ内地ニ比シ人口稀薄ナル朝鮮ニ於テハ將

來往費ノ許ス限益ニ警察機關ヲ完備シ每府郡ニ一警察署又ハ憲兵分隊毎面ニ一巡查駐在所又ハ憲兵派遣所ヲ配置スルノ必要アルヲ認ム

又水上警備ニ付テハ明治四十三年警察權委任ノ當時韓國ヨリ承継シタル警備船ハ石油發動機船十隻ニ過キザリシヲ以テ爾後之カ増加ヲ圖リ現在ニ於テハ汽船八隻石油發動機船十五隻ヲ各地ニ配置シテ海港ノ取締及檢疫漁業ノ保護及取締遭難船ノ救護等ニ當ラシメツツアリ又警備電話線ハ現在亘長八百八十餘里延長一千二百七十餘里ニ及ハリ此等特種ノ設備ニ付テモ將來益々其

、擴張ヲ圖リ海陸共ニ警備ヲ完カラシメムコトヲ期ス

第二節 地方騷擾ノ鎮撫

警察力充分ナラサルハ舊韓國時代ニ於テハ地方民擾ノ頻繁ナル發生ハ殆ト連年ノ常例タリ就中江原道慶尙北道附近ノ如キハ所謂火賊ノ巢窟ト認メラレ其ノ他ノ各地ニ於テモ無賴不逞ノ徒集團ヲ爲シテ鄉曲ニ橫行シ良民ヲ剽掠スルモノ甚カサリシカ日露戰役後日韓兩國ノ關係漸ク舊態ヲ改ムルニ從ヒ地方ノ儒生、兩班等大勢ニ通セサル輩ハ漸次排日ノ氣勢ヲ昂メ中央ニ於ケル政治的陰謀ト氣脈ヲ通シ終ニ明治三十九年五月ニ至リ閔宗植

ナル者ヲ首魁トシ忠清南道藍浦ノ郡衙ヲ襲ヒテ郡守ヲ
拉去シ更ニ洪州城ヲ占領シ兵器糧食彈藥等ヲ徵發シ勢
猖獗ヲ極メタリ是ニ於テ統監ハ軍司令官ニ出兵ヲ命シ
歩兵二個中隊及騎兵一個小隊ヲ派遣シ憲兵及警察官ト
協力シテ之ヲ鎮壓セリ更ニ明治四十年七月海牙密使事
件ヨリ延リテ韓皇ノ禪讓トナルヤ京城ニ於テ暴動起リ
首相李完用ノ邸宅ヲ襲フテ之ヲ燒キ拂フニ至レリ次テ
新協約ノ締結韓國軍隊ノ解散トナルヤ八月一日南大門
附近ノ兵營ニ在リタル侍衛隊ノ一部武器ヲ携ヘテ營外
ニ逸出シ我軍隊ニ抵抗シ歩兵二個中隊及若干ノ工兵ヲ

以テ之ヲ鎮撫スルアリ餘波全國ニ及ヒテ竟ニ地方民擾
ノ續起ヲ致セリ蓋シ此ノ次ノ暴動ハ排日思想ノ實現ニ
兼ヌルニ解散兵丁ノ憤起スルアリ郷閭不良ノ輩火賊小
匪ノ類亦此ノ機ニ乘シテ相呼應スルノ状アリ是ニ於テ
一方ニ於テハ警察官及憲兵ヲ増加シ且漸次守備隊ノ配
置ヲ密ナラシメ他方ニ於テハ銃砲火藥類ノ取締及出版
結社ノ取締ヲ嚴ニシ以テ未等騷擾ノ鎮壓ニ努メタル結
果明治四十二年ノ終ニ於テハ暴動漸ク其ノ勢ヲ減シ多
キモ二十名以上ノ集團ヲ為セルモノナキニ至リ更ニ明
治四十三年七月警務機關ヲ統一シ其ノ行動ヲ敏活ニシ

且其ノ配置ヲ周密ナラシメタル微ハ殆ト暴動ノ跡ヲ絶
チ明治四十四年中總督暗殺ノ陰謀ヲ企ツルモノアリタ
ルモ何等ノ騷擾ヲ見ルニ至ラズシテ止メリ爾來頑冥不
靈ノ徒モ時勢ノ推移ニ從ヒ新政ノ惠澤ヲ看取シテ無謀
ノ輕舉ニ出ツル者ナク朝鮮全土悉ク平穩ニ歸シ人民ハ
安堵シテ常業ニ就クヲ得ルニ至レリ

第三節 刑事警察

凡ソ犯罪ノ増減喪遷ハ其ノ時代ノ法制警備力人智ノ程
度交通ノ便否等種々ノ社會狀態ニ依リ影響ヲ被ルコ
ト甚ク大ナリ朝鮮ニ於ケル犯罪ハ併合後諸般ノ法令制

度整備シ警察力普及充實シ且交通ノ便ヲ増スニ從ヒ集團的犯罪ニ屬スル暴徒及政治的犯罪ノ如キハ殆ト屏息シ強盜ノ如キモ漸次其ノ數ヲ減スルニ至リタレトモ詐欺恐喝橫領等ノ智能的犯罪著シク増加シ從來朝鮮ニ多ク其ノ例ヲ見サリシ掏摸ノ如キモ近來諸所ニ出沒シ且物價ノ騰貴ト生活程度ノ向上トニ因リ一般ニ生活困難ニ赴キタルト從來輕微ノ被害ハ之ヲ申告セサルヲ常トセシニ近來ハ進ンテ申告スルニ至リシ等事情ニ依リ竊盜被害事件ノ數ハ甚シク増加ノ傾向アリ而シテ民風ニ多大ノ關係ヲ有スル賭博罪ノ如キハ取締厲行ノ結果實

際ニ於ケル犯行ハ其ノ數ヲ減スルニ至リシモ計數上ニ
於テハ却テ増加ヲ示セルヲ見ル今警察權委任ノ翌年明
治四十四年以降三年間、犯罪發生件數及人員並犯罪人
員ヲ見ルニ明治四十四年ニハ犯罪發生件數四萬五千餘
同檢舉件數三萬六千餘人員五萬餘人大正元年ニハ犯罪
發生件數七萬二千餘同檢舉件數六萬二千餘人員七萬三
千餘人大正二年ニハ犯罪發生件數八萬餘同檢舉件數六
萬八千餘人員八萬九千餘人ニシテ發生件數ニ對スル檢
舉ノ成績ハ概シ良好ナルヲ認め而シテ此等犯罪中治安
上最モ注意スルハ内乱暴動等高等警察ニ屬スル犯罪

ヲ除キテハ強盜ヲ以テ重要ナルモノトス往時官憲ノ保護完カラサリシ時代ニ在リテハ集團セハ火賊各所ニ出波シ人民ハ一方ニ於テ官吏ノ苛斂誅求ニ遭ヒ他方ニ於テ此等兇賊ノ迫害ヲ受ケ生命財産ノ安固ハ得テ期スヘカラサル状態ニ在リタリ是ヲ以テ警察權委任後警察力ノ普及充實スルト共ニ極力集團的火賊ノ掃討擒拏ニ努メタル結果輓近ニ至リテハ全ク其ノ跡ヲ絶ケ數人共謀ノ強盜犯モ漸次其ノ數ヲ減シ民心漸ク安堵シ如何ナル僻陋ノ地方ト虽旅客貨物等ノ交通ニ何等危險ヲ感セサルニ至レリ然レトモ朝鮮ニ於ケル強盜事件數ハ他ノ犯

罪ト、比較上甚多ク大正二年中強盜以外、犯罪ニ因
ル檢挙人員一千人ニ對スル強盜檢挙人員歩合八十八人
。九強ニシテ之ヲ内地ニ於ケル明治四十四年中、歩合
一千人ニ對スル一人四。弱ニ比スレハ著シキ差違アル
ヲ見ル又強盜ノ犯罪手段ニ於テモ舊韓國時代ノ遺物タ
ル脅迫狀ヲ以テ財物ヲ奪取セムトスル手段ニ依ルモノ
未タ全ク跡ヲ絶ツニ至ラス依テ今後一層警戒ヲ嚴密ニ
シ檢挙ヲ厲行シ以テ此ノ種犯罪ノ剿滅ヲ圖ラムトス又
不良土工ノ恐喝取財「ハ」賭博貨幣偽造等ノ犯罪ニ
関シテモ一層ノ努力ヲ以テ取締ヲ厲行シ且其ノ他ノ犯

罪ノ度邊増減ニ注意シ能ク時勢ニ適應シテ刑事警察上好成績ヲ舉ゲシメムコトヲ期ス

第四節 犯罪即決事務

犯罪即決ニ付テハ明治四十二年十月公布セハ韓國ニ於ケル犯罪即決例ノ規定ニ依リ朝鮮人ニ付テハ笞刑(笞百以下)拘留又ハ三十圓以下ノ罰金刑ニ處スルキ罪内地人ニ付テハ拘留又ハ科料ノ刑ニ處スルキ罪ニ對シ警察署長ニ於テ即決處分ヲ爲シ来リシ力明治四十三年十二月改メテ内地人及朝鮮人ヲ通シテ適用シ得ルキ犯罪即決例ヲ公布シ三拘留又ハ科料ノ刑ニ該ルヘキ罪三三月以下ノ

懲役又ハ百圓以下ノ罰金若ハ科料ノ刑ニ處スヘキ賭博
又ハ拘留科料ノ刑ニ處スヘキ刑法第二百八條ノ罪(三)三
月以下ノ懲役拘留又ハ百圓以下ノ罰金科料ノ刑ニ處ス
ヘキ行政法規違反ノ罪ハ警察署長又ハ其ノ職務ヲ行フ
憲兵分隊及同分遣所ノ長ニ於テ之カ即決處分ヲ為スコ
トトナレリ依テ其ノ執行ノ任ニ當ル警察官ニ對シテハ
法律上ノ智識ト處分手續ニ關スル技能ノ教養ニ努ムル
ト共ニ其ノ運用ニ際シ苛察ニ涉ルヲ避ケ能ク事件ノ内
容犯人ノ性行及情狀等ヲ斟酌シテ慎重事ニ膺リ法規
適用ノ刑ノ量定ニ關シテハ深ク注意ヲ拂ヒ假令犯罪事實

アリトモ處罰ノ實益ナシト認ムルモノニ付テハ訓戒處
分ニ付シ一面ニ於テハ法ノ威嚴ヲ示シ取締ノ目的ヲ達
スル爲メ必要ニ應ジテハ假借ナク制裁ヲ加フル等寬嚴
其ノ宜ヲ得ルニ力メシメツツアリ明治四十四年現行規
定施行以來大正二年ニ至ル三箇年間ノ即決事件數ハ總
數六萬二千五百餘件ニシテ内正式裁判ヲ請求シタルモ
ノハ百十五件裁判ノ結果無罪トナリタルモノハ僅ニ二
十八件ナリ如斯ニシテ犯罪即決處分ハ治罪ノ方法簡便
ナルト處斷迅決ニシテ時日ヲ要スルコト少ナク犯罪ニ
對スル社會ノ記憶新ナリ間ニ於テ處分ノ結果ヲ明カニ

スル為ノ懲罰ノ目的ヲ達スル上ニ於テ頗ル良好ノ成績
ヲ収メ一般ニ好感ヲ以テ迎ヘテレツツアルト同時ニ微
罪ヲ一々裁判所ニ送致スルノ煩ヲ省キ司法事務ノ敏活
ヲ助クルノ利アリ朝鮮ノ現状ニ於テハ最モ時宜ニ適シ
タルモノト認ム

第五節 民事争訟調停事務

明治四十三年民事争訟調停ニ関スル制令ニ依リ裁判所
所在地外ノ警察署長又ハ其ノ職務ヲ行フ憲兵分隊及同
分遣所ノ長ハ二百圓ヲ超過セサル金銭ノ債權又ハ價額
ニ拘ハラス住家其ノ他ノ建物若クハ物品ノ引渡又ハ不

動産ノ境界等ニ関スル紛争事件ニ付之カ調停ヲ為スヲ
得セシメタリ舊韓國時代ニ於テハ觀察使、郡守等カ贈賄、
權勢及情實等ニ依リ偏頗ナル裁判ノ判決ヲ為スノ弊ニ
堪ヘス正當ノ權利ヲ有スル者モ之ヲ主張スルヲ避ケタ
ル情勢ト其ノ後保護政治時代ニ至リ漸ク裁判ノ嚴正ヲ
知ルニ至リシモ手續ノ煩雜ナルト判決ニ長時日ヲ要ス
ル為メ寡少ノ債權又ハ輕微ノ權利ヲ有スル者ニシテ之
ヲ拋棄スル者尠カラサリシカ本制度施行ノ後ハ其ノ手
續簡略ニシテ取扱迅速ナルニナラス多額ノ費用ヲ要
セサルヲ以テ裁判ヲ出訴スルノ煩ニ堪ヘサルカ如キ

少額ノ債權者其ノ他ノ爭訟者ニ取りテハ頗ル便宜ナリ
トシ一般・其ノ效果ヲ認メツツアリ而シテ之カ運用ニ
付テハ調停ノ際断ミテ強制ニ涉ルヲ避ケ當事者ノ自由
意思ニ任スヘキハ勿論當事者双方ノ主張ノ内容地方ノ
習俗其ノ他事件ノ真相ヲ知ルニカメ以テ双方ノ主張ヲ
尊重シ專ラ圓滿ナル調停ヲ遂クルノ方針ヲ採ラシメツ
ツアリ其ノ結果トシテ調停後ニ於テ之カ履行ニ関シ強
制執行ノ手段ニ依ルカ如キコトハ極メテ稀ニシテ債務
者ハ進ンテ其ノ義務ヲ履行スルノ狀況ナリ近來交通機
関ノ完備ニ赴クハ朝鮮人ノ權利思想發達スルトニ伴ヒ

此ノ方法ヲ利用シテ爭議ヲ解決セムトスル者益々増加
シ取扱事件數ハ年々著シク増加シツツアリ明治四十四
年本制度施行後大正二年末ニ至ル受理件數ハ總計二萬
八千四百餘件内調停未済一千餘件ヲ除キ調停成立一萬
二千九百餘件取下七千六百餘件不成立其ノ他七千八百
餘件ニシテ右不成立其ノ他ノ件數中ニハ申請後調停前
當事者間ニ於テ私和ヲ爲シタルモノ多數ヲ占ム本制度
ハ少額ノ債權者ヲ保護シ其ノ他ノ爭訟者ニ便宜ヲ與ヘ
一般人民ノ警察官憲ニ對スル信賴厚キヲ加フルト共ニ
益々其ノ利用ヲ増加スヘキヲ以テ其ノ局ニ當ル者ヲシ

テ之ニ関シ深甚ノ注意ヲ拂ハシメ以テ處理ノ公正ヲ保
テ一層其ノ效果ヲ發揮セシメムトス

第六節 消防

朝鮮ニ於テハ併合前數年迄ハ消防機關トシテ特設セラ
レタルモノナク併合當時ニ於テモ京城ニ於テハ舊韓國
政府警視廳所屬常設消防隊ノ外全土ヲ通シテ僅ニ三十
九ノ消防組ヲ數フルニ過キスシテ而モ此等消防組ノ多
數ハ京城仁川其ノ他ノ開港地及多數内地人ノ居住地ニ
於テ在留日本人ノ組織シタルモノニ係リ其ノ他ハ朝鮮
人聯合組織ノモノ九組、鮮人ノモノニテ組織セラルモノ七組

ニ過キサリシカ爾來各地方ノ發展ニ伴ヒ市街地建造物
ノ増加ヲ來シ消防施設ノ必要ヲ促スノミナラス地方部
落・於テモ從來消防ノ設備ヲ缺キシ為メ火災時ニ於ケ
ル慘害甚大ナリシ事例ニ鑑ミ當局官憲ノ獎勵ト相俟テ
テ非常ノ發達ヲ為スニ至リ本年六月末ニハ五百八組ノ
多數ニ上レリ而シテ各消防組ノ經費ハ府制施行地ニ於
テハ總テ府費支弁ナルモ其ノ他ノ地方ニ於テハ依然寄
附金及協議費等ヲ以テ支弁スルニ依リ將來其ノ維持改
善ニ関シ適當ノ方法ヲ設ケシメ尙ホ漸次必要ノ箇所ニ
増設ノ途ヲ講シ消防機關ノ普及ヲ圖ラントス

山林ノ火災ハ警務機關及林務吏員ニ於テ極力豫防警戒
努メツツアルニ拘ラス年々其ノ度数ヲ増加シ殊ニ大
正三年ノ如キハ江原道及咸鏡南北道ニ於ケル大森林ニ
大火頻發シ其ノ損害一百三十七萬餘圓ノ多額ニ上リシ
ハ洵ニ遺憾トスル所ナリ山林火災ノ原因中多數ハ火田
火入通行人ノ焚火又ハ喫烟後ノ不始末ニシテ就中火田
火入ハ概ニ規定ノ手續ヲ履マサル場合ニ屬ス而シテ廣
漠ナル区域ニ涉ル林野又ハ深山ニ對シテハ警戒取締ヲ
周到ナラシムルコト極メテ困難ナルヨリ火災ノ發見意
ノ如クナラズ出火ノ報道敏速ヲ缺キ又消防方法モ充分

ノ效果ヲ奏スルコト至難ナリ依テ火田火入其ノ他ノ原
因ニ関シ人民ヲシテ各自之ヲ防壓セシムルニ努ムル
同時ニ經費ノ許ス限リ多數ノ山林監守ヲ配置シテ監視
ヲ嚴密ナラシメムトス

第七節 營業其ノ他ノ取締

質屋及古物商ノ取締ニ関シテハ併合以前其ノ規定ナキ
ニ非サリシモ内地人及朝鮮人ニ對シ區々ノ取扱ヲ為シ
且不備ノ點尠カラサリシカ此等營業者ノ數ハ漸次増加
シ来リ明治四十四年末ニ於テハ質屋業者ハ内地人六百
餘人朝鮮人五百餘人古物商ハ内地人八百餘人朝鮮人百

餘人ニ上リ其ノ間強竊盜橫領等ニ係ル不正ノ物品ヲ質
入授受スル者數カラサルヲ以テ一層周密ナル取締ヲ加
フル必要ヲ認メ明治四十五年四月以降内鮮人ヲ通シ總
テ内地ノ質屋取締法及古物商取締法ヲ準用スルコトト
セリ其ノ結果不正品ノ轉賣授受ヲ防キ其ノ發見ヲ容易
ナラシメ犯罪搜查上便宜ヲ得タル事實頗多ク之ト同
時ニ營業者ニ於テモ不正品授受ノ為メ不慮ノ損失ヲ被
ルコトヲ減サスルニ至レリ

信用告知業ハ商業者力之ヲ活用シ告知業者力忠實ニ業
務ヲ行フトキハ實業上有益ナル機關ナリト雖同一ノ土

地・多數ノ同業者アリ又ハ必要ヲ感ヒサル地方ニ之ヲ
設クルトキハ徒ニ競争ヲ生シ又ハ加入ヲ強制スル虞ナ
シトセス又從業者ニシテ之ヲ害用シ若ハ極端ニ露骨ノ
方法ヲ執ルトキハ其ノ弊害サカラサルヲ以テ明治四十
四年七月其ノ取締規則ヲ發布シ人物性行等ニ於テ適當
ト認メラルル者ニ限リ從業ヲ認可スルコトトシ且印刷
物ヲ以テ内報スル事項ニ一定制限ヲ加ヘタリ
風紀ノ維持ニ関シテハ從來比較的放漫ニ流レタル點
ルヲ認メタルニ依リ併合後ハ最嚴密ノ注意ヲ加ヘ必要
ノ地方ニ於テハ特種料理店ノ營業區域ヲ限定シ賭博類

似、娛樂興行場其、他風俗ニ關係ヲ生スヘキ營業者ニ
對シテハ不斷周到ナル取締ヲ勵行シ且朝鮮人從來ノ
迷信及弊習ノ矯正スヘキモ、ハ懇切ニ指導教誡ニ努メ
シメツツアリ其、他寄附金募集、取締勞働者及浮浪者
ノ取締不正ノ目的又ハ手段ヲ有スル組合其、他ノ集團
ノ取締不正度量衡ノ取締不正漁業ノ取締爆發物銃器其
他ノ危險物ノ取締狩獵ノ取締及害獸ノ驅除交通及建
築ニ關スル取締等警察官ヲシテ所在地方ノ實情ニ照ラ
シ各適宜ノ措置ヲ執ラシメツツアリ

第八節 墓地ノ取締

古來朝鮮ニ於ケル諸種ノ迷信中墓地ニ関スルモノヲ最
甚シトス是レ原ト祖先ヲ崇尊スルノ美風ニ出テタルモ
ナリト雖漸ク轉シテ迷信ナリ墳墓ノ地位ノ良否ハ
即チ子孫ノ盛衰ヲ支配スルモノト為シ争ウテ其ノ地ヲ
選ミ而シテ自家ニ良地ナキ者ハ理想ノ地ヲ探ル為一族
各地ヲ彷徨シ得レハ價ヲ選マスシテ之ヲ求メ若シ之ヲ
購フ能ハサルトキハ他人ノ山野田畑タルヲ顧ミス埋葬
ヲ敢テスルニ至リ為ニ鬭争ヲ惹起シ又ハ刑事犯罪人ト
為リ或ハ民事訴訟ヲ起ス等其ノ事例枚舉ニ遑アラズ又
死因ノ病性ニ依リテハ屍骸ヲ樹木ニ曝シ又ハ道路ニ埋

ムル風習アリ而シテ一面ニ於テ貧者ハ理想ノ地ハ措キ
一片埋骨ノ土塚ヲスラ有キスミテ屍體ヲ野外ニ遺棄ス
ル者少シトセズ斯カル弊風ハ到底等閑ニ付スヘカリサ
ルヲ以テ明治四十五年六月府令第百二十三號ヲ以テ墓
地火葬場埋葬及火葬取締規則ヲ發布シ直ニ各地ニ準備
ヲ命ジ其ノ完了ヲ待テ漸次施行スルコトトセリ該規則
ノ主要ナル点ヲ掲グルハ墓地ハ原則トシテ府面里洞其
ノ他公共團體ノ設置ニ係ル共同墓地ニ限ルコトトシ特
別ノ事情アル場合ニハ私有墓地ヲ許スヘキ例外ヲ設ケ
屍體ハ墓地以外ニ埋葬スルコトヲ禁ミ尙ホ一面火葬場

ノ設置ヲ許シテ火葬ノ風習ヲ喚起シ而シテ從來ノ墳墓
ハ其ノ存在ヲ認メ其ノ死者ノ配偶者ノ屍體ニ限り之ヲ
合葬スルコトヲ許シ規則施行後一年以内ニ墓籍ノ届出
ヲ爲ササルモノハ無縁墓地ト看做シ必要ニ應ジテ之ヲ
整理セシメ又共同墓地ノ設置ニ付テハ必要アレハ官有
ノ山林原野ヲ拂下クルコトセリ如斯ニシテ今後ハ細
民ト雖其ノ父母ヲ葬ムルヲ得サル者ナキニ至ルト同時
ニ從來朝鮮全土ニ見ルカ如キ廣大ナル面積ノ土地ヲ空
シク墳丘ト化シ了ルカ如キコトナカルヘシ

第九節 屠場ノ取締

屠場取締ニ就テハ曾テ韓國政府時代ニ於テ創定發布セ
ル屠獸規則ニ依リ内地人ニ對シテハ統監府令ニ依リ屠
場ノ設置ニ付テハ韓國ノ屠場規則ニ依リ許可ヲ受ケシ
ムルコトトシ施行シツツアリ白泰朝鮮ニ於テハ比較的
肉食ノ風盛ニシテ獸畜ヲ屠殺スルモノサナカラズ殊ニ
犬肉ヲ食用ニ供スルノ習慣アリ規則發布前ハ山野田園
甚シキハ人家ノ内庭ニ於テ獸畜ヲ屠殺セルモノモアリ
シカ規則施行後ハ許可ヲ得タル一定ノ屠場ニ非サレハ
獸畜ノ屠殺解體ヲ為スヲ得サルコトト為シタルヲ以テ

大ニ舊來ノ陋習ヲ一新スルヲ得タリ警察權委任後取締
ハ警察ノ管掌スルコトナリシモ屠場設立ノ許否ニ付
テハ依然道長官ノ權限ニ屬セシヲ以テ府令ヲ以テ規則
ノ一部ヲ改正シ之ヲ警務總長警務部長ノ權限ニ移セリ。
屠場ハ居留民團學校組合衛生組合面洞里等公共團體及
之ニ準スヘキモノニ經營セシムルヲ以テ公衆衛生上其
ノ他ノ点ニ於テ利益ナリト認メ明治四十四年八月後ハ
專ラ此ノ方針ニ依リ獎勵ヲ加ヘツツアリ爾來是等ノ團
體ニ於テ私設屠場ヲ買収セシモノ及新ニ經營セシモノ
少ナカラス大正二年末ニ於ケル屠場數ハ左ノ如シ

屠場數

公立	一〇七
<div data-bbox="692 217 783 409">私立</div> <div data-bbox="571 452 912 844"> <div data-bbox="820 497 912 838">內地人經營</div> <div data-bbox="692 497 783 838">朝鮮人經營</div> <div data-bbox="571 497 662 838">外國人共同經營</div> </div>	<div data-bbox="820 1085 900 1270">二六二</div> <div data-bbox="692 1034 783 1275">一二二二</div> <div data-bbox="571 1158 662 1275">九八</div>
合計	一六八九

第四章 衛生

第一節 醫療機關

韓國ニ於ケル衛生上ノ施設ハ從來殆ト絶無ニシテ官制上内部ニ衛生局ヲ置キ後警務局ノ一課ト為シ以テ衛生行政ヲ掌ラシムルコトト為セシモ僅ニ種痘ノ普及上多少寄與スル所アリシ外實績ノ見ルヘキモノナカリキ蓋シ國民一般ニ衛生思想ニ乏シク且醫學ノ素養アル醫師少クシテ各般ノ衛生機關具備セザリシヲ以テ獨リ行政上ノ設備ヲ以テ甚ノ進歩ヲ期スル能ハサルノ狀態ナリ

キ依テ統監府設立後明治四十年三月ニ至リ初メテ京城
ニ大韓醫院ヲ設置シ且全州清州及咸興ノ三個所ニ慈惠
醫院ヲ設ケ以テ診療醫育及衛生事務ノ執行ニ當ラシメ
タリ併合後ニ至リ一層醫療機關ノ完成ヲ圖ラハカ為メ
大韓醫院ヲ總督府醫院ニ改メ其ノ規模ヲ擴張スルト同
時ニ前記三箇所以外ノ道廳所在地ニ各一箇所ノ慈惠醫
院ヲ設置シ大正元年度ニ至リ濟州安東楚山江陵及會寧
ノ五箇所ニ慈惠醫院ヲ増設スルト共ニ各道醫院ニ巡回
醫師ヲ配置シ又警察署憲兵分隊等ニ配置セハ警察醫ヲ
シテ公務ノ傍一般患者ノ治療ニ従事セシメ以テ辟陋ノ

地方ニモ醫療ノ普及セムコトニ努メタリ此等醫療施設
ノ效果頗ル顯著ニシテ漸次一般患者ノ信賴ヲ博シ診療
ヲ請フ者年々増加シ明治四十三年韓國併合以來
大正二年十二月迄ノ取扱患者總數ヲ舉クレハ實ニ九十
八萬八千餘人ニシテ其ノ治療延人員ハ六百五十四萬二
千餘人ノ多キニ達シ其ノ内普通患者藥價其ノ他ヲ徴収
スルモノハ一百九十七萬七千餘人施療患者ハ四百五十
六萬五千餘人ナリ今各年別ノ患者數ヲ舉クレハ左表如
シ

朝鮮總督府醫院

年		普通患者		施療患者		計	
實數	延人員	實數	延人員	實數	延人員	實數	延人員
明治三十四年							
内地人	一、一五三		二、四	一、〇三六		一、〇三六	
朝鮮人	四、七九	三、三八		七、四九		七、四九	
計	一、四三三	三、五二	五、三三八	一、七六三	三、三七八	一、七六三	三、三七八
明治四十四年							
内地人	五、六七	六、三五	八、七三	九、〇〇	八、七三	八、七三	
朝鮮人	四、四四	一、四五	九、〇〇	七	七	七	
外國人	七						
計	二、二一八	五、一六二	一、三三三	二、二一八	二、二一八	二、二一八	
大正元年							
内地人	二、四〇六	五、四	二、四〇六	二、四〇六	二、四〇六	二、四〇六	
朝鮮人	六、九五	五、七三	三、八七	三、八七	三、八七	三、八七	

合計			大正三年				
計	外國人	朝鮮人	内地人	計	外國人	朝鮮人	内地人
九四三六	一三七	二二五四	七〇七二	二七三六	一二五	六四六	二二二五
六九七五				二〇二七九			
五二六四	三	五三六	一七二	六二〇	二	五七九	三八
八八八二				一五〇四一			
一四七五	一四〇	七五	七五	四八五	二七	二六五	二六三
一七五三				六六〇〇			

慈惠醫院

年	明治四十年			明治四十一年			普通患者		施療患者		計
	内地人	朝鮮人	外國人	内地人	朝鮮人	計	實數	延人員	實數	延人員	
明治四十年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治四十一年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治四十二年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治四十三年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治四十四年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治四十五年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治四十六年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治四十七年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治四十八年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治四十九年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
明治五十年	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六
	五七四	三八八	二	三三三	四八八	八二一	九七四	九七三	六四	五二九	五八六

大正元年			大正二年			合計		
朝鮮人	外國人	計	内地人	朝鮮人	外國人	内地人	朝鮮人	外國人
一〇、三五五	五	一〇、三五五	五、七〇〇	一、三〇〇	二〇	八、五五二	一、五五二	二六
		四、二八〇				五、四三三		
一、四五六	二	一、四五六	九五	七、五五五	九	七、六六四	六九五	二七
		一、四五六				一、四五六		
一、五七五	七五	一、六五〇	六、七六五	二、九二〇	九二	七、六八五	六、八二六	八六三
		一、六五〇				一、六五〇		

計

五五五

一四二六八

五五五

五五五

五五五

五五五

以工患者増加ノ趨勢ヨリ推ストキハ將來一般ノ要求ニ
應セリ力為メ益々醫療機關ノ擴張ヲ圖ルノ必要ナルハ
言ヲ俟タサル所ナリ然レトモ斯ノ如キハ財政上遽ニ實
行シ得ヘカラサル所ナルヲ以テ應急ノ措置トシテ大正
三年四月以降公醫規則ヲ施行シ從來ノ囑託警察醫中百
十七人ノ囑託ヲ解キ新ニ百八十七人ノ公醫ヲ配置シ官
憲ノ指揮ヲ受ケテ行政醫務ニ従事スルト同時ニ所在地
方ニ於テ醫術ヲ開業セシムルコトトセリ

大正三年三月末日、在ル病院ハ官立十九公立四、私立
百十一、開業醫師ハ内地人四百九人、朝鮮人百四十二人、外
國人四人、限地開業醫師ハ内地人二十八人、外國人三十人
ニシテ、未タ漸次其ノ数ヲ増シタリト、虽朝鮮全土ニ普及
スルニ至ラス、依テ從來醫業ニ従事シタル朝鮮人、漢方醫
ニシテ適當ト認ムル者ハ、醫生トシテ醫業ヲ免許スルコ
トトシ、大正三年七月十五日迄ニ免許ヲ與ヘタル者四千
六百三十一人アリ

總督府醫院附屬醫學講習所ハ元大韓醫院附屬醫學校ノ
組織ヲ改メタルモノニシテ、鮮人醫師及助産婦看護婦ノ

養生ヲ目的トシ開始以來既ニ七箇年ヲ閱シ卒業生ヲ出
スコト四面ニ及ヘリ近時醫學ノ真價漸ク鮮人ノ知ル所
トナリ卒業生ノ需要頗ル多ク殊ニ地方ニ開業セルモノ
ノ如キハ一般人民ノ信賴ヲ受ケツツアリ韓國時代ニ在
リテハ大韓醫院附屬醫學學校生徒ハ給費ヲ原則トセルモ
醫學講習所ニ於テハ私費生地位トシテ給費生ノ數ヲ限
定セルモ尙ホ志願者逐年増加ノ趨勢ヲ示シタルノミナ
ラス近時鮮人教育ノ普及ニ伴ヒ入學生ノ素養向上シタ
ルヲ以テ一昨年中入學資格ヲ高ムルト同時ニ生徒ノ増
員ヲ行ヘリ

助産婦及看護婦ノ養成ハ總督府醫院附屬醫學講習所及
道廳所在地ニ於ケル慈善醫院ニ於テ之ヲ行ヒツツアリ
就中助産婦ノ普及ハ焦眉ノ急ナルヲ認メ其ノ需要ニ應
セムカ爲メ特ニ速成科ヲ設置セシムルコト爲セリ助
産婦及看護婦ノ養成ハ專ラ實地ニ熟達セシムルヲ期シ
殊ニ速成助産婦科ニ在リテハ短期間ニ修業セシムルモ
ノナルヲ以テ特ニ此ノ點ニ深ク留意シ修費ノ許ス限速
ニ多數ヲ養成スルノ目的ヲ以テ主トシテ憲兵(以下士)及巡
査ノ家族ヲ收容養成シタルニ其ノ成績極メテ良好ナリ
尚ホ畢業生中給費生ニ在リテハ指定地ニ勤務スヘキ義

務ヲ附シ自費生ト雖其ノ多クハ地方在勤官吏ノ家族ナルカ故ニ其ノ分布ニ於テハ需要ニ適切ナルヲ得ヘシト信ス大正二年十二月末ニ於ケル產婆員數ハ内地人三百三十六人ニシテ大正三年四月ヨリ施行セシ產婆規則ニ依リ免許ヲ與ヘタル者ハ内地人七十八人朝鮮人一人ナリ。

第二節 衛生行政

由來朝鮮ハ除穢事務ナルモノナク之レカ爲メ土地及水质ヲ不潔ナラシメ衛生上多大ノ惡結果ヲ生セシカ明治四十二年京城ニ漢城衛生會ヲ設立セシヲ始メトシ仁川、釜山、其ノ他ハ市街地ニハ特ニ除穢機關ヲ設ケ其ノ他ノ

地方ニハ衛生組合ヲ置カシメ又大正三年四月府制實施
ト共ニ府ノ所在地ノ除穢事務ヲ府ニ移シ明治四十五年
以後ハ一般ニ春秋二季ヲ以テ清潔法ヲ勵行セシメタリ
大正三年七月末衛生組合ハ全土ヲ通シ一千一百二十八
ニシテ甚ノ中多クノ基本財産アルモノ百五十八ナリト
ス

京城仁川平壤鎮南浦群山釜山木浦等ニ於テハ漸次水道
ヲ敷設セル為メ飲用水ノ不潔ヨリ生スル諸種ノ害毒ヲ
除去スルヲ得タレトモ甚ノ他ハ地方ニ在リテハ全ク井
水ヲ飲料ニ供シ而カモ甚ノ井戸ノ構造不完全ナルカ為

メ汚水ノ流入スル虞アルヲ以テ明治四十三年以降國庫
ヨリ補助ヲ與ヘテ各地ニ模範井戸ヲ掘鑿セシメタルモ、
大正二年度迄ニ三百八十一個所ニ及ヘリ尙ホ將來モ経
費ノ許ス限井戸改良ヲ獎勵セムトス

第三節 傳染病ノ豫防

朝鮮ニ於ケル傳染病中最猖獗ヲ極メタルハ痘疹ニシテ
之ニ次クハ赤痢及腸窒扶私トス痘疹ノ豫防ニ関シテハ
舊韓國政府ニ於テモ明治二十八年以來種痘普及ノ施設
ニ著手シ中央ニ種痘司ニ各道ニ種繼所ヲ置キ各府郡ニ
種痘認許員ヲ配置シタルトモ其ノ實績ヲ見ルニ至リテ

ルハ明治四十年大韓醫院ノ設立以後ニシテ爾來種苗ヲ
精製シ朝鮮人男女種痘認許員ヲ養成シ其ノ配置ヲ周到
ナラシメ且警察機關ヲシテ極力種痘ノ效果ヲ懇諭セシ
メタル結果漸次迷信ヲ打破シ累年ノ種痘者ハ左表ノ如
キ多数ニ上リ明治四十二年ノ如キハ全土ヲ通シテ四千
餘人ノ患者ヲ發生シ約千人ノ死亡者ヲ發生セシモ漸ク
通減シテ大正二年中ニハ僅ニ患者二百餘人ノ死亡者三
十餘人ヲ見ルニ止マリ而カモ其ノ大部分ハ支那トノ國
境附近ニ發生セルモノニシテ他ノ地方ニ於テハ各道多
キモ十人ヲ出テス亦以テ種痘ノ效果ヲト知スルニ足ル

	朝鮮人種痘者數	朝鮮瘰癧患者數	同死亡者數
明治四十一年	五四、五九五	一八七八	四七六
明治四十二年	六七、九三五	四三六〇	九〇二
明治四十三年	一三三、二四六	二四二五	四四五
明治四十四年	二九、六八七	二六五三	五一九
大正元年	三〇七、〇三三	一〇九五	一四六
大正二年	二八七、三一九	二二四	三三

虎列拉及「ペスト」ノ豫防ニ関シテハ明治四十年來最嚴密ナル措置ヲ執リ同年十月我皇太子殿下韓國渡御ノ旨仰出サレタル後韓國各地ニ虎列刺患者ノ發生シタル際ノ如ク伊藤統監ハ防疫事務ヲ舉ケテ駐劄軍司令官ニ一任シ日韓兩國官憲中ヨリ委員ヲ任命シ約十萬圓ノ經費豫算ヲ以テ一舉ニ之ヲ撲滅セリ又明治四十三年秋季ヨリ翌年一月ニ亘リ滿洲地方ニ「ペスト」流行ノ報ニ接スルヤ鴨綠江及圖們江ノ沿岸一帶並支那戎克船ノ出入スル西海岸全線ニ亘リ約一千ノ監視所ヲ設ケ之ニ加フルニ一般鐵道及海港檢疫ヲ勵行シ重要ノ都合ニ於テ釐族ノ

買エテ行ヒ其ノ結果朝鮮内ニ於テハ遂ニ一人ノ患者ヲ
發生セズシテ熄メリ

赤痢及腸室扶私ニ関シテハ豫防消毒ノ效果未ク顯著ナ
ラスト雖京城仁川其ノ他上水道ノ設ル都會ニ於テハ
甚ノ敷設ノ前後ニ於テ大ニ患者ノ發生ニ差異ヲ生セル
ヲ見ル尙ホ現在ノ傳染病院及隔離病舎ハ全土ヲ通シテ
左表ノ如シ此等ノ施設ハ尙後財政ノ許ス範圍ニ於テ益
甚ノ完備増設ヲ圖ラムトス

傳染病院及隔離病舎數(大正 年 月現在)

	官立	公立	私立	計
傳染病院				
隔離病舎				

第五章 救恤及慈善事業

併合ノ際下賜セラレタル臨時恩賜金中三百三十五萬五千八百圓ハ之ヲ一般貧民ノ救療精神病者ノ救療孤兒ノ教育及盲啞者ノ教養ニ充ツルコトトシ之ヲ基金トシテ財團法人タル濟生院ヲ設立シタリ此等事業中醫院ノ所管ニ屬セシムルヲ便トスルモノアルヲ以テ爾後更ニ朝鮮醫院及濟生院特別會計ヲ創設シ前記ノ財團法人ハ之ヲ解散シ其ノ基金ヲ該特別會計ニ移シ各事業ニ配當スヘキ資金額ヲ定メタリ其ノ現在金額ハ左ノ如シ

一般貧民救療資金

三〇六七、三九五円

癩病院資金

三〇〇、〇〇〇

精神病患者救療資金

一五〇、〇〇〇

濟生院資金

三二八、六二三

計

三八四六、一八

備考 現在基金額ハ前記ノ恩賜金ノ外内地濟生會

ヨリ配付セラレタルモノ七萬圓喫烟禁止國債報償

會積立金ヲ充當セルモノ十一萬餘圓其ノ他ノ寄附

金及利子ヨリ成ル

即チ前章ニ記述セシ朝鮮總督府醫院及慈惠醫院ニ於ケ

ル一般貧民又ハ精神病者ノ救療ニ要スル経費ハ此ノ資
金ノ利子ヲ以テ之ニ充ツルモノナリ癲病院ハ目下創設
計劃中ニ屬ス

濟生院ハ專ラ孤兒及盲啞生ノ教養ヲ掌ル現在孤兒養育
部ニ收容セシ兒童ハ八十人ニシテ其ノ多數ハ舊韓國政
府時代ヨリ存在シタル私立京城孤兒院ヨリ引継キタル
モノナリ此等孤兒ニ對シテハ家族的教養ヲ為スノ方針
ヲ採リ職員ヲシテ院兒日常ノ起居ニ関シ直接教化指導
ニ任セシメ孤獨ノ彼等ヲシテ慈親ノ温情ト家庭ノ興趣
トヲ併セ得セシメ彼等ニ生シ易キ陰鬱不活潑ノ性情乃

至僻心邪念ヲ杜絶セムコトヲ期セリ只幼少ナル哺乳兒
ハ希望者アルトキハ之ヲ里預ケト爲スノ方法ヲ採レリ
院兒八歳ニ至レハ院内設備ノ普通學校ニ入學セシメ學
科教習ノ傍ヲ實科ヲ課セリ實科ハ主トシテ手工及附屬
田園ノ耕作ニ從事セシメ以テ懶惰ノ弊習ヲ排シ質實勤
勞ノ風ヲ馴致スルニ努メツツアリ斯クノ如クニシテ普
通學校科ヲ修了シ身體強健ナル者ハ更ニ農場ニ移送シ
此處ニ於テ職員指揮ノ下ニ農業ノ實習ヲ與ヘ將來農民
トシテ身ヲ立ツルノ途ヲ開キ體質又ハ本人ノ性情農民
トシテ不適當ナル者ハ商工業ノ徒弟又ハ見習トシテ市

中ノ商估ニ託シ以テ相當ノ生業ヲ得セシムトス
盲啞部ノ事業ハ大正二年四月ヨリ開始セリ給費生ノ収
容定員ハ四十名ニシテ現在自費給費合シテ盲二十八名
啞十名ヲ收容セリ各科ノ區分及修業年限ハ盲速成科一
箇年盲本科三箇年啞本科五箇年トシ學科ハ盲生ニハ按
摩マッサージシ啞生ニハ裁縫編物ノ如キ主トシテ手藝ヲ
課シ各將來自營シ得ヘキ方便ヲ與フルコトニ留意シ盲
生ニハ練習ノ爲市民ノ希望ニ應シテ按摩マッサージノ施
術ヲ爲シ啞生ニハ教授ノ資料トシテ市民ヨリ裁縫材料
ヲ借り加工セシム而シテ本年盲速成科ヲ卒業シタル者

九名ノ内七名ハ總督府醫院及道慈惠醫院ニ於ケルマシ
ージ技術員トシテ雇聘セラレ其ノ他ハ獨立開業ヲ爲シ
タリシカ其ノ成績何レモ良好ニシテ鮮人盲者ノ自活生
計ノ途トシテ充分ナル實績ヲ擧ケツツアリ盲啞部開始
ノ當時自費ノ入學生ハ殆ト豫期セサル所ナリシモ開始
以來自費生ハ已ニ十五名ニ達シタルヲ以テ將來自費生
ノ勧誘ヲ試ムルト同時ニ一面ニ於テハ相當ノ時機ニ於
テ現品給與ノ現制度ヲ學資給與制度ニ改メ官費半官費
又ハ自費生ニ區分シ生徒ノ收容力ヲ増加シ朝鮮ニ於ケ
ル是等不具者ノ教育ヲ全カラシメムトス

第六章 教育

第一節 學制

朝鮮ニ於ケル舊來ノ教育ハ讀方習字ヲ主トシ進ンテ經書ヲ講究スルニ止マリ處世實用ニ適スル科目ヲ教授スルニ至ラザリシカ明治二十八年舊韓國政府ハ内地ノ制度ニ倣フテ學制ヲ定メタルモ未タ教育機關ノ完成ヲ見ルニ至ラス次テ明治三十九年統監府ノ設置ト共ニ統監指導ノ下ニ銳意教育ノ刷新ニ努メ學制ノ改革、學校ノ新設等漸ク其ノ歩ヲ進メタリ併合後ニ至リ更ニ教育制度ヲ確定セムトシ深ク調査研究ヲ重ネタル結果明治四十四年八月

ヲ以テ朝鮮教育令ヲ發布シ朝鮮人教育ノ方針ヲ確
立シ其ノ組織系統ヲ明カニセリ尋テ普通學校規則、
高等普通學校規則、女子高等普通學校規則、實業
學校規則、私立學校規則及京城專修學校規程ヲ制
定シ同年十一月一日ヨリ之ヲ實施シ更ニ明治四十五年
月朝鮮公立小學校規則、同高等女學校規則、同實
業專修學校及簡易實業專修學校規則ヲ制定シ
テ内地人各學校ノ監督統一シ期ニ尚從來ノ中學校規
則ニ必要ナル改正ヲ加ヘ茲ニ朝鮮人教育ノ基礎全ク確
立セリ又師範教育制度トシテハ小學校教員養成ノ為メ

明治四十四年四月京城中等學校附屬臨時小學校教員養成
所規程ヲ定メ更ニ同年十月京城高等普通學校附
設臨時教員養成所規程ヲ制定シテ普通學校朝鮮
人教員養成機關トシ次テ大正二年三月本規程ニ改
メソ加ヘ内地人教員ヲモ養成スルコトセリ

第二節 朝鮮人教育

朝鮮人教育ノ方針ハ朝鮮教育令ノ旨趣ニ從ヒ主トシテ
帝國臣民タルノキ能力品性ヲ涵養シ生活ニ必須ナル
知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トシ從來ノ宿弊タル空
論橫議ヲ事トシ遊惰放逸ニ流ルノ陋習ヲ矯メ

勤勉力行ノ氣風ヲ鼓吹シ教育上常ニ實業趣味
ノ助長ニ努メ以テ實用ニ適スル人材ヲ養成セムコトヲ
期セリ朝鮮教育令ハ實施以來日尚ホ淺シト雖共ノ
制度ノ音趣能ク朝鮮ノ實狀ニ適セルト教育組織程
度簡約ニシテ鮮人生活ノ實際ニ切實ナルトニ依リ
其ノ效果顯著ナルモノアリ年々入學志願者ヲ激増
シ殊ニ兩班儒生其ノ他所謂上流人士ニシテ從來徒
ニ舊慣ヲ墨守シ新教育ヲ喜ハサリシ者モ亦漸ク
新制度ノ音趣ヲ了解シ進ンテ其ノ子弟ヲ公立
學校ニ入學セシメ或ハ私立學校ヨリ轉學シ來ル

者頗ル多キヲ加フルニ至リタル事實ニ徴スルモ亦以テ
一般ノ趨向ヲト知スルニ足ルヘシ

普通教育機關ハ現在普通學校、高等普通學校、
女子高等普通學校、三種アリ就中最モ長足ノ
進歩ヲ遂ケタルハ公立普通學校ニシテ併合當
時僅ニ一百校ヲ數フルニ過キサリシモノ今ヤ三百半
餘校約五万一千名ノ兒童ヲ有スルニ至リ而シテ
普通學校ノ教育ニ於テハ特ニ實業思想ノ鼓吹ニ
重キヲ置ケル結果現在農業ヲ課スルモノハ二百五
十九校、商業ヲ課スルモノハ八校、手工ヲ課スルモノ

二十八校ニ及ヒ正科トシテ是等ノ實科ヲ課セサルモノ雖モ何レモ多少ノ實習地又ハ學校林ヲ設備セサルナク女子教育モ亦漸次發達ノ氣運ニ向ヒ普通學校ニシテ女子學級ヲ設クルモノ二十六校ノ多キニ達シ殊ニ一般ニ國語ノ進步最モ著シク以テ地方教化ノ中心タル實績ヲ舉ゲツアリ私立普通學校ハ現在二十校ニシテ漸次増設ノ傾向アルモ年々之ヲ公立普通學校ニ變更スルモノ多シ然レトモ普通教育ハ尙ホ未タ全土ニ普及セルニ至ラサル憾アルヲ以テ大正五年度及六年度_度於テハ毎年二十校宛同

同七年度以降ハ毎年五十校宛ヲ増設シ十餘年ニシ
テ一府郡平均ニ校ヲ有スルニ至ラシメムトス
官立高等普通學校ハ其ノ數ニ於テ漸クニ校ヲ數
フルニ過キスト雖從來ノ高等學校、外國語學校、
師範學校等ヲ整理統一シ專ラ内容ノ改善ト
施設ノ擴張トニ力ヲ注ギ畧ホ遺憾ナキ程度ニ達
セリ本校ニ對スル一般ノ趨向ヲ甚ク良好ニシテ本
年度入學志願者ノ如キ兩校ヲ通シ本科募集
定員三百三十八名ニ對シ應募者ハ實ニ一千五
百四十九名ノ多キニ達シタルニ徴スルモ亦以テ一般

ノ風潮ヲ察知スルヲ得ヘシ將來適當ノ時機ニ於
テ南鮮及北鮮ニ各一校ヲ増設シ漸ク遂ク他
ニ及ホサントス又規定ニ依リ認可ヲ受ケタル私立高
等普通學校ハ京城及咸興ニ各一校アリ基礎確
實ニシテ相當成績ヲ擧ケツ、アリ官立女子高等普
通學校ハ本年度新設ニ係ル平壤女子高等普
通學校ヲ合セ二校ニシテ現在入學志願者ノ數
甚ク多カラスト雖思想堅實ナル生徒ヲ收容シ
訓育ノ徹底ヲ期シ模範的卒業生ヲ出スニ於テ
效果尠シトセヌ又規定ニ依リ認可ヲ受ケタル私立

十二高等普通學校、京城、二校、一、共、以國法、
之、相當ノ設備ヲ為シ成績亦可良ナリ

實業教育ハ普通教育ト相俟テ最モ力ヲ致セル
所ナリ、農、實業學校規則實施ノ狀況、鑑ミ更
ニ本規則中改ムヲ行ヒ夏季休業ヲ全廢シ或ハ
農業學校及簡易農業學校ノ教授要目ヲ
編製シ各學校ヲシテ本要目ニ準據シ且ツ地方
産業方針ニ則リタルタル教授要目ヲ定メシメ又
朝鮮農業ノ實際ニ適合スル農業各分科ノ教
科書十五種ヲ編纂シ以テ有效適切ナル教育ヲ

施サシメムコトヲ期セリ而シテ農業學校ノ教育ハ
實習ニ最モ重キヲ置ケル爲ノ當初生徒父兄
共ニ之ヲ嫌忌スルノ風アリシカ職負率先シテ範
ヲ示シ熱心指導ノ結果遂次其蒙ヲ啓キ現在
ニ於テハ生徒ハ喜シテ之ニ從事シ實習地ノ設備
モ亦漸ク完整ノ域ニ達シ其ノ生産ニ係ル米麥
ノ類ニシテ物産共進會ニ出陳シ一等賞牌ヲ受
クル者ヲ出スニ至リ地方人民モ亦一般ニ實業教育
ノ必要ナル所以ヲ覺知シ親シク農業學校ヲ参
觀シ種苗其他ノ配付ヲ求ムル者モサカラス兩班

儒生ノ子弟ニシテ進ニテ入學ヲ希望スル者續出シ
入學志願者ハ毎年募集定員ニ數倍スルノ狀況ヲ
呈シ殊ニ生徒及卒業者ニシテ自ラ率先シテ勤勉力
行ノ範ヲ示ス者多ク是等ヲ通シテ直接又ハ間接
ニ地方産業ノ開發ニ資スル所多大ナルモノアリ

實業學校ハ總督府設置ノ際農業學校十二、商
業學校三、簡易實業學校四、ニ過キサリシカ爾來
年々必要ニ應ニテ増設シ現在農業學校十五、商
業學校三、簡易實業學校五十九トナリ生徒數モ亦
二千七百餘名ノ多キヲ數フルニ至リ卒業者ハ農業學

校七百十五人、商業學校二百十八人、簡易實業學校八百二十九人ヲ算シ、或ハ官公吏トナリ、或ハ實務ニ從事シテ低度ノ實業指導者トナリ、或ハ直接農工商工業ニ從事スル等實業ノ改善ニ寄與セル所鮮シトセス

専門教育ニ付テハ、未タ教育令ニ規定スル専門學校ノ施設ヲ見スト、雖主トシテ法制經濟ノ學科ヲ授クルモノニ、官立京城專修學校アリ、教育令實施ノ際舊法學校ノ組織ヲ變更シタルモノニシテ、年々入學者志願者増加シ、既ニ三四ニ亘リテ、五十五名ノ卒業者ヲ出シ、概テ官公吏、銀行、会社等ニ就職シ、殆ント後食

者ヲ見サルノ状況ナリ

私立各種學校ハ併合當時二千二百二十五校ノ多キヲ
數ヘ而モ其ノ教養ノ状況概ネ穩健ヲ缺キタルモ
ノ其ノ大部ヲ占ムルノ状況ナリシカ教育令實施以
來專ラ之ヲ指導監督ニ力メ其ノ教科ヲミテ公立
學校ノ規定ニ準セシムルノ方針ヲ採リ之ヲ整理
改善ヲ圖リ就中宗教學校ニ對シテハ學校關係
宣教師ヲ勸誘シテ公立學校ニ準シ教科課程準
則ヲ編製セシメ之ニ依リテ學則ノ變更ヲ為シタ
ル結果事實上本府ノ方針ニ準據シ適當ナル教

育ヲ施スモノ多ク從來、如キ不完全且ツ有害ト
認ムヘキモノハ漸次其ノ跡ヲ絶テ國語ノ普及ニ於
テモ着々其ノ成績ヲ顕スニ至レリ又私立學校設
置ニ關スル調査準則ヲ各道長官ニ示シ一定ノ標準
ノ下ニ細密ナル調査ヲ遂ケシメタル爲メ單ニ處理ノ
便宜又ハ正確ヲ期シ得ルニ止マラス依テ以テ設置
認可ニ對スル大體ノ方針ヲ窺知スルコトヲ得セシメ
濫設ノ弊ヲ防止スルト共ニ一面内地人教員ノ採用ヲ
勸誘シタルニ依リ現在各校ヲ通シテ約二百人ノ内
地人ヲ採用シ内宗教學校ニ於テ三十一人ヲ數ヘ國語

教授ノ改善上效果鮮シトモ又道主権ノ講習會
ニ私立學校教員ノ出席ヲ促シ教授法其ノ他必要
學科ノ講習ヲ與ヘ尚毎年一回以上公立普通學校
長ヲシテ管内私立學校ヲ視察セシメ之ヲ指導及連
絡ヲ圖ラシムル等銳意改善整理ニ努メタル結果
不完全ニシテ基礎薄弱ナルモノハ自然廢校ノ已ムナ
キニ至リ現在ニ於テハ其ノ數一千二百九十校ニ減シ著
シク其ノ面目ヲ改ムルニ至レリ
書堂ハ各府郡到ル所ニ存在シ且ツ興廢常ナリ最近
ノ調査ニ依レハ實ニ一万八千二百有餘ノ多キヲ數

フルモ普通教育機関ノ未タ洽ネカラサル今日ニ在
リテハ寧ロ普通學校ノ豫備機関トシテ存置セシムル
ノ要アルニミタラス別段弊害ノ認ムヘキモノ尠ナキヲ
以テ急劇ニ之ヲ改廢シ全ツルコトヲ戒メ徐ロニ
指導啓發ヲ加フルノ方針ヲ採リ一面公立普通學
校長指導ノ下ニ之ト連絡ヲ保タシテ中ニハ國語算
術等ノ學科ヲ授クルモアルニ至レリ

第三節 内地人教育

朝鮮ニ於ケル内地人教育ノ方針ハ内地ノ教育方針
ト異ナル所ナク唯朝鮮ノ實狀ニ鑑ミ生徒教養上

特・注意ヲ要スヘキ點ヲ明示シタルト其ノ設立ヲ居
留民團及學校組合ニ限定シタルノ外（居留民團ハ
大正三年三月限り廢止シタルヲ以テ其ノ教育事務ハ
學校組合ニ於テ之ヲ掌ルコトナレリ）教育ノ本旨修
業年限、教科編制等大体内地ト同一ニシテ彼我同
等學校ノ入學轉學ノ關係ニ於テモ全然共通トシ
相互ノ連絡ヲ保テリ

公立小學校ハ併合以來遽ニ内地人ノ發展セルニ伴
ヒ逐年其ノ數ヲ増加シ明治四十三年ニ於テ一百七校
ヲ數ヘタリシモ今ヤ二百九十校ノ多キニ達シ尚年

々増設ノ傾向ヲ示シ内地人集團地ニシテ學校組合
ヲ組織シ得ル程度ニ至レハ直ニ小學校ノ設置ヲ見
充ナキノ状態ニシテ舊統監府時代ヨリ相當ノ補
助金ヲ支給セシメ總督府設置以來更ニ補助金
ヲ増額シ以テ之ヲ獎勵ニ努メ國民教育ノ普及
發達上畧遺憾ナキニ至レルモ尚僻陋ノ地方ニ居住
スル者ニシテ小學校ノ設備ナク就學ノ便ヲ得ズ
者ノ爲ニ特ニ京城、平壤、永浦、群山、義州等
ノ學校組合若ハ教育會ニ補助金ヲ與ヘ兒童寄
宿舍ヲ設ケシメ是等不就學兒童ヲ收容シ附近

小學校ニ通學ノ途ヲ開キタルニ入舎ヲ希望スル者少
カラズ成績佳良ニシテ教育機關缺如ノ一端ヲ補ヘリ
依テ遠カラズ此ノ種ノ寄宿舎ヲ各道一箇所宛設
ケシノムトス又生徒數少キ邊陲ノ地方ニ於テハ別ニ校
舎ヲ設ケス教員住宅ヲ以テ之ヲ兼子シムルコトトシ
以テ便宜ノ措置ヲ執ラシノムトス
中學校ハ國庫ノ施設ニシテ從來京城中學校ノミナ
リシカ前年度ニ於テ畧設備ノ完成ヲ告ケ現在十
四學級、六百五名ノ生徒ヲ收容セルモ前述ノ如ク
内地人ノ發展ト小學校ノ増設トニ伴ヒ入學志願

有年々増加シ到底之カ收容ノ餘地ナキニ至レルヲ
以テ焦眉ノ急ニ應ニ應セムカ爲メ大正二年四月新
ニ釜山中學校ヲ設置シ現在二學年四學級百八十
餘名ノ生徒ヲ收容セリ尙未達カラス北鮮ニ中學校
一枚ヲ増設セムトス

高等女學校モ亦小學校卒業者ノ激増ト共ニ逐年
増設シ現在京城、仁川、釜山、平壤ニ公立高等女
學校、鎮南浦及元山ニ公立實科^{高等}女學校アリ京城及
釜山ヲ除ク外ハ併合後ノ設置ニ係リ各校ト七年
々補助金ヲ支給シ之カ施設ヲ容易ナラシメム

トシ期セリ

實業專修學校ハ釜山及仁川ニ各一校、簡易實業
專修學校ハ平壤及鎮南浦ニ各一校アリ何レモ商
業ニ関スル科目ヲ教授シ毎年國庫補助ヲ與ヘ朝
鮮ニ於テ商業ニ從事スルニ必要ナル教育ヲ施シ卒
業者ノ分布普及ニ依リ直接又ハ間接ニ商業ノ
振興ニ資シツ、アリ

内地人私立學校ハ現在九校アリ其ノ中私立東洋協會
專門學校京城分校ハ特ニ殖民地ノ事業ニ從事セ
ムトスル者ヲ養成シ又私立善隣商業學校ハ夙ニ

夜學科ヲ設テ官廳銀行會社等ニ就職セル雇員
給仕等晝間就學ノ途ナキ者ヲ收容シテ教育ヲ
施シ尙大正二年度ニ於テハ新ニ甲種程度ノ内地人
商業教育ヲ開始セル等兩校トモ相當成績ヲ收メ
ソ、アルヲ以テ毎年國庫補助金ヲ交付シ之ヲ獎勵
セリ

第四節 教員養成

教育令實施ト共ニ公立普通學校ノ教員養成機關
トシテ京城高等普通學校ニ修業年限一々年ノ教
員速成科及修業年限三々年ノ臨時教員養成所

ヲ附設シ又平壤高等普通學校ニ教員速成科ヲ置
キ従来ノ師範學校ヲ廢止セリ本施設ハ專ラ朝鮮
人タル教員ノ養成機關ニシテ内地人教員ハ内地ヨリ
相當ノ學識經驗アル有資格者ヲ選拔採用スルノ
方針ヲ採リシモ漸次普通學校ノ増設ニ伴ヒ朝鮮
内ニ於テ適當ノ教育ヲ施シタル内地人訓導ヲ養
成シ配置補充スルノ必要ヲ認メ大正二年四月新ニ
臨時教員養成所ニ第二部ヲ設ケ修業年限ヲ一ケ
年トシ中學校卒業若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有ス
ル者ヲ選拔入學セシメ本年第一回卒業生三十七名ヲ

四月京城中學校ニ臨時小學校教員養成所ヲ附
屬セシメ修業年限ヲ一箇年トシ中學校卒業
若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲ選拔入學
セシメ既ニ第三回八十二名ノ卒業生ヲ出シ之ヲ各
道ニ配置シ尚新設學校若ハ學級増加ニ伴フ
要員ノ補充ニ付テハ内地ヨリ相當有資格者
ヲ選拔採用セリ

教員養成所出身ノ内地人教員ハ修業年限
短期ナル為メ教授訓練ノ方面ニ於テ素養充
分ナラス成績著シカラスト雖何レモ壯年ニシ

四月京城中學校ニ臨時小學校教員養成所ヲ附
屬セシメ修業年限ヲ一箇年トシ中學校卒業
若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲ選拔入學
セシメ既ニ第三回八十二名ノ卒業生ヲ出シ之ヲ各
道ニ配置シ尚新設學校若ハ學級増加ニ伴フ
要員ノ補充ニ付テハ内地ヨリ相當有資格者
ヲ選拔採用セリ

教員養成所出身ノ内地人教員ハ修業年限
短期ナル為メ教授訓練ノ方面ニ於テ素養充
分ナラス成績著シカラスト雖何レモ壯年ニシ

予活氣ニ富ミ漸次研鑽修養ヲ積ムニ從ヒ良
好ノ成績ヲ收ムルニ至ルヘシ

第五節 教科用圖書

明治四十三年八月韓國併合ノ結果從來ノ教科
書ハ何レモ其ノ教材ト語句トニ不適當ノ點ヲ生
シタルニ依リ同年十月教授上ノ注意並字句ノ訂
正ニ關スル印刷物ヲ刊行シ普ク官公私立各學校
ニ配付シ教授上遺憾ナカラシメタリ而シテ之ト同時
ニ従来使用セル舊學部編纂普通學校教科
書ノ訂正ニ着手シ明治四十四年三月迄ニ之ヲ

完了シ同年四月ヨリ全部訂正本ヲ使用セシメ更ニ
朝鮮教育令又普通學校規則ニ基ツキ新ニ普通學
校教科書ノ編纂ニ着手シ大正二年四月ヨリ其ノ一部
使用セシメ其後出版ヲ為スニ隨ヒ舊教科書ニ代
テ使用セシメ大正四年度ニ於テ全部編纂ヲ了ル豫
定ナリ新教科書ハ朝鮮語漢文ノ外ハ何レモ國語ヲ
以テ記述スルヲ本体トシ而シテ其ノ假名遣ハ表音的
トシ最上級ニ於テ歴史的假名遣ノ文章ヲ讀ムニ差
支ナカラシムルコトト為シタルヲ以テ教授上頗ル便益ニ
シテ國語力ノ増進著シキモノアルヲ認メタリ

高等程度諸學校用教科書ハ舊學部ニ於テ編纂
シタルモノ殆ト絶無ニシテ民間出版ノ教科書モ亦適
當ナルモノ極メテ稀ナルヲ以テ先ツ高等普通學校用
ヲ主トシ且同程度ノ諸學校ニモ使用セシムヘキ教科書
ノ編纂ニ着手セリ然ルニ普通學校ノ教科書未タ
完成セズ彼此聯絡上更ニ考慮ヲ要スヘキモノアル
ヲ以テ何レモ先稿本トシテ出版シ以テ當面ノ急
ニ應スルコト、爲シ明治四十五年度ヨリ其ノ一部分ヲ
使用セシメ其ノ後編纂ヲ完成スルニ隨ヒ新教科書
ヲ使用セシメタル上大正五年度中ニハ全部ノ編纂ヲ

完結スル豫定ナリ

實業學校中公立農業學校教科書ノ編纂ハ最モ急
シ要スルモノ、一タリ、蓋シ朝鮮ノ農事ハ自ラ内地ト大
ニ趣ヲ異ニスルモノアルヲ以テ此ノ種ノ實業學校ニ
使用スル教科書ノ内容ハ本府勸業ノ方針並朝鮮
農事ノ實際ト合致セサルヲ得サルヘケレハナリ是レ
於テ先ツ本府ニ於テ制定シタル公立農業學校教
授要目ニ準據シ該方針ニ一致スヘク農業各分科ノ
教科書ヨリ始メテ大正二年二月其ノ編纂ニ着手シ
同三年三月末迄ニ九種十三冊ノ出版ヲ了シ大正三

年度初ヨリ使用セシメタリ此ノ外水産教科書農業法規及經濟教科書農業理科教科書等ハ大正三年度内ニ商業學校主要教科ノ教科書ハ大正五年度内ニ全部出版シ了スル見込ナリ又内地人教育ニ於テハ内地ノ國定教科書ノ外教材ノ補充若ハ參考トナルヘキ事項ヲ集メ各科ニ涉リテ之ヲ編纂シ大正八年度ニ於テ之ヲ完了スル豫定ナリ尚ホ朝鮮教育令ニヨリ朝鮮教育ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ依ルヘキ旨規定セラレタルモ其ノ解釋區々ニ渉ルモノアルヲ以テ之ヲ標準ヲ示スノ必要ヲ

認メ明治四十五年二月教育勅諭衍義ヲ出版セリ
教授用地圖ハ後來適當ナルモノ之ナク殊ニ併合
後日本ノ領土ヲ具體的ニ示スヘキモノ一モ之ナキヲ
以テ大日本帝國全國及今國ノ編纂ニ着手シ大
正二年八月先ニ朝鮮地方ノ部一軸ヲ出版セリ
又國語普及上簡易適切ナル教授書ノ必要ヲ認
メ大正元年八月國語教授法ヲ出版シ各學校等ニ
配付シタリ

教科用圖書認可ニ関シテハ普通學校ニ於ケル
教科書ハ普通學校規則ニ依リ必ズ本府編纂

教科書ヲ用キシムルコト、為シ普通學校以外
ノ官立學校並私立各種學校ニアリテハ何レモ
當該學校規則ニ依リ本府編纂並檢定ノ圖書
ヲ教科書トシテ使用スル場合ハ屈出ニ止ムルモ其
ノ他ハ一切本府ノ認可ヲ受ケシムルコト、セリ又出版
法以前ニ朝鮮人發行セシ不良圖書ノ私立學校教
科書トシテ使用セラル、モノ數カラサリシヲ以テ併合當
時學務局ニ於テ此等不良教科書ノ内容ヲ審査シ其
ノ結果發賣頒布ヲ禁止セラレタル圖書二十一種アリ此等ノ
圖書ハ何シノ學校ニテモ教科書トシテ使用スヘカラサル

ハ勿論參考書トシテモ使用スヘカラサル旨屢々通牒
ヲ發シ又機會アル毎ニ注意ヲ與ヘ地方官憲ヲシテ
十分之力取締ヲ為サシメ其ノ後發賣頒布ヲ禁止
セラレタル教科書類似圖書ニ對シテハ何レモ同様
ノ方針ヲ取リタル結果私立學校教科書ノ狀況ハ
其ノ面目ヲ一新シ現時ハ不良教科書ノ使用セラ
ル、モノ全ク其ノ跡ヲ絶テリ

第六節 留學生

留學生ニ関シテハ明治四十四年留學生規則ヲ故
ニ發布シ東京ニ留學生監督ヲ置キ之ヲ保護

監督ニ任セシメタリ官費生ハ定員五十名ニシテ官立學
校、醫學講習所及工業傳習所等ノ卒業生中校長
又ハ所長ノ推薦ニ依レル成績優良ナル者若ハ特ニ
留學生監督ノ推薦セル者ノ中ヨリ選拔シテ内地ニ
派遣シ各地ノ學校ニ入學セシム此等留學生ハ概シ
テ實業科ヲ履修スル者多シ私費生ニ至リテハ年々
其ノ數ヲ増加シ東京ヲ中心トシ現在六百名ヲ數
フルノ狀況ニシテ中ニハ學生タル本分ヲ忘レ他ノ誘惑
ニ遇ヒ學費ヲ浪費シ或ハ危險思想ヲ抱キ不穩ナ
ル言動ヲ敢テスルモノアル等之ヲ監督及取締ハ頗

ル困難ナル事業ニシテ曩ニ監督部内ニ寄宿舍ヲ
設テ官私貴生ヲ收容シ保護ノ途ヲ講セリト雖其ノ
大多數ハ外部ニ在リテ留學生監督ニ信賴接近ス
ルヲ厭ヒ其指導ヲ肯セサル者尠カラス依テ特ニ在
學學校ニ對シ之カ訓育及監督上ニ關シ依囑ス
ルト共ニ面各道府尹郡守面長等ニ對シ朝鮮ニ於
テ教育施設ノ完備セル今日ニ在リテ漫ニ内地留學
ヲ為スノ有害無益ナルコトヲ周知セシムルニ努メタリ
歸還留學生ノ就職ニ關シテハ官私貴生ヲ問ハス之
カ周旋ニ努メ無為徒食ノ遊民ヲ作ラサルコトニ

苦心セリト雖實業學校、高等普通學校、專修
學校卒業生等ノ比較的一般ノ歡迎ヲ受ケ就職ノ容
易ナルニ反シ私費留學生中朝鮮ノ實狀ニ適合セサ
ル教育ヲ受ケタルモノハ徒ニ意氣ヲ尚ヒ就職ノ
難ヲ訴フル者多ク最近調査スル所ニ依ルモ約百
八十名ノ不就業者ヲ見ルカ如キハ頗ル遺憾ノト
ナリトス

第七節 經學院

經學院ハ經學ヲ講シ文廟ヲ祀リ風教德化ヲ
裨補スルヲ以テ目的トシ明治四十四年六月經學院

規程ヲ發布シ舊成均館ノ組織ヲ變更シテ之ヲ京城ニ設置セリ成均館ハ其ノ創立頗ル古ク尊聖慕賢ノ靈廟トシテ將夕養士育英ノ最高學府トシテ歷朝深ク之ヲ尊崇シ幸學謁聖ノコト屢々行ハレ時ニ世子ヲシテ此ニ學ハシムル等實ニ儒學ノ中樞機關タリシト雖時勢ノ變遷ニ伴ヒ新學興リ漸ク不振ノ狀態ニ陥リ殊ニ一定ノ學制ノ下ニ朝鮮ノ時勢ト民度ニ適ヘル教育施設ヲ見タル今日ニ在リテハ最早教育機關トシテ成均館ハ全ク其ノ必要ヲ認メサルニ至レリト雖李朝五百年間ニ於

ヲ專ラ國民ノ風教ヲ維持シ深ク民心ヲ支配セル
儒教ノカハ牢トシテ孩クヘカラサルモアリ而モ古
未ノ慣行ヲ重シシ良風美俗ヲ保存シ以テ風教
德化ノ助長普及ヲ圖ルハ更ニ一層切實ナルモノ
アルヲ認メ之ヲ經學院ト稱シ故ノ臨時恩賜
金二十五萬圓ヲ基金ニ充テ大提學、副提學、
祭酒、司成、直員等ノ職員ヲ置キ院務ヲ處理
セシムルト共ニ各道ヨリ高德篤行ノ耆宿ヲ選ミテ
講士ニ擧テ毎年春秋ノ釋奠祭ニ列セシメ經學ヲ
講セシムル等儒林ヲ尊ビ碩學ヲ重ムスルノ美

風ヲ推獎シ更ニ進シテ彞倫ノ扶持ト人心ノ啓發
ニ資スルノ機關タラシメ尚本院ノ事業トシテ月次經
典ノ講究ヲナシ或ハ講士ヲ地方ニ派シテ巡回講演ヲ
ナシ或ハ院誌ヲ発行スル等能ク施政ノ方針ニ獎順
ミテ民衆ノ儀表タラシメムトシ職員講士等亦其
ノ趣旨ヲ體シ本院設立ノ目的ニ副ハムコトニ勉メツ
ツアリ

第八節 郷校財産

郷校ハ往時地方各府郡ニ於ケル教育機關ニシテ大成
殿ニ文廟ヲ祀リ明倫堂ニ儒學ヲ講スル慕聖育

其ノ府ヲリシモ明治二十七年科擧ノ制廃止セラル
ルト共ニ著シク表額ニ赴キ自ラ教育機關タルノ
實ヲ失ヒ今ヤ僅ニ文廟ノ享祀ニ舊態ヲ留ム
ルニ過キス而シテ郷校財産ハ夙ニ之ヲ維持ニ充ツ
ル目的ヲ以テ附屬セシメタル特種ノ財團ナルモ年
所漸ク久シキニ及ンテ該財産ヲ以テ單ニ地方儒
林ノ私的共有ニ屬スルモノト誤認スルニ至レリ依テ之
ヲ散逸耗盡ヲ防カムカ爲明治四十三年舊學部
令ヲ以テ郷校財産管理規程ヲ發布シ之ヲ府尹
郡守ノ管理ニ屬セシメ其ノ收益ハ主トシテ地方

公立學校ノ經費ニ充テ必要アルトキハ支廟ノ享祀
費及修理費ニ使用スルコトヲ得セシメタリ爾來該
財産ノ整理ニ力メシ結果年々收益ヲ増加シ當初
ノ收益僅ニ七萬六十餘圓ニ過キサリシモノ今ヤ約
二十萬圓ノ巨額ニ達シ學校經費使用額ノ如キ亦
十二萬七千餘圓ヲ算スルニ至リ公立普通學校維
持ノ有力ナル財源ヲ為セリ尚將來之ヲ管理ノ手
數ヲ省畧シ且ツ其ノ收益ヲシテ益々多カラシ
メシカ爲メ適當ノ方法ヲ講スルノ必要ヲ認メ目下
調査中ナリ

第七章 觀測事務

朝鮮ニ於ケル氣象觀測事業ハ日露戰役中軍事上ノ目的ノ爲ニ創立セラレタルモノナリシ事、和克復後其ノ施設ヲ舉ケテ韓國政府ニ引継キ産業、土木、衛生、交通ノ事業ニ資セシムルコトナリ、總督府設置後モ此ノ方針ノ下ニ仁川ニ觀測所ヲ置キ、釜山、永浦、元山、龍岩浦、城津ノ臨時觀測所ヲ附屬測候所ト改メ更ニ京城、平壤、大邱、江陵、雄基、中江鎮等漸次各地ニ測候所^{ヲ増}設セリ、然リト雖廣

袤一万四千餘方里ヲ有シ且ツ山凹極リナキ朝
鮮ニ在リテハ僅少ナル測候所ノ觀測ノミヲ以テ
其全班ヲ窺フコト固ヨリ不可能ナルヲ以テ燈臺
衛戍病院・農場等ヲシテ簡易觀測ヲ施行セ
シメ更ニ大正三年度ヨリ府郡二十五箇所ニ於テ
之ヲ開始シ現在氣象觀測機關九十四箇所
ヲ算スルニ至レリ而シテ是等諸所ノ觀測成績
ハ悉ク之ヲ仁川觀測所ニ蒐集整理シ月報年
報又ハ臨時報告トシテ内外官公署及實業家
重ナルモノニ頒布シ尙ホ之ニ基キ調査研究シタル

結果ヲ臨時刊行物トシテ内外ニ発表シ以テ各種事業
ノ經營ニ資シ且ツ學界ニ貢獻スル所鮮シトセス又
中央氣象臺其ノ他内地、臺灣、關東州、及香港、
馬尼刺、浦塩斯德等ノ測候所ト氣象電報ヲ
交換シ之ニ依リテ天氣圖ヲ作成シ天氣豫報
暴風警報ヲ發布シ之ヲ普及方法トシテ信稱
所十四ヶ所ヲ設ケ其ノ設置ナキ地方ニ對シテハ警
務機關ヲ通シテ警報普及ノ途ヲ講シ尚特ニ必
要ト認ムル官公署團體等ニハ測候所ヨリ直接通
報セシメツ、アリ

然レトモ目下觀地^測點ノ僅少ナルカ爲メ氣象調查

ノ材料充分ナラス天氣豫報及暴風警報確實シ
缺ク憾アルシ以テ將來ニ於テ漸次必要ノ地點ニ
測候所二十五箇所及簡易測候所百箇所ヲ
増設シテ測候機關ノ充實ヲ圖リ一面高層氣象
觀測ヲ開始シ兩者相俟テ資料ノ充實ト天氣豫
察ノ確實ヲ期シ以テ益々産業、交通、衛生、等
ノ諸事業ニ貢獻セシメムトス又仁川觀測所ニ於テ
ハ地動ノ觀測ヲ爲シ其ノ成績ヲ萬國地震協
會及臨時震災豫防調查會ニ報告シ資料ヲ

提供スルト共ニ内外官公署団体等ニ報告シテ其
ノ参考ニ供セリ又時刻ノ測定ニ依リテ時辰儀
ノ誤差ヲ正シ毎日仁川郵便局ヲ通シテ正確
ナル時刻ヲ通報シ時刻ノ正確ト統一トヲ保持
セシメツツアリ

以上ノ外朝鮮民曆ヲ編纂シ又朝鮮ニ於ケル古
今ノ天文氣象ニ関スル史實ヲ調査研究シ統
計シ作り興ニ有事業家ノ参考ニ資シタルモノ
カラス

第八章 司法制度

第一節 司法制度ノ整理

明治三十九年保護制度ノ施行セラルルヤ故伊藤統監
ハ司法制度ノ改善ヲ以テ最先ノ急務ナリトシ當時ノ
主要ナル裁判所ニ内地人ノ補佐官各一人ヲ傭聘セシ
メ果テ明治四十年七月締結ノ日韓協約ニ依リ司法事
務ヲ全然行政事務ヨリ分離セシメ明治四十一年八月
ヨリ三審制度ノ裁判所ヲ開設シ内地人ヲ主要ナル判
事檢事書記ニ任命セシメタリ此ノ如クシテ漸ク改善
ノ端ヲ啓キタリト亟更ニ進ムニ民衆ノ生命財産ノ安

固ヲ確實ナラシムムニハ益司法制度ノ整備ヲ圖ルノ
必要アリ然ルニ舊韓國政府ハ其ノ財政狀態ニ鑑ミ到
底所期ノ改善ヲ遂行スル能ハサルヲ以テ明治四十二
年七月司法及監獄ノ事務ヲ擧ケテ之ヲ帝國政府ニ委
託セリ仍テ帝國政府ハ舊韓國司法事務ヲ繼承スルト
同時ニ従来統監府法務院及理事廳ニ屬スル帝國居留
民ニ對スル司法事務ヲ併セテ之ヲ統一スルノ必要ヲ
認メ同年十月公布ノ勅令ニ依リ統監府司法廳官制及
統監府裁判所令ヲ定メ之ニ依リ統監府司法廳及統監
府裁判所ヲ設置シ同年十一月一日ヨリ其ノ事務ヲ開

始セリ

越ヘテ明治四十三年八月二十九日韓國併合ノ結果同年十月一日朝鮮總督府官制實施ト同時ニ統監府司法廳ヲ廢止シ其ノ事務ハ本府ノ司法部ニ於テ之ヲ兼継シ又從前ノ統監府裁判所令ヲ改メテ朝鮮總督府裁判所令ト爲シ裁判所ノ組織ハ從前ノ制ヲ蹈襲シ裁判所ノ種類及權限等範ヲ内地ノ制ニ採リテ三審制度ヲ確立シ區裁判所地方裁判所控訴院及高等法院ニ區分シ裁判所ハ朝鮮總督ニ直屬シ朝鮮ニ於ケル民事刑事ノ裁判及非訟事件ニ關スル事務ヲ掌リ區裁判所ハ單獨

審理ノ制ト爲シ地方裁判所及控訴院ハ三人高等法院
ハ五人ノ判事ヲ以テ組織セル合議審理ノ制ヲ採用セ
リ又朝鮮總督府判事檢事ノ任用ニ關シテハ裁判所構
成法ニ依リ判事檢事又ハ司法官試補タル資格ヲ有ス
ル者ノ中ヨリ之ヲ任用スルヲ原則トシ内地人又ハ朝
鮮人ニシテ新制度施行ノ際統監府判事又ハ檢事タル
者ハ特ニ之ヲ任用スルコトヲ得又朝鮮人ニシテ帝國
大學官立專門學校又ハ朝鮮總督ノ指定シタル學校ニ
於テ三年以上法律學ヲ修メ卒業シタル者ハ文官高等
試驗委員ノ銓衡ヲ經テ特ニ之ヲ任用スルコトヲ得ル

モ朝鮮人タル判事、檢事ニハ民事ニ在リテハ原告、被告
共ニ朝鮮人タル場合、刑事ニ在リテハ被告人カ朝鮮人
タル場合ニ限リ、其ノ職ヲ行ハシムルコトト定メタリ
尚同年十月一日、高等法院一、控訴院三、地方裁判所八、地
方裁判所支部十二、區裁判所六十八ヲ設置シ、裁判所ノ
職員ハ判事二百六十一人、檢事六十三人、書記長四人、通
譯官四人、書記及通譯生四百二十九人ヲ以テ定員ト為
セリ

朝鮮人ニ對スル司法ニ関スル法規ノ適用ニ付テハ原
則トシテ内地法ヲ適用スルコトト為シタルモ、多年生

活ノ規準トシテ其ノ遵行ニ慣熟セル舊韓國ノ法規及
慣習ヲ遽ニ無視スルヲ得サル事情アルヲ以テ司法權
委任時代ニ於ケルト同シク特ニ明治四十二年勅令第
二百三十八號朝鮮人ニ係ル司法ニ關スル制ニ依リ法
令ニ特別ノ規定アル場合ヲ除クノ外朝鮮人ニ對シテ
ハ舊韓國法規ヲ適用シ朝鮮人ト朝鮮人ニ非サル者ト
ノ間ノ民事事件ニ付テハ一ニノ變更ヲ以テ内地法ヲ
適用スルコトト爲シタリ

舊統監府判事ニ對シテハ法規上身分ニ付特別ノ保障
ナク一般文官ト同一ノ待遇ヲ受ケタリシカ明治四十

四年制令第四號ヲ以テ朝鮮總督府裁判所令ニ改正ヲ
加ヘ朝鮮總督府判事ハ禁錮以上ノ死刑ニ處セラレ又
ハ懲戒ノ處分ニ依ル場合ヲ除クノ外其ノ意ニ及ビテ
其ノ官ヲ失フコトナキ旨ヲ規定シ以テ終身官タルノ
保障ヲ與ヘタリ又判事ノ懲戒ニ付テハ同年制令第五
號ヲ以テ朝鮮總督府判事懲戒令ヲ規定シ一般官吏ニ
對スル懲戒ノ場合ト其ノ手續ヲ異ニシ特ニ判事ヲ以
テ組織シタル判事懲戒委員會ノ決議ニ依リ懲戒ヲ加
フルコトト爲シタルカ爲裁判官ノ地位ハ従前ニ比シ
大ニ安固ヲ加ヘタリ

辯護士ニ關スル制度ハ舊韓國時代ニ在リテハ内地人
ハ内地ニ於テ辯護士ノ資格ヲ有スル者ノ外訴訟事務
ニ相當ノ經驗アル者ハ統監府理事廳理事官ノ許可ヲ
得テ之ニ從事スルコトヲ得タリシヲ明治四十三年制
令第十二號ヲ以テ辯護士規則ヲ改正シ朝鮮總督ノ認
可ヲ得テ辯護士ノ業務ニ從事スルコトヲ得ル者ヲ内
地ノ辯護士法ニ依リ其ノ資格ヲ有スル者ニ限レル結
果從來理事官ノ許可ヲ得テ訴訟事務ニ從事シタ
ル者ハ爾後其ノ業務ニ從事スルコトヲ得サルコトト
爲リタルニ其ノ後明治四十四年制令第八號ヲ以テ當

分ノ内其ノ理事廳ノ在リタル地ヲ管轄スル地方裁判
所又ハ區裁判所ニ於テノミ訴訟代理ノ業ヲ為スコト
ヲ得セシムルニ至レリ又朝鮮人ニ對シテハ辯護士規
則ニ依リ其ノ為特ニ設ケタル辯護士試験ニ合格シタ
ル者又ハ舊韓國裁判所舊統監府裁判所朝鮮總督府裁
判所ノ判事檢事若ハ舊韓國ノ辯護士タリシ者ニ限リ
辯護士タルノ資格ヲ有セシムルコトト為セリ
以上ハ韓國併合當時ヨリ明治四十五年三月迄ノ間ニ
於ケル司法制度ノ綱要ニシテ爾來之ニ依リテ司法ノ
公正ヲ發揮シ大ニ内外ノ信用ヲ博シ得タリト云最高

裁判所ノ下ニ三種ノ裁判所ヲ置キ一審二審ノ裁判共
ニ二種ノ裁判所ニ分屬シ裁判所ノ種類夥多ニシテ其
ノ権限亦相錯綜シ加之單獨判事ノ裁判権ハ區裁判所
ノ権限ニ屬スル輕易ノ事件ニ限ラレ其ノ他ノ事件ハ
總テ合議裁判ノ手續ヲ用ヰサルヲ得ヌ此ノ如キハ百
般ノ事簡捷ヲ必要トスル朝鮮ノ現場狀ニ適セサルヲ
以テ之ヲ組織改善ノ必要アルヲ認メ明治四十五年制
令第四號ヲ以テ朝鮮總督府裁判所令ヲ改正シテ從來
ノ區裁判所地方裁判所及控訴院ヲ廢シ裁判所ノ種類
ヲ減シテ之ヲ地方法院覆審法院及高等法院ノ三階級

ニ區分シ尚必要ニ從ヒ地方法院ノ事務ノ一部ヲ取扱
ハシムル爲地方法院ノ支廳ヲ設置スルコトヲ得ルコ
トトシ第一審ノ裁判ハ總テ地方法院ニ於テ第二審ノ
裁判ハ總テ覆審法院ニ於テ又第三審及特別ノ事件ノ
裁判ハ高等法院ニ於テ各之ヲ行ハシメ以テ其ノ権限
ヲ明確ニシ且事務ノ簡捷ヲ期スルカ爲第一審ニ於テ
ハ單獨判事ヲシテ裁判ヲ爲サシムルヲ原則トシ特ニ
重要ナル事件ニ限り合議裁判ノ制ヲ採リ一層裁判事
務ヲ敏活ナラシム以テ朝鮮ノ現状ニ適應セシナムコ
トヲ期シタリ而シテ改正裁判所令實施後ニ於ケル裁

判所ノ數ハ高等法院一、覆審法院三、地方法院八、地方法
院支廳六十ニシテ之ヲ従前ノ裁判所數ニ比シ二十ヲ
減シタリ又裁判所職員ノ定員ハ判事二百十六人、檢事
六十人、書記長四人、通譯官四人、書記及通譯生三百九十
一人ニシテ之ヲ従前ノ定員ニ比スレハ判事四十五人
檢事三人、書記及通譯生三十八人ヲ減シタリ尋テ大正
三年四月ニ至リ交通機關ノ整備ニ伴ヒ強テ之ヲ存置
セサルモ人民ニ多大ノ不便ヲ感セシムル虞ナシト認
メタル地方法院五箇所ヲ廢シテ其ノ數ヲ五十五ニ減
シ又同年五月制令第二十號ヲ以テ地方法院管内ニ其

ノ出張所ヲ設置シ裁判所書記ヲシテ登記及公證ノ事
務ヲ取扱ハシムルノ制ヲ定メ同月一日ヨリ三箇所ノ
出張所ヲ設置シ而シテ之ニ伴ヒ定員令ヲ改正シ判事
十四人檢事一人ヲ減シ書記及通譯生六人ヲ増員シタ
リ又大正二年四月制令第四號ヲ以テ朝鮮總督府裁判
所令ヲ改正シ新ニ司法官試補及豫備判事並豫備檢事
ノ制ヲ設ケ之ト同時ニ制令第五號ヲ以テ判事檢事ノ
任用ニ關スル制ヲ改メ朝鮮總督府司法官試補ハ裁判
所構成法ニ依リ司法官試補タル資格ヲ有スル者ノ中
ヨリ之ヲ命シ朝鮮總督府判事及檢事ハ裁判所構成法

ニ依リ判事若ハ檢事タル資格ヲ有スル者又ハ朝鮮總
督府司法官試補トシテ一年以上實務ノ修習ヲ爲
シ試験ニ合格シタル者ノ内ヨリ之ヲ任用スルコトト
爲シ裁判所構成法ニ依リ司法官試補タル資格ヲ有ス
ル者ヲシテ實務ノ修習ヲ爲サシメス直ニ之ヲ朝鮮總
督府判事又ハ檢事ニ任用スルノ制ヲ廢セリ而シテ朝
鮮總督府司法官試補ヨリ新ニ朝鮮總督府判事又ハ檢
事ニ任用シタル者ヲ補スヘキ職位ナキトキハ其ノ缺
位アル迄豫備判事又ハ豫備檢事トシテ地方法院地方
法院支廳又ハ其ノ檢事局ニ勤務セシムルコトト爲シ

以テ現今ニ及ヘリ又明治四十五年制令第五號ヲ以テ
辯護士規則ヲ改正シ内地人ノ辯護士資格ヲ擴張シテ
舊韓國裁判所舊統監府裁判所若ハ朝鮮總督府裁判所
ノ判事檢事タリシ者ヲモ辯護士タルコトヲ得セシメ
タリ

朝鮮ニ於ケル民事刑事ニ關スル從來ノ法規ハ概シ舊
韓國時代ノ制度ニ係リ内地人及外國人ニ對スルモノ
ト朝鮮人ニ對スルモノトニ箇全然別種ハ法系ヲ存シ
タルヲ以テ其ノ關係彼此錯綜シ實際ノ適用上非常ニ
困難ナルノミナラス往々時勢ノ要求ニ適セサルモノ

アリタルヲ以テ之カ整理統一ヲ圖ラムカ為明治四十
五年三月制令及府令ヲ以テ新ニ法令ヲ發布シ同年四
月一日ヨリ之ヲ施行シ内地人朝鮮人及外國人ノ別ナ
ク之ヲ適用スルコト、為セリ乃チ民事ニ在リテハ朝
鮮民事令朝鮮不動産證明令朝鮮不動産登記令及其ノ
施行上必要ナル規定ヲ設ケ民法商法民事訴訟法其ノ
他内地ノ現行法ニ依ルヘキコトヲ原則トセリ然レト
モ朝鮮ノ現状ニ鑑ミ遽ニ是等ノ内地法ニ依ルコトヲ
得サルモ、又ハ之ニ依ルヲ以テ不便ナリト認メタル
モ、ニ付テハ特ニ相當ナル除外例ヲ設ケ又ハ從來ノ

例ニ依ラシムルコト、為セリ今此等例外規定ノ主ナルモノヲ列舉スレハ朝鮮人相互間ノ法律行為ニ付公ノ秩序ニ関スルモノ、外ハ其ノ慣習ニ依リ民法中能カ親族及相續ニ関スル規定ハ之ヲ朝鮮人ニ適用セズシテ從來ノ慣習ニ依ルコト、為シ又不動産ニ関スル物權ノ種類及效力ニ付テハ民法ニ定メタル物權ヲ除クノ外慣習ニ依ルコトニ定メ朝鮮人ニ関スル人事訴訟ニ付テハ人事訴訟手續法中失踪ニ関スル手續ヲ除クノ外之ヲ適用セサルコト、シ又其ノ他ノ裁判手續ニ付テモ朝鮮ノ現状ニ照ラシタツノ點ニ於テ例外規定

定ヲ設ケ手續ノ簡易ヲ圖レリ而シテ民事令ニ於テ民
法商法等ニ定メタル公証人ノ職務ハ裁判所書記之ヲ
行フコトニ規定セリト雖一般公正證書ノ作成ニ付テ
ハ何等ノ規定ナカリシカ故ニ大正二年三月發布ノ制
令ヲ以テ朝鮮公證令ヲ定メ公証證書ノ作成ニ関スル
規定ヲ設ケ朝鮮ノ現状ニ鑑ミ當分ノ内專務ノ公証人
ヲ置カス地方法院ヲシテ公証人ノ職務ヲ行ハシムル
コト、為シ同年五月一日ヨリ之ヲ施行シタリ隨ツテ
之ト抵觸スル民事令第四條中ノ公証人ノ職務施行ニ
関スル規定ハ自然廢滅ニ歸セリ又朝鮮不動産登記令

ハ土地臺帳ノ備ハラサルカ爲メ施行スルニ至ラザリ
シカ市街地二十九箇所ハ土地調査結了シタルヲ以テ
關係法令ノ一部ニ改正ヲ加ヘ大正三年五月一日ヨリ
之ヲ右地域ニ施行シ且各國居留地制度ノ撤廢ニ伴ヒ
永代借地ノ登記ニ關スル法令ヲ定メ同時ニ之ヲ施行
シ尋テ船舶令ノ施行ニ因リ船舶登記規則ヲ定メ同年
六月一日ヨリ之ヲ施行シ以テ不動産及船舶ニ關スル
權利ノ保障ヲ的確ナラシメタリ

刑事ニ關シテハ朝鮮民事令ト同時ニ朝鮮刑事令ヲ制
定シ刑法刑事訴訟法等實體法手續法共ニ内地ノ現行

法ニ依ルハキコト、為セリ然レトモ朝鮮ニハ殊ニ殺人、強盜等ノ犯罪多ク而シテ其ノ犯狀亦^極テ殘忍ナルモノ少カラサルヲ以テ朝鮮人ノ此等ノ犯罪ニ付直ニ内地法ヲ適用スルハ治安ノ保持上事情ニ適セサルモト認メ朝鮮人ニ對シテハ殺人、強盜等ノ犯罪^{限リ}ニ當分ノ内刑法大全ノ效力ヲ有セシムルコトト為シタリ又裁判手續ニ付テハ民事ニ於ケルト同シク多クノ點ニ於テ例外規定ヲ設ケ手續ヲ簡易ニシ朝鮮特殊ノ現狀ニ適セシメムコトヲ圖レリ

又笞刑ハ朝鮮固有ノ刑ニシテ執行ノ方法宜シキヲ得

ハ微罪ニ對スル制裁トシテハ却テ短期ノ自由刑又ハ
少額ノ財産刑ニ比シ其效力多ク且執行ノ方法極メテ
簡易ナルニ依リ此ノ制ヲ存シ朝鮮人ニ對シテノ之適
用スルコト、シ明治四十五年制令第十三號ヲ以テ朝
鮮管刑令ヲ制定シ同年四月一日ヨリ之ヲ施行セリ而
シテ本令ハ従前ノ制度ニ幾多ノ改良ヲ加ヘ適用ノ範
圍ヲ擴メタルモ老幼婦女子ハ之ヲ除外シ又其ノ執行
ニ付テハ可及的人道ヲ重ムスル趣旨ヲ以テ特ニ精細
ナル手續ヲ規定セリ

以上列舉セル力如ク朝鮮ニ於ケル司法制度ハ初メ舊

韓國政府ノ施設ニ依リ改善ノ端ヲ啓キ其ノ後司法事務ノ委任及韓國ノ併合ニ伴ヒ前後二回ノ改正ヲ施シ爾後更ニ幾多ノ改善ヲ経タルモノニシテ之ニ依リ司法事務八年ヲ逐テ健全ナル發達ヲ遂ケ其ノ成績益良好ニ向ヒ人民ノ信賴愈深厚ヲ加ハツツアルノミナラス數回ノ改善ニ因リ多額ノ費用ヲ節約スルコトヲ得タルモノニシテ帝國現時ノ財政状態ニ鑑ミ特ニ適切ナル制度タルヲ疑ハス

第二節 裁判事務ノ概要

韓國併合以來裁判所ニ於ケル民事刑事ニ関スル事件

ハ逐年増加ノ趨向ヲ呈セリ即チ明治四十三年ヨリ大
 正二年ニ至ル四箇年間ニ於ケル民事訴訟事件ノ舉
 レハ左ノ如シ

年 度	新 受 件 数			
	第一審事件	第二審事件	第三審事件	計
明治四十三年	二四二六五	一五〇七	二六	二五、九七八
明治四十四年	二九六三八	二一三三	二四四	三二、〇一五
大正元年	三四七四一	二二二七	二二七	三七、一九五
大正二年	三五三二七	六五二	三六〇	三八、五三九

大正元年迄ハ毎年其ノ總數ニ於テ約二割乃至三割ノ

増加ヲ示セル力大ニ二年ニ至リ其ノ増加率ノ稍減少
シタルハ簡易ナル督促手續ニ依ルモノ激増シタル結
果ナルヘシ又同期間ニ於ケル督促事件並其ノ他ノ民
事雜事件ハ左ノ如シ

年 度	區 新 受 件 數		
	督 促 事 件	其 他 民 事 雜 事 件	計
明治四十三年	一、六六五	九、〇〇六	一〇、六七一
明治四十四年	二、二六二	一〇、六八四	一二、九四六
大正元年	一〇、〇二二	一七、六七〇	二七、六九二
大正二年	二九、一六三	二二、三七九	五二、五四二

之ニ依レハ毎年非常ノ増加ヲ示シ就中督促事件ハ大
正元年以後ニ於テ著シク増加セリ是レ明治四十五年
四月朝鮮民事令ヲ實施シ朝鮮人モ亦内地人ト同シク
督促手續ニ依ルコトヲ得ルニ至レル結果ナリ

以上ノ現象ハ時運ノ進展ト一般人民ノ權利思想ノ發
達ニ因ルハ言ヲ俟タサル所ナリト虽曩ニ帝國政府カ
保護政治施行以來銳意司法制度ノ改善ニ努メタル結
果年ヲ逐フテ健全ナル發達ヲ遂ケ生命財産ノ安固ヲ
加フルニ至リ裁判ノ公明嚴正ナル毫モ當事者ノ貴賤
ト情實ノ如何ニ依リ是非曲直ヲ顛倒スルカ如キコト

ナキヲ視テ大ニ一般ノ信賴スル所ト爲リ日ヲ逐フテ
其ノ程度益深厚ヲ加ヘ進ムテ裁判所ノ保護ヲ求ムル
者愈多キヲ致セルニ職由セスムハアラス

又大正二年五月一日公證令實施後同年十二月迄八箇
月間ニ取扱タル件數ハ左ノ如シ

公正証書作成拒絶証書作成	私署証書認証執行文附典	正本附典	總計
二〇〇	一九	二九	一九一
二	一九	二九	四四一

公證ノ件數未タ多シト謂フコトヲ得ス且其ノ當事者
ハ多ク内地人ニシテ朝鮮人ハ甚タ稀ナリ是レ朝鮮人
カ未タ公証ノ利便實益ヲ周知セサルニ因ルナルヘシ

明治四十三年	六八八	九〇五	九二	一三五	一六三	一九	七九二	一〇、九一九
明治四十四年	九〇三	一、〇六二	一、〇七	一、四〇	一七三	二九	一、〇六二	一四、二六〇
大正元年	一、三三二	一、六、一六	一、〇七	一、四一	一六五	二〇八	一、三五三	一七、八二五
大正二年	一、五四七	二、〇、一七二	一、三九	一、七六	一三七	一九	一、六九六	二二、〇六七

又同上期間ニ於ケル檢事捜査事件ハ九ノ如クニシテ
 是亦毎年其ノ件數及人員ニ於テ約三割ノ増加ヲ示セ

リ

年 度 別	新 受		
	件 數	人	員
明治四十三年	一四、二五〇		二二、二三六

明治四十四年

一九一三四

二九、四三二

大正元年

二四、九三七

三七、一三三

大正二年

三一、二八一

四六、五二〇

此ノ如キ刑事々件及檢事捜査事件ノ増加スルハ主ト

シテ警務機關ノ完備ニ伴ヒ犯罪ノ捜査漸次細密周到

ニ趨キ從テ檢舉數々増加ヘタルカ故ナリト虽前述

ノ如ク一般人民ノ裁判所ヲ信賴スルノ念倍々深厚ヲ

致セル結果進ムテ當該官憲ニ犯罪ノ申告ヲ為ス者著

シク増加シタルニ基因セルコトモ亦爭フヘカラサル

事實ナリトス而シテ漸次強盜略人等ノ如キ蠻的性質

ヲ帶ヒタル犯罪ヲ減シ詐欺橫領文書偽造等智能的犯罪ノ數ヲ増加シ且犯罪ノ手段亦漸次巧妙ヲ加フルニ至レル傾向アリ是レ社會的事物ノ進步スルト共ニ人智モ亦發達シ之ニ隨伴シテ起ル所ノ自然ノ現象ナリトス

第三節 領事裁判權ノ消滅及其ノ影響

舊韓國ニ於ケル領事裁判權制度ハ各國トノ條約ニ依リ設定シタルモノニシテ司法事務ノ不完全ナル時代ニ在リテ止ラ得サル事情ニ因レリ然ルニ帝國政府ハ舊韓國ニ對スル保護政治施行以來韓國ノ司法制度ヲ

改善シ主トシテ民衆ノ生命財産ノ保護ヲ確實ナラシ
ムコトヲ期シ殊ニ明治四十一年八月以降ハ司法事
務ヲ全然行政事務ヨリ獨立セシメ三審制度ニ基キ文
明的裁判所ヲ新設シ内地人ヲ主要ナル判事、檢事及書
記ニ任用シ且法官養成所ヲ設立シテ朝鮮人法官ノ養
成ニ努メ又一面法典調査局ヲ設置シテ法典ノ編纂ニ
銳意シ以テ司法制度ノ改善ヲ遂成シ領事裁判權撤去
ノ準備ヲ全ウセムコトヲ企圖シタリシト由法官ノ養
成ト法典ノ編纂トハ共ニ至難ノ事業ニ属シ短時日ニ
シテ其目的ヲ達シ得ヘキニ非サルノミナラヌ舊韓國

政府ノ財政ハ到底司法制度ノ改善ヲ遂行スルニ堪ヘ
サル事情アリシヲ以テ司法制度ノ整備ニ關シテハ既
ニ諸外國ノ信用ヲ有スル帝國政府ニ其ノ司法權ヲ委
任スルノ寧口至當ナルヲ認メ明治四十二年七月舊韓
國政府ハ司法及監獄ニ關スル事務ヲ攀ケテ帝國政府
ニ委託スルニ至レリ仍チ帝國政府ハ同年十一月一日
新ニ統監府司法廳及統監府裁判所ヲ設置シテ韓國ニ
於ケル司法事務ヲ開始シタリ爾來司法制度ハ益改善
ノ実ヲ攀ケ裁判事務ハ顯著ナル発達ヲ遂ゲ之ヲ文明
國ニ於ケル司法制度ニ比スルニ殆 遜色ナキノ域ニ

達シ著シク内外人ノ信賴ヲ収ムルニ至リ沿外法權撤
去ノ機運ハ茲ニ漸ク熟シタリ而シテ明治四十三年八
月二十九日韓國併合ノ結果朝鮮ニ於ケル領事裁判權
ハ當然消滅ニ歸シ其ノ居留民ハ總テ我司法權ニ服ス
ルコトトナリ爾來外國人ノ我司法ニ對スル信賴ノ念
ハ日ニ倍々深厚ヲ加ヘ今ヤ安ムシテ其ノ保護ヲ受ク
ルニ至レリ試ニ明治四十四年以後大正二年ニ至ル外
國人關係ノ民事及刑事事件ヲ擧クレハ左ノ如シ

外國人關係民事訴訟事件

區

別

年

度

新

受

件

數

明治四十四年

大正元年

大正二年

計

外國人刑事事件

計	朝鮮人 外國人 間	内地人 外國人 間	内地人 朝鮮人 間	外國人 間
一七六	一一八	五一		七
一二七	八一	四八	一	三
二四七	一七七	五八	三	九
五五〇	三七六	一五一	四	一九

明治四十四年	區別		新		受	
	年	度	第一審事件	第二審事件	第三審事件	計
二三九	件数					
四〇五	人員					
三八	件数					
五八	人員					
三	件数					
五	人員					
二七〇	件数					
四六八	人員					

大正元年	三三九	三三五	一五	一七	三	三	二四七	三五五
大正二年	二七〇	三三九	二三	三一	三	五	二九六	三五五
計	七三八	一〇五九	六六	一〇六	九	一三	八一三	一一七八

第四節 監獄制度開スル從來方針及施設

朝鮮ニ於ケル監獄ハ初メ舊韓國政府内部ノ所管ニ屬シ警察署ニ附設セラレタリシカ明治四十一年一月各部改正官制施行ト同時ニ監獄官制ヲ實施シテ之ヲ法部ノ所管ニ移シ監獄及監獄分監ヲ設置シタリ然ルニ當時韓國ニ於ケル獄舎ノ設備ハ甚メ不完全ニシテ監獄事務亦甚シク紊乱セルヲ以テ司法事務ト共ニ銳意

其ノ改善ヲ企圖セルニ舊韓國政府當時ノ財政狀態ヲ
以テシテハ到底所期ノ改善ヲ施スコト能ハサル事情
アリシテ以テ明治四十二年七月舊韓國政府ハ司法事
務ト共ニ之ヲ帝國政府ニ委託スルニ至レリ仍テ帝國
政府ハ同年十月勅令第百四十三號ヲ以テ統監府監
獄官制ヲ公布シ之ニ基キ從來ノ監獄及分監ハ理事廳
監獄ト共ニ統監府監獄ニ變更シ同年十一月一日ヨリ
其ノ事務ヲ開始セリ

越ヘテ明治四十三年八月韓國併合ノ結果同年十月一
日朝鮮總督府新官制實施ト同時ニ統監府監獄官制ハ

之ヲ朝鮮總督府監獄官制ニ改メ監獄ハ朝鮮總督ノ管
理ニ屬シ其ノ設置及廢止ハ朝鮮總督之ヲ定メ且總督
ハ必要ニ應シテ分監ヲ設置スルコトヲ得ルコトト爲
シ典獄ハ朝鮮總督及控訴院檢事長ノ指揮監督ヲ兼ケ
監獄事務ヲ掌理シ部下ノ職員ヲ指揮監督スルコトト
爲シタリ又監獄事務ノ取扱ニ關シテハ明治四十二年
勅令第二百三十九號ニ依リ司法大臣ノ職務ハ朝鮮總
督之ヲ行ヒ笞刑ノ執行ニ付舊韓國法規ニ依ル等若干
ノ例外ヲ除クノ外内地監獄ノ例ニ依ルコトトセリ而
シテ朝鮮總督ハ同年十月一日本監八分監十三ヲ設置

監獄職員ノ定員ヲ典獄八人、看守長及通譯生六十一人、
監獄医十三人、教誨師四人、教師四人、藥劑師四人、看守七
百人、女監取傭四人ト定メタリ

然ルニ從來ノ制度ハ往々朝鮮ノ現状ニ適應セサルモ
ノアルニ依リ之ヲ改善、必要ヲ認メ明治四十五年三
月制令ヲ以テ新ニ朝鮮監獄令同施行規則及假出獄取
締規則ヲ制定シ同年四月一日ヨリ之ヲ施行シ且各監
獄管刑執行ノ統一ヲ期スルカ爲其ノ執行心得ヲ定メ
タリ而シテ以上ノ法規ニ於テ内地ノ監獄ニ於ケルモ
ノト著シク異ナレル所ハ在監者一般ニ對シテ糧食ノ

自辨及差入ヲ許スノ途ヲ開キ又受刑者ノ監外作業ニ
付制限の規定ヲ設ケス出役者ノ選擇ヲ全ク典獄ノ裁
量ニ委ミ其ノ他檢束ノ確保ヲ期スルカ爲特種ノ戒具
ヲ設ケタル等ノ點ニシテ其ノ實施以來刑ノ方法ヲシ
テ克ク朝鮮ノ事情ニ適セシメ遇囚上ニ將夕作業ノ施
行上ニ多大ノ便益ヲ得ルニ至レリ又朝鮮ニ於テ指紋
ノ徵取ヲ創始シタルハ明治四十三年八月ニシテ爾來
幾多ノ研究改良ヲ加ヘ大正元年四月訓令第四十七號
ヲ以テ指紋取扱規程ヲ定メ一層其ノ取扱ノ敏活正確
ヲ期セリ又監獄ノ數ハ大正元年九月本監一箇所ヲ増

設シタル外從前ト異ナルコトナク又監獄職員ハ監獄
ノ増設及在監人ノ増加ニ伴ヒ且作業、医務及教務ノ周
到ヲ圖ルカ爲必要ナル増員ヲ行ヒ現在ニ於ケル定員
ハ典獄九人、看守長、技手、通譯生九十六人、監獄医十七人、
教誨師十二人、教師六人、藥劑師十人、看守千百二十二人、
女監取締三十三人ト爲レリ、

以上ハ韓國併合當時ヨリ現今ニ至ル監獄制度ノ大要
ニシテ、甬東獄舎ノ新營ヲ行ヒ拘禁、戒護、作業、給養、衛生
教誨及教育等獄務ノ全般ニ涉リテ改善ノ歩ヲ進メ且
其ノ週到ヲ圖リタル結果今ヤ著シク其ノ面目ヲ改メ

殆ト昔日ノ觀ヲ留ムルモノナキニ至レリ

第五節 監獄事務、概要及囚情ノ變遷

監獄ニ於ケル在監人員ハ逐年増加ノ趨勢ヲ呈シ數度ノ大赦、特赦、減刑等、赦典ニ因リテ多數ノ出獄者アリタルニ拘ラズ大正二年十二月末日現在人員ハ猶九千八百九十人ニ達シ明治四十二年十月末日即チ帝國政府ヲ舊韓國政府ヨリ委託ヲ受テ監獄事務ヲ開始シタル當時ノ在監人員共千二百十一人ニ比スレハ實ニ三千六百八十人ノ増加ナリトス今明治四十三年以降大正二年ニ至ル迄ノ各年十二月末日現在在監人員及其

ノ増減ヲ擧クレハ左ノ如シ

各前年比較	在監人員		明治四十三年末	明治四十四年末	大正元年末	大正二年末
	減	増	七〇二一	九五八二	九五七二	九八九〇
		九九五		二五六一		三一八
					一〇	

明治四十三年ニ於テハ同年勅令第三百二十五號大赦令ノ施行ニ因リ既未決囚合計千七百十一人ノ出獄者アリシニ拘ラス同年十二月末日現在ノ在監人員ハ前年同期ノ在監人員ニ比シ猶九百九拾五人ノ増加ヲ示シ在監者ノ減少ヲ見ルニ至ラサリシカ大正元年九月

以降ニ於テ大赦特赦又ハ減刑ノ結果出獄者多カリシ
カ爲前記四箇年間ニ於テ唯同年十二月末日ノ現在人
員カ前年末ニ比シ漸ク十人ノ減少ヲ見タルノミ而カ
至明治四十三年十二月末日ノ在監人員ニ比スレハ其
ノ多キヲトニ千五百二十二人ナルヲ見レハ在監人員
ノ如何ニ著シク増加シタルカラ知ルニ足ルヘシ
以上ノ如ク年々著シク在監人員ノ増加ヲ見ルニ拘ラ
ス從來朝鮮ニ於ケル監獄ノ設備ハ甚タ不完全ニシテ
收容力入監人員ノ増率ニ伴ハス到底拘禁及行刑ノ適
實ヲ期スル能ハサルヲ以テ其ノ改善ハ監獄行政上最

七緊要ナル事項ナルコトヲ認メタルニ依リ爾來年年
財政ノ容ス限リ極力獄舎ノ新築若ハ改築ニ務メタル
結果今々大ニ舊觀ヲ改メ面目ヲ一新シテ其ノ收容力
ヲ増大シ且戒護上ノ安固ヲ加フルニ至リタリト尚
獄舎中舊來ノ建物ヲ襲用セルモノアリ其ノ新築ニ係
ルモノ亦必スシモ完全ト謂フヘカラス而シテ他方ニ
於テ因徒ハ益増加ノ傾向アリテ大正三年五月末日ニ
於ケル拘禁状態ハ平均一坪ノ收容人員四人二分一人
ノ占居面積ニ合三勺ニシテ未タ各監獄獄ニ於ケル拘
禁状態ヲシテ十分ニ緩和セシムルコトヲ得ス為ニ在

監人ノ種類、性格、罪質、犯數、年齡等ヲ斟酌シテ所定ノ分類、別異法ヲ十分ニ實行スルヲ得ルニ至ラサルハ頗ル遺憾トスル所ナリ

又監獄事務受託當時ニ於ケル監獄ノ作業ハ頗ル不振ノ狀況ナリシカ銳意其ノ普及擴張ニ努メタル結果逐年就業者ノ數ヲ増加スルニ至レリ即チ明治四十三年以降大正二年ニ至ル四年間ニ於ケル各十二月末日現在就業人員及受刑者百人ニ對スル^{就業}歩合ヲ擧クレハ左ノ如シ

年 度

就 業 人 員

受刑者百人對スル就業歩合

明治四十三年	二、五七三	四一
明治四十四年	五、七六九	六五
大正元年	六、五五一	七三
大正二年	八、〇四二	八八

大正二年ト明治四十三年トノ状況ヲ比較スレハ其ノ

就業者實ニ二倍以上ニ達シ現今ニ於テハ病者事故者

ヲ除クノ外ハ殆ト全部就業者見ルニ至レリ

監獄作業ノ主要ナルモノヲ擧クレハ土管煉瓦工、指物

工、裁縫工、機工、網工、鐵力鍛治工、彫刻工、靴工、下駄及草履

工、疊工、藁工、編笠工、行李工、耕耘等ニシテ近時殖産興業

ハ發達ニ伴ヒ漸次有利ナル業種ヲ見ルニ至レリ而シ
テ監獄作業中最モ有望ナルモノヲ永登浦土管工場及
麻浦煉瓦工場ニ於ケル土管及煉瓦ノ製作ナリトス同
両工場ハ元當府ノ直管トシテ土木局ノ監理ニ屬シ多
數ノ職工ヲ使役シ製品ハ主トシテ官廳用ニ充テ傍ラ
民間ノ需用ニ應ジタリシカ明治四十五年四月以降職
工ヲ瘵^瘵シ專ラ受刑者ヲシテ之ニ當ラシムルコトト爲
シタルヲ爲其ノ監理ヲ司法部ニ移シ尋テ大正二年四
月一日ヨリ京城監獄ノ所屬ニ移シ同監獄ノ受刑者ヲ
シテ之ニ從事セシメツ、アリテ大正二年度ニ於ケル

西工場ノ製作總收入ハ七萬七千四百餘圓ニ達シ其ノ
製作品ハ民間ノ需用多シ

教誨ハ明治四十三年以降漸次教誨師ノ數ヲ増加シテ
各本分監ニ配置シ以テ其ノ普及ニ努メ教育ハ明治四
十三年ヨリ之ヲ開始シ最初比較的多數ノ未成年者ヲ
収容セル京城監獄（現今ノ西
大阿監獄）ニ於テ簡單ナル國語及數

學ヲ教授セシカ爾來教師ヲ増員シテ其ノ普及ヲ圖リ
現今ニ至リテハ各監共教師及教誨師ヲシテ未成年者
其ノ他特ニ必要ト認メタル者ニ對シ其ノ教育程度ニ
應ジ所定ノ學科ヲ教授シ又一般在監者ニ對シテハ其

、性格經歷職業及將來ノ志望等ニ應シ適當ナル文書
圖畫、閱讀ヲ獎勵シ以テ智能ノ啓發ニ努メツツアリ
其、他給養獄内及監房ノ衛生的設備並に監人ノ保健
診療等ハ監獄改良着手以來特ニ留意セシ所ニシテ在
監人ノ衛生狀態ハ比較的良好ナリトス

各監獄ニ於テハ從來銳意經費ノ節約ヲ圖リ漸次其ノ
成績ヲ擧ゲツツアリ即チ近年ニ於ケル米麦薪炭等ノ
如キ必需品ノ暴騰ハ在監人ニ對スル給養其ノ他監獄
ノ經理ニ非常ナル影響ヲ蒙ルニ至リ而シテ一方豫算
ノ増額ハ之ニ伴ハサルヲ以テ妨メテ冗費ヲ節シテ実

際、必要ト豫算トヲ調節スルノ方針ヲ採リ其ノ方法
トシテ在監人ノ食費及薪炭費ノ節約ヲ圖ルカ爲ニ在
監人ノ主食物ノ種類ニ適宜ノ變更ヲ加ヘ大豆又ハ粟
ヲ以テ麦ニ代用シ或ハ粟大豆若ハ蜀黍ノミヲ混炊給
與シ又ハ半麦混炊ノ歩合ヲ變更スル等種々ノ方法ヲ
講スルト共ニ副食物ハ成ルヘク監獄ニ於テ栽培セラル
蔬菜ヲ用ルコトニ努メ薪炭ハ主トシテ分量ヲ一定
シテ渡切ノ法ヲ勵行シテ濫費ヲ避ケ其ノ他竈ヲ改造
シテ燃料ノ節約ヲ圖リ又ハ石炭燃屑ヨリコークスヲ
採取利用スル等ニ依リ節約ヲ施セリ又監獄專用品ノ

自作ニ努メ看守被服ノ裁縫在監被服ノ染織其ノ他諸般ノ器具類ニ至ルマテ成ルヘク監獄ニ於テ調製シ以テ經費節約ノ目的ヲ達スルコトヲ期セリ

從來朝鮮ニ於ケル在監者ハ不紀律無節制ヲ極メ因情亦極メテ險惡ナリシカ帝國政府力膺韓國ニ於ケル監獄事務受託以來銳意在監者ノ處遇方法ヲ改善シ殊ニ給養及衛生ノ施設ニ付テハ細心ノ注意ヲ加ヘ且教誨及教育ノ普及ニ努メタルノミナラス特ニ韓國併合ニ際シ大赦ノ詔勅ニ基キ重大ナル罪犯ヲ除クノ外殆ト總テノ罪犯及國事犯並各種ノ韓國法規ニ定メタル

罪ヲ犯シタル者ニ對シ總テ赦免ノ恩典ヲ與ヘラレ又
大正元年九月十三日ノ詔書ノ趣旨ニ基キ多數ノ在監
者ニ對シ恩赦ヲ施シ更ニ大正三年五月二十四日ノ勅
令ヲ以テ減刑ヲ施行セラレタル結果著シク囚情ニ良
好ナル影響ヲ及ホシ在監者概テ悅服ノ狀ヲ呈シ克ク
紀律ヲ守リ靜肅ヲ保テ囚情倍々平穩ニ趨キ舊韓國時代
ニ頻出セル多數共謀ニ係ル不穩ノ事故ノ如キハ全ク
其ノ跡ヲ絶テ近來著シク逃走ヲ企ツル者ノ數ヲ減少
スルニ至レリ監内ニ於ケル違則行為ノ如キモ暴行或
ハ抗命等不従順ノ行為ニ屬スルモノハ殆ト絶無ニシ

テ其ノ多クハ輕微ナルモノニ止マリ嚴罰ヲ科セラル
ルカ如キ行爲アル者ナキニ至レリ因後ノ狀態既ニ期
ノ如ク隨テ遷善改悟ノ徵候アル者續出シ大正二年十
二月末日ニ至リテハ受刑者平均百人中賞表ヲ有スル
者六人弱ヲ算スルニ至レリ之ト同時ニ假出獄ヲ許可
セラルル者亦多キヲ加ヘ試ニ既往數年間ニ於ケル同
出獄者ヲ憵クレハ明治四十二年三月ヨリ同四十三年
十二月迄ノ間ニ於ケル者四十一人同四十四年中ニ於
ケル者九十九人大正元年中ニ於ケル者百六十三人大
正二年中ニ於ケル者百九人ニシテ彼等出獄後ニ於ケ

ル成績ハ極メテ良好ナリ

第六節 出獄人保護事業

出獄人保護ニ關スル事業ハ刑事政策上最モ重要ナル事項ノ一ニシテ其ノ消長興廢ハ延テ社會ノ公安ニ影響スル所鮮少ナラサルヲ以テ從來該事業ノ普及擴張ニ付テハ關係職員ニ對シ熱心獎勵ヲ爲シ且其ノ獎勵ノ方法トシテ大正二年五月内訓第五號ヲ以テ免囚保護事業補助金下附手續ヲ制定シ以テ其ノ發達ヲ促セシ結果裁判監獄職員其ノ他官民有志ノ協力ニ依リ續々保護團體ノ設立アリ現今既ニ監獄及同分監ノ所直

地ニ於テハ一モ其ノ設立ヲ見サルナキニ至レリ而シ
テ右補助金下附手續ニ依リ大正二年中補助金ヲ下附
セシモノ十一團體金額四千三百圓ニ達セリ之ニ依リ
該事業ニ對シ一層一般社會ノ注意ヲ喚起シ將來健全
ナル發達ヲ見ントスルノ機運ニ向ヘリ以上各團體ニ
於ケル事業ノ狀況ハ職業紹介、衣類旅費、並療養費給與、
職業資本補助等ニシテ何レモ其ノ創設日淺ク資産十
分ナラス設備亦完全ナラサルヲ以テ未タ成績ノ見ル
ヘキモノナシト雖年月ヲ經ルニ從ヒ其ノ基礎益鞏固
ナリ致シ從テ大ニ保護ノ実績ヲ擧グルコトヲ得ヘシ

第七節 三審制度維持理由

朝鮮ニ於ケル司法制度ハ從來數度ノ改革ヲ見其ノ變遷ノ數數シトセサルニ草創過度ノ際ニ於テハ其ノ改善ノ方法トシテ亦止ヲ得サル所ナリトス而シテ現行ノ司法制度ハ時勢ニ適應セル最善ノ制度ナルヲ以テ今後特異ノ事情發生セサル限りハ努メテ其ノ變革ヲ避ケ長ク之ヲ持續スルノ方針ナリ然ルニ世間或ハ二審制度ヲ以テ優レリト爲シ制度ノ變革ヲ唱フル者ナキニ非サルカ如キ之ヲ理論及實際ヨリ觀察スルニ今日ノ如ク第一審及第二審ハ事實及法律ニ別者ニ互

リ慎重ノ審理ヲ爲シ更ニ上告審ニ專ラ法律適用ノ當
否ヲ判斷セシムル三審制度ハ事實ノ認定及法律ノ適
用ニ違算過誤ナキヲ期スルノ目的ニ出テ彼ノ畏ルヘ
キ裁判ヲ避ケ司法ノ公平ト適正トヲ保維セムトスル
ニ最モ適當ノ途ナリトス之ヲ二審制度ニ變更セムト
スルノ説ハ世運ノ進展ニ逆行シ人民ノ保護ヲ輕ムス
ルモノニシテ穩當ノ見解ト謂フヘカラス且ニ審制度
ヲ採用スルトキハ最高裁判所タル高等法院ヲ廢スル
ヲ以テ是レリト也ス尙現在ノ三覆審法院中其ノ二箇
ヲ廢シテ其ノ一箇ノミヲ存置セサルハカラスナルニ至

ルヘシ蓋シ同一ノ法令ヲ施行スル地域ニ於テハ最高
裁判所ハ唯一無二ナラサルヘカラス然ラサレハ法令
解釋ノ統一ヲ期スヘカラスハナリ惟テニ現制度ニ
於テ地方法院ハ内地ノ地方裁判所カ區裁判所ノ裁判
ニ對スル上訴事件ヲモ取扱フモノト異ナリ單ニ第一
審事件ノミヲ取扱フモノト過キスシテ第二審事件ハ總
テ覆審法院ノ管轄ニ屬スルヲ以テ其ノ管轄區域ハ甚
タ廣ク人民ノ不便尠カラサルカ如キハ現制度ノ弱點
トスル処ナリ案情既ニ此ノ如シ況ヤ現制度ヲ變更シ
更ニ第二審裁判所ノ數ヲ一箇ト為スカ如キハ土地廣

ク人口多ク訴訟事件ハ逐年増加ヲ示シ且交通機關ノ
未タ完備セサル朝鮮ニ於テハ官民共ニ堪ヘ得ル所ニ
非サルナリ加之三審制度ノ廢止ハ領事裁判權消滅前
後ノ事情ニ照シ最モ不可ナルモノアリ抑朝鮮ニ於ケ
ル領事裁判權ノ消滅ニ關シ諸外國カ何等異議ヲ挾マ
サリシハ是レ全ク帝國政府カ保護政治施行以來銳意
朝鮮ニ於ケル司法制度ノ改善ニ努メ範ヲ内地ノ制ニ
採リ三審制度ヲ確立シ裁判ノ公正適實ヲ致シタルカ
為大ニ内外ノ信賴ヲ博シタルニ因ルモノニシテ當時
帝國政府ハ諸外國ニ對シ長ク現制度ヲ存續シ之カ變

更ニ為ササルヘキヲ聲明シタルコト内外ノ耳目ニ新
ナル所ナリ今ニシテ三審制度改ムルカ如キコトアラ
ムカ為ニ帝國政府ハ信ヲ例國ニ失ヒ國際上ノ情誼ヲ
傷クルニ至ルノミナラス司法権信賴ノ度ヲ減シ延テ
生命財産ノ保護ニ疑懼ノ念ヲ懷カシムルニ至ルヘシ
是レ永ク現制ヲ存シ漫ニ之カ變革ヲ容ササル所以ナ
リ

秋

第十四章 水產

第一節 水產行政ニ関スル從來ノ方針

朝鮮ノ沿海線ハ其ノ延長實ニ六千餘海里ヲ有シ魚
ハ海藻ニ富メリト雖沿海水產業ハ未開幼稚ノ状態
ニ在リテ其ノ產額亦隨テ寡少ナリ仍テ從來斯業ノ
發達產額ノ増大ヲ期シ大体左ノ方針ノ下ニ水產ニ
関スル施設經營ヲ進メ来リタリ

第一漁具漁船及漁法ノ改良進步ヲ圖リ漁業者ノ
智識技能ヲ發達セシムルコト

第二水產ニ関スル調査及試験ヲ行ヒ遺利ノ開發

ニ努ムルコト

第三漁業ノ秩序ヲ維持シ之ヲ保護シ圖ルコト

第四水産物ノ蕃殖保護ヲ圖ルコト

第五内地人漁業者ノ移住及内鮮人斯業者間ノ統

一融和ヲ圖ルコト

第六漁業者ノ共同利益ヲ増進シ漁村ノ維持發達ヲ

圖ルコト

第七水産業者ノ共同利益ノ増進ヲ圖ルコト

第八漁船避難場ヲ修築シ漁業ノ安全ヲ圖ルコト

第九水産物ノ處理販賣方法ノ改善ト談機關ノ

普及發達ヲ圖ルコト

第十漁業者ノ副業及貯蓄ヲ獎勵スルコト

第十一水産物ノ輸移入ヲ防キ其ノ輸移出ヲ圖ルコト

右ノ方針ニ基ケル施設經營ニ付テハ自ラ緩急ノ順序ナキヲ得ス前記土項中第三及第四ニ基ク水産行政ニ關スル法規ノ整備及漁業出願ノ處分ノ如クハ最緊急ニ屬スル事項ナルヲ以テ從來ハ主トシテ此種消極的施設ニ其ノ力ヲ傾注シ其ノ他ノ積極的經營ニ至テハ未タ甚タ周カラスト雖水産業全般ニ於ケル發達進步ノ實況ヨリ見ルトキハ

從來ノ施設經營尙其ノ效果ノ著シキヲ知ルヘシ而
シテ其ノ實蹟ハ左ニ叙述スルカ如シ

第二節 水産行政ニ関スル施設經營ノ成績

第一 漁具漁船及漁法ノ改良進歩ヲ圖リ漁業者ノ智

識技能ヲ發達セラルコト

朝鮮ノ水産業ノ發達ヲ圖ルハ本項ノ施設ヲ以テ最
適切ナリト認メ沿海各道ヲ以テ地方費及臨時恩賜
金ノ事業トシテ其ノ改良獎勵ニ努メシメ地方費ニ
對シテ毎年國庫補助金ヲ交付シタリ即チ關係各
道ノ事業ノ種類ヲ定メ延繩一本釣、鰻鱺網、刺網、
手繰網、如キ簡易ニシテ且有利ナル漁具ニ依ル漁
法及是等漁具ノ製作、海苔ノ養殖又ハ製造魚

類ノ塩藏又ハ乾製方法等ノ傳習ヲ行ヒ又一般水産
關スル臨時ノ講習講話簡易ナル學術教授若ハ水産
養殖改良漁法ノ試験ヲ實施シ尙改良漁具漁船
購入者ニ對スル補助金ノ交付若ハ是等現品又ハ製
作材料ノ無償交付轉^{轉輸}出向塩鯖又ハ罐詰等ノ製造
業者ニ對スル補助金ノ交付等ヲ施行シ又水産傳
習終了者ニ對シテハ漁具漁船ノ購入費ヲ補助シ
若ハ漁具漁船又ハ其ノ製作用具ヲ給付シ以テ地方
斯業者ノ模範タルヲ期セシメタリ之ヲ爲未開幼稚
朝鮮人漁業ヲ漸次改良發達ノ氣運ヲ促進シ内地

式漁具漁法ニ依ル者年ト共ニ増加シ漸次其ノ所得ヲ加ヘ南鮮一部地方ノ如キハ朝鮮人漁夫ノ漁獲成績内地人漁夫ニ比シ多ク遜色ヲ見サルニ至レリ

地方水産業改良奨励ノ爲ニスル各道地方費及臨時恩賜金ノ歳出豫算及朝鮮人漁業者ノ使用セル内地式漁具漁船ノ種類數量ヲ示セハ左ノ如シ

地方費及臨時恩賜金水産業改良奨励事業費豫算

年次	地方費豫算額	恩賜金豫算額	計	地方費ニ対スル國庫補助金
明治四十四年度	二五九八四 _円	二八〇〇〇 _円	五三九八四 _円	一〇、七五〇 _円
大正元年度	三六、二〇九	二三、五〇六	五九、七一五	八、七五〇 _円

大正二年度

大正三年度

三六六四五

四〇三八四

二八九二四

三一八四五

六一五六九

七二二二九

一〇、〇〇〇

一〇、〇〇〇

朝鮮人漁業者使用内地式漁具、種類及數量

種類

數量

種類

數量

鯖一本釣

三七二〇本

地曳網

一五八六統

鯖延縄

一四〇三鉢

鯛延縄

一一九五鉢

投網

九一二統

鯛一本釣

七九九本

鰻鰻網

五〇八

鯖流網

四四五統

鯖延縄

三七五鉢

漕網

三二二

壺網

一〇五統

大敷網

八九

鰭流網
 鰻巾着網
 鰻揚繰網

三
 一、二、四

潛水器
 台網
 以上ニ討スル日本
 型漁網

一九四六
 一統四台

第二水産ニ関スル調査及試験ヲ行ヒ遺利ノ開発ニ努ムルコト
 朝鮮海ニ於ケル水棲物ノ種類分布ノ状態及習性等ヲ
 調査シ有望ナル水族ニ対スル漁法、漁獲物ノ處理及人
 工生産増殖ノ方法ヲ研究シ遺利ノ開発ト斯業ノ發
 達ニ資セリトスルノ目的ヲ以テ明治四十五年度以降水
 産調査及試験ヲ行ヒタリ

水産調査ニ関シテハ東京帝國大學農科大學ニ囑託シ明治四十四年ニハ慶尚南道ヨリ咸鏡北道ニ至ル東海岸一帯大正二年ニハ京畿道仁川ヨリ平安北道鴨綠江ニ至ル一帯ノ沿海ニ於ケル水棲物ノ分布ニ付實地調査ヲ行ヒ又農商務省水産講習所ト聯絡シ大正元年十二月ヨリ大正二年三月ニ亘リ釜山近海ニ於ケル海洋ト朝鮮海ノ重要水産物タル鰯トノ移動關係ニ付調査ヲ施行シ共ニ發明スル所數カラ

ス
水産試験ハ漁撈製造及養殖ノ三部ニ分テ施行

ハ漁撈試験ハ更ニ西海岸、東海岸、南海岸ノ三方面
ニ分テ西海岸ニ於テハ蝦、蟹、石首魚、太刀魚、東海岸ニ於
テハ蟹、鯖、桑魚、鰻、南海岸ニ於テハ大鰻ノ漁場ノ
探検及漁法ノ試験ヲ行フ製造ハ主トシテ寒天製造
ニ力ヲ注ク、外玉玢貝、煮乾、乾蝦及鰯ノ製造ヲ研
究シ養殖ハ鮭、人工孵化試験ヲ行フ今之等試験事
項ニ付其ノ施行方法及成績ヲ詳述セハ左ノ如シ

漁撈試験

一 蝦漁撈試験 蝦族ハ朝鮮、西海岸ニ饒産スルモ
内鮮人共ニ其ノ漁場及漁法ニ精カラス加之同治

岸ニ於テ嘗テ支那密漁者ノ使用シタル支那式
漁法ハ徒ニ多大ノ勞力ヲ要シ到底内鮮人漁業
者ノ操作ニ適セサルヲ以テ該魚族ノ主要產地タル
西朝鮮湾内ニ於ケル清川江大同江及鴨綠江河
口沿岸及其ノ沖合ニ於テ新式漁具ヲ用ヒ大正元
年度及大正二年度ノ二ヶ年度間漁場ノ探換及
漁法ノ試験ヲ行ヒ數多ノ好漁場ヲ發見スルト共
ニ鯨鯨網ヲ用ユル新漁法、支那式漁法ニ比シ
遙ニ有利ナルヲ以テ實験シ斯業者ニ好模範
ヲ示シタル結果トシテ大正二年ノ漁期ニハ新

漁法ニ依り出漁スルモノ三十餘艘大正三年、漁期ニ
更ニ七十餘艘ニ増加シ將來益該漁業發達ノ趨勢
ヲ示セルヲ以テ該方面ノ試験ハ大正二年度限り打切
り大正三年度ハ黃海道以南全羅南道水浦附近
ニ於ケル一帯ノ沿海ニ於テ他ノ漁撈試験ヲ兼ネ
前年度來ノ試験ヲ續行シツ、アリ

二 鰯^{ササギ}、石首魚^{イサナ}、太刀魚^{タチウオ}漁撈試験 鰯モ亦西海岸ニ多

産スルモ嘗テ支那人、密漁セルモノアルノ外内鮮人

共ニ其ノ漁場及漁法ニ熟セザルヲ以テ之ヲ明ニシテ
該^{(漁業、開發ヲ圖リ又石首魚及太刀魚ハ現南海岸ニ於ケル重要水産物ニモ現在、漁場外捕}漁場少カウサレ見込アルヲ以テ之ヲ開拓シテ其

ノ産額ヲ増大ナラシムトシ蝦ノ試験ト共ニ黄海
道以南本浦附近ニ至ル一帯ノ沿海ニ於テ大正三
年度ヨリ該魚族ノ漁場探検漁法ノ試験ヲ行
フ着手日尚浅ク成績未知ニ属スルモ京畿道沖
合長峰水道及牙山湾等ニ於テ石首魚、鮓、太
刀魚、^{フナ}鯛等ノ好漁場ヲ発見シ又蘇魚^{ソウイ}ノ将来有
望ナル漁獲物ノ一タルヲ併セ発見セリ

三 蟹漁撈試験 いばら蟹ハ罐詰トシテ貿易品中重
要視セラル朝鮮海ニ於ケル此種ノ蟹ハ東海岸ニ
棲息スルモ其ノ漁場及漁獲數量等未ク不明ニ属

スルヲ以テ全方面ニ於ケル該魚族ノ棲息状態ヲ詳
ニセムトシ先ヅ慶尚南道ノ一部慶尚北道及江原道ノ
沿海ニ於テ大正二年度及大正三年度ノ二ヶ年間本
試験ヲ施行シ將來漸次北鮮沿海ニ及ホサムトス而シ
テ此ノ兩年度ノ試験ニ依リ該方面ニ於ケル蟹ノ
出来ノ方向ニ付畧之ヲ認知スルヲ得タルモ未タ顯
著ナル事績ヲ舉グルニ至ラス

四 鯖手釣法試験 東海岸ニ於ケル現在ノ鯖漁法ハ擬
餌鉤ニ依ル曳縄釣ニシテ朝夕二回ノ短時間ノ操
業ニ限ラルルヲ以テ日中手釣法ヲ行ヒ同一漁場

ヲ有利ニ使用セシメトシ大正二年度ニ於テ鯉魚
撈試験ノ傍ニ試験ヲ行ヒ地方漁業者ヲシテ有
利ナル一種ノ漁法ノ存在スルコトヲ認知セシムルヲ得
タリ

五 柔魚釣試験 慶尚北道及江原道近海ニ於テ夏

秋ノ交漁業少ク同方面ニ於ケル漁業者ノ苦慮スル
所タリ然ルニ八九月ノ頃同近海ニ柔魚ノ来游ヲ
認め(鬱陵島ニ於テハ毎年十萬円以上ノ漁獲アリ)江原
道ニ於テ其ノ漁法ヲ傳習シツ、アルモ未タ普及セス
慶尚北道沿海ノ如キハ未タ全ク行レス仍テ該魚族ノ漁

利ヲ明ニシ有利ナル新漁業ヲ起サシカ爲ニ大正三年八月中
旬ヨリ慶尚北道以北ノ沿海ニ於テ本試験ヲ施行セハトス
六夏鯨ノ棲息探検 鯨ハ慶尚北道沿海ニ於テ冬季盛
ニ漁獲セラレ東海岸ニ於ケル重要水産物ノ一タリ而シテ
該道沖合ニハ夏季尚之カ棲息ヲ認ムルヲ以テ其ノ
状態ヲ明ニスルノ必要ヲ認メ大正三年度ヨリ夏鯨ノ
棲息探検ニ着手ス現在ノ成績ニ於テハ該沿海沖
合ニ於テ夏季鯨ノ棲息ヲ認ムルヲ得タリシモ其
ノ疎密及分布ノ區域其他營業關係等ニ就テハ
目下調査中ニ屬セリ

七 大鰻棲息探候 大鰻ハ近ク山口縣及対州ニ多
産ニ朝鮮ニモ移入セラル然ニ朝鮮ニ於テハ小鰻ノ
ニ饒産モ大鰻ニ至テハ從來之レカ漁獲ヲ見ス近
来慶尚南道沖合ニ於テ該魚族ノ他ノ魚族ニ混
漁サルモアルヲ以テ大正三年十月下旬ヨリ之レカ
来游ノ状態ヲ探候セムトス

製造試験

一 寒天製造試験 寒天製造原料タル石花菜ハ
朝鮮ニ於ケル重要海産物ノ一ナルニ拘ハラズ從來
原藻ノ儘悉ク内地ニ移出セラレ他チ寒天ノ製

1 造ニ着手シタル者ナキヲ以テ朝鮮ニ於テ之ヲ製造
シ製品トシテ進ンテ大需要地タル支那及歐州ニ輸
出スルノ途ヲ講スルハ朝鮮産業ノ興衰ニ資スル所
大ナルヲ認メ大正元年慶尚北道大邱府管内ニ寒天
製造試験場ヲ設置シ今年度ニ於テ試製品七百二十
五斤ヲ得之ヲ大邱市場ニ送致試賣シタルニ其ノ品質
價格内地製品ニ比シテ遜色ナキコトヲ認メ大正二年
度ニ於テ更ニ全羅南道長城郡管内ニ試験場一
個所ヲ増設シ前年度ヨリ一層優良ナル寒天ヲ
製造シ朝鮮ノ氣候カ寒天ノ製造ニ好適ニ又其ノ

水質ノ原簿ノ漂白ニ決シテ不適當ナラサルコトヲ
一般ニ確認セシメ既ニ大正二年ニハ民間實業家ニ於
テ慶尚南道密陽ニ大規模ノ寒天製造所ヲ起シ
相當ノ成績ヲ収メ更ニ本年他ニ一箇所ノ起業ヲ
計畫スル者アルニ至レリ

玉珧貝ノ製造試験 玉珧貝ハ全羅南道麗水
海峽ニ饒産シ其ノ貝柱ノ乾製品ハ支那輸出品ト
シテ有望ナルニ拘ルラス從來製法完カラス利用ノ
途不充分ナルヲ以テ大正三年五月煮乾製造ヲ試
ミ好成績ヲ収メタリ其ノ試験前ノ見本品ハ長崎

市場ノ相場百斤三十圓乃至三十五圓ニシテ賣行
接々シカラサリシモ試験後ノ見本品ハ今市場ニ於
テ百斤四十五圓ノ付値アリテ頗ニ需要ヲ増加セリ

三 蝦製造試験 蝦ノ漁撈試験ノ效果ヲ完ラシ
ノムカ爲支那輸出向トシテ適當ナル煮乾蝦ノ製
造ヲ大正三年九月施行ノ豫定ナリ

四 鰯製造試験 鰯魚ノ漁撈試験ニ伴フモノニシテ支
那輸出向適當品ヲ製造セリトシ大正三年八月中旬
ヨリ着手ノ豫定ナリ

養殖試験

一 鮭人工孵化試験 朝鮮東海岸一帯ハ鮭ノ棲息

ニ好適スルニ拘ラス積年ノ酷漁濫獲ト山林ノ荒
廢ニ基リ河流ノ變態トニ因リ種族ノ減滅ヲ來セ
タル結果現時ニ於テ相當漁獲アルハ僅ニ豆満江
及龍興江ノ一部ニ止マリ而モ近年漁獲高ヲ減
少スルノ傾向アルヲ以テ之カ蕃殖ヲ保護スルト
同時ニ一面人工ニ依リテ増殖ヲ圖ルノ必要アルヲ認
メ咸鏡南道沿岸ニ於テ鮭人工孵化試験場ヲ設
ケ大正元年度ニ於テハ鮭ノ種卵一百万粒ヲ孵化シ
其ノ成育稚兒八十七万餘尾ヲ同道文川江ニ放

流シ大正二年度ニ於テハ種卵三百六万餘粒ヲ孵化シ
其ノ成育稚児二百六十九万餘尾ヲ放流ス種卵ノ孵
化稚児ノ成育共ニ成績良好ナルノミナラス水産業
改良施設ニ對スル地方民心ニ多大ノ好影響ヲ與ヘ

ナリ

第三 漁業ノ秩序ヲ維持シ之レカ保護ヲ圖ルコト

漁業ノ秩序ヲ維持シ之ヲ保護スルハ漁業ノ利益ヲ

確保シ漁業者ノ生業ヲ安全ナラシムルニ在リ日韓國

政府ニ於テハ此ノ目的ヲ爲ニ統監府ノ指導ノ下ニ漁

業法及附屬法規ヲ施行アリシト雖時世ノ變遷ニ依

リ實際・適應セサル、重リ且取扱上不備、並數カ所
ルヲ以テ之カ改正ノ必要ヲ認メ明治四十四年六月制
令第六號、以テ新ニ漁業令ヲ制定公布シ同時
ニ府令ヲ以テ漁業令施行規則其ノ他ノ附屬法規ヲ
發布シ明治四十五年四月一日ヨリ施行シタリ新法令
ニ於テハ免許漁業中特ニ水面專用免許、制ヲ設ケ
テ漁村ノ維持經營、資ニ供セシメ又免許漁場ノ隣
接水面ニ於テ漁業ノ妨害トナルヘキ行為ヲ禁止又ハ制
限シ漁業ノ秩序公益ヲ一層確實ニ保持シ又許可
漁業中特定ノ種類ヲ除ク、外ハ概テ其ノ處理ヲ地方

長官ノ權限ニ移シ以テ漁政ノ運用ヲ便ナラシメタリ

免許漁業ノ出願処分ニ独リ漁業者ノ利害休戚ニ關スルノミナラス公益上至大ノ關係ヲ有スルヲ以テ特ニ慎重ノ審議ヲ重ネ左ノ方針ヲ以テ處分シ来レリ

一專ラ慣行ヲ重シ從來占用セル漁場ハ其ノ慣行者

ニ免許スルコト

ニ土着漁民ノ生計及授産上將來必要ト認ムル漁場

ハ專ラ當該漁民ニ免許シ或ハ之ヲ留保シ漫ニ

他ノ出願者ニ免許セサルコト

三個人独占ノ弊ヲ生セサラシムルカ爲同一人ノ出願ニ

係に長距離ニ亘ル数多、漁場、慣行又ハ既得
權利ヲ有スルモノ、外ハ之ヲ免許セサルコト

四 慣行ナキ漁場ニシテ数多ノ競願者アル場合ニ在
リテハ競願者中資格ノ優越ナルモノニ免許ス
ルカ又ハ合同若クハ使用ノ順序ヲ定ムル等將來
ノ紛争ヲ避クルニ適切ナル方法ヲ定メ之ヲ
處分スルコト

五 府縣水産組合其他、團體的組織ニ依ルモノ、出
願ト個人出願ト、競願アル場合ノ如キハ團體的組
織者ヲ以テ優越ト認レルコト

大從來村民共同シテ從事セル漁業又ハ海藻採収ノ
如キ、其ノ地元漁民一同ニ免許スルノ趣旨ヲ採リ
一部漁民ノ独占ヲ排スルコト

明治四十二年旧漁業法施行當初ニ於テハ内鮮人
漁業出願者ノ多クハ漁業權ノ獲得ニ專ニシテ自營
ノ觀念ニ乏シク一敏ニ投機的傾向ヲ示セシト雖爾後
其ノ處分ヲ前記方針ノ下ニ實行シタル以來不着實
ナル出願者ハ年ト共ニ減少シ漁業ノ經營漸次着實
トナレリ

明治四十二年以降ノ漁業ノ免許出願及処分件數左ノ如シ

年次	出願件数				免許件数			
	内地人	朝鮮人	内鮮人共同	計	内地人	朝鮮人	内鮮人共同	計
明治四十二年	三二七一	二二八九	四二三	五九八三	五〇	三四	八〇	一六四
左四十二年	一〇七二	二一六一	三七一	三六四四	二〇二	三二六	五二	五七〇
左四十四年	三八五	七四二	七二	六一九九	三一	八三一	二一	一五三
大正元年	五九〇	七九三	四三	一四二六	四六〇	五九三	二五	一〇七八
左二年	五〇〇	一三八五	五二	一九三七	四二五	一四九九	五九	一九六三
左三年	二〇四	六八八	二七	八四九	八九	三三二	一五	四二六
青未日迄	六〇二二	七九八八	九八八	一四九九八	一五三七	三九七五	二三三	六三四四
現在								

備考出願件数中青未現在未処分件数千六百五十三件ニシテ他ノ

八十一件ハ不免許却下等ニ属スルモノトス

水産業、保護上最も重要ナルハ、有毒物爆発
物ノ使用禁止トヨリル漁業ノ制限支那密漁
船ノ掃蕩トス。韓國政府時代、於テハ朝鮮
西海岸・多年支那密漁船ノ出沒スルアリ
蝦、鱈、石首魚、太刀魚等ノ密漁ヲ事トシ朝
鮮漁業者ノ利権ヲ侵害スルコト甚カクサリ
シカ。明治四十五年以來特、其ノ警戒及取締
ヲ勵行セシ結果殆ント其ノ跡ヲ絶ツ。至レリ
ト雖近時内地人漁業者ニシテ名ヲ支那漁夫ノ産
備、藉リ支那密漁船ヲ朝鮮沿海ニ誘致シ

不正、利ヲ貪ラムトスル者アルヲ以テ嚴ニ戒飾ヲ
加ヘツ、アリ

第四水産物、蕃殖保護ヲ圖ルコト

水産物、蕃殖保護ヲ圖ル爲メ漁業令ト同時ニ府令
ヲ以テ漁業取締規則ヲ發布シ漁獲醜漁ニ涉
ル漁具漁法ヲ禁シ重要漁獲物ニ付漁場漁期
及禁ル休長ニ一定ノ制限ヲ加ヘ又有毒物爆発物
使用ヲ禁シトローニ漁業及捕鯨業ニ對シテ特
ニ其ノ取締ヲ嚴ニセリ

有毒物爆発物ノ使用漁業ニ魚族ノ蕃殖ニ妨害

ヲ及ボスノ甚大ナルヲ以テ、トロール漁業ト共ニ嚴シク
ヲ取締。明治四十四年ニ海上警備機關ヲ擴張シ翌
四十五年ニ漁業取締規則ヲ改正シ違反者ノ制
裁ヲ重クシ更ニ大正五年一月重テ之ヲ改正シ一層
其ノ制裁ヲ重クセリ

トロール漁業ニ朝鮮内ニ於テ一切之ヲ許可セサ
ルノ方針ヲ採レルニ農商務省ノ許可ヲ受ケタル
トロール漁船、朝鮮、禁止區域ヲ侵入シ沿岸漁民
ノ操業ヲ妨グルノミナラス漁場ヲ攪亂シ産卵著
殖ヲ害スルコト甚レキヲ以テ大正元年及大正二年

ニ於テ漁業取締規則ヲ改正シテ禁止區域ヲ擴
張變更シ一方農商務省ト交渉シ從來許可シタ
ルトモルル船ニ對シ操業區域中朝鮮海ヲ削除
シ朝鮮海ニ於ケル禁止區域ヲ遵守セシムヘキ
ヲ命セシメ尚特ニ同省ノ取締船ヲ以テ主トシテ
朝鮮海ノ監視ニ當ラシムコトトセリ如斯農商
務省ト協力取締ヲ勵行セシ結果内地トローニ
漁船ハ朝鮮海禁漁區域ヲ侵犯スルモノ著シク
其ノ數ヲ減スルニ至リ

捕鯨業ハ一時捕鯨會社ノ増設ト決メ漸ク濫獲

業ヲ則致シ延テ鯨族ノ蕃殖ヲ阻礙スルノ傾向アリ
レシヲ以テ明治四十年旧韓國政府ニ於テ捕鯨
業管理法ヲ發布シ漁期根據地漁法等ヲ制
限シテ相當ノ取締ヲ加ヘリト雖未ク完ナリサルヲ
以テ漁業令及漁業取締規則中特ニ之カ取締ノ
規定ヲ設ケ又別ニ捕鯨船數ヲ制限シ且既許可
當業者ノ外新ニ之ヲ許可セサルノ方針ヲ採レリ現
在捕鯨業ヲ許可セルニ東洋捕鯨株式會社及日
韓捕鯨株式會社ノ二會社ニシテ其ノ根據地ハ
五個所捕鯨船數ハ十二隻ナリトス

人工蕃殖方法ニ至リテ、前述ノ鮭、人工孵化試験ヲ
始トシ各道地方費經營、海苔、蛸、蛸、蛸、蛸等ノ
養殖試験アリ又民間ニ放テモ是等海藻魚介、數萬
鰯、金魚等ノ養殖行ハル

第五内地漁業者ノ移住及内鮮斯業者ノ統一融
和ヲ圖ルコト

漁業令及附屬法規ノ施行ニ依リ内地漁業者ノ定
着移住及漁村經營ノ便宜ヲ圖リ又朝鮮水産
組合ヲシテ相當ノ設備ヲナシタル結果漸次其
發展ヲ促進シ大正九年十月末ニ於ケル朝鮮沿岸

移住内地漁業者ノ概數ハ戸數二千六百十八人、人口
 七千百十八人ニシテ、其ノ明治四十二年以降ハ發展ノ状
 勢及各道分布ノ狀況左ノ如シ

移住内地漁業者年別戸口數

年

別

戸數

人口

備

考

明治四十二年

一三二戸

四九四九人

今四十三年

一六五六

六二七七

今四十四年

二四八六

九二三六

大正元年

二六一八

七一一〇

内地漁業者各道移住狀況

前年ニ比シ人口減少スルハ過期
 ヲ過ヒ轉住スルヲ扣除シ定着
 移住者ノミヲ掲記シタルニ依ル

道名

戸数

人口

道名

戸数

人口

京畿道

六〇戸

一八二

黄海道

二戸

八四

忠清南道

四七

一〇二

平安南道

三五

一四五

全羅北道

三二六

三二六

平安北道

一二

五八

全羅南道

一〇九

四〇〇

江原道

七

一九

慶尚北道

二六六

七二五

咸鏡南道

七一

七五

慶尚南道

一六三六

四九二二

咸鏡北道

二七

七二

併合前、於ケル内鮮漢業者、關係ハ動モスルハ

相疎隔シ兩者、融合頗ル困難ナリシモ併合後

革新、氣運ハ僻陬ノ漁村ニ至ルマデ普及シ蒙

昧ナル漁民ニ至ルヲ克ク新政ノ趣旨ヲ了解シ内
鮮漁業者漸次相接近融和ノ傾向ヲ示スニ至リ
殊ニ新漁業法令ノ施行朝鮮水産組合ノ組織
変更等ニ依リ直接兩者ノ聯絡提携ヲ促進セリ
第六漁業者ノ共同利益ヲ増進シ漁村ノ維持發

達ヲ圖ルコト

漁業者協同ノ力ニ依テ相互ノ利益ヲ増進シ漁
村ノ經營維持ヲ全カラシムル爲漁業令ヲ以テ一
定ノ地區内ニ居住スル漁業者ヲシテ漁業組合ヲ
設立スルコトヲ得シメ且其ノ法人格ヲ認メ漁業
二〇

組合規則ヲ發布シテ其ノ設立、管理、監督其
ノ他必要ノ事項ニ関スル詳細ノ事項ヲ規定ヤリ
而シテ組合ノ設立、其ノ成功ヲ期シ得ヘキ望アル
モノ又ハ漁業免許ノ必要上特ニ設立ヲ要スル
漁村ニ限り之ヲ許可シ堅實穩健ナル發達ヲ
遂ケシムルノ方針ヲ採リ豫メ濫設ノ弊ナカラ
ムコトヲ期ヤリ漁業組合ノ設立ヲ許可セルモノ
其ノ數三十一個所ナリトス

(大正三年
有十百現在)

第七 水産業者ノ共同利益ノ増進ヲ圖ルコト
水産業ノ改良發達、水産動植物ノ蕃殖保護其

ノ他水産業ニ関シ共同利益ノ増進ヲ期圖セシムルノ
目的ヲ以テ漁業令中漁業者又ハ水産物ノ製造若
ハ販賣ヲ業トスル者ヲシテ水産組合ヲ設クルコト
ヲ得セシメ組合ヲ法人トスルノ規定ヲ設ケ更ニ水産
組合規則ヲ發布シテ其ノ設立管理監督其他
必要ナル事項ヲ定メタリ水産組合ハ從來既ニ朝
鮮水産組合ノ設立アリ朝鮮一國ヲ組合區域トシ
内鮮人漁業者製造者ニ依リテ組織セラル朝
鮮水産組合ハ元朝鮮海水産組合ト称ス本部ヲ
釜山ニ支部又ハ出張所ヲ沿海樞要ノ地ニ置キ

必要ノ箇所ニ巡邏船ヲ配置シ朝鮮各地ニ於テ
ル水産業ノ改良發達ヲ期圖スルノ外政府ノ補助
命令ニ依リ内鮮人漁業者ニ對シ均シク漁業上ノ
保護便宜ヲ與ヘ來リタリト雖元來同組合ハ外國領
海水産組合法ニ依リ内地人ノミヲ以テ成立シタル組
合ニシテ組織ノ鮮樣併合後ノ事態ニ適合セサルモノ
アルヲ認メ漁業令及水産組合規則ノ實施ニ伴ヒ大
正元年七月組合定款ヲ改正セシメ其ノ名稱ヲ朝鮮
水産組合ト改メ内鮮人漁業者ヲ組合員トシ其ヲ取
扱フ全然同一ナラシムルト共ニ其ノ文部ヲ各道ニ置

＊出張所ヲ増設シテ業務ノ刷新擴張ヲ圖ラレ
メタリ爾來同組合ハ益各地水産業ノ改良發達ヲ圖
ルト共ニ一層力ヲ内鮮人漁業者ノ保護取締、災害
ノ救済、相互ノ融和、移住漁業ノ奨励等ニ致シ成績
見ルヘキモノアリ政府、從來ノ例ニ依リ毎年四萬
圓ノ補助金ヲ交付シ來レリ

第八漁船避難場ヲ修築シ漁業ノ安全ヲ圖ルコト
沿岸ニ漁船、避難場ヲ修築シテ漁船ノ出入碇繋ス
便ニシ風浪ノ遭難ヲ防ギ漁業者ノ生業ヲ安全ニシ漁
場ノ開拓ヲ圖ルハ水産業助長ノ一要務タリト認メ

地方ノ計劃ニ對シ緩急ヲ計リ補助施行セシムル
ノ方針ヲ採リ大正元年度以降毎年二千五百圓ヲ
地方産業補助費豫算ニ計上支出ス其ノ修築ノ
個所及補助金交付額左ノ如シ

一 全羅北道 旌青島

元忠清南道ノ管轄ニ屬シ該道地方費ヲ以テ修築
ノ補助費ハ大正元年度ニ二千五百圓大正二年度ニ一千
圓合計三千五百圓ヲ交付シ大正二年度ニ旌テ工事
完成

二 慶尚北道 盈德郡 江口港

其、他、(水産物製造業者及水産物販売業者ニ對スル補助等ニテ亦用)水産試験及地方費事業ハ既ニ記述セ

ル處、如シ

輸移出海藻ノ検査ハ大正二年ヨリ施行ス石花菜、
海藻、銀杏草等ノ海藻ハ重要輸移出海産物
タリ而シテ其ノ品質内地及臺灣ニ比シ決シテ遜色
ナキニ拘ハラズ從來採取業者及販賣業者ノ調
理不良ノ結果需要地ニ放ケル取引價格ハ内地又
ハ臺灣産ノモノニ比シ常ニ四割乃至六割ノ下位ニアル
ヲ以テ當業者間ニ行ハルノ弊習ヲ矯正シテ需要
地ニ放ケル聲價ヲ昂騰セシメシカ爲大正二年五月

海藻検査規則ヲ發布シ同年七月一日ヨリ實施セ
ル、結果其ノ移出品ハ需要地ニ於テ二割乃至四割
方價格ヲ高メ取引モ亦圓滿斂括ナルヲ得ルニ至リ
輸移出當業者ハ現在ノ海藻検査所ノ外尙其ノ増
設ヲ希望スルニ至リ延テ各漁村ニ於ケル採取業者
モ亦其ノ調製上多大ノ進歩ヲ見ルニ至レリ
水産物ノ販賣機關中最重要ナルハ魚市場ニシテ
之カ開設ハ許可ヲ要スルコトトセルモ從來ノ取引慣
習ハ動モスレハ弊害ヲ醸出スルノ虞アルヲ以テ市場
規則ヲ制定シ當業者取締リ嚴ニシ取引ノ改善ト

同時ニ其ノ設置ノ普及ヲ圖ラントシ目下審議中ニ
屬ス

僻陬島嶼又ハ販賣市場ニ遠隔ノ土地ニアル漁業
者ニ對シテハ共同販賣又ハ共同製造ヲ獎勵シ漁
業組合ノ如キハ事情ノ能ク限リ該事業ヲ經營
セシムル方針ヲ採レリ

第十 漁業者ノ副業及貯蓄ヲ獎勵スルコト
漁民ノ生計ヲ專ラ漁業ノミニ依頼スルトキハ朝
不漁ノ際ハ忽チ悲境ニ陥ルヲ以テ漁民ハ漁業ノ
傍適當ナル副業ヲ營ムヲ必要トス就中農業ハ

副業トシテ最適當ナルヲ以テ漁村ニ成ルヘク半漁半農ヲ
ラシメントス内地人漁業者ノ如キ特ニ其ノ必要ヲ認メ漁村
附近ノ國有未墾地又ハ林野ヲ貸附ケ農耕造林ヲ
獎勵セリ

農業以外ノ副業トシテハ編網、釣鉤具、製衣作、水産
物ノ製造、小穀ノ利用、繩綯、吹簫、アシペラ精麻、麻
糸ノ製造等ヲ推スヘク地方費及臨時恩賜金授産
事業トシテ之ヲ獎勵シツ、アリ

朝鮮人ニ由來貯蓄心ニ乏シク漁業者ニ至リテハ朝鮮
人共特ニ其ノ甚シキヲ見ル依テ貯蓄實行方法

トシテハ内地人ニ在リテハ日掛講又ハ頼母子講ヲ設
ケ若クハ魚市場ニ於テ賣上代金文拂、幾分ヲ積
立金ト爲サシメ朝鮮人ニ在リテハ稷又ハ組合ヲ組織
セシメ又ハ改良漁船漁具ノ給與若クハ其ノ經費補
助ニハ貯蓄ヲ條件ト爲シ或ハ水産傳習生ニ限制
スル等種々ノ方法ヲ採リ貯蓄ヲ獎勵ス而シテ鮮人
漁業者中成績ノ最モ顯著ナルハ江原道ニシテ稷
又ハ組合ノ數二百五十七、人員一万一千六百三十三人金額
四千七十二圓ニ達シ其ノ他京畿忠南兩道ニ於テ稷
又ハ獎勵會ノ組織セラレタルモノ各一、慶南ニ於テ巨

濟島外四ヶ所ノ漁業組合ニテ其ノ剩餘金百分ノ五
至六十ヲ積立金トシ全南ニテハ漁業者ヲ各郡ノ納
税組合ニ加入セシメ平北ニテハ面事務規程ヲ以テ各面
ニ契又ハ組合ヲ組織セシメ市日又ハ定日ニ於テ一戸毎
月十錢以上ノ貯蓄ヲ爲サシメツヽアリ（貯蓄調ハ大正二年
十月現狀）
第十一 水産物ノ輸移入ヲ防キ其ノ輸移出ヲ圖ル

コト

朝鮮沿岸ノ漁獲逐年其ノ額ヲ増加スト雖尚若干
水産物ノ移輸入ヲ見ル就中數量價格最多キモ
ノヲ米國産塩鯨トシ大正二年ノ輸入額千七十餘萬

斤其ノ價格四十萬四千余圓ニ上ル此ノ米國產塩鰯
朝鮮ニ於テ魚類拂底ノ時期ニ於テ極メテ廉價
ニ供給スルヲ以テ其ノ驅逐容易ナラス依テ春夏ノ候
魚類ノ豐饒ナル時期ニ於テ適當ナル製造ヲ加ヘテ
貯藏シ冬期ニ之ヲ賣出サシムルノ方法ニ付目下攻究
中ナリ其ノ他一二ノ道ニ於テ九州産大羽鰹ノ移入
ヲ試ミタムモノアリモ價格ノ点ニ於テ競争スルコト難
キカ如シ

輸移出奨勵ノ施設タル寒天製造ニ関スル事
項ハ前文述ヘタルカ如シ其ノ他塩鯖ヲ桑港ニ塩魚

ヲ哈爾賓ニ試賣シタルモ未タ十分ノ成績ヲ見ス玉
玃貝柱ノ煮乾品ニ就テハ支那駐在リ各帝國領事
ヲ以テ其ノ販路ヲ目下調査中ニ屬ス

第三節 朝鮮沿海水産業發展ノ實況

水産業ニ関スル施設經營ノ結果トシテ朝鮮ノ水産
業ハ年々顯著ナル發達ヲ遂ケツ、アリ即チ漁業ニ在
リテハ明治四十二年ニ朝鮮人ノ出漁人員七万五千六
十三人其ノ漁獲高三百六十九万三百圓ナリシモノ大
正二年ニハ出漁人員十八万七千百七十三人漁獲高六

百十八万七千五百三十八圓ニ増加シ内地人漁業ハ明治
四十二年ニ出漁人員一万五千七百五十一人漁獲高三百
五十五万二千百九十四圓ナリシモノ大正二年ニ出漁人員
二万五千五百四十人漁獲高五百九十三万四千六百五十四
圓ニ増加シ明治三十二年ニ於ケン朝鮮沿海漁獲高内
鮮人ヲ通シ七百二十四万二千四百九十四圓ナリシモノ
大正二年ニ於テハ千二百十二万二千百九十二圓ニ
増加セリ左ニ年別ニ朝鮮海漁業發展ノ概況
ヲ示サム

朝鮮沿海内鮮人漁業概況

水産物製造業ハ漁業、養魚ニ伴隨スルモノヲ

保タス其ノ統計的調査ハ明治四十四年前迄ハ之ヲ缺
 クヲ以テ詳ニスルヲ得スト雖今年以降ニ於ケル水
 産物製造高ハ著シク増進シ過去三年間ニ其ノ額
 二倍以上ニ達セルヲ見ル

水産物製造高

年 別	朝鮮人	内地人	計
明治四十四年	一五五、六六元	一一九、五六元	二六五、四九七元
大正元年	二二八、一五四	一四八、八五七	四六六、五九一
今 年	五、四九七、五六	二、一八〇、七〇八	七、六七八、二六四

更ニ水産物ノ輸移出ノ状況ヲ見ルニ明治四十五年ニ

於ハハ新場公銀百八万二千二百四十九圓ナリ一七六五年
ニ百十七万四千百八十五圓ニ達セリ

第四節水産行政ニ関スル将来ノ方針

水産行政ニ関スル将来ノ方針ニ大體ニ於テ従前ニ
異テトナキニ差向キ特ニ擴張ヲ要スヘキモノ又ハ
新ニ計畫スヘキモノナリ如シ

第一地方水産業ノ改良獎勵事業及水産調査
試験事業ヲ擴張スルコト

朝鮮ノ水産業ニ過去數年間ニ於テ著シキ發達ヲ

遂々トリト雖之ヲ内地ノ水産業ニ比較スルトキハ記
統計表ノ示スカ如ク未タ甚タ微弱ナルヲ免レス

内鮮漁業比較表

區別	沿海延長	漁業者數	漁船數	漁獲高	平均一海里ニ付		
					漁業者數	漁船數	漁獲高
朝鮮	九百三十八里	二二萬三千	一九萬六千	二六二萬五千円	五	五	一九二二
内地	一四五六六里	四萬八千	四萬八千	二二萬八千	二一九	二一九	八二二七

備考内地ノ統計ハ明治四十二年農商務省水産

統計ニ依ル

以上ノ状況ハ朝鮮海ニ於ケル水産物ノ菲薄ニ依ルヲ
示スルモノナリ。漁業ノ幼稚ニ基クハ言フ俟タズ現在朝

鮮人漁業者、使用スル漁船舊朝鮮型、モ、一万千
三百一十二隻。對シ内地型、モ、僅々二千隻ニ滿タ
ルガキ、是將來斯業、改良發達、縣地極メテ大ナ
ルモノアリ示スモノナリ而シテ之ガ改良及獎勵ニ最モ
有效ナル方法ハ地方費及臨時恩賜金經營ノ水産
獎勵事業及市府、永産調査試験ニ在リ。過去ノ
實績ヲ証スル処ナリ然レドモ事業ノ擴張ハ經費ノ
増加ヲ避クヘカラス臨時恩賜金ノ財源ハ自ラ一定ノ
限度アリ地方費モ亦財源ニ至テ菲薄ナルヲ以テ之ニ
對スル國庫補助額ヲ増加スルト同時ニ市府ノ水産

試験費モ亦々相當増額スル、必要アルヲ認ム

現在水産調査試験、爲使用セル漁船ハ肩幅九尺
内外ノ小形漁船ニシテ勞力極メテ薄弱ナリ故ニ調査
試験ヲ有效ニ施行シ兼テ漁業ノ取締其ノ他ノ
漁政事務ヲ補助スルカ爲ニ少クモ百五十噸級
以上ノ汽船ヲ備フル必要アルヲ認ム

第三既免許漁場ヲ整理シ無手續漁業者ヲ
取締ルコト

漁業ノ出願處分ハ從來ノ方針ニ準據スヘク既
免許漁場・對シテハ免許條件ノ不適當ナルヲ

地方公益ニ障礙アルモノ隣接漁場ト、區劃適當
ナラサルモノ免許ヲ受ケタル漁場外、於テ漁業ヲ爲
スモノ又ハ漁業權取得後漁業ノ經營ヲ爲ササルモ
ノ等ノ有無ヲ調査シ適當ニ之ヲ整理スルヲ要ス
交通不便ノ僻陬ノ地又ハ島嶼等ニ於テハ未ダ法規ノ
存否若ハ其ノ精神ヲ解セス不知ノ間、出願又ハ
届出ヲ爲サスレテ漁業ヲ営ムモノヤキニ非ルヲ以テ一
層法ノ周知・努力ノ此等遠方者ノ取締ヲ爲スヲ
要ス

第三内地人漁業者ノ移住ヲ奨励シ既設移住

村ノ整理振興ヲ圖ルコト

内地人漁業者ヲ移住セシメ朝鮮人漁業者ヲシテ
其ノ進歩セル漁法ヲ實際ニ同擊又ニ習熟セシムルハ
朝鮮人ノ水産業改良上效果甚ナキヲサルヲ以テ沿海各
道必要ノ地ニ内地人漁業者ヲ移住シ獎勵セシムルハトス
朝鮮海ニ於ケル漁業ノ有望ナルコトハ夙ニ内地人斯業
者間ニ喧傳セラレ日露戰役後各府縣ニ競フテ
南鮮沿岸ニ移住漁村ヲ經營シ管内漁業者ノ移
住獎勵ニ努メタルモ往々移住地又ニ移住者ヲ撰擇
シ誤リ或ハ移住地ノ經營ヲ一當利社又ニ團體等ニ

委託して、徒、會社又ハ團體ノ利用スル所トナリ或ハ移
住監督者ノ不適當ナル事、爲多クハ所期ノ成績
ヲ収メルヲ得ス中ニハ維持困難ニ至レルモノモアリ
如此ハ之ヲ成行ニ放任スルトキハ將來ニ於ケル内地
漁業者ノ移住ヲ妨グルヲ以テ其ノ施設府縣ト協
力シ撤廃併合若ハ移住者ノ更替又ハ相當ノ副業
ヲ與フル等適當ノ方法ヲ講シ將來ノ發展ヲ圖ル
ノ必要アリト認ム

第四 漁業組合ノ設置ヲ獎勵スルコト
漁村ノ經營維持ヲ完フル漁業ノ發達ヲ圖ルハ漁

業組合ヲ設立セシムルヲ以テ最モ適良ノ手段トスル
 ヲ以テ從來ノ方針ニ基キ其ノ設立ニ組合ノ基礎
 トナルヘキ漁業權ヲ附與シ組合員ヲレテ之ニ依テ
 生ズル利益ヲ享受セシメ進テ共同貯蓄、漁獲物
 共同販賣又ハ共同處理漁果、共同購入遭難者、
 共済副業、共同作業等ノ事業ヲ經營セシメントスル
 第五 小漁港及船避難場修築、進捗ヲ圖ルコト
 漁業根據地、有無ニ漁業ノ發展ヲ左右スルモノナルハ
 漁業根據地タル小漁船避難場、設備ヲ完全ニ
 シテ漁船ヲレテ漁場、往復出入疏繫及漁獲物處

理・便ナラレハルノ必要アリ而シテ漁船避難場ハ規
模ノ設備ヲ以テ足り従テ多額ノ経費ヲ要セサレハ現
在ノ如ク專ラ地方ノ事業トシテ其ノ経営ヲ獎勵シ之
ニ補助金ヲ附與スル方法ヲ採ルヲ可トスルモ現在ノ補
助豫算額ニ千五百圓ハ尠少トスルヲ以テ少クトモ
之ヲ毎年壹萬圓以上ニ増額スルヲ要シ又漁業者
カ陸揚^{陸揚物}處理シ兼テ物資ノ供給ヲ仰クヘキ小漁港
ニ至リテハ其ノ設備漁船避難場ノ如ク簡易ナル能
ハス従テ多額ノ経費ヲ要シ現ニ稟申中ノ清津港ノ
如キ其ノ規模尤モリ大ナルニ非サルモ尚約九萬圓ノ工

事業ヲ要シ一地方ノ事業トシテ到底其ノ負擔ニ堪ヘサルヲ以テ國庫ニ其ノ緩急ノ事情ヲ審査シ相當補助金ヲ交付スルノ必要アリ

第六水産物ノ製造及外國輸出ヲ奨励シ兼テ水産物ノ輸入ヲ防遏スルニ努ムルコト

朝鮮ノ水産物ハ朝鮮内ニ於ケル内地人ノ増加ト朝鮮人ノ生活状態ノ推移トニ由リ朝鮮内ノ需要ヲ増加スルノミナラス隣國支那ニ無限ノ需要アリ大正二年中ノ水産物外國輸出額十五萬七千五百十五圓ニ殆ント全部支那ニ輸出サレ尙ホ内地移出

品中乾鹹魚、乾貝、乾蝦、鱧鱒及海蔘等、多クハ
内地ヲ經由シ支那ニ輸出サルモノニシテ此等移出品、
移出總額ハ九十二萬三千七百三十五圓ニ達セリ而シテ
朝鮮海ニ於ケル水産物ハ獨リ支那ノミナラス歐米
ニ對シテモ輸出ニ適スルモノ多シ依テ本府ハ夙ニ寒天
其、他ノ製造試験ヲ爲シ當業者ヲ指導シ來レルコ
ト前述ノ如クニシテ殊ニ貝類藻類ハ其ノ天然生産ノ
豐饒ナルノミナラス沿岸到ル処人ニ増殖ニ適スルヲ
以テ之カ養殖ヲ獎勵シ魚介海藻ノ製造輸出ヲ奨
勵セハトス蓋シ海産蔘、寒天、鰯、乾貝類、塩乾魚

貝類罐詰、蝦罐詰等、將來有望ナル輸出品タルヲ
疑ハス

朝鮮ニ於ケル水産物ノ輸移入品中最モ注目スヘキ
ハ米國産塩鯿ニシテ其ノ輸入状況ハ前述ノ如クニシテ
之カ防遏ヲ圖ル爲ニハ大羽鰻ノ移入等從來採レル
手段ニ付更ニ研究ノ歩ヲ進ムルノ外米鯿ノ主ナ
ル需要地タル西北鮮沿海ニ於テ冬期漁撈試験
ヲ行ヒ鮮人ノ嗜好スル鱈、鯿等、漁場ノ探換漁
獲方法ノ調査ヲ爲サントス

第七 海藻検査所ヲ増加シ並ニ海産肥料検査所

施行スルコト

海藻検査ノ成績良好ナルコト前述ノ如ク獨リ需要地ニ於ケル聲價ヲ高メ移出額ヲ増大セルノミナラス原產地ニ於ケル當業者ノ注意ヲ喚起シ其ノ採収數量漸ク増加シ現在ノ検査所四ヶ所ニテハ仁川以北ニ於ケル當業者ノ不便少キカラサルヲ以テ大岳年度ニ於テハ鎮南浦稅關ヲ海藻検査所ニ加ヘムコトヲ要ス

朝鮮ニ於ケル鰻ノ採粕乾鰻其ノ他ノ海産肥料ノ大正二年ノ輸移出額ハ一千二百二十五萬五千三百斤其ノ價格二十三萬七千九百十七圓ニ達シ輸移出海産物

中重要ノ地位ヲ占ム然ルニ年々粗製濫造ニ流シ需
要地ニ於ケル聲價ヲ低下セシムテ輸移出海藻
同様其ノ輸移出品ニ對シ検査ヲ施行スルノ必要
アリ尚ホ畜業者ニ於テモ海藻検査規則施行ノ
成績ニ鑑ミ海産肥料ノ検査ヲ希望セリ
第ニ中小漁業者保護ノ爲漁業組合ニ對シ特殊
金融ノ途ヲ啓クコト

中小漁業者ニ對シ特殊金融ノ途ヲ啓クハ漁業ノ
發展上最モ必要ナリ故ニ農業者ニ對スル地方金
融組合ノ制度ニ倣ヒ中小漁業者ノ爲漁業組合ニ

對シ農工銀行等ヨリ特殊金融ノ途ヲ啓クコトヲ要ス

第九 水産試験場及講習所ヲ設置スルコト

水産ノ關スル調査及試験事業ハ本府職員中練リ合
セ之。當ルヲ以テ勢ニ事業ニ專ヤルコトヲ得ス時ニ或
ハ統一ヲ缺キ試験施行上不便歟カラヌ水産基序
調査及製造試験ノ如キ特ニ然ルヲ覺ユルニ從來財
政上ノ理由ニ依リ未タ水産試験場ノ設置ヲ見ルニ
至ラサルハ甚タ遺憾トスル所タリ水産試験事業
擴張ノ必要ハ前述ノ如シ從テ獨立シタル試験場ヲ
設置スルハ其ノ試験ヲシテ最有効ナラシムル所以

す

又主として朝鮮人ヲ收容スル目的ヲ以テ簡易ナル水産講習所ヲ設クルノ必要ヲ認ム講習科目ハ漁撈製造及養殖ノ實地ヲ授クルヲ主眼トシ兼テ水産ニ關スル學術的智識ノ大要ヲ修得セシムヘシ現在一エノ道ニ於テ漁撈製造等傳習ノ傍簡易ナル學術教授ヲナスモノアリト雖傳習ノ事項狹ク且ソ餘リニ授産的ニシテ大体ノ目的ヲ達シ難キニ似タリ講習生ハ廣ク沿海各道ヨリ撰擇推薦セシメ終了後ハ其ノ管内ノ水產業者間ニ於ケル先覺者トシテ一般當業者ノ

指導者トシテハ、現今尙ホ幼稚ナル朝鮮ノ水産業
ヲ發達セシムルニ最必要ナル施設ナリト認ム而シテ水
産試験場ト水産講習所トハ各別ニ設立スルヲ妨ケ
ストスルモ可成兩者ヲ併置スルヲ利便ト認ム



第七章 通信行政

第一節 通信事業

通信事業中最も重要、地歩ヲ占ムル通信事業ハ其ノ本
 來ノ目的固ヨリ公衆ノ利便ヲ期圖スルニ在ルヲ以テ此ノ
 目的ノ遂行ニ對シ幾多ノ經費ヲ要スルハ已ムヲ得ル所
 ナリト雖其ノ經營ノ精神ニ於テハ常ニ營業的收支ノ觀念
 ヲ離ル可カラサルヲ論ヲ俟タス隨テ人員及物品經濟ニ就
 テハ十分ノ注意ヲ加ヘ事業永遠ノ基礎ヲ確立スルヲ以
 テ目的ト爲サ、ルニ力ヲス然ルニ本事業ノ便否ハ政治
 經濟及軍事ニ直接重大ナル關係ヲ有シ特ニ朝鮮、如キ

僅少ノ歲月間ニ於テ獨立國ヨリ附庸國ト爲リ更ニ一轉
シテ新領土ト成リタル力如キ急劇ナル變遷ヲ經タル過
渡ノ際ニ於テハ其ノ經營方法ニ付特ニ格段ノ考慮ヲ費
サ、ルヲ得人通信事業合同當時ニ於テハ諸般ノ施設固
ヨリ其ノ態ヲ爲サ、リシヲ以テ之ニ對シ適切急要ナル改
善ヲ加フルノ要アリ加フルニ當時國內ヲ通シテ一般不安
ノ狀態ニ在リ之ニ對スル警備行動ニ策應スルノ施設ヲ要
スルコト亦急ナリシヲ以テ比較的多大ノ經費ヲ要スルアリ
一面時運ノ推移發展ニ追隨スルニ止ラズ進シテ富源ヲ
開發シ産業ノ振興ニ資スル爲通信機關ノ整備擴張ニ努

力スルノ要アリ隨テ一時多大ノ經費ヲ要シタルハ四圍
ノ事情寔ニ已ムヲ得サルモノナリト大併合後國內靜謐
ニ歸シ專ラ力ヲ產業ノ方面ニ傾注スルニ當リ本事業經
營ノ方針モ亦常態ニ復スルヲ得ルニ至リタルヲ以テ各
地民度ノ狀況及政治上ノ便宜ニ應ジ適切ナル施設ヲ為
シタルハ勿論經費ノ支出及人員物品經濟ニ就テハ常ニ
節約ノ方法緊縮ノ途ヲ按シ而シテ甚節約ニ得タル餘財
ヲ割テ之ヲ有益ナル方面ニ注ク等經濟的利用ノ方途ヲ
講ニタリ隨テ田地ニ比シテ施設ノ不完全ナルハ勿論特
ニ飛躍的發展ヲ為スニ至ラザリシモ朝鮮現時ノ民度及

状況ニ照シ諸般ノ設備先ツ以テ甚シキ不十分ヲ感セザルニ至リ同時ニ其ノ收支勘定ニ於テモ明治四十五年度ニ於テ既ニ巨多ノ餘剰ヲ見大正二年度ニ於テハ資本勘定ニ屬スルキ電信電話及廳舎ノ營繕等ニ要スルモノヲモ經常歲入ニテ支辨シ猶且餘裕アルノ状態ニ達シタルカ如キハ正ニ本事業永遠ノ基礎ヲ確立シ得タリト云フヲ憚ラズ將來ニ對スル經營方針亦從來ニ則リ邁進努力スルニ於テハ本事業ノ基礎益々鞏固ヲ加フルニ庶幾カラシカ

明治三十八年日韓通信事業合同以來通信現業機關ノ數

ハ左表ニ示ス力如リ

昭三十八年七月事業會算	昭四十二年八月併合當時	大正三年三月末
四四五	四九八	五七九

ニシテ其ノ増加ノ計數ハ多カラサル力如キモ其ノ設備
 及取扱事務ノ不十分ナル郵便及電信ノ受取所取扱所及
 郵便所ノ如キ不完全ナル通信機關ヲ全廢シ之ヲ完全ナ
 ル郵便局郵便所ニ改定シタル等其ノ實質ニ於テ改善ヲ
 施シタルモノ甚カラズ即チ取扱事務ノ狀況ニ依リ表示
 スレハ左ノ如シ

通郵便	宅郵便	為替郵便	電信	交換通話通	話國庫金 話受拂
-----	-----	------	----	-------	-------------

明治三十九年有事業倉庫費	四三五	一〇	一〇	四四	五	一	一
明治三十九年合併倉庫費	四四〇	二九七	二九五	二七二	二四	一五一	一五一
大正三年三月末	四九六	四九六	四九六	五〇八	四五	三六五	四二九

第二節 事業ノ施設

事業ノ施設ニ就テハ前節ノ經營方針ニ基キ遂行シタル結果明治三十九年度以降大正二年度ニ至ル過去八年間ニ於テ漸次其ノ經費ヲ増加セリ即チ事業ノ増進ニ對スルモノ四十万七千餘圓事業ノ改良擴張ニ要スルモノ二百二十七万五千餘圓廳舎増設ノ為固定シタル經費百三万五千餘圓電信電話建設ノ為固定シタル經費二百十二

万三千餘圓ニ達セリ將來ノ施設・對ニ年々果シテ幾許ノ増費ヲ要スルヤニ付テハ外界一般狀態ノ發展如何ニ隨伴スヘキモノナルヲ以テ精確ナル計數ヲ示スエトハ困難ナリト雖大體ニ於テ從來ノ平均程度ヲ超越スルコトナカルヘク一面事業ノ收入ハ外界ノ發達ニ伴ヒ漸次増進スヘキモノナルヲ以テ大體擴張ノ基礎ヲ增收ノ上ニ置クヲ以テ適當ノ施設ナリト信ス茲ニ附言スヘキハ年々增收金額ヲ不適當ニ割イテ他ノ政費ニ充當スルニ於テハ事業ノ施設外界及民度ノ發展ニ順應セズ萎微不振ノ狀況ニ逆轉スヘキニ由リ增收額中適當ナル金額ハ必ス先ツ之ヲ事業擴張ノ費途

ニ充當スルノ必要アルコト是ナリ

郵便 通信機關ノ擴張改善ト相待テ其ノ主要機能ヲ
ル郵便遞送及郵便集配ノ敏活正確ヲ期スルノ要アリ即
チ遞送ニ付テハ各地通信力ノ關係及道路等ノ狀況ヲ參酌
シ夜中遞送ノ實施遞送速度ノ改定及遞送回數ノ增加ヲ
行ヒ又鐵道及航路ノ利用ニ努メタル結果交通至難ノ島
嶼ヲ除キ各郵便局所々在地ニハ毎日少クモ一回以上遞
送郵便物ノ到着セサル所ナキニ至リ平均一日ノ遞送延里
程ハ通常道路鐵道及水路ヲ合シ實ニ左表ノ如キ増進ヲ
示シ之力爲各地ニ至ル郵便送達日數ヲ短縮シタルコト

卷之キエノアリ

明治廿八年七月事業合同當時明治廿三年合併當時大正三年三月末

四七七六

六二五六

九四三〇

又集配ニ付テハ地況ノ發展及通託力ノ増進ニ伴ヒ或ハ集配
區劃及集配回數ヲ増加シ或ハ郵便函ヲ増設シ又ハ囑託集配
ヲ直備集配ニ改定シタルノ外僻遠部落通送集配人ノ服務途
中郵便切手葉書ノ携帶賣捌及普通ノ常郵便物受託ノ便法
並市内速達郵便ヲ開始シタル等郵便集配上舊來ノ面目ヲ一新
スルニ至リ平均一日ノ集配延里程ハ實ニ左表ノ如キ増進ヲ示シ之
力為通信ノ安固正確ヲ一層堅實ニ保全スルヲ得ルニ至リ

明治三十九年九月末

明治四十四年三月末

大正三年三月末

九五里

六六九三里

一二八三二里

郵便為替

舊韓國政府經營時代ニ於テハ未タ郵便為替制

度ノ開始ナカリシモ明治三十八年七月事業合同ノ際各郵便

局所ハ一時朝鮮人ニ囑託執務セシメ郵便所ノ名稱ヲ冠シタ

ル簡易機關ヲ除ク外總テ本事務ヲ取扱フコト、為シ郵便

ニ依ル送金ノ便法ヲ國內ニ周布シ一般公衆ニ利便ヲ増進セ

リ而シテ此ノ郵便所ハ同四十四年度中ニ於テ之ヲ全廢シ其ノ

組織整備セシ郵便所新設セラレタルヲ以テ同年度末以降全國

郵便局所ニ於テハ郵便為替ヲ取扱ハザルモノナキニ至リ高郵便為

替金ノ居宅拂、交換拂及便宜拂制ノ開始等取扱上改善ヲ施シ
タル事項勘カラス本郵便為替制度ノ如キハ幼維ナル朝鮮農民及
商人等ニ於テ特ニ非常ナル便益ヲ感得シタルモノ、如ク施行
後幾許モナリ其ノ確實ナル利便ニ對シテ各地ヨリ頻々感謝
狀ヲ送り來リタルコトアリ

郵便貯金

郵便貯金モ亦明治三十八年七月事業合同ノ際

一般ニ之ヲ開始シ特ニ朝鮮人ニ對シテハ勤儉貯蓄ノ思想
ヲ涵養スルノ必要アリ各種ノ獎勵勸誘ノ方法ヲ講ズルト
共ニ一方自ラ其ノ範ヲ示スノ實益多キヲ認メ官公衙吏員
傭人ヲシテ率先規約貯金ヲ勵行セシメ又利率ノ割合ハ内地ト

同レク年四分二厘ナリシヲ大正元年十二月ヨリ五分四厘ニ
引上ケ其ノ他貯金局待拂ノ開始即時拂戻金額制限ノ撤
廢預入手續ノ簡便ヲ圖リタル等改善ヲ施シタル事項甚カ

ラズ

郵便振替貯金

郵便振替貯金ハ金錢ノ取引アル者ノ預ケ

金ヲ帳簿ノ上ニ於テ受拂ヲ商ニ相互ノ取引ヲ決済スルノ便

法ニシテ我カ内地ニ於テ 明治三十九年三月初メテ本制度

ヲ開始シ振替口座ハ同月ヨリ東京ニ同四十二年十一月ヨリ大

阪ニ開設セラレ該口座ニ對スル受拂事務ハ當初ヨリ朝鮮

郵便官署ニ於テモ之ヲ取扱ヒタル同四十三年一月京城ニ

振替口座ヲ開設シ爾後臺灣、福岡、大連等ノ各地ニモ亦漸
次開設セラル是等各地ノ口座ト相互聯絡呼應シ一般取引
上多大ノ利便ヲ與ヘヨ、アルノミナラス今ヤ朝鮮内地特ニ
地方費徵稅上缺々ヘカラサル必要ノ機關トナルニ至リ
口座加入者及受拂高漸次増加ノ趨勢ヲ呈セリ尚振替貯
金ノ取扱ニ関シテハ集金郵便振替貯金拂込ノ制、店宅拂
電信局待拂、地方費賦課金收納郵便振替貯金特別取扱及
振替貯金拂出証書交換拂ヲ開始シタル等改善ヲ施シテ
ル事項多カラス

電信 交通不便ナル朝鮮内地ヲ開拓シ警備其ノ他諸般行

政機能ノ圓満ナル活動ヲ期セシメムト欲セハ電氣通信機
関ヲ設備スルコト最モ當面 急務ナルヲ認メ漸次主要ナ
ル地點ニ電信事務ノ取扱ヲ開始スルニ努力シ尙電信利
用ノ増進ヲ期スル為明治四十三年十一月電報料金ノ大
輕減ヲ漸行セリ又電信回線ノ設備ニ関シテハ常ニ地況
ノ變遷其ノ他通信力ノ關係等ヲ調査シ或ハ中継ヲ廢シ
テ直通線ヲ開設シ或ハ印字機通信ヲ音響機通信ニ改メ
或ハ通信ノ數量ニ應ジテ電信機ト電話機ヲ交互改装シ
タル等回線ノ整理及通信ノ敏速疏通ヲ圖ルト共ニ人員
ノ經濟及取扱ノ簡捷敏活ヲ圖リ殊ニ朝鮮内地間多數電

蘇ノ銀海疏道、圖ル為京城下關間、京城大阪間、京城東京
間、釜山下關間及元山松江間ニ直通回線ヲ設ケ、自働二重
電信機又ハ現波電信機ヲ裝置シ、就中京城東京間ハ陸上
四百十四里、海底百十六里ヲ有シ、帝國電信回線中最モ長
距離ノモノナルニ拘ラズ、其ノ通信成績ハ頗ル良好ニシテ
電信ノ經過時間ヲ短縮シタルコト顯著ナリトス。尚電信ノ
取扱ニ関シテハ、電報料金後納ノ制、料金受信人拂外國新
聞電報鐵道停車場揭示電報及時間外電報ノ取扱ヲ開始
シタル等改善ヲ施シタル事項數カラズ。

電信取扱局所

明治三十九年七月事業合算時	明治四十三年八月併合當時	大正三年三月末
四四	二七二	五〇八

電信線路里程

線路	明治三十九年三月末	明治四十三年八月併合當時	大正三年三月末
線條	六四一五	三、一八五	四、五三九
線路	一、一七七 _里	一、三七二 _里	一、六八四 _里

電話 各地商工業、隆昌ヲ期シ商取引及一般通話ノ敏
活ヲ圖ラムト欲セハ電信ト相並ヒ電話ヲモ擴張普及ス
ルノ急要ナルヲ認メタルモ一面朝鮮ニ於ケル一般ノ民
度ニ適應シ極メテ慎重ナル考量ヲ加フルニ非サレハ徒

二外觀ヲ飾ル、其タルニ至ルナキヲ保セサルヲ以テ是
 等ノ點ヲ酌量ニ漸次主要ナル地點ニ之力設備ヲ為シ又
 警備其ノ他、行政上等密接ノ關係ヲ繋グル須要ノ區間
 ニ對シテハ或ハ既設電信線路ニ專用電話線ヲ添架シ或
 ハ既設電信線ヲ利用シ電信電話双信法ヲ實施スル等特
 殊ノ方法ヲ講シ節約セシ經費ヲ以テ實際ノ需要ヲ充テ
 るコトニ努メタリ

電話取扱局所

交換及 通話	明治二十九年事業合圖時	明治三十一年合併合圖時	大正三年三月末
五		二四	四五

通話

一

一五

三六五

電話線路里程

		明治三十九年三月末		明治三十九年合併當時		大正三年三月末	
市內電話交換線路	線路	一八里	八八里	一七〇里	東電話線路	線路	二五五九
	線條	二四一	六八三四	五〇二五		線條	四七五
市內電話交換線路	線路	一八里	八八里	一七〇里	東電話線路	線路	一四
	線條	二四一	六八三四	五〇二五		線條	九八

第三節 業務ノ成績

前節所述、如リ内ニ在リテハ通信機關、整備ヲ圖ルト
共ニ事業上諸般、施設改善ヲ加ヘ外ニ在リテハ内地人

1 増殖ニ加フルニ朝鮮人ノ通信力亦漸次發達ニ是等内外
 1 事情各呼應ニ相調和ニ事業全體ニ於テ大ニ舊來ノ面
 目ヲ革新シ左表ニ示ス如ク業務上顯著ナル效果ヲ擧グルヲ得タリ

明治三十八年度 統監府設置當時		明治四十二年度 (併合ノ前年度)		大正二年度	
通常郵便物引受數		二〇、四五四、五九二		四〇、五八一、二〇二	
小包郵便物引受數		七、七六〇、四		四八、九一七、三	
郵便為替振出		三、一五、五二		九、五四、六八	
郵便取立金		六、一二九、七四二		二四、五三九、二八	
口數		二五、五四〇		一五、二一八、二	
金額		三、三三七、九		一、五七三、四九八	
				五、五二五、四九	
				四、三三、二六五	
				二、六四〇、三六〇	
				一、四四七、一五八	
				一、九八七、三六	
				七、三〇七、四〇六	

郵便貯金年度末現在

預人員

五八〇・八

一〇六六四

六四一・七三

預金額

三五〇・二三九

二二三・六六一

五六九・五九

郵便振替貯金

雇人員

二七九

六一四七

年度末現在

口座金額

一

三三九一

元六二八六

電報發信

數

八四九五三

一六二六四三二

二二五・三九

電

話

年度末現在
加入者數
通話度數

一〇六五

五五〇六

九四六九

四七四八・三・七

一六七八・二・四二

三八六五・三・四

更ニ併合後ニ於テハ

朝鮮人通信機關利用ノ趨勢ヲ調フ

ハ左表ニ示ス如ク漸次増進發展セリヲ見ル

明治四十四年度

大正二年度

通常郵便物引受數

七六〇・二〇五五

一五、二三六〇・八一

小包郵便物引受數

一〇、四八三二

五、五五四、五九八

郵便為替振出高

口數
金額

九六〇・九六
三七九一・六八

二二八七・二
五一四九・七二七

郵便取立金

口數
金額

八〇・八六
七五、一六六

四六六二一
三三三・七

郵便貯金年度末現在

預人員
預金額

一九、四三六
一一七、二二七

四八、七九八
一〇、一七七・四

電報掛信數

二〇、四九四七

二六九、八九六

第四節 事業ノ収支

通信事業合同經營後、於ケル事業經濟ノ狀況ヲ見ルニ
過渡期業、際多額ノ經費ヲ要セシヲ論ヲ俟タスト雖常
ニ收支關係ニ注意、息ヲ付リシ尚甚、經常部ニ於テハ
左表ニ示ス如ク年々順漸ト向上僅々五年經過後、明治
四十三年度ニ於テ早クモ既ニ收入ヲ以テ優ニ支出費償
ニ尚二十四萬圓餘ノ餘剰ヲ存シ大正二年度ニ於テハ此
ノ餘剰額實ニ四十一萬圓餘ニ達スルニ至レリ

通信事業經常部收支累年比較

	歳入（印紙、收入）	經常歳出	經常歳出比 歳入、過不足	歳入百圓ニ對 歳出、割合
明治三十九年度	一、四四七、四七九	一、四七九、九七四 ^内	不足 四三、五五五 ^内	一、四一六、九六 ^内
明治四十年度	一、四九四、九八七、六	一、三六一、五四、五 ^同	三、六二一、三五、六二四	一、三三八、一八
明治四十一年度	一、七二一、九一、三五〇	一、一五九、七、一四九 ^同	三、三三八、七五、七九	一、二七、七四九
明治四十二年度	一、七〇四、八六九	一、二二六、五九一、七四 ^同	一、一九五、四六、二五	一、〇五、九五六
明治四十三年度	一、五二〇、六九四、二五	一、二七八、〇七、四三 ^過	一、四六、九四、六三	九、三五五
明治四十四年度	一、五九三、一六、三三二	一、三八五、一二、四〇、七八 ^同	三、八一九、二四	八、二一六
明治四十五年度	一、六六六、一、六九三、七	一、五九六、三三、五二 ^同	三、七〇、七六、四六	八、七四、七
大正元年度	一、二二六、二二八	一、二七二、五三、五〇、四〇 ^同	四、四九七、一八	八、七、八四
大正二年度	一、二二六、二二八	一、二七二、五三、五〇、四〇 ^同	四、四九七、一八	八、七、八四

更ニ其ノ臨時部ヲ合算シタル收支狀況ヲ見ルニ事業創

始、際電信電話建設及廳舎營繕等事業、資本ニ要スル臨時費額尠カラサルヲ以テ年々多少、不足額ヲ見ラルモ大正二年度ニ至リ初メテ二万圓餘ノ餘剰ヲ生シ通信事業ノ基礎益鞏固ヲ加フルニ至レリ

通信事業經常臨時部合計收支累年比較

年度	總計		總歲出ニ比シ 歲入ノ過不足
	經常部	臨時部	
明治三十九年度	一四四七、四七九	一四七九、九四九	一五、二二八
明治四十年年度	一四四九、八七六	一八三六、一五五	三八、二六九
明治四十一年度	一七二六、九五〇	二、一五九、六七〇	四、九三三
明治四十二年年度	一七二六、九五〇	二、一五九、六七〇	四、九三三

明治四十四年度	六五七、六五五	六三八、七四三	二九五、六七六	二五七、三七八	同	五、五三三八
明治四十五年度	六五三、三六三	六三三、二五五	二四、七八	四八八、六八	二七三、五五八	同
明治四十六年度	六五三、〇九七	六五三、三五二	四八四、九九九	三、四、七九	五二一	同
大正元年度	三、四、二二	三三八	二七五、三五四	九、九五、四四一	三二八、八九五	過
大正二年度	三、四、二二	三三八	二七五、三五四	九、九五、四四一	三二八、八九五	過

而シテ將來ニ對スル収支狀態ニ就テハ固ヨリ一般經濟界

ノ一進退ニ伴フモノナルヲ以テ今遽ニ樂觀スルヲ許サズ

且精細ナル數字ヲ擧ケテ之ヲ說示スルヲ得スト雖大体將來

ニ對スル事業施設ノ程度ヲ事業増収ノ限度ニ留ムルノ

方針ヲ採ルニ於テハ事業經營ノ基礎ヲ危殆ナラシムルコ

ト莫カルヘシ

第 章

海事行政

舊韓國政府時代ニ於テハ航路標識ノ施設ニ關シ稍々見ル
ヘキモノアリシモ海事ニ關スル法規ノ整備統一シタルモ
ノナク隨テ船舶及海員ニ對スル監督十分ナラス航運事
業亦不振ノ狀況ニアリシモ總督府設置後必要ナル海事
諸法規ヲ制定整備シテ在來ノ缺陷ヲ補足シ一面命令航
路ノ整理統一ヲ遂ケ之カ保護督勵ニ腐心シ又須要ナル
地點ニ航路標識ヲ増設シタル結果朝鮮ニ於ケル海路交
通ハ漸次發展ノ機運ニ向ヒ船舶海員ノ數亦比年増進ノ

趨勢ヲ呈シ海事行政ノ成績漸ク一般ノ注意ヲ喚起スル
ニ至レリ

第一節 船舶海員ノ監督

朝鮮從來ノ海事ニ関スル法規トシテ見ルヘキモノハ僅
ニ朝鮮船舶ニ對シ適用スヘキ海上衝突豫防船舶ノ登録
及検査ニ関スル舊韓國法及在朝鮮内地法人所有ノ日本
船舶ニ對シ適用スヘキ船舶登録及検査ニ関スル統監府
令竝是等法規ニ関スル附屬命令ノ數者アリシニ過キス
ニテ海員ヲ取締ルヘキ船員船舶職員及海員懲戒ニ関ス
ル法規竝海難ノ豫防ニ缺クヘカシタル船舶燈信號器救命

具ノ取締及海難ノ場合ニ於ケル救護等ニ関スル制規ニ
至リテハ全然之ヲ缺如セシメ船舶及海員ニ對シテ十分
ナル監督保護ヲ施スコト頗ル困難ナリシノミナラス前
掲海事法規ハ朝鮮船舶及在朝鮮内地法人所有ノ日本船
舶ニ對シ各別ニ適用セラル其ノ間種々ノ不便ヲ醸生ス
ルハ論ヲ俟タス監督及保護ノ点ニ於テモ亦公平普遍ナ
ルコトヲ得サリシ等不備缺漏ノ点尠カラズ到底今日ノ
時運ニ適應セサルヲ以テ過般朝鮮船舶令朝鮮船舶検査
令朝鮮船員令朝鮮船舶職員令朝鮮海員懲戒令朝鮮水難
救護令海上衝突豫防法ヲ朝鮮ニ施行スルノ件及朝鮮統

督府海員審判所官制其、他附屬府令二十二件ヲ制定并
布、大正三年六月ヨリ實施シ之カ整備統一ヲ圖リタル
結果權利ノ設定、船籍ノ確立、航海ノ安全等完全ニ保障セ
ラル、前述不備缺漏ノ点ヲ補足シ得ルニ至リタルヲ以テ
今後ハ船舶及海員ニ對シ十分ナル監督保護ヲ施スコト
ヲ得一面海路交通機關ノ秩序的發達ヲ促進スルニ至ル
ヘキヤ疑ヲ容レサル所ナリト信ス

斯ク、如ク海事法規ハ一先完成ニ告リ朝鮮ニ於ケル海
事行政上一新時期ヲ劃シタリト雖本來船舶海員ハ世界
共通ノ性質ヲ有スルモノナルヲ以テ少クトモ内地及谷

殖民地ノ間ニ於テハ共通制度ヲ布キ其ノ取扱ヲ一樣
ニ爲スヲ得ルニ至リサレハ未ク以テ十分ナリト云フヲ
得ス將來實施ノ成績ニ鑑ミ必要ニ應ニ適當ノ時機ニ於
テ彼我ノ連絡共通ヲ圖リ以テ海事法規ノ運用上此ノ遺
憾ナキヲ期セムトス

朝鮮在籍船舶及船員ノ数ハ海路交通ノ漸次發達展スル
ニ伴ヒ年々増進ノ成績ヲ示スコト左表ノ如クナルカ將
來産業ノ發展ニ伴ヒ一層益々増進ノ趨勢ヲ呈スルニ至
ルハキヤ疑ヲ容レム

朝鮮在籍船舶數

明治四十三年八月併合當時				大正三年三月末			
汽船	帆船	石敷船	合計	汽船	帆船	石敷船	合計
二	四	六	三	七	一	一	二
八	一	一	三	四	六	五	一
三	三	六	一	一	一	六	二
五	五	七	六	二	二	四	五
噸	噸	噸	噸	噸	噸	噸	噸

備考 合計噸數中、八積石數十石ヲ一噸ニ換算シテ

算入

船員現在數 (大正三年三月末)

内地人	職	員	其他船員	計
三七三			八〇九	一一八二

朝鮮人	支那人	合計
-----	-----	----

二 三	一	三 九 六
--------	---	-------------

四 九 五	一 三	一 三 一 七
-------------	--------	------------------

五 一 八	一 三	一 七 一 三
-------------	--------	------------------

第二節 命令航路

舊韓國政府時代ニ於ケル朝鮮沿岸補助航路ハ東沿岸、

南沿岸及全羅沿岸ノ三航路ニシテ明治四十一年以降之

ヲ開始シ其ノ成績概シテ不良ナラサリシモ其ノ經營者

ノ箇々別々ナルト當初政府ニ於テ補助航路ニ對スル一

定ノ方針ナク單ニ請願ヲ基礎トシテ順次ニ之ヲ採用シ

タリシ等ノ關係上相互航路間ニ連絡統一ヲ缺クノミナ

ラ又西沿岸ノ如キモ他ノ沿岸ト連絡均衡ヲ保ツルヲ以
テ根本的ニ運輸交通機關ノ改善策達ヲ圖リ一面之ニ適
應スヘキ補助ヲ為スノ必要ナルヲ認メ同四十五年三月
補助命令期間満了ヲ機トシ之カ整理統一ヲ圖リ一面
大同江及錦江兩河ニ於ケル水運利用ノ亦等閑ニ附スヘ
カラサルヲ認メ茲ニ沿岸及河川ニ對スル航路補助ノ計
畫ヲ樹テ同年四月ヨリ新命令航路ノ開始ヲ見ルニ至リ
後大正二年四月沿岸命令航路中ニ二線ヲ追加シ更ニ同
三年四月鴨綠江航路ヲ開始セリ
現時朝鮮ニ於ケル命令航路ハ前述ノ如クニシテ爾來航

意之カ保護督勵ニ努力シタル結果逐次發展ノ機運ニ嚮
ニ其ノ成績亦大ニ見ルヘキモノアリト雖固是沿岸河川
ニ止リ對外的航路ニ付テハ未タ何等ノ施設ヲ見サルノ
ミナラス現在航路中亦整理改善ヲ要スルニ至リタルモ
ノ甚カラサルヲ以テ本年度末命令期間ノ終了ヲ告グル
ヲ機トシ既往ノ實績ニ鑑ミ地方ノ狀況及商業貿易ノ関
係等ヲ精細ニ査覈シ其ノ整理スヘキモノハ之ヲ整理シ
其ノ新設ヲ要スヘキモノハ之ヲ新設スル等時運ノ要求
ニ適應スル改善施設ヲ為スノ目的ヲ以テ近海沿岸及河
川ノ三航路ニ分テ目下之カ調査ヲ進メツ、アリ

搭載貨物箇數	乗客員數	郵便行囊箇數	補助金額
一一八、七二五	一三六三二一	一五三、六二〇	三二六七七七
八五四三	九六九六	五七三六	一五五七五
一一八九二六八	一四六、一七	一五九、三五六	三四六三五二

第三節 航路標識

朝鮮ニ於ケル航路標識事業ハ明治二十七八年日清戦役ノ際帝國政府ニ於テ艦船ノ航通上其ノ設備ノ急要ナルヲ感シ同二十八年中内地ヨリ技師ヲ派遣シ沿岸ノ測量調査ヲ爲シタルニ胚胎メ後同三十四年ニ至リ更ニ帝國政府ヨリ舊韓國政府ニ交渉勸告ノ結果内地ヨリ技師ヲ

招聘シ漸ク之ヲ建設ニ着手シタルモ當時多額ノ經費ヲ
支出スルコトヲ得ナリシ爲同三十八年迄ニ於テ全沿岸
ニ亘リテ航路標識ヲ建設セラレタルモノハ日露戰役中
帝國陸海軍ノ手ニ藉リテ建設セラレタルモノヲ併セ僅
ニ十餘箇所ニ過キサルノ狀況ナリシカ同三十九年以降
大正二年度ニ至ル過去八年間ニ於テ總工費約百三十四
萬圓ヲ投シ著々樞要ナル地點ニ建設シタル結果左表ニ
示スカ如ク長足ノ進步ヲ爲シ航海上ノ利便ヲ増進シタ
ルコト多大ナリトス

計	霧	晝	燈	
	警	標	標	
				明治三十八年末
一 二	一	二	一 〇	
				明治四十四年度末
一 七 三	一 六	一 〇 〇	五 七	
				大正二年度末
二 一 五	一 七	一 二 〇	七 八	

大正二年度末ニ於ケル燈標分布ノ密度ハ沿岸埋數百八
 埋ニ付一基ヲ有スルニ過キサルノ割合ニ當リ之ヲ臺灣
 ノ四十九埋内地ノ六十五埋ニ付各一基ヲ有スルノ割合
 ニ對比スレハ其ノ及ハサルコト尚頗ル遠キノミナラス
 朝鮮沿岸ハ特ニ潮流ノ劇甚ナルコト潮ノ漲落ノ差ノ大

ナルコト、濃霧ノ頻發スルコト、航路ノ屈折多岐ナル等航
海上危険不安ヲ感スルノ点ニ於テハ稀ニ見ルノ状態ニ
在ルヲ以テ航路標識ノ普及ハ海運政策上最大急務ノ一
ナリト謂フヘリ將來國費ノ許ス限リ漸次樞要ナル地點
ニ増設シ以テ航海ノ安全ヲ圖リ一面航路ノ發展ト相待
テ海運事業ノ隆昌ニ趨カム事ヲ期セムトス

第 章 電氣行政

併合當時ニ於ケル電氣事業界ハ其ノ業務ヲ開始セルモ
ノ僅ニ指ヲ京城仁川及釜山ノ三會社ニ屈スルニ過キサ
リシモ新政ノ普及發展ニ伴ヒ大正三年三月末ニ至リテ
ハ其ノ數實ニ十六ニ達シ將來漸ク増進ノ趨勢ヲ示セリ
ト雖由來幼稚ナル朝鮮產業界ニ於テ獨リ電氣事業ノ
發展ヲ期シ得ヘキニアラズ會社其ノ他ノ經營スル發電
力約八千「キロワツト」ノ能力ヲ有スルモ其ノ之ヲ實際ニ利
用スルモノ僅ニ約三千「キロワツト」ニ過キス而シテ亘長

約十六哩、電氣市街鐵道ニ使用スルモノヲ除キテハ概
ネ皆電燈事業ニ屬シ其ノ之ヲ工業ノ動力ニ利用スルモノ
ニ至リテハ實ニ僅少ナルノ情況ナリ明治四十四年度
初頭以降調査ニ從事シ既ニ大畧其ノ外部ノ作業ヲ終了
シタル發電水力調査事業ノ完結公表ノ曉ニハ其ノ動力
ヲ大小工業上ニ利用スルノ機會ヲ促進スルニト雖朝鮮
産業界發展ノ現状ハ尙幾多ノ年月ヲ經ルニ非サレハ水
力電氣事業ノ振興容易ニ期待シ得ハカヲ甘ルモノト信
スル

第一節 電氣事業ノ監督

電氣事業ハ商工業ノ發展ニ密接ナル關係ヲ有シ又公共
ノ利害安危ニ影響ヲ及ボスヲ以テ
折業ノ健全ナル發展ヲ期圖セムニハ十分ナル監督及保
護ノ途ヲ講ズルノ要アリ明治四十四年三月電氣事業取
締規則ヲ制定公布シ電氣事業ノ經營ニ關シテハ許可主
義ヲ採ルコトヲ明確ニシ且事業ノ危險防止等ニ關シ精
細ナル事項ヲ規定セリ

電氣事業ハ出願ニ對シテハ從來地方ノ實狀ニ鑑ミ又其
ノ需給ノ程度ヲ按シ企業地ニ對スル事業ノ要否企業者
ノ企業地ニ對スル關係企業成立ノ確否及設計ノ適否竝

企業者ノ人物、資産、信用、程度等ヲ精査シ適切穩健ナル
企業ナリト認ムルモノニ限リ之ヲ許可スルノ方針ヲ採
リ來リタル力將來トテモ依然此ノ方針ニ則リ徒ニ私利
ヲ貪テムトスル投機者流ニ權利ヲ獲得セシメ真摯穩健
ナル企業ノ成立ヲ遮止シ之カ爲延テ地方人民ノ企業心
ヲ萎靡挫折セシメ斯業ノ發達ヲ阻碍スルカ如キコトナ
キヲ期セムトス

電燈及電力料金ノ制ハ公共ノ利害ニ直接重大ノ關係ヲ
有スルモノナルヲ以テ事業經營ノ狀況、地方ノ經濟狀態
物價勞銀ノ關係、投資額ノ多寡設備ノ大小、供給範圍ノ廣

鉄等ニ鑑ミ傍ラ類似事業トノ權衡ヲ參酌シ各會社ヲ以テ
漸次料金ヲ低下セシメ以テ當業者ト公衆トノ利益ヲ
調和節制スルニ努メツ、又ルモ之ヲ内地ノソレニ比較
スレハ尙未ダ一般ニ高キニ過リルノ嫌アリ是畢竟スル
ニ朝鮮ニ於ケル此等會社ノ大多數ハ其ノ創設日尙淺キ
ノミナラス容易ニ豫期ノ成績ヲ収メ得サルニ因ルモノ
ナルハキニ依リ將來事業ノ漸次順境發展ニ趨クニ伴ヒ
漸ク遂ニ適宜料金ノ通減ヲ行ハシメ以テ公衆ノ利益ヲ
圖ラントス

電氣事業ノ施設ニシテ其ノ當ヲ得サルトキハ不測ノ災

害ヲ惹起スルニ至ルハキヲ以テ之カ設備ニ関シテハ精
細ナル規定ヲ設ケ嚴密ナル監督ヲ勵行シツ、アリト雖
直接之カ執筆ノ任ニ當ル技術者ノ能力如何ニ重大ナル
關係ヲ有スルヲ以テ内地ニ於テハ主任技術者ノ資格ニ
関シ細密ナル規定ヲ設ケ檢定試驗ノ制度ヲ採レルモ朝
鮮ニ於テハ内地ト少シク事情ヲ異ニスル所アルヲ以テ
未タ規定トシテ公表スルマデニ至ラサルモ内地ト同一
趣旨ノ内規ヲ定メ相當資格ヲ具備スル者ニ非ズルハ主
任技術者タルコトヲ得サラシクルト共ニ一面技術者ヲ
シテ常ニ技術的方面ノ研鑽ヲ怠ラサラシメ以テ不測ノ

災害ヲ未然ニ防止スルノ方針ヲ採レリ

電気事業ノ経営成績ハ左表ニ示スル如シ

明治三十八年度末明治三十九年度末大正二年度末

事業開始會社數

拂込資本金

發電力 (キロワット)

供給電力 (同)

電燈數 (千燭光)

電気鐵道 (五哩)

地鉄 (同)

2 3 16

21,000,000 625,000 277,000

865 1575 798

! 716 278

! 2670 644

! 15 16

? 16 22

第二節 發電水力ノ調査

軌道電氣遠送方法ノ進步ニ伴ヒ發電原動力トシテ水力
ノ利用ヲ促進スルニ至リタルハ宇内ノ大勢ニシテ文明
各國互ニ相競ラテ之カ發展ヲ期圖シ以テ富源ノ開發產
業ノ振興・資益モムル。況タテヲサハナシ現ニ
我國内地・於テハ近年特・著シク此ノ趨勢アリ數年以
前ヨリ既・發電水力調査事業・著手シタルカ産業振興
ノ急一日モ忽諸・耐スヘカヲサハナシ朝鮮・於テハ其ノ以
要ノ度特・一停痛切ナルモノアルヲ認メ韓國併合ノ翌
年度初頭即チ明治四十四年四月ヨリ本調査ニ著手スル

ト、ナリ直ニ其ノ調査機關、準備ヲ整ヘ同年九月初
旬ヨリ著々作業ヲ開始シ先ッ豫定ノ水系ニ就キ實地ヲ
踏査シテ水力地点ヲ選定シ次ニ河川流域内必要ノ箇
所ニ雨量觀測所ヲ配置シ又關係河川ニ量水標ヲ設備シ
其ノ有望ナリト認めタル地点ニ對シテ測量班ヲ派遣
シテ實測ニ從事セシメ大正三年六月ヲ以テ外部ノ調査
作業ハ大略一段落ヲ告グルニ至リ目下諸般ノ調査資料
ニ據リ糸電水力調査書ノ編成中ニ屬ス今其ノ調査成績
ノ梗概ヲ舉グルニ左ノ如シ

踏査

踏査ハ糸電水力調査第一次ノ作業ニシテ先ツ

水力電氣事業ノ經營ニ有望ナリト認ムル水系ノ流域及
地勢ノ概畧ヲ豫メ地圖面上ニテ查察シ技師ヲシテ實地
ニ就キ之ヲ踏査シ流量及河川ノ狀態等ヲ照査シ馬力數
及豫定水路等ヲ概定シ水量十五個水力二百馬力ヲ最小
限度トシテ水力地點ヲ選定セシメタリ其ノ踏査ノ成績
左ノ如シ

水系

十二

水力地點數

九十二

馬力數

二万二千馬力

實測

踏査ニ依リ選定シタル水力地點ノ中ニ就キ電

氣事業經營上利便ニシテ且經濟上有利・電氣ヲ發生供
 給スルヲ得ヘキ地點ト認ムルモノヨリ漸次實測作業ヲ
 施行スルノ方針ヲ以テ測量班ヲ派遣シ測地測水作業ニ
 當ラシメ大正三年六月ニ至リ主要地點三十八箇所ノ實
 測ヲ終了シ水力合計約三萬三千馬力ヲ得タリ今之ヲ水
 系別ニ掲擧スレハ左ノ如シ

水系

水力地點數

馬力數

洛東江

六

四四二〇

馬力

錦江

四

三二四〇

漢江

一三

一〇、七七〇

臨津江

五

五九。

大同江

四

五三七。

清川江

二

七九。

大寧江

二

八一。

龍鼻江

一

一五。

蟾津江

一

三四。

合計

三八

三一四。

以上，中，就平晉州附近，洛東南江第一號，陝川附近，

南汀江第一號，大田地方，錦江第一號，全州地方，蟾津江

第一號，鐵原附近，臨津江第三號，華川附近，北漢江第一

鄂德川附近ノ北大同江茅二號及恭川附近ノ大寧江茅一
號ハ水力利用上最モ注目ニ値スル地點ナリトス

雨量觀測

雨量ノ多寡ハ流域ノ面積及植林狀態等ト
相待チ河川流量ノ大小及其變化ト最モ密接ノ關係ヲ

有スルモノナルカ故ニ之カ觀測ハ水力調査上重要ナル
事項ニ屬スルト共ニ又極メテ其ノ正確ヲ期セサルヘカ

ヲサルヲ以テ水力地點ヲ有スル河川ノ流域内ニ少クト

モ一箇所以上ノ雨量觀測所ヲ設置シ郵便局警察署及憲

兵隊等ニ之カ觀測ヲ委嘱シ其ノ觀測表ヲ蒐集スルコト

トセリ大正三年三月末ニ於ケル雨量觀測所數ハ合計七

十五箇所ニシテ又同二年中ニ於ケル降水量ヲ流域別ニ表示スルハ左ノ如シ

流域

年降水量(耗)

自六月至九月 降雨水量(耗)

漢江 臨津江 大同江 清川江 大寧江 錦江 洛東江

自九〇〇

至一一〇〇

自九五〇〇
至九〇〇

七〇〇

六〇〇

自六〇〇

至八〇〇

自六〇〇

至九〇〇

自五〇〇
至七〇〇

自五〇〇
至八〇〇

自四〇〇
至六〇〇

五〇〇

四〇〇

自三〇〇

至五〇〇

自三〇〇

至五〇〇

本表ニ依リテ之ヲ見レハ六月ヨリ九月ニ至ル四箇月間ハ朝鮮ニ於ケル多雨季ニ属シ本期間ノ降水量ハ殆ント年降水量ノ過半ニ達シ其ノ分布モ亦年量ノ分布状態ト畧相同シオヲ察知スルヲ得ヘシ而シテ本調査ハ獨リ陸電水力調査ノ資料トシテ必要ナルノミナラス一面水利計畫事業ノ資料トシテ裨益スル所亦決シテ鮮少ナラサルヘシト信ス

水位觀測 水位ノ昇降ハ直ニ流量ノ増減ヲ來タシ隨テ水力地點ニ於ケル馬力數ヲ測定スル工ニ至大ノ關係ヲ

繫クモノナル力故ニ水力地點ノ豫定取入口、放水口其ノ
他測水地點、如キ主要ナル箇所ニ量水標ヲ設置シ各其
ノ附近ニ於ケル信用アル者ヲ選ミテ水位ノ觀測ニ當ラ
シメタリ大正三年三月末ニ於ケル水位觀測所ノ數合計
三十七ヲ數フ

朝鮮ニ於ケル河川流量ハ降水量少ク且蒸發量ノ強大ナ
ル森林狀態劣惡ナル為内地ニ比シ甚寡少ナリトス今明
治四十五年ヨリ大正二年ニ至ル調査ノ結果ヲ綜合スル
ニ地方ニ依リ差異アルヲ免レスト雖モ漢江以北ノ河川
ハ冬季ニ於テ水深結氷涸渴スルヲ以テ渴水期ハ冬季ニ

發達ニ資益シ一ハ以テ企業者ニ權威アリ且正確ナル根
據ヲ與ヘテ企業上些ノ失誤蹉跎ナカラシメシコトヲ期
セムトス

思フニ水力電氣ノ利用ハ獨リ大工業ニ對シテ必要ナル

ノミナラス小工業ニ對シテモ亦最モ有利有益ノモノニ

シテ又其ノ特徴トスル所ハ高價ナル燃料ヲ要セス最モ
經濟的ニ電力ノ供給ヲ爲シ得ルニ在ルテ以テ朝鮮ノ如

キ燃料ノ缺乏セル所ニ在リテハ電力供給上水力ノ利用

ヲ推奨促進シ工業界ノ進歩發達ト相倚リ相待テテ産業

ノ振興ヲ期圖スルコト朝鮮開發上最モ緊要ナル政策

一ナリト信ス

第一章 附帶事業

第一節 國庫金取扱事務

目下附帶事業トシテ現ニ經營スルモノ、中ニ就キ其ノ最モ古ク又最モ主要ナルモノハ國庫金取扱事務ナリトス本事務起源ハ明治三十九年十月旧韓國政府ノ委託ヲ受ケ我カ郵便官署ニ於テ同國ノ庫金ノ受拂事務ヲ取扱ヒタルニ始マル而シテ其ノ之ヲ實施スルニ至リタル理由ニアリ一ハ同國政府財政整理ヲ援助スル為一ハ本事務ノ開始ト相依リ相待テ完全ナル通信機關ヲ全土ニ普

及ヒシム為是ナリ即チ第一ノ理由トシテハ從來同國ニ
於ケル租稅徵收其ノ他國庫金受拂事務ハ郡守等ニ於テ
之ヲ取扱ヒタルモ其ノ事務ニ紀律節制ナク法規亦嚴正
ナラザリシ等ノ為弊害百出シ國庫ノ收入ニ虧カラサル
影響ヲ及ホシタルノミナラズ金庫ノ設置國內ニ周カラ
サル為納稅其ノ他經費ノ支拂ニ不便多キヲ以テ全國各
地ニ散在セル郵便官署ヲ利用シテ本事務ヲ取扱ハシム
ルノ便益ナルヲ認メタルニ因リ又第二ノ理由トシテハ
通信事業合同當時ニ於ケル通信機關分布ノ狀況ヲ見ル
ニ朝鮮人ニ踰託シテ集配事務ノミヲ取扱ハシメタル設

備極^ニテ不十分ナル郵遞所ヲ除クトキハ約百十五方里
付漸ク一局所ヲ有スル割合ニ當リ地方通信ノ不便
尠カラサルヲ以テ少クトモ此ノ郵遞所ニ代ノルニ設備
十分ナル通信機關ヲ設置之ニ内地人吏員ヲ駐在セシ
メテ各種ノ通信事務ヲ執行セシムルコト地方開闢振興
上最モ急要ナルヲ論ヲ俟タサルモ一舉ニテ之ヲ改定ス
ルコト財政上容易ノ業ニ非ス即チ本事務施行ノ委託ヲ
受ケ相當經費ノ支辨ヲ受クルニ於テハ地方通信機關ノ
設備及改善上便益尠カラス兩者相倚リ相待チテ前記缺
陷ノ幾分ヲ補足スルコトヲ得ヘカリシニ因ル而シテ此

、事タル朝鮮通信官署創始、事業ニ属シ未タ曾テ其ノ
先例ヲ有セザルヲ以テ當初相當經驗ヲ積ム迄其ノ取扱
種目ノ如キモ租税受入金ト歳出金拂渡及歳出定額還入
金ノ三種ニ限定シ又其ノ取扱局所ハ金庫所在地外、郵
便局及郵便取扱所ニ限リタルモ後同四十三年四月ヨリ
郵便所以外、郵便局所ヲシテ國庫金中関税金ノ出納保
管事務ヲモ取扱ハシメ同年十月以降更ニ之ヲ擴張シ其
取扱種目ハ朝鮮總督府及其ノ所屬官署ニ属スル總テ
歳入歳出金並保管物取扱規程ニ依リ金庫ニ寄託ヲ
要スル歳入歳出外現金ニモ之ヲ收ホシ又其ノ取扱局所ハ

金庫所在地外、總テ、郵便局所ニ於テ之ヲ取扱ハシムルコト、セリ

本事務取開始後、成績ヲ見ルニ左表ニ示ス力如ク歳入金歳出金、兩者トモ勢カミナル口数及金額ニ達シ而シテ此等収納金ハ短少期間内ニ於テ中央金庫へ振替拂込マル、ヲ以テ從來郡守ノ収納ニ依リ廻納スル制度ニ比シ其ノ敏速ナルコト固ヨリ言テ俟タズ又歳出金ノ拂渡ニ付テハ從來其ノ支出證據書ノ整理方乱雜ヲ極メタル弊害ヲ芟除シ決算ノ正確ヲ期圖シ得ルニ至リタル為確實ナル歳計豫算ヲ樹ツルヲ得ルニ至リ財政上顯著ナ

ル效果ヲ與ヘタルノミナラス本事務取扱ノ開始ニ依リ
完全ナル通信機關ヲ全土ニ配設スルヲ得朝鮮人ヲミテ
通信事業利用ノ觀念ヲ涵養シ一般民衆ノ安寧康福ヲ圖
ル上ニ於テ貢獻シタル所尠カラサルハ尙郵便官署ハ
收納ノ方法ニ依リ舊貨ヲ回收シ一面新貨ヲ流布シ舊韓
國貨幣整理ニ對シ至大ナル援助ヲ與ヘ一般金融ノ關係
ヲ調和シ延テ殖産興業ノ發達ヲ助長促進シタルコト多
大ナルハ疑ヲ容レサル所ナリ

明治四十年度 明治四十三年度 大正二年度

歳入金受入		歳出金拂渡	
金	口	金	口
額	数	額	数
四六、〇五一	二、〇六六九二	一六、三八三二	
四七、三六二一五	七、九九三二八三	九、三三八四八	
三七、八七〇	五、七一七八	一、〇五、九六	
一、九〇、二四八三	二、一〇、五六八七	六、五九、九二六一	

備考 本表中大正二年度歳入金受入口数、明治四十
三年度ニ比シ減少セルハ同年度計数中ニハ小包郵便
物輸出入税金受入口数ヲ包含スルモ該税金ハ併合後
収入印紙ヲ以テ納付セシムルコトニ改メタル結果同
受入口数ヲ減少シタルニ由ル

第二節 年金恩給交付事務

年金恩給交付事務ハ郵便官署ノ附帶事業トシテ現ニ經
營スルモノノ一ニ屬シ其ノ事務ノ内容ハ國庫ノ支辨ニ
屬スル年金恩給遺族扶助料及退隱料ヲ受給者ニ交付ス
ルニ在リトス本事務ハ從來各府縣ニ於テ之ヲ處理シタ
ルモノナルモ受給者ノ不便尠カラサルヲ以テ明治四十
三年四月以降全國各地ニ散在セル郵便官署ヲ利用シテ
之ヲ支給ヲ取扱ハシムルコトニナリ朝鮮ニ於テモ内地
同様同日以降各郵便局所ニ於テ本事務ノ取扱ヲ開始シ
タルニ左表ニ示シ力如ク其ノ成績良好ニシテ大ニ受給
者ノ利便ヲ增進セリ

		明治四十三年度	大正二年度
口数	金額	三三五七	六五七二
	一三六〇七四		二七〇一一九

第三節 小口保險事業

生命保險、人生社會ニ必須缺クハカラサルモノナルコ
 十八國ヨリ歟、辯ヲ俟ツサル所ナリ就中確固タル恒
 産ヲ有セサル中流以下ノ者ニ對シテハ其ノ必要ノ度特
 ニ一層痛切ナルモノアリ然ルニ目下我國ニ於ケル生命
 保險會社經營ノ實際ヲ見ルニ何レモ皆中流以上ノ者ヲ
 以テ主タル目的ト爲シ保險ノ必要ヲ痛切ニ感スル中産

者以下ノ者特ニ朝鮮人ノ如キ概シテ經濟程度ノ低級ナル者ニ在リテハ殆ント之カ利便ニ浴スルコト能ハサルノ狀態ニ在リ是特ニ朝鮮ニ於テ小口保險事業經營ノ急要ナルヲ認ムル所以ナリ而シテ此ノ小口保險即チ簡易少額生命保險ノ特色ト為ス所ハ其ノ保險金ノ少額ナルコト其ノ保險料金ノ拂込度數頻繁ナル為一因ノ拂込金極メテ少額ナルコト體格ノ醫的診査ヲ行ハサル等契約加入ノ手續極メテ簡易ニシテ汎ク多數下級者ヲ網羅シ得ル等其ノ主要ナルモノナルヲ以テ之カ經營ニハ勢ヒ多額ノ經費ヲ要スヘキニ由リ彼ノ營利ヲ以テ目的ト為

大民營保險會社ノ到底克ク其ノ任ニ堪エル能ハサルヤ
論ヲ俟タス殊ニ現時朝鮮ニ於ケル保險事業界ハ猶未ダ
極メテ幼稚不振ノ時代ニ在リ唯僅ニ内地ニ於ケル保險
會社九支店又ハ出張所ヲ設置シ主トシテ在留内地人ヲ
目的トシテ經營スルニ過キサルノ狀態ニシテ此等ノ諸
會社力保險ニ對スル觀念ニ乏シク貯金思想亦幼稚ニシ
テ且富力概シテ貧弱ナル朝鮮人ヲ對手トシテ經營スル
ノ更ニ一層困難ナルヤ明白ナリ然カモ多額ノ勸誘費ヲ
投シテ小口ノ保險加入者ヲ募集スル力如キハ所謂學多
クシテ功少ク普通ノ營利保險會社トシテ到底其ノ任務

＝堪へサルノミナラズ収支得失相償ハサルヲ言フ俟タ
ル所ナリ此ノ點ニ於テ朝鮮ハ内地ト全然事情ヲ異ニ
セルヲ以テ内地ニ於テ小口保險ノ官營ト爲ルト否トニ
拘テ不特殊ノ事情ヲ有スル朝鮮ニ於テハ斷然之ヲ官營
ト爲スノ殖民地タル朝鮮ノ經營開發上極メテ適切ニシ
テ且最モ機宜ヲ得タル政策ナリト謂ハサルヘカラス
既ニ小口保險ヲ官營ト爲ス以上郵便局所ヲ利用シ附帶
事業ノ一トシテ之ヲ經營ノ任ニ當ラシムルコト最モ經
濟的且最モ便益ナル方法ナリト信ス即チ郵便局所ハ全
國都鄙ニ散在普及セルヲ以テ勸誘上多大ノ便宜ヲ有ス

ルノミナラス保険料ノ如キハ郵便貯金ニ依ル振替拂込
又ハ拂出ノ便法ヲ設ケ又ハ吏員集配人ヲミテ戸別集金
ヲ為サシムル等格別ノ費用ヲ要スルコトナク至極簡易
ニ行フコトヲ得ヘク斯クテ保険思想ノ普及ハ一方貯金
思想ノ普及ト相待テ朝鮮人ヲミテ漸次勤勉力行ノ民ヲ
ラシムルコトヲ得ヘグレハナリ

如工ノ理由ニ依リ朝鮮ニ於テハ小口保険ヲ官營ト為ス
ノ必要特ニ急切ナルモノアリ客年既ニ之ニ関スル法令
案ヲ具シ中央政府ニ提出シ目下懸題ト為リ居レリ頃日
内地ニ於テ問題ト為リ居レル小口保険官署^警問題ノ解決

如何ニ拘ラズ本附帶事業ノ朝鮮ニ實施セラルニ至ラ
ムコト渴望シテ止マサル所ナリ

第六章

調査事項

第一節

土地調査

土地調査ハ土地ノ面積境界ヲ測定シ地籍ヲ明ニシテ所有權ヲ確保シ地稅ノ負擔ヲ公平ニシ賣買讓渡ヲ簡捷確實ニシ以テ土地ノ改良及利用ニ便ニ且其ノ生産力ヲ増進セシムルヲ目的トス抑朝鮮ノ現行地稅制度ハ今尚ホ數百年前ノ結制度ヲ襲用シ當ニ現今ノ經濟狀態ニ適應セザルノミナラヌ法規弛廢ノ結果到ル處所謂隱結ナルモノヲ生スル等課稅ノ公平ヲ失スル殆シト其ノ極ニ達セリ耕地面積ノ稱呼ハ從來ノ一斗落二斗ノ種數ヲ播下

スル面積或ハ一日耕人一人牛一頭一日間ニ耕ス面積、
單位ヲ用牛其ノ大小區ニシテ實際ノ面積ヲ知ルヘカラ
ス又土地ニ關スル權利證明ノ如キモ當事者間ニ於テ作
成シタル不完全ナル文記ニ依ルカ否ヲサレハ頗ル不整
備ナル書類帳簿ニ基ケル郡守ノ證明ニ依ルノ外ナキヲ
以テ常ニ詐欺或ハ不當利得ノ賣買抵當等行ハレタルニ
依リ舊韓國政府ハ之ヲ矯正ノ一法トシテ明治三十九年
中土地建物證明規則及土地建物典當執行規則ヲ制定公
布シ以テ公簿登錄權利公認ノ途ヲ開キ稍其ノ面目ヲ改
メタリト雖前述ノ如ク土地ノ面積ヲ表示スル單位頗ル

不確實ナルノミナラス土地ノ異動不整理ニシテ地籍紛
乱シ荒廢地ニシテ課税ヲ受ケ既墾地ノ却テ免税セラル
ルモノアリ此等ノ弊害ヲ一掃セムトセハ是非トモ全土
ニ亘リ完全ナル土地調査ヲ遂行スルノ必要アリ舊韓國
政府ハ明治三十一年中量地衙門ヲ設置シ内部度支部農
商工部各大臣ヲ其ノ總裁トシ一米國人ヲ顧問トシテ土
地調査ノ事務ヲ開始セリト雖量地衙門ハ京城市街ヲ除
クノ外ハ朝鮮在來ノ測量方法ヲ用ヰタルノミナラス其
ノ經費ノ如キモ從事者ノ旅費食料ニ至ル迄之ヲ直接人
民ニ負擔セシメタルヲ以テ往々其ノ反抗ヲ招キ事業ノ

進行上多大、支障ヲ生シ明治三十六年遂ニ廢廳ノ止ム
ナキニ至レリ其ノ後テ、舊度支部臨時財産整理局ニ於
テ土地調査ノ準備ニ著手シ且主トシテ土地調査費ノ支
辨ニ充ツルノ目的ヲ以テ明治四十一年末第二起業資金
債ヲ起債シ翌年三月臨時土地調査局ヲ設置シ實地測量
ニ著手シタリシカ其ノ翌年併合ノ結果土地調査ノ事業
ハ朝鮮總督府臨時土地調査局ノ掌理スル所トナレリ同
局、總裁ハ政務總監ヲ以テ之ニ充テ副總裁一人書記官
三人事務官二人監查官一人技師五人書記及技手通シテ
五十人、定員ヲ置キ更ニ必要ニ應ニ豫算ノ範圍内ニ於

テ監査官、書記及技手ヲ定員外ニ増置シ、尙ホ必要ト認め
ル地ニ支局又ハ出張所ヲ設置スルコト、セリ臨時土地
調査局ハ之ヲ庶務、調査、測量ノ三課ニ分テ調査課ニ在リ
テハ主トシテ土地ノ境界、所有主、地目及地位等ヲ調査シ
テ其ノ調査書、土地臺帳及地券ヲ調製シ測量課ニ在リテ
ハ大三角、小三角測量、圖根測量及一筆地測量ヲ爲シ且圖
面ヲ作製セシム其ノ後同局ハ更ニ行政整理ノ結果大正
二年三月官制ヲ改正シテ其ノ組織ヲ縮小シ總裁、副總裁
ヲ廢シテ局長ヲ置キタリト雖土地調査事業ハ方ニ擴張
ノ時期ニ際シ漸次職員ヲ増員スルノ必要アルヲ以テ事

務官專任二人ヲ五人ニ技師專任五人ヲ七人ニ増員シ殊
ニ下級従業員ノ如キハ事業ノ膨脹ニ伴ヒ著シク其ノ人
員ヲ増加セリ

舊韓國政府ノ編成ニ係ル土地調査事業ノ豫算ハ明治四
十三年以降八箇年ノ繼續事業トシテ總費額一千四百十
二萬九千七百七圓ヲ計上シタリシカ併合後ニ至リ實地
調査ノ結果ト時運ノ發展トニ鑑ミ出來得ル限事業ヲ速
成スルノ必要ヲ認メ調査面積ヲ二百七十五萬五千町步
ト看做シ其ノ繼續年限ヲ短縮シ明治四十三年三月事業
開始當時ヨリ起算シ滿七箇年ヲ以テ完成スルノ計畫ヲ

立テ其ノ總豫算額ヲ一千五百九十八萬六千二百二圓ト
定メタリ然ルニ更ニ調査ノ進捗スルニ從ヒ調査面積ノ
割合當初ニ比シ増加シ且一般圖測量地形測量及異動地
整理ノ新作業ヲ開始スルニ至リシ爲メ経費三百九十九
萬三千七百九十七圓ヲ増加シ大正六年度ヲ以テ完成ス
ヘキ計畫ニ改メタリ

土地調査事業ハ先ツ大三角測量小三角測量及圖根測量
ノ各測量作業ヲ順次施行シ更ニ一筆地測量ノ準備トシ
テ道府郡及面洞里ノ境界ヲ調査シ土地所有者ヨリ土地
申告書ヲ取纏然ル後土地ノ境界所有主地目及地位等級

ヲ調査シ測量ノ上地籍圖土地調査簿及土地臺帳ヲ調製
シ更ニ調査後生シタル土地ノ異動ヲ整理スルモノニシ
テ之等ノ手續ヲ終了シタルトキハ土地ノ所有權及其ノ
境界ニ就キ道地方土地調査委員會ニ諮問シタル後之ヲ
査定シ尙其ノ決定ニ對シ不服アル者ハ高等土地調査委
員會ノ裁決ヲ求ムルコトヲ得ヘク高等土地調査委員會
ハ更ニ周到ノ審査ヲ遂ケ最終ノ裁決ヲ與フルモノトス
事業開始以來大正三年六月迄ニ調査及測量ヲ終了シタ
ルハ五十郡舊郡ニ依ルトキハ百八郡(市街地二十九所筆
數十一萬五千五百二十五土地臺帳等ノ調製完了シ既ニ

査定公示ノ手續ヲ了シ高等土地調査委員會ニ不服申立
ヲ爲シタル七百七件三千二十一筆及旧居留地ノ分二千
八百三筆ヲ除ク外ハ總テ土地所有權及其境界確定セリ
又製圖積算及土地臺帳調製等ノ事務ニシテ大正三年六
月迄ノ既濟筆數ハ製圖三百四十一萬一千九百七十三積
算三百萬九千三百五十九土地調査簿一百十四萬七千八
百三十土地臺帳八十九萬四千七百五十六ナリ

調査施行地方ノ順序ニ付テハ大体中部ヨリ漸次南部
及ヒ更ニ北部ニ及ホシ以テ本事業ヲ完結スルノ豫定ニ
シテ將來ニ於テ特別ノ事情ノ發生セザル限リ此ノ方針

ヲ以テ進行スルノ豫定ナリ今一筆地測量ノ着手及完成
豫定年度割ヲ舉クレハ左ノ如シ

地 方

着 手

完 成

京畿道

明治四十三年度

大正三年度

忠清北道

明治四十五年度

大正三年度

忠清南道

明治四十五年度

大正三年度

全羅北道

大正三年度

大正四年度

全羅南道

大正三年度

大正四年度

慶尙北道

明治四十三年度

大正三年度

慶尙南道

明治四十四年度

大正三年度

黃海道

大正三年度

大正四年度

平安南道

大正二年度

大正四年度

平安北道

大正四年度

大正五年度

江原道

大正四年度

大正五年度

咸鏡南道

大正四年度

大正五年度

咸鏡北道

大正四年度

大正五年度

右ノ外一般圖測量ハ大正三年度ヨリ着手シ大正六年度

ニ完了スル豫定ニシテ其ノ着手及完成豫定年度割ハ別

紙面ニ示ス力如シ (同前)

各道沿海ニ散在スル島嶼ニ付テハ調査開始ニ當リ耕地

宅地面積ノ割合人口其ノ他交通ノ便否等ヲ稽ヘ其ノ都
度調査實施ノ有無ヲ決定スルノ方針ヲ採リ從來隔在セ
ル小島嶼ニシテ耕地宅地面積ノ過少ナルモノハ其ノ必
要ト經費トノ關係上此際調査セサルコト、セリ將來ニ
於テモ此ノ方針ヲ以テ進行セントス

本事業ハ既定ノ經費ヲ以テ既定ノ年限ニ事業ノ完成ヲ
圖ラサル可ラサルヲ以テ局員ノ周到ナル精勵ト努力ト
ヲ要スルコト極ノテ切ナリ又一方ニ於テ各種作業相互
ノ連絡ヲ一層円滑ナラシムルノ必要アリ從來此ノ点ニ
留意シ來リタルモ其ノ實蹟ニ徴スルニ其ノ功程未タ滿

足シ得ルノ域ニ達セズ各作業ノ連絡ニ於テモ尚充分ナ
リト云フ能ハス目下ノ狀況ヲ以テモハ既定ノ年限内ニ
完成ヲ期スルハ頗ル困難ナリト思料スルヲ以テ今後ハ
一層各種作業ノ連絡統一ヲ期スルコトニ努力シ以テ事
業ノ進捗ヲ圖リ又一方特殊ノ給與及獎勵制度ヲ施行シ
技能優秀ナル者又ハ精勵者ハ之ヲ推奨シ益々其ノ技能
ヲ發揮セシメ技能未熟ナル者又ハ勤勉ナラサル者ハ之
ヲ鞭撻激勵シ其ノ功程力ヲ一層増進セシムルコトニ努
メ既定ノ年限内ニ事業ノ完成ヲ期セムトシ目下給與及
獎勵制度ニ付調査中ニ屬ス

土地臺帳地稅名寄帳及地籍圖等ハ一府郡、查定公示ヲ
終了スルト共ニ漸次府郡ニ之ヲ引継クモノニシテ之等
ノ簿書ハ極メテ重要ナルヲ以テ其ノ保管ニ付テハ特ニ
注意ヲ要スルカ故ニ將來災害豫防ノ方法トシテ適當ノ
倉庫ヲ作ルカ又ハ之ニ代ルハキ防備方法ニ付適宜ノ措
置ヲ講ズルノ必要アリト思料ス土地調査簿測量原圖及
一般圖原圖ノ保管ニ付テモ亦同シ又異動地ニ付テモ調
査關係書類ヲ府郡ニ引継キタル後ハ府郡ニ於テ之ヲ整
理セサルハ力ヲ付ルヲ以テ引継後ニ於テ之カ事務ニ支
障ナキ様調査測量ノ智能ヲ育ムル吏員ヲ補充スルノ要

アリトス

市街地一付ナハ土地臺帳引継ト同時ニ不動産登記令ヲ施行セラレタルカ今後郡部ニ付テモ引継後直ニ登記令ヲ施行スルノ方針ヲ執ラントス

土地調査局職員ノ數ハ現在高等官内地人四十三人朝鮮人一人判任官内地人六百十五人朝鮮人一千七百八十七人雇内地人百四十人朝鮮人九百二十六人計三千五百十二人ニシテ其ノ事務分擔ハ紛争地調査其ノ他一般内業事務ヲ除ク、外ハ從來大体ニ於テ内地人ヲシテ指揮監督ノ任ニ當ラシメ朝鮮人ヲシテ直接作業ニ従事セシム

ルノ方針ヲ執リ来リタルカ將來ニ於テモ特ニ之ヲ變更
スルノ必要ナシト認め但シ朝鮮人ニシテ技術優秀克ク
其ノ任ニ勝ツル者ハ成ルヘク之ヲ拔擢シテ相當指揮監
督ノ職務ニ當ラシムルノ要アルハ勿論ナリ又事業終了
ノ際ニ於ケル之等局員ノ處置ニ付テハ今ヨリ相當政究
ノ上勤中ニ於ケル勤紛ニ稽ハ其ノ技能成績良好ナルモ
ハ他官衙ニ轉任方針ヲ執ラントス

第二節

制度及舊慣ノ調査

朝鮮ニハ光武帝ノ二年ニ編纂シタル大典會通アリ李朝
約五百年ニ亘ル主要ナル法令ヲ輯集シタル法典ニシテ

百般、制度皆之ニ則リ明治二十七年政務ノ改革ヲ行ヒ
シモ主トシテ官制ノ改定ニ止マリ殆ト其ノ他ニ及ハス
又明治三十八年刑法大全ヲ編成セシモ民事ノ實體法
及民刑事訴訟手續ニ関スル法規ハ全ク備ハラズ總テ從
來ノ慣行ニ從ヘリ明治三十九年統監府ノ設置セラル、
ヤ韓國政府ハ其ノ指導ニ依リ法制ノ整理ニ著手シ當時不
動產權ニ関スル証明ノ方法ヲ缺キ僅ニ文記ト稱スル私
文書ヲ以テ之カ証憑ト為シ權利ノ保障十分ナラス又土
地家屋ヲ目的トスル擔保權ノ慣習アリシモ其ノ實行ノ
手續確實ナラザリシヲ以テ特ニ不動產法調查會ヲ設ケ

不動産權ニ關スル慣習ヲ調査シ之ヲ基礎トシテ土地家
屋證明規則、土地家屋典當執行規則及附屬法規ヲ制定セ
リ而シテ明治四十年民法、刑法、刑事訴訟法及附屬法令
等起案ノ目的ヲ以テ法典調査局ヲ設ケ先ツ刑法及民刑
事訴訟法ノ起案並民法起案ノ材料タル慣習ノ調査ニ著
手シ同年中民事訴訟法案ヲ脱稿シ一應ノ審査ヲ了リシ
モ再議ノ必要アリシヲ以テ定案ト爲スニ至ラス政府ハ
別ニ民刑訴訟規則ヲ制定シテ一時ノ急ニ應ヒタリ
慣習ノ調査ハ明治四十三年末ヲ以テ一應調査ヲ終リ民
法ノ起草ニ着手スル豫定ナリシモ併合ノ爲メ之ヲ中止

セリ而シテ其ノ間政府ハ舊來ノ法制及當時ノ慣習ヲ斟酌シ利息規例及民籍法ヲ制定シタリ

併合後ニ至リテハ從來ノ制度慣習ヲ調査スル必要一層緊切ナルモノアリ一面行政上各般ノ施設ニ資料ヲ供シ

又司法上裁判ノ準則トナルヘキ慣習ヲ示スト同時ニ他

ノ一面ニ於テハ朝鮮人ノ為メニ制定スヘキ法制ノ基礎

ヲ確立スル目的ヲ以テ一切ノ制度舊慣ヲ調査スルコト

トシ朝鮮全土ニ亘リ各地ノ慣習ヲ調査シ又典籍ヲ涉獵

シテ制度并慣習ノ淵源ヲ究メ既ニ其ノ事業ノ大半ヲ了

シ今後約三年ヲ以テ大体結了スヘキ豫定ナリ而シテ大

正二年民事令、刑事令、不動産登記令、不動産證明令等ノ制
定アリ民事令ニ於テハ大体民法及民事訴訟法ヲ適用シ
能力親族相續等ニ關シテハ從來ノ慣習ヲ認メタリ調査
ノ結果ニ依レハ民事令ニ於テ内地法ヲ適用セル事項ハ
必スシモ特別法ヲ必要トセス又能力ニ付テハ内地法ニ
依ラシムルコト敢テ妨ナシト雖親族及相續ニ付テハ内
地ト異レル慣習アル力故ニ直ニ内地法ヲ適用スルコト
ヲ得ル事情アリ又強ヒテ内地法ヲ適用スルノ必要ナ
キヲ以テ將來親族相續ニ付テハ朝鮮人ノ為ニ特別ノ法
制ヲ必要トシ隨テ戶籍法ニ付テモ特別法ヲ設クルノ必

要アルヘシ

又別ニ制度及慣習調査ノ參考ニ資スル為メ大典會通ヲ
譯シ既ニ稿ヲ脱セラルヲ以テ大正四年度ニ於テ印刷ニ付
スル豫定ナリ

韓國政府カ奎章閣及江華奉化平昌茂朱ノ各史庫ニ藏セ
シ李朝歷代ノ記錄並一切ノ圖書ハ併合ノ結果之ヲ總督
府ニ引継キシカ明治四十四年中茂朱史庫ニ屬セシ圖書
ヲ李王職ニ移シ爾餘ノ圖書ニ付キ大正二年六月迄ニ大
体ノ調査ヲ遂ケタルヲ以テ同年七月新ニ整理方針ヲ定
メ之ヲ朝鮮圖書及支那圖書ニ區分シ各別ニ番號ヲ附シ

テ書架ニ排列シ且特別取扱ヲ要スル圖書ハ之ヲ別所ニ
以テ圖書臺帳部門別目錄等ヲ作成シカードヲ用ヒテ出
納ニ便スルコト、シ既ニ朝鮮圖書大半ノ整理ヲ了レリ
而シテ此ノ整理ハ大正四年未迄ニ略ホ終了ノ見込ナル
モ現在ノ書庫ハ元宗親府タリシ舊來ノ建物ニシテ到底
書庫トシテ使用スルニ適セサルヲ以テ整理終了ノ時迄
ニ書庫ヲ新築ミテ之ヲ收藏シ引續キ圖書閱覽室及事務
室ヲ新築シテ圖書館ト爲シ之ヲ一般ノ閱覽ニ供セムト
ス而シテ此ノ圖書館ニ於テハ朝鮮圖ヲ完備シ以テ其ノ
特色ヲ示ス必要アルヲ以テ本府所藏以外ノ朝鮮圖書ヲ

モ總テ之ヲ蒐集補充スル計劃ヲ立テ大正二年一月以來
之ニ著手シ本府ニ於テ直接蒐集ヲ爲ス外各道ニ移牒シ
テ之ヲ蒐集ニ力メ現在圖書總數一萬八千六百九十一部
十四萬八千八十九冊アリ

圖書ノ整理ト同時ニ韓國政府ヨリ引継キタル冊板約一
萬枚ハ既ニ之ヲ整理シ遂ケ而シテ各地ニ散在セル冊板
ハ順次調査ヲ遂ケ必要アルモノハ本府ニ取寄セ否ナル
モノハ之ヲ地方廳ニ保管セシムル方針ニテ目下調査中
ニ係レリ此ノ外韓國政府ヨリ引継キタル活字六十餘萬
アリ大正二年中之力調査ヲ遂ケ其ノ種類ヲ區別シ在來

ノ方式ニ依リ其ノ整理ヲ遂ケタリ

又朝鮮圖書ハ書目ニ依リ直ニ其ノ内容ヲ知ルコト難キ

ヲ以テ之カ閲覧ニ便セムトシ明治四十四年中解題ノ作成ニ着手シ今ヤ其ノ稿ヲ脱シ近ク印刷ニ付セムトス

史籍ノ散逸セシ朝鮮ニ於テハ金石其ノ他ノ遺物ヲ以テ

最モ貴重ナル考事ノ資料トセサルヘカラス而シテ此ノ

種ノ資料ハ各地到所ニ残存シ殊ニ國寶トシテ保存スヘ

キモノ亦尠カラズ今ニ於テ之カ蒐集ヲ爲シ及保存ノ方

法ヲ講スルニ非サレハ遂ニ湮滅シテ其ノ所在ヲ失ハム

ト又仍テ大正二年一月以來之カ調査蒐集ニ著手シ既ニ

金石文拓本千有餘点ヲ蒐集シ目下之ヲ整理中ニ而
テ今後蒐集スヘキモノ尙尠カラサルヲ以テ其ノ完結
ヲ待テ朝鮮金石總覽ヲ編纂シ拓本ハ他日博物館設置ノ
曉參考品トシテ陳列シ又金石其ノ他ノ遺物ニシテ保存
スハ取寄ノ必要アルモノニ對シテハ各適當ナル處置ヲ
取ラムトス

凡ソ何レノ國ニ於テモ大抵國語ノ辭典アリ然ルニ朝鮮
ハ未ダ固有ノ辭典ナク朝鮮ノ事物ヲ研究スル上ニ於
テ不便尠カラズ仍テ明治四十四年朝鮮語辭典ノ編纂ニ
着手シ今ヤ其ノ業央ヲ過キ今後二年ヲ以テ之ヲ完成セ

ントス語數約十二萬朝鮮諺文ノ順序・依リテ排列シ漢
字アル語辭ハ頭字ニ依リテ一所ニ集合シ諺文五十音漢
字劃三樣ノ索引ヲ附シ又品詞專門語等ヲ示シ先ヅ朝鮮
文ヲ以テ其ノ意義ヲ説明シ之ニ邦語譯文ヲ附セリ而シ
テ專門語ニ付テハ特ニ學識アル者ヲ委員ト爲シ之ヲ審
議セシメタリ此ノ辭典ハ編纂ノ順序トシテ一應鮮文解
說ヲ附シタルモ二重ノ解說ヲ附スルハ辭典ノ体ヲ成サ
ズ又今日ニ於テハ朝鮮人ノ爲メ特ニ朝鮮語辭典ヲ作成
スルノ必要ナキヲ以テ寧ロ完成ノ際ニハ鮮文解說ヲ除
キ邦文解說ノミヲ存スヘシ

名 称	寺 内 正 毅 文 書
標 題	総督府施政正史調査書類

分	
類	439
番	
号	6-27-II

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--



第

章

鐵道

沿革

朝鮮ニ於ケル鐵道ハ明治二十九年米國人ヨリ

アールモールス^ルカ旧韓國政府ヨリ京城仁川間

鐵道敷設ノ特許ヲ得タルヲ始トシ其ノ工事

進行中同三十二年一月澁澤榮一其ノ他ノ本

邦人ヲ以テ組織セル京仁鐵道ヲ受組合之ヲ

引受ケ同年五月組合組織ヲ變更シテ京仁

鐵道合資會社トシ同年九月仁川驛梁津間

二十哩餘ノ運轉ヲ開始シ續イテ同三十三年

七月鷺梁津西大門間五哩餘ノ工事竣成ニ
茲ニ京仁間全線ノ開通ヲ見ナリ又京釜線ハ
明治二十七年八月日韓兩國間ニ協定セシ暫定
條約及同三十一年九月締結ノ京釜鐵道契約
ニ基キ京釜鐵道株式會社ニ於テ同三十四年八月
起工ニ同三十八年一月ヨリ全線二百六十七哩餘ノ
運輸營業ヲ開始セリ而シテ同會社ハ又一面ニ
於テ明治三十六年十月京仁鐵道ヲ買收シナリ
京義及馬山線ハ明治三十七年二月日露戰役
開始後臨時軍用鐵道監部ハ敷設ニ係リ前

者ハ同三十九年三月後者ハ同三十八年五月全部開
通シ同四十一年四月ニ至リ兩線共一般ノ運輸營業
ヲ開始セリ明治三十九年鐵道國有ノ議決スルヤ
帝國政府ハ同年七月ヲ以テ京釜及京仁線二百九十
三哩大ヲ買收シ同時ニ統監府鐵道管理局ヲ
設ケ九月京義線三百二十二哩九分及馬山線二十五
哩ヲモ其ノ管理ニ移シタリ後明治四十二年十二月朝
鮮ノ鐵道ハ一旦鐵道院ノ管理ニ移リモ更ニ同四
十三年十月朝鮮總督府鐵道局ノ所管ニ歸シ
以テ今日ニ至リ顧テニ朝鮮ノ鐵道ハ始メ我商

權扶植ノ方法トシテ在畫セラレ中頃軍用ノ急需ニ
應シ一氣呵成半島ヲ縱貫シテ國境ニ達シ且軍
需品輸送上必要ナル港灣ニ通スルニ三ノ支線ヲ設
ケシモ要スルニ當面ノ急ニ應シタルニ過キサリ^也其ノ後
鴨綠江ノ架橋成リ安奉線ノ改築ト相俟テ南滿
鐵道線ヲ經テ東清鐵道線ニ連絡スルヤ一躍シテ
歐亞交通ノ要衝ニ當リ世界的 중요ナル地歩ヲ
占ムルニ至レリ次ア地方ノ開發ニ資スル爲湖南、京元
及平南ノ三線合計三百四十八哩^{三ノ支線}竣成シ目下咸鏡線
三百七十三哩餘ノ内一部ノ敷設工事中ニ屬ス如斯ニ

シテ朝鮮ノ鐵道ハ一面ニ於テ古界の優美完備
ノ設備ヲ要スルト同時ニ他方ニ於テハ殖民地ニ於ケル
産業鐵道トシテ實用簡易ヲ主トセザル可カ^ル點アリ
從來ト雖此ノ兩箇ノ目的ニ適應スルノ方針ヲ以テ經
營シ來リシカ將來ニ於テハ一層此ノ點ニ注意シテ施
設スル所アラムトス

第二章 運輸

第二節 運輸及營業

列車運轉、明治三十九年統並府鐵道管理局
ニ於テ朝鮮ノ鐵道ヲ統轄スルニ至リタル當時ニ在リテ
ハ線路其他ノ設備未タ完カラサリシヲ以テ豫期ノ
輸送能率ヲ發揮スル能ハサリシニ漸次線路改
良及設備ノ整頓ト共ニ同四十二年四月一日ヨリ
釜山新義州間直通旅客列車ノ運轉ヲ開始シ
尚ホ京仁線其他ノ支線ニ急行又ハ直通列車ヲ
運轉セシムル外數次各線列車時刻ノ改正及列車

増發ヲ施行セリ總督府設置後諸般ノ事物刷新ノ機運ニ伴ヒ併合當時ハ區間列車、外京釜京義兩線ニ於テ各晝行一回、急行列車ト京釜線ニ隔日ノ夜行列車ヲ運轉スルニ止マリシヲ鴨綠江橋梁ノ架設及安奉線改築ノ竣成ト共ニ之ヲ改メテ明治四十四年十一月京城長春間ニ一週三回、鮮滿直通急行列車ヲ運轉シ同時ニ各列車ヲ安東駅ニ着發セシムルコトセリ加フルニ鮮滿直通運輸ノ開始ハ延年テ開釜聯絡船ノ運航ヲ促進セシメ同年十二月鐵道院ニ於テ同區間聯絡船ノ晝行隔日ナリシ

ヲ毎日運航ニ改ムト同時ニ朝鮮鐵道ニ於テ釜
山京城間夜行列車ノ隔日運轉轉ヲ毎日運轉ニ改メ京
義線晝行急行列車ト接續シテ釜山安東間直
通運轉トセリ越エテ明治四十五年六月其ノ運轉時
刻ヲ著シク短縮セシメ京城長春間直通列車ヲ釜
山長春間ニ延長シ當時落成セル釜山埠頭新棧
橋ニ發着セシメ以テ船車接續ノ實ヲ擧ケタリ
又内鮮間ノ交通運輸ノ發達ヲ期スル爲鐵道院ニ
於テ關釜聯絡船ノ運航時間ヲ改メ且下関新
橋間ニ特別急行列車ヲ開始シ朝鮮鐵道ハ大

正二年五月第五及第六列車ヲ安東釜山間運轉ニ
改メ京城安東間ニ夜行列車ヲ創始セリ又大正三年
五月鮮滿直通急行列車運轉時刻ノ改正ト同時
ニ南滿安奉線ニ於テ當局線第一及第二列車ニ接
續スヘキ夜行列車ノ運轉ヲ開始セリ本年三月末
日現在朝鮮鐵道各線別主要列車運轉回数ヲ擧
グレハ左ノ如シ

京釜本線

六回

京仁線

一二回

京義本線

六回

京元線

二回

湖南線

二回

車輛

現在使用車輛中、最良ナルモノハ機關車

ニ在リテハデシホキールドデングー過熱蒸氣機關車トシ

客車ハ全部貫通四輪ボギー式ニシテ貴賓、乘車ト

シテハ特ニ展望室、寢室、食堂等ヲ併有スル設備

裝飾ノ最善ヲ盡シタル特別車ヲ備フ又貨車、

最大ナルモノハ二十六噸車トス本年三月末日現在車輛

數ハ左ノ如シ

タシク

九四

輛

機關車
テシタ

七一

計

一六五

客車
ホヤ

三三一

貨車
有蓋
無蓋
計

五六一

一〇四一

一六〇二

營業哩及列車走行哩數

現在總營業哩數元

百九十四哩ニシテ之ヲ明治三十九年度ノ哩數ニ比較

スレハ三百五十六哩一分ヲ増加セリ是レ京元・湖南平

南ノ各新設線路ノ増加ト改良工事竣成ノ爲哩

程、変更ニシタルモノアリ由ル又大正二年度ニ於ケル列車走行哩數ハ三百五十七萬三百六十六哩ニシテ之ヲ明治四十年年度ニ比較スレハ一百八十四萬四千八百四十九哩ヲ増加セリ以テ朝鮮ニ於ケル鐵道發達ノ程度ヲ知ルニ足ラム今兩者ノ累年比較表ヲ示セハ尤、如シ

營業哩

列車走行哩

明治三十九年度(國有後)	營業哩	列車走行哩
同四十年年度	六四一五	一七二五、五一七
同四十一年度	六四一五	二一九五、三六〇
同四十二年年度	六四〇、五	一九二一、二三七
明治三十九年度(國有後)	六三七、九	九九六、五八六

同四十三年度

六七四六

二、一〇、二、一、二、二

同四十四年度

七六七六

二、三〇、七、六、六、七

大正元年度

八三七〇

三、〇、一、五、九、八、七

同二年度

九七〇二

三、五、七、〇、三、六、六

同三年度

九九四〇

列車設備、長距離旅客ニ對スル旅行中ノ無聊

ヲ慰ミ且ツ諸般ノ便宜ヲ圖ルカ爲ニ經費ノ許ス限

リ成ルヘリ其ノ設備ニ努メタリ即チ明治四十一年四月

以降京釜京義線晝行急行列車ニ食堂車ヲ連

結シ民間料理業者ヲシテ其ノ經營ニ當リシメ六二

等乘客、需要ニ應ジシメタルカ、尚ホ其ノ設備ヲ改善
シ、旅客ニ満足ヲ與フル爲メ、大正二年度ヨリハ之ヲ直
營トシテ、食堂車、連結ト同時ニ同車内ニ碁將棋ヲ
イチングバー等ヲ設備シ、乘客ヲシテ隨意使用セシ
特ニ京釜京義兩線、各急行列車ニハ客扱專
務車掌及列車站士ヲ乗務セシメ、又列車内ニ
於テ發生シタル傷病者ニ對シ、鐵道醫ヲ待ツノ暇ナ
キ應急救治、用ニ供スル爲メ、前記急行列車外
鮮滿直通急行列車内ニ救急函ヲ設備シ、更
ニ嚴寒酷暑ニ對シテ設備トシテ夏季ニ於テ各

列車一、二等車ニ飲用水、電扇等ヲ使用シ冬季
ニ於テハ蒸氣暖房器又ハ暖爐ヲ設備セリ其ノ他
京釜線夜行列車ニ一、二等暖室旅客ヲ取扱フ開始
シ又同線直通列車及京仁線各列車ニ電燈ヲ裝
置セリ

旅客賃率、明治三十九年京釜京義兩線并

有當時ニ於ケル朝鮮鐵道旅客賃金ハ京義線
在リテハ元臨時軍用鐵道監部ニ於テ制定シタル運
三錢比例法ヲ以テ便乘ヲ許可シ京釜線ニ在リテ
ハ元京釜鐵道株式會社制定シタル一哩一錢八厘

ヲ基礎トセル递减法ヲ適用シタリシカ如斯ニ統一經營
ノ主旨ニ及スルヲ以テ明治四十一年四月全線ヲ通シ一哩
三錢ヲ基礎セル递减法ヲ採用シ同四十三年總督府
ノ設立セラル、ヤ更ニ朝鮮、民度ニ適合セシムル爲畿
分收入ノ減少ヲ豫期シ現行一哩二錢ノ比例債金
ニ改正シ以テ近距離旅客交通ノ便ヲ圖レリ
旅客債率ニ上記ノ如クナルモ營業政策上玆特殊ノ
事情ニ依リ別ニ或條件ノ下ニ債金ヲ輕減スルノ
必要アリ現行諸種ノ割引中重ナルモノヲ舉クレハ
團體乘車券、回数乘車券及學生定期乘車券

外軍人、軍屬、警察官吏等ニ對シテハ（赴任旅行ノ
場合ニ在リテハ其ノ家族ニ對シテモ）普通賃金ノ五割
引トシ小學校並普通學校生徒ノ通學乘車ニ特
ニ無償トスル、外中學程度以上ノ學校職員生徒（統）並小
學校及普通學校職員ニシテ冬期及夏期休業期
間ヲ利用シ見學其他ノ用務ノ爲旅行スルモノニ對
シテハ其ノ乘車等級三等ニ限リ所定賃金ノ五割
ヲ低減シ且朝鮮及滿洲農業移民獎勵ノ爲此等
移住者ニ對シ是レ又三等ニ限リ五割ヲ減セリ更ニ
停車場附近ニ開催スル市場行旅客ニ便スル爲

特別割引往復乘車券ヲ發賣スルト共ニ其ノ携
帶手荷物ニ對シテハ極メテ簡易ノ取扱ヲ爲シ其他
主要駅ニ於テハ六箇月通用回数券ヲ發賣セ
リ又京元線ノ開通ニ依リ露領沿海州行山東地方
支那人苦力ノ輸送ヲ吸收シ得ヘキヲ認メ朝鮮郵
船株式會社其他ノ汽船會社ト結ビ破格ノ割引
ヲ以テ試験的ニ其ノ輸送ヲ開始セリ

乘車券類ノ委託發賣ハ主トシテ外國人漫遊
客ノ便宜ヲ計ルニ出テタルモノニシテ發賣乘車券ノ
種類ハ朝鮮鐵道局乘車券急行座敷券^席鐵道

院線連帶乘車券及南滿洲鐵道線連帶急行
席券等ニシテ發賣者ハ「トーマス・クック・アンド・ソン」商
會、萬國寢臺車會社及「ル・グランド・エクスプレス・ヨーロッパ」
ノ三者トス其ノ取扱所所在地ハ左ノ如シ

「トーマス・クック」商會

倫敦(本店) 巴里、ブラッセル、漢堡、ブレーメン、

伯林、維也納、馬尼拉(比律賓) 香港、上海、橫濱、

萬國寢臺車會社

(東京・上海)

ブラッセル(本店) 倫敦、巴里、漢堡、伯林、維也納、

ペトログラード、莫斯科、哈爾濱、浦塩、斯德、北

京・天津・芝罘・漢口・上海・香港・ハイフオン
(東京)・馬尼拉(比律賓)・コロンボ(錫蘭)・大連・
京城・釜山・神戶・東京・横濱・桑港・紐
育、

ホルダイスクレゼビユ

ゴーチンブルグ(本店)

ストックホルム、ペトログロード、

莫斯科

旅客輸送上、施設 一般鮮人生活程度、上進

ニ伴ヒ旅行趣味、普及シタルト朝鮮、事情漸ク

内外ニ知悉セラルルトニ依リ内鮮人及諸外國人、

組織セル觀光團體ノ來往多キヲ加フルニ至リタル
ヲ以テ是等ノ輸送ニ關シテハ特ニ便宜ヲ供與シ又
新聞社等ニ於テ舉行セル汽車巡回博覽會
等ノ計畫ニ對シテハ補助獎勵ヲ與ヘテ其ノ實行
ヲ容易ナラシメ時ニ觀櫻・觀桃等ノ爲臨時列車
ヲ運轉シ以テ地方名勝ヲ紹介ニ力ソタリ軍事
輸送ニ關シテハ常ニ其ノ計畫ヲ整齊シテ以テ有事
ノ日ニ備ヘ從來施行セル数次ノ鮮滿駐在軍隊ノ
輸送ニ當リテモ大体ニ於テ好良ノ成績ヲ收ムルヲ
得タリ又旅客ノ傷病ヲ治療スルト從事員ノ衛生

狀態ヲ良好ナラシムル目的ヲ以テ京釜線龍
山、大田及草梁ニ鐵道病院ヲ設置シ其他各主
要地ニ鐵道醫ヲ駐在セシメタリ又運輸ノ發展ニ伴
ヒ内外各地トノ間ニ聯絡運輸ヲ開始スルノ必要ヲ
認メ各關係運輸業者ト協定ヲ遂ケ之ヲ實施セ
リ詳細ハ別ニ項ヲ分テテ記述ス今累年ノ旅客
輸送人員ヲ擧ケレハ左ノ如シ

明治三十九年度(國有後)

一五五〇、〇四七人

同四十年

二六、二五、七七二

同四十一年度

二一、七二、七四一

同四十二年度

一九三〇、四四二

同四十三年度

二〇二四、四九〇

同四十四年度

二、四二九、六八七

大正元年度

四、三九九、〇二二

同二年度

四九九五、四四一

同三年度

貨物債率

大貨物、債金、元貨物、種類ニ

依リ運賃ヲ區別セズ單ニ取扱フ所取扱及噸扱、二種

分チ遠距離運賃法ヲ適用シ、リカ爾來經濟

狀態、推移ニ鑑ミ一般消費者、利便ヲ圖リ多

額減収ヲ犧牲トシテ明治四十五年七月現行大
債物債金ヲ定メ之ヲ斷行セリ此、改正ニ依リ利
便ハ左ノ如シ

一貨物、種類ニ從ヒ運賃ノ等級ヲ設ケ各品運賃
ノ權衡ヲ得セシメタルコト

一新ニ車扱、制ヲ設ケ大小貨物運送ノ便ヲ圖リ
從來、噸扱ヨリ二割乃至四割ヲ低減シタルコト

一噸扱ニ從來ヨリ一割乃至二割五分ノ斤扱（小口貨物）
ハ距離久ハ品種ニ依リ相違アルモ最高四割ノ低減ヲ

為シタルコト

一 牛馬類ノ運賃、從來ヨリ二割ヲ低減シタルコト

一 發着手数料、從來ヨリ約三割ヲ低減シ車扱ニ

對シテ二層低廉ナラシメタルコト

一 從來十里未満ノ運送ニ對シテ十里分ノ運賃ヲ

徴シタル制ヲ廢止シ近距離貨物ノ運送ヲ便ナラシ

メタルコト

一 遠距離低減率、二百哩迄ニ止メレテ三百哩迄延長シ

遠距離行貨物運賃ヲ低廉ナラシメタルコト

一 輕量ナル爲高品ノ才積扱ヲ廢止シタルコト

貨物輸送上ノ施設

朝鮮ニ於ケル一般經濟力

ノ發達ニ從テ朝鮮内ニ勿論日鮮滿間相互ノ貨物輸
送數量増進セルヲ以テ輸送ニ関シテハ隨時適當ノ
施設ヲ為スノ必要アリ今既ニ於ケル施設事項ノ主
ナルモノヲ舉グルニ南大門外數驛ニ保稅倉庫ヲ新
設シ内地線發ノ荷物ニシテ前記各所在地ニ到着ス
ルモノニ對シテハ草梁ニ於ケル通關手續ヲ省畧ス
ルコトトシ殊ニ大正二年六月ヨリ安東ニ於ケル關稅
三分ノ一減稅ノ實施竝綿布綿糸ノ運賃低減以
來朝鮮鐵道經由ノ貨物大ニ増加セルニ鑑ミ安東
ニ檢査所ヲ設置シ聯絡貨物ノ受渡及通關手續

速且ツ確實ヲ期セリ又明治四十五年十二月貨物ノ運
送中止返還及著駅変更ニ関スル取扱方ヲ制定シ
貨物託送後荷送人又ハ荷物引換証所持人ノ請
求ニ依リ之ニ應スルコトセリ尚ホ穀類移出奨励
爲各駅ヨリ釜山、草梁、群山、仁川、鎮南浦、木浦、
各駅及新義州荷取所ニ仕向ケ發送スル穀類ノ
車扱運賃ヲ低減實施セリ累年ノ貨物輸送噸
數ヲ擧グルハ左ノ如シ

明治三十九年度(國有後)

二二六、三七三噸

同四十年 度

二九一、一七五

同四十一年度

六五七、六九三

同四十二年度

七一六、一三七

同四十三年度

八八八、七二三

同四十四年度

一〇六三、一一一

大正元年度

一、一〇五、三六二

同二年度

一、三八八、九一五

同三年度

貨物取扱人

貨物取扱、為補助機關トシ

明治四十一年二月主要驛ニ貨物取扱人ヲ設置シ

尚ホ出荷奨勵策トシテ貨物取扱人ノ納金額

對シ一定ノ割戻ヲ爲ス。トセシカ大正二年二月更ニ此
 等貨物取扱人ノ改善ヲ圖ル爲朝鮮總督府鐵
 道局承認貨物取扱人規則ヲ制定シ該規則ニ
 依リ承認ヲ得タル貨物取扱人ニ對シテ二方ニ
 分テ其ノ託送貨物ノ朝鮮鐵道線内運賃ニ對シ
 百分ノ二乃至十二ノ範圍ニ於テ運賃ヲ割戻スト同時
 ニ地方ニ於テ其ノ貨物ノ取扱方ニ關シ安全運送
 ラ期セシメ所定ノ担保ヲ提供セシメテ其ノ取引ヲ確
 實ニシ且ツ荷主ヨリ不當ノ料金又ハ賃金ヲ徴セシ
 メサルコトトセリ大正四年三月末日現在承認貨物取

扱人数、左如之

京釜線

四二八

京義線

二六

京元線

六

湖南線

二〇

鮮内地

三

計

九七

聯絡運輸

明治四十四年十月鮮滿間、交

通聯絡完備

朝鮮鐵道、歐亞交通、最捷徑

路トナリタルヲ以テ

同年末日滿日滿露及西歐聯絡

加入、希望ヲ提議シ日滿旅客貨物連絡、大正元
年十一月露都ニ開催セル會議ニ於テ之ニ加入スルニ
確定シ旅客聯絡、同二年十月ヨリ貨物聯絡、同三年
一月ヨリ之ヲ實施スルニ至リ又日滿露旅客、大正元年
十一月露都ニ於ケル露國各鐵道、會議ニテ之ニ加入
スルニ確定シ同三年十月ヨリ之ヲ實施セリ西伯利經由國
際旅客交通、西伯利及蘇士經由國遊並加奈大及西伯
利經由世界周遊交通、三交通ニ就キ、明治四十五年
六月柏林ニ開催セル會議ニ於テ朝鮮經由ヲ設定
スルコトヲ主義トシテ承認セラレ大正二年六月莫斯

科・開催セル會議ニ於テ之ニ加入スルニ確定シ目下
實施ノ準備中ニ在リ斯ノ如ク西歐諸國トノ交通
ニ之ニ加入セリト雖通商交通上最密接ノ關係ヲ
有スル日文兩國間ニ未ク聯絡運輸ノ協定ナカリシヲ
以テ先ツ^{以テ}京奉鐵道ト朝鮮徑路ノ聯絡ヲ開始
セト欲シ大正二年三月東京ニ於テ關係運輸機關
代表者ノ會議ヲ開催シ同年十月ヨリ之ヲ實施
シ^ニ大正三年三月第二回會議ヲ東京ニ開キ更
ニ聯絡交通ヲ京漢・京張・津浦・滬寧・各鐵道線
ニ擴張シ大正四年一月ヨリ實施セリ又連帶運輸ニ付

明治四十年六月日本郵船株式會社ト大貨物ノ連
帶運輸ヲ開始シタルヲ始トシ年ヲ逐フテ鐵道院
南滿鐵道線等、運輸業者間ニ旅客貨物ノ連帶
運輸ヲ協定擴張ニ内鮮滿間、交通ニ便セリ現ニ連帶
運輸ヲ施行セルモノ左ノ如シ

朝鮮鐵道線
昇野船會社航路

連帶大貨物運送

明治四十年六月實施

朝鮮鐵道院

線連帶旅客貨物運送

同四十一年十月實施

朝鮮鐵道線
大阪商船會社航路

連帶旅客手荷物運送

同翌年十一月實施

朝鮮鐵道線
朝鮮瓦斯電氣會社航路

線連帶旅客手荷物運送

同年十一月實施

朝鮮鐵道線
大阪商船會社航路

連帶旅客手荷物運送

同四十三年十二月實施

朝鮮鐵道 兼 旅客貨物運送

南 滿 鐵道 兼 旅客貨物運送

朝鮮鐵道 兼 旅客貨物運送

朝鮮鐵道 兼 旅客貨物運送

朝鮮鐵道 兼 旅客貨物運送

朝鮮鐵道 兼 旅客貨物運送

倉庫

鐵道局ニ於テ倉庫營業ヲ開始スルハ獨

鐵道輸送貨物ヲ増加スル利アルミナラス一般經濟界ニ

及ホス利便亦尠カラサルヘキヲ認メ大正二年七月ヨリ

慶山外十數個所ニ其ノ營業ヲ開始セリ由來朝鮮

ニ於ケル倉庫業ハ幼稚ニシテ一二地方ヲ除クノ外完

同十四年十月實施

同四十五年三月實施

同年七月實施

大正三年十月實施

同年十一月實施

備セル倉庫ナキヲ以テ産業ノ發達ヲ阻止セルコト
歎カウサリシカ本營業ノ開始ニ依リ一般債主ハ勿
論地方在住商人ハ金融ノ逐ヲ得ルニ至リ漸次利
用増進ノ趨勢ヲ示シ大正三年中寄託貨物取扱
件數一千三百六十八件ニ對シ倉荷証券ヲ發行シタ
ルモノ七百六十一通ニ及ビ内銀行業者等ニ依リ金
融ニ資シタルモノ約六割ヲ占ムルニ徴スルニ其ノ好況
ヲ窺フニ足ルヘシ寄託貨物ノ種類ハ穀類、金巾、木
綿、繩、紙、筵、干魚、煙草等ヲ主ナルモノトシ總噸數一
萬一千六百七十六噸ヲ算セリ現在ニ於ケル營業箇所

左、如シ

慶山、大邱、倭館、金泉、大田、烏致院、天安、
烏山、開城、金郊、汗浦、漣川、鐵原、本浦、
旅館、今ヤ朝鮮鐵道、歐亞交通、最捷路ナル、位
置ヲ占メ來往ノ旅客漸ク頻繁ナラントスルニ當リ此
等旅行者ニ不便ナカラシム爲メ釜山、新義州、京城、
三箇所ニ旅館ヲ開設セリ釜山及新義州ニ孰レモ
停車場樓上ヲ以テ之ニ充テ各種ノ設備ヲ爲シ京
城ニ大規模ノ洋式旅館ヲ建築シ前者ニ大正元年
後者ニ大正三年ヨリ營業ヲ開始セリ而シテ其ノ成績ハ

日尚ホ浅キヲ以テ未ク見ルヘキモノナレト雖漸次良好ノ成績ヲ呈スルニ至ルヘシ今大正三年中（朝京城朝鮮ホチルハ十月以降）ニ於ケル成績ヲ示セリ左ノ如シ

投宿人員

一、一六五人

食事客數

一、一三八三

收入

三、六六五三兩

事業成績

明治三十九年九月朝鮮ニ於ケル鐵道

ノ統一完キヲ得タルモ該年度ニ官私ノ經營錯綜セ

シヲ以テ國有鐵道トシテノ損益狀態ヲ見ルトセハ翌

四年度ヲ以テ基點ト爲サルヘカラス即チ同年度以

降損益計算ヲ示セハ左表ノ如クニシテ明治四十及四十一年度ノ損失ヲ來シ缺損補填ヲ受クルヲ免カレサリシニ漸次諸般ノ改良施設ト地方産業ノ發達トニ伴ヒ旅客貨物ノ往來頻繁ヲ加ヘ營業費ノ節約ト相俟テ明治四十一年ニ於テハ當初缺損補填豫算額四十三萬三千九百四十七圓ニ對シ決算ニ於テハ十八萬一千五百七十九圓餘ノ補填ニ止リ差引二十五萬二千三百六十七圓餘ノ減少ヲ見ルニ至リ同四十二年度ニ入リテハ一般經濟界不況ノ影響甚シク又國內暴徒ノ出沒虎列拉病ノ發生締有

ノ酷寒等ニ依リ前年度ニ比シ旅客ニ於テ豫期ノ成績ヲ見ル能ハサリシモ尚ホ且ソ缺损補填ヲ受ルノ域ヲ脱シ幾分ノ益金ヲ見爾來年々累進シ大正二年度ニ於テハ湖南線ノ全通、京元線ノ延長等ニ依リ旅客貨物ノ輸送共ニ良好ナル成績ヲ舉ゲ前年度ニ比シ一躍殆トニ倍ニ垂ントスル利益ヲ舉グルニ至リタリ

損益計算表

△印ハ損失ヲ示ス

年	度	一	收	入	一	支	出	一	損	益
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

明治
四十一年度

三、五、二、六、七、二、一 円

三、五、九、九、七、〇、九 円

△ 七、六、九、八、八 円

同四十一年度

四、五、〇、四、一、九、七

四、六、八、五、七、七、六

△ 一、八、一、五、七、九

同四十二年度

四、二、四、四、二、〇、四

四、二、〇、四、二、〇、六

△ 三、九、九、九、八

同四十三年度

五、一、四、二、四、四、六

四、八、〇、四、〇、六、六

△ 三、三、八、三、八、〇

同四十四年度

五、七、五、八、一、一、八

五、一、二、四、一、六、八

△ 六、三、五、九、五、〇

大正元年度

六、八、一、七、三、六、三

六、九、六、四、五、九、六

△ 八、五、二、八、六、七

同二年度

七、八、五、二、一、八、五

六、二、八、三、九、九、九

△ 一、五、六、八、二、二、六

同三年度

而シテ一日一哩平均運輸收入、左表、如ク明治四十年

度ニ於テ一日一哩平均十三圓七十銭ナリシモノ大

正三年度ニ於テ、十九圓九銭ニ進ミ時ニ消長ナキニ
非サズ漸次良好ノ成績ヲ示シツツアリ

年度

一日一哩平均運輸收入

明治四十年年度

一三、^四七。

同四十一年度

一六、四八。

同四十二年度

一五、六八

同四十三年度

一八、一四

同四十四年度

一八、八七

大正元年度

一九、八六

同二年度

一九、〇九

同三年度

第一節 工事

建設改良工事ニ関シ統監府鐵道管理局所管後
施設ヲ舉クルハ左ノ如シ

京釜線ニ於テ八國有後直ニ釜山草梁間一哩ノ線路
建設ニ着手シ明治四十一年四月竣功トシ

平南線ハ京義線平壤驛ヲ分岐シ鎮南浦ニ達ス

ル延長三十四哩三分ノ支線ニシテ明治四十二年七月

速成ノ方針ヲ以テ建設ニ着手シ翌四十三年十月其

ノ運輸營業ヲ開始セ

京義線ニ於テハ明治四十二年八月國境鴨綠江橋
梁ノ建設工事ニ着手シ同四十四年十月竣工セリ
該橋梁ハ總延長三千九十八呎ニシテ朝鮮側ヲ第
九連ノ鋼桁ヲ開閉式トシテ船舶ノ航行ニ便ナリ
シメ又橋梁ノ兩側ニ幅各八呎ノ步道ヲ設ケ通行ノ
用ニ供セシム此ノ架橋ノ竣工ニ依リ安奉線ノ
開通ト相待テ南滿州鐵道ト朝鮮鐵道ト聯絡
ヲ全クシ以テ歐亞交通ノ一大幹線タルニ至リ
京元湖南ノ兩線ハ朝鮮開港ノ必要ニ基キ急速建
設ノ要ヲ認メ前者ハ明治四十三年四月測量ニ着

手ニ大正三年八月全線一百三十八哩四分、線路
ヲ開通ス後者ハ特ニ速成ノ方針ヲ以テ明治四十三年
五月測量ニ着手シ大正三年一月ヲ以テ太田木浦間一
百六十一哩三分及裡里ヲ分岐シテ群山ニ至ル支線
十四哩三分ヲ開通シ沿線地方ノ交通状態ニ新紀元ヲ
劃シ富源開發ニ資スル所大ナルモノアリ

咸鏡線ハ咸鏡南道元山ニ起リ咸鏡北道會寧ニ至ル
百七十三哩七分ノ幹線ト輸城附近ニ於テ分岐シ咸鏡
北道清津ニ至ル五哩三分ノ支線トヲ併セ延長三百七十
九哩十八分全線ヲ急速ニ敷設スルコトハ財政上許サ

廿八所ナルヲ以テ先ツ元山ヨリ永興附近ニ至ル三十四哩八分及清津ヨリ會寧ニ至ル五十八哩六分ノ線路ヲ第一期トシ大正三年度ヨリ大正七年度迄ノ繼續事業トシテ其ノ間不急ノ工事ハ成ルヘク之ヲ繰延ヘ元山永興間ハ大正五年度中ニ清津會寧間ハ大正六年度中ニ其ノ營業ヲ開始スル計畫ヲ立テ大正三年四月ヨリ測量ヲ開始シ前者ハ其ノ全區間ニ亘リ後者ハ清津ヨリ金巨里ニ至ル四十哩餘間ノ工事ニ着手セリ而シテ元山文川間十二哩五分ハ本年八月開通ノ豫定ニシテ此ノ區間ノ開通ニ依リ朝鮮鐵

道ハ營業線一千哩ニ達スヘシ

以上新線建設ノ外既成線ニ於テハ京義馬山ノ西線ハ
孰レモ戰時ノ急ニ應ジ特ニ速成セシモノナルヲ以テ概シ
天然ノ地形ヲ利用シ成ルヘク加工ヲ避ケ線路ノ迂回、急
彎配又ハ急曲線數カラズ依テ之ヲ改築シ以テ輸送力
力ノ増加ヲ圖ル必要ヲ認メ各線ニ改築工事ヲ施行
セリ即チ京義本線ハ明治三十八年十月臨時軍用鐵
道監部ニ於テ着手後引續キ施工シ同四十四年十月大
畧完了シ大正元年五月竣功シ其ノ結果全線ヲ通シテ最
急彎配百分ノ一曲線最小半至二十度タルニ至リ馬山

線モ亦明治三十九年五月臨時軍用鑄道監部ニ於テ
其ノ一部ノ改築ニ著手シ南來引續キ施工シ同年
一年四月竣功セルモ猶最急句配四十分ノ一曲線最小
半至十四貫ヲ存シ京釜本線トノ聯絡上不便甚力
ヲサルヲ以テ之ヲ改築シテ最急句配百分ノ一曲線最
小半至二十貫タラシムル爲メ第二次改築工事トシテ
之ヲ施行スル計畫ナリ

京仁線ハ當初米國人ノ設計ニ係リ線路ノ曲折甚シ
キモノアリ之ヲ以テ明治四十一年二月改築ニ著手シ同時
假橋梁ヲ本構造ニ改メ同年十二月三月其ノ工ヲ竣

ヘタリ

平南及湖南線ハ何レモ速成方針ノ下ニ建設シ隧道及
大土工ノ施設ハ成ルヘク之ヲ避ケ停車場ノ設備ヲ簡
易ニシ橋梁ノ如キモ大部分ハ假構造トシ營業ヲ開
始セルヲ以テ各線共速成後引續キ緩急ヲ圖リテ漸
次改築工事ヲ施工シ前者ハ大正元年十一月ヲ以テ大
略完成ヲ告グ後者ハ尙ホ大正四年二月迄ニ廿五哩三分
ノ改築ヲ了シ目下延長廿七哩四分ニ亘リ工事中ナリ
京元線ハ大軌ニ於テ永久的構造ト為シタルモ停車
場ノ諸設備ニ至ツテハ一時的ノモノ尠カラズ又土

工及建物等ノ工事ニシテ未完ノモノアリ此等残工事ハ引續キ施行中ナリ

京釜本線モ亦京義線ト同シク明治三十七八年戰役ノ際ノ速成ニ係リ其ノ最急勾配五十分ノ一曲線最小半徑十五員ニシテ現今歐亞連絡最捷經路トシテ直通列車運轉上及逐年發展セムトスル鮮滿及日支間貨物ノ輸送上多大ノ支障アルヲ以テ線路停車場其ノ他ノ設備ノ改良ヲ要スルモノ多シ即チ清道大邱間ニ於ケル六十分ノ一句配、大邱英江間ニ於ケル五十分ノ一句配、英江天安間ニ於ケル八十分ノ一句配ノ如キ

何レモ最急句配百分ノ一曲線最小半重二十貫ニ改築
スルヲ要シ又京城附近ニ於テハ鮮滿直通列車ノ運
轉ヲ見ル今日ニ於テハ南大門ヨリ直路水色ニ至ル線
路ヲ設ケテ列車運轉ノ整理ト時間ノ短縮ヲ計ル
外南大門及龍山停車場ノ如キ從來ノ設備ヲ以テ
シテハ到底時代ノ要求ニ應スル能ハス配線其ノ他
ニ改良ノ必要アリ又草梁釜山鎮間ニ於テハ旅客及
貨物ノ激增ニ伴ヒ終端驛トシテノ釜山及草梁構内
ニ於テ機關車庫ノ擴張、客貨車ノ停留、入換線貨
物線其ノ他釜山鎮ニ於ケル諸設備ノ擴張ヲ要シ同

時ニ現在草梁工場ヲ他ニ移轉スル等ノ必要アリ然
レトモ一時ニ此等全部ノ改良ヲ實行スルコトハ到底
財政ノ許ササル所ナルヲ以テ先ツ第一次ノ計畫トシテ
其ノ中最モ緊急ナル京釜線中ニ於ケル五十分ノ一勾配
區間タル大邱及英江間線路ノ改良竝ニ京城附近及
草梁釜山鎮間ノ一部改良(主トシテ之ニ充
當スル敷地ノ買収)ノミヲ期シ
該計畫ハ大正七年迄ノ繼續事業トシ既ニ大正三年
度ヨリ著手シ目下大邱英江間改良區域中最モ緊急
ヲ要スル新灘津英江間約七哩二分及若木金泉間
約二十哩四分ノ土工甚ノ他ノ工事中ニシテ若木金泉

間ハ大正四年秋期ニ新灘津美江間ハ大正五年春期
・於テ竣功ノ豫定ナリ而シテ既往ニ於ケル鑄道投資
額ヲ示セハ左ノ如シ

種別	五九年度	甲年度	甲年度	甲年度	甲年度	甲年度	甲年度	甲年度	合計
京釜鐵道	五〇〇・八三	—	—	—	—	—	—	—	五〇〇・八三
買収費	—	—	—	—	—	—	—	—	—
軍事費	五五・二六	—	—	—	—	—	—	—	五五・二六
建設及改良費	—	一〇五・三五	六〇・三三	二五・九八	六二・四〇	八八・六六	一五・七五	八四・三六	五五・四九

水害 復旧費	一四三六六	一六五五	六五三三	二七五五	—	—	—	—	一七五五
災害費	—	—	—	—	—	九五八九	六二八三	—	一七五五
鐵道用品 資金	七五五五	—	—	—	—	—	—	—	七五五五
補充費	一〇六六	六五三	四六三	二五七	一〇九五	三三六六	二五九四	一五五〇	九五九二
合計	六五五五	一〇五五	六〇八六	三〇九〇	六五五五	九五八九	九六五五	一五五五	一七五五

第三節 職員ニ對スル施設

救済組合

朝鮮鑛道ニ於ケル職員救済組合ハ明治

四十三年四月鑛道院職員救済組合ノ一部トシテ開

始シタルモノニシテ同年十月官制ノ改正ニ伴ヒ別ニ一ノ

組合ト爲シ従前ノ組合員ノ資格ヲ兼継セシメタリ

大正二年末現在ノ組合員ハ五千二百六十七人ニシテ資

金總額十八萬五千餘円ヲ有セリ而シテ既往四箇年

間ニ支出シタル金額ハ傷痍救済金二萬三千餘円死

亡救済金三萬八千餘円療養金一萬七千餘円拂

庚金一萬七千餘円合計九萬七千円餘圓ナリ本組合
ノ設定ニ依リ幾多現業員ノ福祉ヲ増進シツ、アルハ
勿論彼等ヲシテ穩健著實ノ思想ト自治自營ノ觀念
トヲ博懷カシムル上ニ於テ好影響ヲ有スルヲ以テ本
年度ヨリハ内地人ノミナラス朝鮮人ニモ此ノ制度ヲ
及ホシ其ノ利便ニ均霑セシムルコトトセリ

教育及慰藉 鐵道從事員ニ對シ鐵道業務上必

要ナ學藝技能ヲ養成スルノ必要ヲ認メ明治三十八
年元臨時軍用鐵道監部ニ於テ鐵道吏員養成所
ノ事業ヲ設立シタルカ明治四十三年ニ至リ改メテ鐵道

局從事員教習所規程ヲ制定シ現ニ本規程ニ依リ業
務運轉ニ科ノ教習ヲ為スノ外別ニ電信修技生ニ鍊
道電氣通信技術ヲ專修セシメツ、アリ又鍊道從事員
ノ精神修養ヲニ資ス且劇務ニ從事スル職員及其ノ
家族ノ慰籍ヲ圖ル爲明治四十年日本基督教青年
會同盟本部ニ於テ朝鮮鍊道青年會ヲ龍山ニ設置ス
ル當リ之ニ對シ適當ノ補助獎勵ヲ與ヘ後前記同盟
本部ト分離シ益々本事業ノ改善擴張ヲ圖ルト共漸
次其ノ會員ヲ増シ現在會員數ハ二千八百五十名其ノ
機關雜誌「朝鮮鍊道青年」ノ發行數ハ三千一百部ニ上

レリ尚下級職員ニシテ勤務ノ餘暇ヲ利用シ勉學セム
トスル者ノ便ヲ圖リ明治四十一年以降龍山ニ鐵道
夜學校ヲ設立セリ現在在籍生徒ハ一百二十六名ナ
リ

第四節 軌道及輕便鐵道

舊韓國政府、許可ヲ得テ敷設シ總督府
設置後鐵道局、監督ニ屬セシメラル軌道
及輕便鐵道ハ左如シ

京城府内電気鐵道

既成

平壤市街車鐵道

同

釜山鎮東萊間輕便鐵道

同

釜山市街及釜山鎮電気鐵道

未成

黃海得永里間平押輕便鐵道

同

而シテ此等事業、監督上準據ハハテ法令ナカリ

三月以迄明治四十五年六月輕便鐵道令並附
屬法規ヲ制定シ又將來敷設ヲ要スル輕便
鐵道豫定線路及朝鮮内ノ奧地ニ於ケル經濟
狀況交通關係及鐵道幹線ト地方市場ト
連絡等ヲ調査セム爲大正元年以降屢々職
員ヲ各地方派遣シテ大正二年度末迄
ニ調査ヲ了セル地方ハ左ノ如シ

一 東萊 廢州間

五一哩三、八

一 慶州 大邱間

四二哩

一 慶州 浦項間

一五哩

一蔚山

長生浦間

六哩六五莫

一裡里

全州間

一六哩

一金州

南原間

三一哩

一三平浦

晉州間

二五哩

一晉州

馬山間

四六哩

一大邱

安東間

七四哩

一金泉

安東間

七七哩

一安東

咸昌間

四一哩

一大田 錦山間

三。哩

一教恩 永同間

三五哩

一晋州 金泉間

一。哩

一咸陽 南原間

二五哩

一吳江 忠州間

六。哩

(鳥致院忠州間)

五五哩

一平澤 長湖院間

七七哩

一水原 驛州間

四五哩

一鳥致院 么州間

一六哩

一論山 公州間

二一哩

一天安 公川間

四九哩

一廣川 鰲川間

九哩

一廣川 龍塘間

四五哩

一德山 瑞山間

一七哩

一洪州 瑞山間

二三哩

一公州 洪州間

三七哩

一小井里 公州間

二一哩

一沙里院 安岳間

三三哩

一載軍海州間

三三哩

一定州龜城間

二六哩

一益中里北鎮間

五九哩

一新安州北院間

二七哩

一平壤順川間

三八哩

一肅川順川間

二一哩

一松汀里南原間

五五哩

一院村肅水間

六四哩

一大邱南原間

三一哩

一光州

社倉場間

四二哩

一貢稅浦

晉州間

一四四哩

一京城

春川間

五八哩

一春川

原州間

五六哩

一原州

忠州間

五七哩

一忠州

江陵間

一四三哩

一松汀里

法聖浦間

三一哩

一羅州

法聖浦間

三五哩

一古幕院

法聖浦間

二九哩

一 井邑 萬浦間

一 萬浦 鎮正里間

總督府設置後今日迄三許可ノ與ハシル線路及既
成現在線路ハ左ノ如シ

一般營業線路

區間

哩數

動力

大邱浦項
東萊長湍間

一一五哩二

蒸汽

裡里金州間

一五五

全

光州松汀里間

八四

全

咸興西湖津間

八九

全

清津羅南間

一二一

電氣

倭館洛東江間

六七

手押

晉州船津間

一三四

全

鏡城羅南間

五〇

全

金堤東津江間

八二

全

計

一八七四

專用輕便鐵道及軌道

區間

哩程

動力

孟中里東四里間

四哩
四四

手押

東倉浦安岳間

五四

全

土里西水羅間

五八

全

平安北道

橋洞東谷間

〇六

全

兼二浦李已井里間

六八

電氣

釜山佐川洞釜山鎮間

〇七

蒸汽

新安州佐川間

一八五

全

計

四六二

現在線路

(開業線)

經營者

區間

延長

動力

軌間

朝鮮瓦斯電氣株式會社釜山鎮東萊間

五八里

二呎六吋

全北輕便鐵道株式會社 裡里全州間 一五、五哩

蒸汽 二呎六吋

日韓瓦斯電氣株式會社 京城府內 一六、〇

電氣 三呎六吋

村井正明外一名 平壤府內 一二

手押 二呎

原米吉 倭館津東江間 〇、七

全 二呎

咸鏡北道廳 鏡城羅南間 五、〇

全 全

計

四四、二

(未開業線)

朝鮮瓦斯電氣株式會社 釜山府及釜山鎮 七、〇
大邱浦項慶州 一二、二
東萊蔚山長湍

電氣 二呎六吋

蒸汽 全

朝鮮電氣株式會社	清津羅南間	二二一	電氣	二呎六吋
光州輕便鐵道株式會社	光州松汀里間	八四	蒸汽	全
慶南輕便鐵道株式會社	慶南小野陰站外十人	全		

咸興炭礦株式會社	咸興西湖津間	八九	全	全
慶南輕便鐵道株式會社	慶南小野陰站外十人	一三四	手押	二呎

金堤軌道株式會社	金堤東津間	八二	全	全
----------	-------	----	---	---

計 一七三、二

(專用線)

金宮萬次郎	黃浦得重間	一六一	手押	二呎一吋	既成
大倉喜八郎	五重東置間	四四	全	二呎六吋	全
麻生鉦業株式會社	東倉浦安岳間	六四	全	二呎	全

東洋金礦會社 梅洞東谷間

二六 全

一次八吋 全

朝鮮起業株式會社 金山河洞金山鎮間 二七 蒸汽 二次六吋 全

三菱金礦會社 華三浦李吉井里間 六八 電氣 全 未成

營林 融土里西水羅間 六八 手押 二次 全

三井礦山會社 新世州仙川間 八五 蒸汽 二次六吋 全

計

五四三

合計

二七一、七

即千輕道鐵道及軌道哩數八四十四哩二分未開業
線一百七十三哩二分此外專用輕便鐵道及軌道五
十四哩三分內運轉也凡七ノ二十三哩二分十リ

第五節 将来ノ方針

鐵道ノ建設及改良ニ付テハ既ニ述ヘタルカ如ク未設
線永興附近ヨリ咸興城津及鏡城ヲ經テ翰城ニ
至ル二百八十五哩六分ノ線路ハ財政上之ヲ第一ニ
期豫定線ニ繰延ヘタルカ現ニ著手中ノ咸鏡
線一部線路ノ竣工（元山永興間ハ大正五年度中營
清津會寧間ハ大正六年度中營
業開始ノ豫定）ノ上ハ成ルヘク速ニ其建設ニ著手
セシコトヲ期ス其他朝鮮全土開發上将来敷
設ノ必要アリト認ムル諸線ニ付テハ目下調
査中ニ属ス而シテ一方ニ於テハ著々既設

線路ノ改良ニ努メ、京釜線改良計畫ノ殘部
馬山線ノ勾配及曲線ノ整理、京義線各停車場
ノ改良、平南線馬山線ノ六十磅軌條ヲ七十五磅軌
條ニ改ムルコト、兼ニ浦支線及寺洞炭坑線ノ改
良、近ク落成セントスル釜山第二棧橋基部ニ
於ケル海陸連絡ニ關スル施設及南大門、龍山
並ニ草梁釜山鎮間ノ各停車場ニ於ケル諸設備、
改良等ハ孰レモ成ルヘク速ニ之ヲ遂行セムコトヲ
期シ、更ニ輸送能率ヲ進メムカ爲時期ヲ計リ、京釜
本支線及京義本線ニ複線敷設ノ計畫ヲ樹テムトス

又以上既定計畫ノ遂行及今後ノ擴張改良ヲ圖ル
・外幹線ノ培養上地方的小鐵道ノ私營敷設
・保護獎勵スルノ方針ナリ

運輸ニ関シテハ益々事務ノ簡捷ト機關ノ充實

トヲ期スルハ勿論一面國際急行列車ノ改善ヲ圖ル

ト共ニ他面ニ朝鮮内地方列車ノ配置ヲ適切ナラシム

漸次車輪ヲ改良增備シ以テ運輸ノ迅速、安全

確實ノ度ヲ高シムトス、急行列車時間ノ短縮

ニ付テハ既ニ京釜京義兩幹線ニ就キ速度試驗

ニ着手セリ國際的運輸ニ在リテハ現今東清、烏

蘇里鐵道トノ日滿聯絡ヲ除キ其他ハ專ラ旅額客
及手荷物ノ輸送ニ限レルヲ以テ將來支那及歐州
諸國トノ聯絡運輸ヲ貨物ニ及ホシ以テ日支及歐亞
貿易ノ發達ニ資スルト共ニ進ニテ米大陸横斷各
鐵道トノ旅客聯絡運輸ヲ開始セントス附帶事
業タル倉庫及旅館營業ハ開始後日尙淺ク未ク
充分ナル成績ヲ舉グルニ至ラスト虽將來益々
之ヲ利用ニ努メ倉庫ハ漸次必要ナル地點ニ増設
シ旅館ハ京城ニ新設セル朝鮮ホテルノ成績ニ徴シ
釜山及平壤ニ於テモ漸次相當ノ施設ヲ試ミムトス

名称	寺内正毅文書
標題	総督府施政歴史相續書類

分類 番号	
	439
	27-iii

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



第

章

林業

第一節

森林山野、整理

朝鮮ノ森林山野ニハ國有私有ノ區分明カナラサルモ
 ノ少カラスト雖大体ニ於テ全土ヲ通シ約一千六百
 萬町歩ノ林野中國有ニ屬スルモノハ八分ノ七ヲ占
 ムルヲ以テ其ノ内國有トシテ存置ヲ要スルモノ
 ト否トヲ區分シ存置ヲ要セサルモノハ漸次民有
 ニ移スノ必要アルヲ認メ明治四十四年十月中要
 存林野選定ノ標準ヲ定メ不要存林野ハ漸
 次之ヲ處分シテ私有ニ移スコトト爲セリ又明治

修正ノ分

四十一年韓國政府、發布セル森林法ニ於テ森林山野、所有者、同法施行、日ヨリ三箇年以内ニ其ノ位置地籍及面積ヲ農商工部大臣ニ届出ツヘク此ノ期間内ニ届出ナキモノ、總テ國有ト看做スヘキコトヲ規定セルモ如何ナル性質ノ土地ヲ私有ト認ムルヤニ就テハ一定ノ標準ナカリシヲ以テ明治四十五年五月古來ノ法令舊慣ヲ考查シ國有私有區分、標準ヲ一定セリ尚ホ不要存林野、内從來地元鮮人ニ於テ禁養其ノ他ノ緣故關係ヲ有スルモノ數カウサルヲ以テ此等ノ林

野ニ對シテハ其ノ緣故者ニ優先權ヲ與フルコト及
私有林野並緣故林野ヲ併スモ尚ホ一戸平均約二
町歩ニ足ラサル地元部落ニ對シテハ緣故者ヲ有セ
サル不要存林野中ヨリ其ノ不足分ニ相當スル面
積ヲ部落林豫定地トシテ區別ニ置クコトト爲セリ

第二節 林野ノ調査

林野整理上最モ急要ナルハ要存豫定林野及不要
存林野中何人ニモ處分シ得ヘキモノ所謂第一種不要
存林野ノ區分調査ナリトス其ノ中營林廠所屬要
存豫定林野約二百二十萬町歩ハ大正二年度ヨリ

大正十一年度ニ至ル十箇年間ニ同廠ノ事業トシテ
調査セシメ其ノ他ノ要存豫定林野約三百八十萬
町歩ト第一種不要存林野概算三百三十萬町歩ト
ノ調査ト本府ノ事業トシテ明治四十四年度ヨリ開
始シ主トシテ權利關係ノ複雑ナル地域、荒廢甚シ
クシテ民間造林ノ急施ヲ要スル地域及河川水源地
ニシテ保護上重要ナル地域ヨリ施行シ來レリ而シテ
其ノ實施ノ方法ハ要存豫定林野ニ對シテハ境界ヲ
定メ標識ヲ設ケ五萬分一見取圖及調書ヲ作製
シ其ノ複本ヲ關係道、府、郡、保護區又ハ警察

官署ニ送付シ第一種不要存林野ニ對シテハ查了後
直ニ造林貸付等ノ處分ヲ要スルヲ以テ各箇所毎
ニ境界ヲ査定シ標識ヲ設ケタル上簡易ナル實測
ヲ行ヒ六千分一地圖及調書ヲ作製シ其ノ複本ヲ
關係道府郡ニ送付ス調査班一組ノ組織ハ内地
人技手一人雇員内鮮人各一人トシ調査班七組ニ對シ
監督技師一人、内業属一人及雇員内地人二人鮮
人一人ヲ置ケリ調査開始以來大正三年七月迄ノ
成績ハ左ノ如シ

年

度

調査組數

查

了

面

積

要存豫定林野

第一種不要存林野

計

明治四十四年度
大正元年度
同二年度
同三年度(七月迄)

計

組		町		町	
二	五、二、二五	一、一、一〇	六、三、三五		
三	三九、九七三	七、二〇九	四七、一八二		
七	一九一、二〇一	八七、〇九九	二七八、三〇〇		
一五	一〇、一〇、一三	五三、四二八	一五四、四四一		
二七	三三七、四一二	一四八、八四六	四八六、二五八		

尚未將來ハ財政ノ許ス限リ其ノ功程ヲ進メ大正六年度迄ニ其ノ餘ノ全部ヲ査了セムトス

私有林野及不要存林野中縁故者ヤルモノ又ハ部落林豫定地トシテ區別ニ置クヘキモノ即チ所

謂第二種不要存林野、査定「前記區分調査及臨時土地調査局、調査、終了セル箇所」隣接セル部分ヨリ着手シ大正十年度迄ニ查了セシメムトス其ノ方法等ニ関シテハ遠カラス別ニ制令ヲ以テ規定セラルヘシ

又未調査地域ニ對シ林野、貸付、賣却又ハ讓與、出願アル場合ニ於テハ地方廳又ハ本府ニ於テ臨時調査ヲ行フ之カ爲大正元年度以降調査班三組ヲ置キ大正三年度ニ至リ之ヲ四組ト爲シ調査セシメツツアリ其ノ調査ノ結果ハ左ノ如シ

年 度	造林貸付	大學演習 林貸付	永年禁養 林讓與	林野賣却	林產物 賣却	計
明治四四年度	二三一四					二三一四
大正元年度	二〇三八五	一〇六〇〇	二四七		三一〇	一二六三二
同二年度	四七六三五	二五八二		五一二		七四〇二九
同三年度	三五六五					三五六五
計	七三八九九	一二七八二	二四七	五一二	三一〇	二〇六五四

第三節 林野ノ處分

林野整理ノ為ニ行フ處分、讓與、賣却及貸付、三種ナリ、讓與ハ地方費及面模範林、學校林及共同墓地用等公益事業ノ為ニスルモノト人民ノ永

年禁養ニ係ルモノトノ二種アリ之ニ関スル調査ハ大部
 分地方廳ニ於テ行ハシメ面積三町歩ヲ超ヘサル共
 同墓地ニ付テハ其ノ處分ヲモ道長官ニ委任セリ大
 正二年度迄ニ讓與處分ヲ爲シタルモノノ件數及
 面積ハ左ノ如シ

種別	明治四十四年度		大正元年度		大正二年度		計
	件數	面積	件數	面積	件數	面積	
地方廣域範林	四件	一四八町	七件	九六九町	八件	五八一町	一九件 一六六九八町
面模範林	一	一	一	一	一	一	一
學校林	五一	二一六	四九	三七〇	九八	九一三	一七四 一四九九
共同墓地	一	二六	三	九	百六二	七、一八六	百六六 七、二二一

永年禁養林

其
，
他

計

三六		
三九。		
三。七	一	二五二
一。九三。	一八	五六四
一二六二四	七	一九九九
一三九七八	五三	五。一九五
一四九六七	八	二。一八。
一六二四八	七一	九七五九

不要存林野中相當林相ヲ爲スモ其ノ育成者ナキモ
及市街地附近ノ如ク造林以外ノ用途ニ適スル箇所
ニ競争入札ニ依リ之ヲ賣却シ公用又ハ公益事業ノ爲
其ノ他一定ノ條件ニ該當スルモノハ特ニ隨意契約ニテ
賣却スルモノトス今日迄ハ未タ此ノ處分ヲ爲シタル件數
及面積極メテ少キモ將來ニ於テハ林野調査ノ結果
不要存ト決定シタル成林地ハ悉ク官ノ保護管理ニ

依ルコト困難ナルヲ以テ必要アルモノハ保安林ニ編入シ若
クハ營林方法ヲ指定シ成ルヘク賣却處分ヲ爲サシム
ル方針ナリ

讓與及賣却處分ニ付スヘキ特殊ノ林野ヲ除キタル做
ノ不要存林野ハ造林ノ目的ヲ以テ貸付シ事業成功シ
タル場合ハ之ヲ讓與スルヲ得ルコトセリ其ノ内縁故
者ヲ有スル林野ニシテ禁養ノ事實アルモ讓與ノ
程度ニ違ヤサルモノニ對シテハ無料ヲ以テ貸付ケ禁養
ノ事實ナキモノニ對シテハ縁故者ニ優先權ヲ與ヘ有
料貸付シ縁故者ナキ林野ニ付テハ地元住民ニ對シテ

優先権ヲ與ヘ又部落林豫定地ハ成ルヘリ其ノ部落全體ノ共同貸付ト爲シ残餘ノ第一種不要存林野ハ何人ニ對シテモ貸付ヲ爲スコトトシ主トシテ事業遂行ノ見込如何ニ重キヲ置ケリ此ノ造林貸付ノ制ヲ設ケタル以來地元民ハ勿論會社等ニ於テ大規模ノ貸付ヲ出願スルモノ比年増加シ其ノ成績大要左ノ如シ

區別	明治四十年度	明治四十一年度	明治四十二年度	明治四十三年度	大正元年度	大正二年度	計
件數(件)	二一	九	一四	五六	三三二	七六六	一、八六八
面積(町)	一二六	一八八	八九〇	一〇二〇	一、六七一	三、四九六	五、七八三

尚ホ本表ノ外大學演習林トシテ大正元年度ニ於テ東

京、京都、九州ノ三大學ニ面積十萬二千町步大正二年
度ニ於テ東北大學ニ面積二萬五千八百八十二町步ノ無
料貸付ヲ爲セリ又舊森林法ニ依リ許可シタル部分
林十六件三千八百十一町步アリ將來林野ノ調査完
了スハニ至ラハ不要存林野ノ大部分ハ之ヲ處理スルヲ得
ヘク朝鮮ノ林野モ茲ニ始メテ整理ノ實ヲ舉クルヲ得ハ

第四節 造林

要存豫定林野ハ沼水上ノ關係最大ナルヲ以テ第一ニ造
林ヲ完成スルノ必要アリ而シテ其ノ面積約六百萬町
步ノ内半ハ成林地ナルヲ以テ此ノ部分ニ對シテハ單ニ

過伐ヲ戒メ保護更新ニ努ムレハ可ナルモ殘餘ノ部分ハ
大抵稚樹發生地ナルカ故ニ此ノ部分ニ對シテハ天然稚樹
ヲ保護シ第一次ノ造林ヲ遂クルコトトシ京城附近ノ魚立
木地約五千町步ニ限リ人工造林ヲ行フコトセリ此ノ人
工造林ノ成績左ノ如シ

年次	普通植栽		砂防工植栽		計		活着割合
	面積 町	本數	面積 町	本數	面積 町	本數	割合
明治四十年 春	九	四〇、六九六	五	三一、五八八	一四	七二、二八四	六〇
同四十一年 春	二一九	九八四一九六	五	一三、〇〇〇	二二四	九九七、一九六	四八
同四十二年 春	一一九	七一九三八九	一三〇	二七、七〇〇	二四九	九九六、三八九	五五
同四十三年 春	一二二	三七四、二五	四、九	五〇、二四、六	五三一	八七六、四三一	七一

明治四十四年
春

大正元年
春

大正二年
春

計

一九三二。	九六	七五八七三。	九六	七七八。五。	九一
五八一。三九八五九	二。	一四九五八二	五三八	一八八九四四一	九二
四五 五八〇。四。	五九	四三四八八	一。四	一。四。一四。八六八	九一
一。三一 三七五七、五五五	七二四	二一六七、一三四	一七五六	五九二四、六五九	一

而シテ今日迄ノ経験ニ徴スレハ朝鮮ノ山野ノ内地ノ如ク土砂ノ崩壊流出甚シカラサルヲ以テ今後ハ多費ヲ要スル砂防工植栽ヲ減シ普通植栽ヲ増加シ以テ造林費ノ増額ヲ行ハスシテ造林力ヲ増加シ得ヘキ方法ヲ執ラムトス
第一種不要存林野ハ其ノ全面積約三百三十萬町歩ノ内成林地約十萬町歩稚樹地約百七十萬町歩ニシテ残

餘、百五十萬町歩、無立木地、見込ナリ此等、既ニ前節ニ述ヘタル如ク資産家、企業ニ委シ造林ノ目的ヲ達セムトス此等受貸者、多クハ直ニ天然稚樹ノ保育ニ着手シ又無立木地及疎生地ニ對シテハ或ハ苗圃ヲ設ケ或ハ苗木ヲ購入シテ盛ニ造林ニ從事シツツアリ又造林企業者ト地元鮮人トノ間ハ從來往々意思ノ疏通ヲ缺キ中ニ紛議ヲ惹起セルモノモアリシカ漸次圓滿ニ進ミツツアリ又第二種不要存林野、其ノ全面積約四百七十萬町歩、内成林地約六十萬町歩、稚樹地約三百八十萬町歩ニテ人工造林ヲ要スル無立木地ハ約三十萬町歩町歩、キス此等、緣故者又ハ地元部落民ニ讓與

若クハ貸付處カヲ行ヒ種苗ヲ下付シ造林方法ヲ指導獎勵セリ而シテ今日迄ニ有料貸付セム五町歩以上ノ林野(多クハ第一種不要存林野)ハ

年 度	件 數	面 積
明治四十一年度	二 一件	一 二 七 町
同 四十二年度	八	一 六
同 四十三年度	一 一	六 九 九
同 四十四年度	三 八	九 五 七
大正元年度	一 〇 五	七 五 六 四
同 二 年 度	四 六 三	二 九 四 〇

計

六四五

三八七六三

ニシテ無料貸付及五町歩未滿、有料貸付
林野（多ク）第二種不要存林野ハ

年 度

件

數

一件

面

積

明治四十二年度

同四十三年度

同四十四年度

大正元年度

同二年度

計

一〇二二一

七七一四

三〇二四

一九

三

一件

一九〇三六

一三五〇

五一一八

六三

一五二

一七三町

ナリ

私有林野、其、全面積約二百萬町歩、内成林地約百三十萬町歩、稚樹地約五十萬町歩ニシテ人工造林ヲ要スル無立木地ハ約二十萬町歩ニ過キス此等無立木地、人工造林ニ對シテハ生長早キ種苗ヲ下付シ漸次植樹ノ進捗ヲ期セシメツツアリ

今民間人工造林ノ實績ヲ表示スレハ左ノ如シ

年 次

植栽面積

植栽本數

明治四十三年春

五〇四町

一九四七〇〇本

同四十四年春

三四八

一〇、六三三、〇〇〇

大正元年春
同 二年春

計

七、一九四	二、一五八二、〇〇〇
一、一六六	三、八三五五、〇〇〇
二、三三四五	七、二五二六、〇〇〇

又私營苗圃ニ於ケル年々、生産成苗數ハ左ノ如シ

明治四十二年度 二、五八〇、〇〇〇

同 四十三年度 五、〇四一、〇〇〇

同 四十四年度 一、六七二四、〇〇〇

大正元年度 二、四八二四、〇〇〇

計

四、四一六九、〇〇〇

即チ植栽事業ニ於テモ亦養苗事業ニ於テモ漸

次進歩セルヲ見ルヘシ

然レトモ朝鮮人ニ由來殖林ニ関スル智識經驗ニ乏シキ
ヲ以テ種苗及技術上ノ補助ヲ與ヘ且ツ實地ニ付之
ヲ指導シ以テ殖林ノ端緒ヲ開ク必要アリ依テ地
方費及恩賜授産金ヲ以テ各地ニ多數ノ苗圃ヲ設
ケシメ地方民ニ養苗ノ方法ヲ教フルト共ニ生産苗木
ヲ下付シテ植樹ヲ促サシメ或ハ記念植樹ヲ行ヒ或
ハ道、面及學校ヲシテ模範林若クハ實習林ヲ設置
セシメ或ハ林業ニ関スル講習講話若クハ實地ノ指
導ヲ行ヒテ愛林ノ思想ヲ喚起シ殖林ノ智識ヲ

與ヘシメツツアリ

大正元年迄ノ地方費及恩賜金苗圃ハ左ノ如シ

年 度

明治三年度

同四年度

大正元年度

種苗ノ下付數ハ左ノ如シ

年 度

明治四十一年度

同四十二年度

地方費苗圃
箇所數 生産成苗數

五
七六、〇〇〇本

七六
八一二、〇〇〇

二六
七、九九四、〇〇〇

恩賜金苗圃
箇所數 生産成苗數

一
一本

四四
二三七、〇〇〇

四八
一、六八四、〇〇〇

計
箇所數 生産成苗數

五
七六、〇〇〇本

一二〇
一、〇四九、〇〇〇

三〇八
九、六七八、〇〇〇

種子ノ下付數

二
四石

三
三
二

苗木ノ下付數

五
〇、六〇〇本

一
〇、八四〇、〇〇〇

同四十三年度	二四九	四九〇五〇〇
同四十四年度	一九三	八九〇〇〇〇
大正元年度	一二九	一四八八五〇〇

又記念植樹數、左ノ如シ

植 樹 數

明治四十四年春

四六五二〇〇本

大正元年春

一〇、一六五〇〇

同二年春

一二四三一〇〇

大正三年春

一三五六七〇〇

將來ニ於テ、地方費苗圃養成、苗木ハ成ルヘク

治山上必要ナル種類ヲ擇ハシメ且ツ私營苗圃ヲ獎勵援助シ植裁本數ノ多クアラムヨリモ其ノ成績ノ善良ナラハコトニ重キヲ置キ以テ健全ナル發達ヲ期セシメントス

現在朝鮮ノ樹木三百余种ノ内林木トシテ價值アル喬木約五十種ニ上ルヲ以テ此等固有ノ天然稚樹ヲ保護スルハ將來ノ林政上殊ニ有益ナルヲ認メ稚樹發生地ニ於テハ先ツ之ヲ保育シテ第一次造林ヲ行ハシム而シテ天然稚樹ヲ保育セムトスレハ之ニ代ルヘキ溫室燃料ノ供給ヲ圖ルヲ必要トスルカ故ニ石

炭、煉炭等、使用ヲ獎勵スルノ外宅地廻り、路傍、河邊、墳墓地等比較的地味肥沃ナル箇所ニ生長神速ナル樹苗ヲ植エシムルコト必要ナリ現ニニセアカシヤ、ホアラノ如キハ大部分其ノ目的ニ供用セラルルモノトス又今後獎勵スヘキ特殊樹種ノ研究、爲大正二年ヨリ林業試験及植物調査ヲ開始シ朝鮮ニ於ケル重要植樹ハ勿論内地、滿州及諸外國ニ産スル有望樹種ニ付炭苗及造林上ノ試験ニ從事シツツアリ

第五節 森林ノ保護

森林ノ保護、造林ト兩立シテ治山上最モ緊要

事項ナルヲ以テ明治四十五年府令ヲ以テ國有森林山野
保護規則ヲ定メ地方長官ヲシテ一般國有林野ノ保護
ヲ爲サシムルコトトシ次テ大正元年二月訓令ヲ以テ警察
官吏ヲシテ地方長官ノ指示ニ從ヒ一般林野ノ保護ニ努
メシムルコトトセルモ經費其ノ他ノ關係上容易ノ事ニ非
ス就中要存林野ノ治水其ノ他ノ關係上最保護ノ周
到ヲ期スル要アルヲ以テ經費ノ許ス限リ漸次重要
ナル箇所ヨリ着手シ森林保護區山林監守所及巡查
出張所ヲ置キ又舊陵園墓所屬ノ森林ニ便且鮮人
囑託及山林監守補ヲ置キ其ノ他ノ林野ニ對シテ普

通警務廳憲ヲシテ地方長官ノ命ヲ奉シ保護ヲ行ハ
シメツツアリ尚ホ區分調査、進行ニ伴ヒ地元人民ヲシテ
森林令第十條ニ依リ保護、責ヲ負ハシムルニ至ラハ其
ノ實ヲ舉クルヲ得ハ

現在、保護機關及其ノ所管國有林野ハ左ノ如シ

機關別	箇所數	保護面積	一箇所平均面積
森林保護區	二。	二八〇、〇〇〇町	一四〇、〇〇町
山林監視所	一二	一八〇、〇〇〇	一五、〇〇〇
巡査出張所	四	一〇、〇〇〇	二五、〇〇
舊陵園墓所屬 森林保護區	二一	三〇、〇〇	一四三

計

五七

四七三、〇〇〇

八三〇〇

尚ホ區分調査ノ進捗ニ伴ヒ保護區又ハ監視所ヲ増
設シ此等森林保護上遺憾ナカラシムコトヲ期ス
森林保護區内ニ存スル不要存林野ニ對シテハ當該保
護吏ヲシテ保護ヲ爲サシメ造林貸付地及部分林ニ對
シテハ地方長官監督ノ下ニ各造林者ヲシテ保護ノ任ニ
當ラシメツツアリ

私有林野ノ保護ニ關シテハ森林令ニ於テ特ニ森林犯
罪ニ關スル罰則ヲ設ケ一方林契其ノ他ノ保護組合
ヲ設ケシメ共同保護ヲ勸奨シ尚ホ火災、虫害等ノ

保護ニ関シテ、地方官憲ヲシテ監督取締、任ニ當
シメ必要、場合、強制シテ此等、保護ニ從事セシメ
ツツアリ古來林野、所有關係甚タ曖昧ニシテ廢
林ノ思想發達セサリシカ近來調査處分ノ進捗ニ
伴ヒ漸次權利關係、確定ヲ見ルニ至リ加フルニ當該
官憲、獎勵指導其ノ歩ヲ進ムルニ從ヒ一般森林ノ
保護保育、其、面目ヲ一新セリ

保安林ノ編入、必要已ムヲ得サルモノニ限ルコトトシ普通
ノ措置トシテ、經濟的ニ林業ヲ經營シ濫伐暴採ニ
陷ラサル程度ニ於テ保安ノ目的ヲ達スルコトヲ期シ禁

止制限、可成寛大ノ方針ヲ執ルコトセリ明治四十一年
 度以降保安林編入ヲ行ヒタルモノ左ノ如シ

年 度

編入箇所

編入面積

明治四十一年度

七 九

二二七九町

同四十二年度

七 八

七〇八七

同四十三年度

一

一

同四十四年度

六

三八八

大正元年度

一 六

六七七四

同二年度

六 三

二〇九八

同三年度

(昭和)

四 六 八

一五〇二

第六節

火田整理及松站蠍驅除

朝鮮ノ森林ヲ荒廢セシメ且ツ殖林ヲ妨碍スル大敵災
災ヲ以テ第一トス現ニ大正三年ノ如キハ百余萬圓ノ立
木ヲ燒損枯死セシメタルノミナラス十餘萬町歩ノ雜樹及
落葉朽土等ヲ全滅セシメ容易ニ恢復シ得サル大損
害ヲ與ヘタリ而シテ林野火災ノ原因明ナルモノ内過半
ハ火田火入ノ延燒ナルカ故ニ火田ノ整理ハ目下ノ急務ナリ
トス然レトモ此ノ事ハ鮮人古來ノ慣習ニシテ俄ニ之ヲ制
止スルトキハ必心ヲ治路ニ苦シムモノ多カルヘキヲ以テ從

來、方針トシテハ危險地、火入ヲ許ササルヲ主義トシ
 森林令ニ於テ警察官吏ノ許可ヲ受クルニ非レハ森
 林又ハ之ニ接近スル土地ニ火入ヲ爲シ得サルコトヲ規定
 シ各地ノ事情ニ應レテ適宜制限ヲ加ヘシメツアルモ其
 成績未タ見ルヘキモノナキハ遺憾トスル所ナリ依テ一層
 其ノ取締方法ヲ嚴密ナラシムル爲目下講究中ニ屬ス
 火災ニ次ク森林ノ大敵ハ松虫蠅ナリ現ニ毎年數十萬
 人ノ賦役ヲ使役シ數萬石ノ害蟲ヲ捕殺シツツアル
 元大正三年ノ如キハ其ノ蔓延特ニ甚シク之カ驅除
 爲既ニ萬餘圓ノ國費ヲ支出セリ

驅除成績ハ九ノ左ノ如シ

年 度

幼蟲捕殺數量

繭捕殺數量

大正元年度

一六、〇、〇、〇

四、〇、〇、〇

同二年度

一九、九、九、七

一、〇、五、三

同三年度

六三、二、七、七

七、〇、〇

計

九九、二、七、四

二、一、五、三

尚ホ大正三年度 蛤蜊蔓延地タル忠清南北道

京畿道、平安南道及慶尚南道に於テハ森林

第十五條ニ依リ驅除及豫防ニ付道令ヲ發布

目下強制的ニ勵行セリ而レテ將來ニ於テハ豫防

方法トシテハアカマツ偏重、慣習ヲ改メ成ルヘク針闊
混淆林ヲ造成セシメ衰勢ノアカマツ林ハ漸次之ヲ
伐除シテ他ノ樹種ニ改メシメ廣大ナル松林ニ地形ニ
應ジテ若干ノ防蟲線ヲ設ケ其ノ線内ノ松樹ハ之
ヲ伐採シテ代フルニ他ノ適樹ヲ以テセシメ又一般ノ松林ニ
對シテハ從來ノ弊風タル落葉ノ採取ト過度ノ切枝
トヲ制限セシムル等ノ方法ニ依ラハトス尚ホ害蟲習
性其ノ他ニ付テモ研究調査スヘキ點數カラサルヲ以
テ相當ノ方法ヲ講スヘシ

名称	寺内正毅文書
標題	総督府施政正史調査書類

分類番号	
	439
	27-iv

国立国会図書館

登録番号	
------	--



第 章 礦業

第一節 礦業法ノ制定及施行後ノ狀況

往時ノ朝鮮ニ於テハ礦業行政ニ関シ何等準據スヘキ
法規ナク礦業ノ許否ヲ爲ス職司亦明確ナラズシテ中央
又ハ地方官憲ハ自由ニ礦業ノ許可ヲ與ヘ爲ニ同一ノ礦産
地ニ對シ前後數人ノ權利者ヲ生ミタル事例稀ナリトセス
又其ノ事業ニ對シ濫ニ課税シ又ハ恣ニ許可ヲ取消ス等
ノ爲礦業經營者ノ權利極メテ不安固ニシテ到底堅
實ナル事業ノ發展ヲ望ムヘカラサル狀態ニ在リタリ
而シテ外國人ニハ礦業ニ關係スルコトヲ許サス國民若シ

外國人ト礦業上ニ付契約ヲ爲スカロギコトアレハ忽チ其ノ
許可ヲ取消シ且嚴罰ヲ加ヘタリシカ日清戰役、後各
外國人ノ要請ニ應シ日英米獨ノ各國民ニ箇所宛、
礦山採掘ヲ特許シ後佛伊兩國人ニ之ヲ豫約シタリ
統監府設置後伊藤統監ハ朝鮮ノ礦業ヲ發展セシムル
ニ先ツ礦業行政刷新ヲ急務ト認ムルト同時ニ外國人
特許礦業者ノ專横ヲ制シ且多數外國人カ前例ヲ引
キテ特許ヲ要請スルヲ防止セムカ爲舊韓國政府ニ勸告
シテ明治三十九年（七月新ニ礦業ニ關スル法令ヲ發布シ同年）九月十五日ヨリ之ヲ施行セシメ且内地
人官吏ヲ招聘シテ其ノ局ニ當ラシメタリ該礦業法ニ

鑛業ノ許可ハ總テ農商工部ノ管掌ニ歸シ許可ハ出願
領ニ依ルヲ原則トシハ宮内府所屬鑛山ニ就テノ例
外ヲ設ケ又許可ヲ取消シ得ヘキ場合ヲ限定シテ處分
ノ公平ヲ期シ且鑛業權ヲ以テ讓渡抵當ノ目的物タルコト
ヲ得レメ資金融通ノ途ヲ開キ尚ホ内外人ニ對シ均シク
鑛業權享有ノ能力ヲ附與シ資金輸入技術利用ノ
機會ヲ與ヘ鑛業稅ニ關スル規程ヲ設ケテ稅率ヲ一定
シ以テ從來ノ弊風ヲ一洗シタリ

日清戰役後舊韓國宮内府ハ頻ニ有望ナル鑛山地方ヲ選
擇シテ帝室ノ所屬ト爲シ其ノ數五十一郡ヲ多クヤニ達セ

シカ徒ニ將來ノ收入ヲ夢想シテ之ヲ採掘利用スル途
ヲ講セズ通ニ奸譎ノ徒アリテ巧言ヲ進ルル時ハ容易ニ
之ニ聽キテ濫ニ廣大ナル特權ヲ付與シ他年ノ禍根
ヲ遺スヲ悟ラサル状態ニ在リタリ是ヲ以テ統監府ノ鑛業
法制定ト同時ニ宮内府所屬鑛山ヲ全部國有ニ移サシ
メムト圖リシモ當時ノ事情直ニ之ヲ廣行シ難カリシヲ以テ
其ノ半ヲ國有トシ二十六郡ノ鑛山地方ハ暫ク舊ニ依リ宮
内府所屬タルコトヲ容認シタルモ其ノ内宮内府ニ於テ直
營セサル鑛山ニ般請願者ニ之ヲ許可スルコトト爲シ其ノ
許可ノ職權ハ農商工部大臣ニ保留シ以テ宮中ノ專恣ナル

同十一年	一四二	二九	四一七五	四三	一六	一五九	一八五	四五	四二三四
同四十二年	二二〇	一五八	一四三九二	九四三	五七	一〇〇	二六三	二二五	一四四九二
同四十五年	三四一	一五八	三〇七五七	九九	一七四	五二七四	四五六	九六〇	三五〇三一
同四十四年	三〇九	一九五	二一五二五	六九	九六	二一六七	三七八	二九一	二三大九二
大正元年	三三四	一五二	一三四九九	六三	五五	一六一三四	五九七	四〇七	二九六三三
同二年	三九五	一七八	五五三八	三〇	三七	五七二	三八五	二一五	一〇六〇
同三年	三三二	一三四	四四七〇	二六	四六	一七二	三五八	一八〇	四五四
總計	二三六〇	一六七一	一一八三七四九	四九八	五三七	二八一〇	六六八	一八〇八	二四六四八二

年次

明治三十九年

同四十年

同四十一年

同四十二年

同四十三年

同四十四年

大正元年

同二年

同三年

鑛

業

砂

鑛

採取

業

合

計

内地人

鮮人

外國人

計

内地人

鮮人

外國人

計

内地人

鮮人

外國人

計

一五

一

一

一六

一一

三

一

一四

七三六

四

一

三

八

九

一九

一〇八

五五

一九

一

七四

一三五

二八

一九

一八二

一六

一五

一

一三二

二九

五

一

三四

一四五

二〇

一

一六六

一四

八九

一三

二四二

四四

一〇

一

六四

一八四

九

一三

五〇六

一〇

七一

八

二二三

一七

五三

一

七一

一三四

一六

九

二九四

一〇

一六

三

一七〇

八九

一四

二

二三

二一九

二七

五

四〇二

一五

七八

三

二三四

四三

四三

六

九二

一九六

一一

九

三二六

一八

一〇

三

二八四

二六

三五

七

六八

二〇七

一三五

一〇

五九二

一八

六二

一

二四九

二八

三一

一

五九

二一四

九三

一

三〇八

砂	雜	石	黑	鐵	銅	金	鑛	總
						銀		計

鑛	炭	鉛	鑛	鑛	鑛	種	(一)	
---	---	---	---	---	---	---	-----	--

							許可鑛區數	一七九
							內地人	五二八
一	一	一	一	一	一	三		五二八
一	七	五	七	九	一	〇		五二
一	一	八	九	八	二	一		一六六
							鮮人	三四二
一			一			一		三九
一		一	一			八		一六
八	六	一	八	九	四	二		七〇
							外國人	一四二
一						一		一七八
六	一	一	六	一	四	三		一四二
							計	一七八
二	七	六	一	一	二	四		六七
四	八	九	〇	〇	〇	九		六六
五			三	七		六		

(大正三年末現在)

合計

七三〇

三四八

四〇

一一一八

(一) 稼行及休業鑛區數

(大正三年末現在)

金銀鑛

銅鑛

鐵鑛

黑鉛

石炭

雜

砂鑛

合計

内地人

稼行 休業

九四 二〇七

一 一二

一六 八二

一三 六六

一一 四七

一三 五八

九 一〇二

一五六 五七四

鮮人

稼行 休業

四三 一三九

一 四

九

一 一七

一 一一

六

二〇 九八

六四 二八四

外國人

稼行 休業

一三九 一一

一 三

一六

一四 六

一一

一三 一

四 一二

二三五 二五

休業

三九七

一九

九一

八九

五八

六五

二〇四

八八三

(木) 鑛産額

年次

金銀鑛

銅鑛

鐵鑛

黒鉛

石炭

雜

砂金

計

明治四十年

五、八、一、九、七

一

七、二、〇

一、五、五、三、八

一、三、三、六、八

四、四、二、八

八、四、五、四、九

六、六、三、三、〇、八、〇

同四十一年

五、〇、四、六、二

九、〇、四、一

三、五、〇、九、二

一、五、三、七、八、七

二、二、三、三、六

七、三、九

二、四、三、五、七、〇

三、五、六、九、〇、七、六

同四十二年

三、三、三、六、八

二、七、二、七

三、二、七、六、三、一、八、一

五、七、四

二、五、五、八、四、四

一

五、二、六、九、六

四、五、八、七、六、一、五

同四十三年

四、六、一、五、五

二、四、八、八

四、二、四、六、二、一、五、三、四、七

三、八、八、七、八、一

一

八、二、一、六、九

六、〇、六、七、九、五、二

同四十四年

四、三、三、四、三

六、八、四、一

一、六、九、九、八

二、六、九、〇、六、五

五、三、九、九、七

六、三

五、九、一、六、一、八

六、一、八、五、九、五、八

大正元年

五、四、三、五、五

六、六、四、一

一、六、八、四、五

三、三、四、〇、九、九

五、五、七、八、一

一

六、七、〇、六、九、二

六、一、一、五、一、一、三

同二年

六、六、三、三、三

三、七、六、三

二、三、三、九、七、四

五、五、八、六、三

五、七、〇、一、五、七

三、一、九、三

九、七、〇、二、〇、五

八、一、九、七、五、二、一

同三年

六五五三

一七〇五

七六六三

一七八三

九七九二

二一九三

五五五五

八四六六

四九

(大正三年礦産額(類別))

內地人	鮮人	外國人	總計
金銀鑛	二二六三	二二七二	六四三五
銅鑛	一一二	一五九四	一七〇五
鐵鑛	二六六六	一	二六六六
黑鉛	一七、七八	四四六	一三六
石炭	七三九六	一	七三九七
雜	二四八六	一	二四八六
砂金	三五五七	一八八九	五四四六
計	六六八四	三二〇五	九八八九

礦産物、朝鮮ニ於テ消費セラルルモノ極メテ僅少ニシ

テ多クハ輸移出セラルル現狀ナルカ今輸移出價額ニ依リ

礦業發展、趨勢ヲ窺ハ公ニ明治四十年即チ礦業

法施行、翌年中主要礦物ナル金、銀、銅、鐵、黑鉛
 及石炭、輸移出價額、四百八十餘萬圓ニ過キサリシ
 モ、八年後、大正三年ニ至リテ、一千一百三十餘萬圓ニ達
 セリ、累年ノ統計ヲ掲クシハ左ノ如シ

年次	金銀鑛	銅鑛	鐵鑛	黑鉛	石炭	計
明治卅年	四、三六四 <small>円</small>	六、一〇七 <small>円</small>	五、七九六 <small>円</small>	一、九三九 <small>円</small>	一、五九六 <small>円</small>	四、三六四 <small>円</small>
同卅一年	四、七八五	七、四七二	一、六八八	九、六九五	四、五二六	五、三五一 <small>円</small>
同卅二年	六、四四一	六、四一八	一、四九〇	一、五〇九	二、三三七	七、一三八 <small>円</small>
同卅三年	六、九二七	六、三五七	三、五九八	一、四二六	三、六四九	一〇、三五六 <small>円</small>
同卅四年	九、三六九	七、八八	二、七八六	一、三二九	三、七六四	一〇、一五七 <small>円</small>

大正元年度	九四八、四六四	三〇七五	三一、六八八	一六五、二七九	三三四三八一	一〇、二六六、七八七
同二年度	一、三七八、八四〇	一	三四八、五九二	二四八、八六八	三九七、七九七	一、六三、四、六一
同三年度	一、二四九、九六	一	四一八、四四四	一九二、一八七	四九八、一八四	一、六三、一、五五三

前記鑛産屈出額ト輸移出額トノ間ニ毎年著シキ差異アルハ主トシテ金銀ノ産出額ニ關スルモノニシテ其ノ主因ニ密採取及屈出ノ不正確ニ依ルモノト認メラルルカ取締、普及ニ伴ヒ逐年遞減ノ趨勢ヲ示セリ

第二節 鑛床調査及試掘

朝鮮ニ於ケル鑛床賦存ノ状態ヲ明ニシ鑛業ノ

開發ニ資スル目的ヲ以テ明治四十四年度ヨリ毎年臨時
ニ鑛床調査ヲ施行シ大正三年末迄四箇年間ニ於テ
左ノ地方ヲ調査ニ終リタリ

平安北道 一圓

平安南道 一圓

黃海道 一圓

咸鏡南道 一圓

咸鏡北道 一圓

京畿道 一圓

江原道 一圓

忠清北道永同郡堤川郡、一部

忠清南道青陽、洪城郡、舒川郡、一部

慶尚北道尚州郡、一部

慶尚南道昌原郡及咸安郡、一部

全羅北道全州郡

如上調査ノ結果各地方ニ於テ幾^概多重要ナル鑛床ノ

賦存スルヲ認メタルモ其ノ大部分ハ未ダ採鑛ニ着手セ

ズ又、鮮人ノ姑息幼稚ナル操業ニ委セリ鑛種ハ金銀

ヲ最モ主要ナルモノトシ鉄、無煙炭、銅、鉛、亜鉛、黑鉛、褐

炭、硫化鐵之ニ亞キ尚重石、水鉛、水銀、錫、鑛石、綿

雲母、滑石等アリ又裝飾用材トシテハ朝鮮玉、大理石
等アリ主要ナル鑛産地方ヲ舉グルハ金銀、平安北道
ニ於テ義州、朔州、昌城、宣川、龜城、雲山、寧邊、各
郡、平安南道ニ於テ平原、順川、兩郡、黃海道ニ於テ
遂安、延白、兩郡、咸鏡南道ニ於テ新興、安邊、永
興、各郡、慶尚北道尚州郡、京畿道ニ於テ楊平、
驪州、兩郡、忠清北道永同郡、忠清南道ニ於テ青
陽、洪城、兩郡等著セリ鐵ハ平安南道价川郡、黃
海道ニ於テ安岳、殷栗、載寧、海州、黃州、各郡
江原道ニ於テ旌善、三陟、兩郡ヲ主要地方トシ其

、鑛量頗ル多ナリ無煙炭ハ平安南道ニ於テ大同伏
川、順川、德川、孟山ノ各郡ニ敷延スルモノヲ以テ主ナル
ノトシ尚江原道三陟郡ニ於テ稍大ナル地域ヲ占ム
ノ之ニ次キ前途大ニ望ヲ囑スルニ足ルヘシ銅ハ咸鏡南
道甲山郡銅店、咸鏡北道會寧郡梨津、慶尚南
道昌原郡九龍山、平安北道原昌郡等ニ於テ見
ルノミナリト雖甲山銅店、鑛床、其ノ品位竝鑛量
ニ於テ朝鮮中ノ白眉タルヘシ鉛及亜鉛ハ平安北道寧
邊郡蘇民洞、咸鏡南道端川郡北斗、面棟德等ニ
於ケルモノ囑望スヘシ黒鉛ハ平安北道ニ敷延セル結

晶質黒鉛及咸鏡南道永興郡及定平郡、忠清
北道沃川郡、慶尚北道尚州郡、江原道江陵郡、
於ケル土狀黒鉛ヲ以テ主要ナルモノス。褐炭、平安南道
安州郡及朝鮮東海岸ニ沿テ所々ニ散在セルモノアリ
其ノ質良好ナリト謂フヲ得スト雖モ鑛量ノ多大ナル
ト運搬ノ便利ナルトハ之ヲ償ウテ餘アルヘリ今後益利
用ノ途ヲ開拓スルニ至ルヘシ硫ヒ鉄、著シキモノ、黃海
道黃州郡、平安北道龍川郡、咸鏡南道文川郡ニ
在リ尚稀金屬ノ鑛物ニ就テハ重石鑛、江原道金
剛山附近及忠清南道青陽郡ニ存スルモノハ望ヲ囑

スヘク其、他發見セラレタルモノ少カラス水鉛鑛モ重石鑛ト
共生スルモノ所々ニ發見セラレタリ又咸鏡南道端川郡ニ
雲母及朝鮮玉、主要ナル產地ニシテ雲母ニ將來漸次利用
セラルルニ至ルヘク玉ニ其ノ美觀ヲ呈スルト大材ノ得易キ
ヲ以テ技術ノ進步ト共ニ益々其ノ事業ヲ振興スルニ
至ルヘシ明治四十四年鑛床調査開始以來調査ノ結果
ハ時々印刷ニ付シ之ヲ發表セリ

大正二年三月十二日本府告示第五十九号ヲ以テ官ニ保
留ニタル鑛山地域ニ於テ鑛床ノ良否多寡ヲ確知シ以テ
經營方法ヲ定ムルカ爲先ツ二箇年間金鑛床ノ試掘

ヲ開始スルニ決シ大正三年度ノ臨時部鑛亦調査費ヲ
増額シ尚州、義州及新興ノ三箇所ニ鑛務課出張所
ヲ設ケ大正三年六月ヨリ之カ試掘ニ着手セリ事業着
手以來同年末迄ニ至ル事業概況左ノ如シ

(一) 尚州 本試掘地ハ約二十五方里ノ區域ヲ含ム作業、
便宜上尚州川ヲ界トシ北部ト南部トニ分テ南部
區域ヲ四區ニ分テ各區ニ探鑛所ヲ設ケ各所三名
乃至四名ノ現場担当員ヲ配置シ坑夫ヲ督励シ
各鑛脉ノ走向ニ沿テ其ノ延長、脉幅及品位ヲ確
メ試掘、價值アリト認メタル鑛脉ニ對シテハ水準坑

道及鑛坑ヲ開掘シ地下ニ於ケル鑛脉、連續厚
及含金品位ヲ知り確實ナル鑛量計算ノ基礎ヲ
作リツツアリ而シテ北部區域ニ對シテ別ニ探鑛員
ヲ派遣シ未知鑛床ノ露頭發見ニ從事セシメ居レリ地
表探鑛ヲ了ヘタル鑛脉一百二十八條其ノ總延長二十
三萬九千六百六十尺ニシテ坑道掘進總延長一千五百
二十八尺ニ達シ大正三年十二月末現在鑛夫員數ハ八
十七人ナリ

(一) 義州

本試掘區域ハ二百平方哩ニ達シ三箇所ニ探鑛所

ヲ設ケ地表及地下、探鑛ニ從事ス既ニ發見セル鑛脉
ハ二百餘條坑道掘進ニヨリ地下探鑛ヲ行ヘルモノ五
七條ニシテ其ノ坑道總延長三千五百九十八尺地表探
坑鑛ニヨリ堀割ヲ施セルモノ二十九萬六千六百六十
立方尺ニ達セリ大正三年十二月末現在鑛夫員數ハ
二百十四人ナリ

(二)新興 本試掘區域、咸興郡及新興郡ニ跨リ
最も長距離東西十二里半、南北十七里ニシテ其ノ面
積約一百四十平方里ニ達セリ現今六個所ニ探鑛所
ヲ設置シ地表、探鑛及地下、試掘ニ從事ス既ニ

發見シタル礦脉ノ露頭、約六百箇所ニ達シ其ノ内
試掘ニ値ル礦脉約五十條ヲ算セリ事業者手
以來大正三年十二月末ニ至ル間試掘坑道ノ掘進
二千七百三十三尺ニシテ露頭掘開ノ箇所又頗ル多シ
大正三年十二月末現在、礦夫人員二百九十名ナリ

第三節 主要礦山概況

朝鮮、金礦山最モ多ク無煙炭、鐵及黑鉛礦山之
次、金礦山、最タルモノ、(米國)東洋金礦會社ニ屬ス
ル平安北道雲山金礦山ニシテ之ニ次、タルモノ、同シ、米國會

社京城鑛業會社ニテ經營セル黃海道遂安鑛山ナリ
トス朝鮮山産金總額、約五割、此、兩鑛山ノ産出係
ル佛國人、昌城金鑛山及(米國會社)稷山金鑛山モ亦
將ニ大規模ノ採業ニ移ラントセリ又現時試掘セル古河
合名會社、龜城^{金鑛山}モ將來相當ノ規模ヲ有スル主要
鑛山タルニ至ルヘシ

無煙炭、朝鮮ニ於ケル主要ニシテ且特有ナル礦産物ノ
ニ屬シ其、優越セル特性、豊富ナル炭量ト相俟チテ將
來莫大ナル需用ヲ増加スヘク又同時ニ朝鮮各種工業
ノ發展ヲ促進スルニ至ルヘシ平壤無煙炭田、朝鮮總

督府平壤鑛業所ノ經營ニ屬シ採掘ニタル石炭ノ九割ハ德山海軍煉炭所ニ送給ス同所ニテハ之ヲ煉炭ニ製造シカ「チ」炭ノ代用ニ充テリ此ノ外無煙炭田ハ价川、順川、德川、孟山、諸郡ニ布衍シ品質優良ナルヲ以テ之ヲ力利用方法ノ研究ト共ニ開發ノ促進ヲ見ルニ至ルヘシ鐵「三井」鑛山株式會社所屬平安南道价川鐵山、三菱合資會社所屬黃海道載寧及黃州ノ鐵山、農商務省所屬黃海道飯梁及載寧鐵山、麻生鑛業合資會社所屬安岳鐵山ヲ最著名トス現在ニ於テハ單ニ八幡製鐵所ノ約十六七萬噸ヲ農商務

省、載寧、殷栗、鐵山及麻生鑛業合資會社、安岳
鐵山ヨリ供給スルニ過キサレトモ有望ナル鐵鑛產地ハ以上
、外海州、利原、北青及江西等ニモ散在セルヲ以テ兼ニ
浦三菱製鐵所、本溪湖製鐵所及遼蘭製鐵所
ノ需用アルニ至ラハ產額著シク増加スヘシ

黑鉛、平安北道ニ敷延セル結晶質黑鉛及咸鏡南
道永興、定平、二郡忠清北道沃川郡慶尚北道
尚州郡ニ於ケル土狀黑鉛ヲ以テ主要ノモノトス主トシテ
内地、鑛業家ニ依リ採掘セラレ結晶質黑鉛ハ全部内
地、需用ニ供シ土狀黑鉛ハ主トシテ海外ニ輸出ス銅ハ甲

山銅山ノ外現時ニ於テ未タ望シ属スヘキモノヲ見ス亜鉛
藤田組ノ經營ニ属スル蘇民亜鉛礦山ヲ最トシ諸所ニ
發見セラレ内地亜鉛製鍊所ノ需用ヲ充タレテ餘アリ
金・銀・銅・鉛及亜鉛、混合鑛、現時稼行セラルルモノ
極メテ稀ナリト雖南鮮地方ニ多ク賦存スルカ故ニ朝鮮
ニ於ケル乾式製鍊、發達ト共ニ之カ開發ヲ見ル遠キニ
非ルヘレ

今大正三年中産額多クナル各鑛山、概況ヲ見ルニ左
如シ

(一) 金

位置平安北道雲山郡一丙
鑛業人米國會社オリエンタル・コンソリデーテッド・マイニング・カンパニー

、

大正三年七月一日前一箇年鑛產額^價三、三七三、七五九、五〇。

採鑛所大岩里坑、橋洞坑、鎮後坑、極洞^坑北坑、極城洞
南坑、極城洞中央坑、極城洞熙川坑、龜岩坑、及燭台
峯坑、九坑、分レ廣袤約二千二平方里餘ニ亘レリ
大正三年七月一日前一箇年間、開鑛金延長方如シ

採鑛所名	堅坑	妻橫坑	補助橫坑	縱入坑	坑井	計
大岩里坑	七 ^尺	三九一六 ^尺	一三〇一 ^尺	六三六 ^尺	元三六 ^尺	一〇、〇八六 ^尺
橋洞坑	一	二五九二	二六六五	一五四	三二九二	九九九三
鎮後坑	一七	二五五九	三二六	五九七	元四五	五、四四四
極城洞北坑	一	七三	一	三四	一	一〇七

同南坑

1

1

1

一一〇

七九

ヤ一八九

同中央坑

1

1

七五

1

四九

一二四

同熙川坑

1

二四

1

一七五

二八七

七〇六

龜岩坑

八九

二七九

三九九

七四六

一三六

三五四九

燭臺峯坑

1

二九三

三三

八九

八六六

二一八一

計

二〇三

二七五六四七九九

五二三一〇四九〇

三二三七九

以上、採鑛坑道、外探鑛、爲開鑿金之坑道、延長ニ

五四八尺ヲ合スルトキハ三四九二尺ニ達ス採掘ニタリ鑛石

坑内ニ於テ手選ヲ爲シ搗鑛混永場ニ送り混永シ

泥鑛ハ更ニ青化製煉場ニ送り收金ス搗鑛混永

場、大岩里、橋洞、極城洞、龜岩及燭臺峯、五箇所ニ
設テリ、搗鑛鐵杵、總數、二百四十基ナリ、大正三年七
月一日前、一箇年間、搗鑛石數量、三十萬一千一百六十二
噸ニシテ之ヨリ收得タル地金、價格、二百七万二千一百
三十五圓五十四錢ナリ、青化製鍊場、大岩里、橋洞、極
城洞、龜岩及燭臺峯、五箇所ニテリ、大正三年七月
一日前、一箇年間、各搗鑛混汞場ヨリ結付テ得タル
混鑛、三万五千十三噸ニシテ之ヨリ得タル地金、二百
三十万一千六百十九圓九十六錢ナリ、前掲本鑛山一箇
年ノ鑛産價額、上記混汞及青化、二様、製鍊

方法ニ依リ收得セル地金、総價額ナリトス
 今大正二年七月一日ヨリ大正三年六月末日ニ至ル一箇年
 間ニ於ケル各採礦所ノ出礦高及其價額等ヲ擧
 示スルハ左ノ如シ

採礦所名	一箇年出礦高	一噸平均含金價格	實收百分率	一箇年製出金、價格
大岩里坑	一二六、〇〇二噸	一四、六二	八、三	一三、五、六、三、八
橋洞坑	九、五、七、六、七	一、一、七、四	八、六	九、六、八、九、一、四
礦後坑	二、六、六、二、〇	八、七八	八、七	二、九、七、九、〇、四
極城洞北坑	九、四、九、七	一、一、五、六	七、五、三	八、三、八、九、四、〇
同南坑	四、九、七、〇	九、一、〇	七、五、一	三、三、九、八、一、四、四

同中央坑
同熙川坑
龜岩坑
燭臺峯坑

計

鑛石ノ平均品位、十萬分ノ一、ニナリ鑛石一噸ニ對スル
總收入及總支出ノ割合ヲ示セ、左ノ如シ

收

入

支

出

一、一八三	一、一、一四	七、五、六	一、〇、〇四五、三八
六、七、九三	七、一、〇	七、四、	三、五、六三、九、三四
三、三、五五、二	二、〇、五二	八、六、二	九、九、三、五、九、八、四
七、七、七八	二、五、四〇	八、六、三	一、七、〇、四九、一、三四
三、〇、一、六二	一、三、七、〇	八、一、一	三、三、七、三、七、五、五、〇

搗鑛地金
青化收金

六、八、八
四、三、二

搗鑛地金
搗鑛泥永費

三、九、六
一、一、二

賣店利益

一六

青化收金費

六四

雜收入

一〇

礦石運搬費

〇二

機洞廢礦堆積所再收入

〇四

諸般費用

八六

機洞焚炭許可第九章
礦區探礦費

〇六

營繕費

七〇

計

一一五

七三六

本礦山ハ去ル明治二十九年ノ特許ニシテ南芥今日

ニ至ル迄十九年間ノ採礦量ハ三百五十三萬七千三百

七十八噸ニシテ其ノ價額四千三百八十三萬九千八百廿四

十九錢ナリト謂フ之ヲ右礦所別ニ区分スルハ左ノ如シ

自 余 出 鑛	東 谷 坑	鷹 峯 坑	龜 岩 坑	鎮 後 坑	極 城 洞 坑	橋 洞 坑	大 岩 坑	泥 踏 里 坑	採 鑛 所 名
------------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------------	-------------	-------------	------------------	------------------

鑛石噸數

價額

一五二六三二	一一〇八九三一	一〇六三六九〇	五三九一〇二	二一四四八七	三六八五九一	一七一五〇	四三一四	三一
三〇三六九五五	一四〇八二四三五九八	一六七七七七八六七	四六九三五五四六	二一〇八八四九六	五〇五五五五五六五	二五五三四六八三	二五七四三四八六	一五五〇二〇

東燭臺峯坑
附屬鑛山

計

三八、八八九	九、六三三、八八八
二九、五六一	七、六三三、五九〇、七五
三、五三七、三七八	四、三八三、九八〇、五一九

採鑛製鍊及其他雜役ニ從事スル者ハ主トシテ朝鮮人ニシテ其ノ數約二千人アリ鑛業管理人ハ米國人アルフレット、ウエルヘブシニシテ此ノ外七十餘人ノ外國人アリテ會社ノ事務ニ執掌セリ

(二) 金

位置 黃海道遂安郡
鑛業人 英國會社フレアシ、シンジゲート、リミツテツト
實際經營者米國會社「ソウル、マイニング、コムパニ」

大正三年中、鑛産價格

金

九七〇、四三九、三五^円

汰物

四三、九二四、一六

鑛石

五〇四〇、〇〇

計

一四、七四〇、五一

採鑛場ハ遂安邑ノ北方ニ屹立スル彦真山ノ北麓傍
洞ニテリ製鍊場ハ傍洞ノ北半里石遼里ニ在リ本鑛
山ニ至ル主要ノ道路ハ平壤ヨリ祥原邑栗里ヲ經テ
遼^ニスル^ニモ^ノニシテ其ノ間十七里牛馬車ヲ通ス鑛石ハ石
灰岩中ニ接觸鑛物主トシテ透角閃石及矽灰鐵鑛
ニ伴フ黃鐵鑛及班銅鑛ヲ含有スルモヨリ成リ其ノ

主要礦物ノ配置、最モ不規則ナリ而シテ常ニ微量、
蒼鉛ヲ含有ス平均合金品位二十万分ノ二内外ニシ
テ混汞製鍊ニ實收率、百分中六十乃至七十ナリト
謂フ坑内ニ十二封度軌條ヲ布設シ鑛石ハ各探鑛
場ヨリ鑛車又ハ捲揚機ニテ坑外ニ搬出ス坑口ヨリ
製鍊場ニ至ル約一哩間、坑内ト同様、軌條ヲ
布設セリ坑内ニ於ケル捲揚機ポンプ用ノ原動力
ハ空氣壓搾機ヲ用フ製鍊、搗鑛混汞及淘汰法
ヲ併有用ス碎鑛機四臺搗鑛杆十。五十封度、モ
四十基其、他混汞箱汞面銅板、鑛尾箱等ノ設

アリ原働力ニ百五十馬力及十五馬力ノ二蒸汽機関
及四十馬力ノ電働機ニ依リ供給ス汰物ノ鑛石五噸余
ニ對シ一噸ヲ得ル割合ニテ其ノ内ニ金銀ノ外百分中平
均銅二十五蒼鉛一五ヲ含有シ全部英國リヴァーブル
ニ輸送シ製^煉業者ニ賣却ス同地ニ於ケル汰物一噸ノ價
ハ平均二百九十三圓三十五錢ナリトテ永和金ハ平均金分
四十五ヲ含有シ之ヲ製鍊シテ品位千分中八百二十九乃
至八百三十ノ青金ト爲シ大坂造幣局ニ輸納ス採鑛
及製鍊ニ要スル原働力ノ燃料ハ從來新材ヲ用ヒ來リ
タルモ伐採地ノ漸次遠カルニ伴ヒ價格昇騰セシヨリ電

カヲ以テ遂安鑛山全体ノ働カニ充テムカ爲曩ニ平壤ニ發電所ヲ建設セリ

尚五年前ヨリ試掘ニ從事シツツアリシ彦真山南麓大千面楠亭金鑛ハ愈々稼行スルコトニ決定シ英國ハ一ゲンジエ式製鍊機(一日平均三百噸處理)ヲ備付ケ大正四年七月ヨリ産金ノ豫定ナリト謂フ役員ハ代表者米國人エーエラチコールアラシノ指揮ノ下ニ内鮮人二十餘人外國人二十餘人アリ鑛夫約一千人ヲ使役セリ

(三)金

位置 忠清南道天安郡外三郡
鑛業 樸山鑛業株式會社

大正三年中ノ鑛産所得

四七五・五九五兩

混汞製鍊ニ依ル收得金

四七五、五九二、四三。

淘汰製鍊ニ依ル收得金

六八、五六三、〇〇。

青化製鍊ニ依ル收得金

五八、九二五、六二

砂金部收入(鑑札料金)

一七、〇五八、〇二

合計

六二〇、一三八、九四

採礦所、砂長洞、堂谷、文珠洞、青橋及楊村ニ在リ

派出所、鍛冶工場、火工工場、汽機及汽罐場ノ設アリ

豎坑、熟シモ二坑道ニ區劃シ、一、礦夫ノ昇降用トシ

他、排水揚礦及材料運搬ニ供シ運搬坑道ニ十二封度

ノ軌道ヲ敷設ス。横坑ノ總延長、四萬七千四百九十尺

豎坑、總延長二千五百三十一尺ニ達ス通風ハ各坑道内約百
尺毎ニウイングヲ開通シ自然通風ニ依ルニ時ニ人力吹子ヲ
使用シテ空氣ノ流通ヲ補フコトアリ 鑽孔器ハ砂長洞及
堂谷、西坑ニテハ氣壓鑽孔器及人力鑽孔器ヲ併用ス
製鍊所ハ會社本店所在地タル天安郡笠場面良笠里
ニアリテ搗鑛場、汽機汽罐場、鍛冶工場、鑄物場、諸
建設物ニ分ル大工場、倉庫、機械工場、青化製鍊
所及鑄物場、諸建設物ニ分ル製鍊ハ混水及青化
ノ二法ヲ併用シ混水ニ碎鑛機三臺一千二百五十封度
立、搗鑛杆三十九臺淘汰機十六臺ノ備アリ 青化

原液槽十個湯槽十個、金液槽二個、沈澱函二個、液溜一個、設備アリ

製煉原動力用トシテ、各一百二十五馬力、煙管式、汽罐三個、三百馬力、横型複式エンジン不凝縮汽機一箇ヲ備フ、
坑外交通良好、事務所ヨリ、京釜線成歡駅ニ至ル三里間、三
間幅道路ヤリ又天安駅ニ至ル四里、間、二間半幅道路
アリ、孰レモ平坦ニテ馬車ノ通行自在ナリ

役員、事務長米國人セルムゼー、アチン、下ニ内地人三人、
朝鮮人一人、外國人十四人アリ、鑛夫雜役夫ハ内地人二十人、朝鮮
人一千一百三十五人、外國人六人アリ

四金

位置、平安北道昌城郡、東倉面、大倉面、青山面、
南倉面、社面、青の面、
鑛業人、外國人、ハ、エム、サル、タ、ム、

大正三年中、鑛山收入

七七一、九六二円二〇

本鑛區、初メ鮮人ニ依リ姑息ニ稼行セラレタリシカ大正
元年十月以降佛國人「ロンドン」ノ經營ニ移リ稍大規模
ニ操業セラレルニ至リ、搗鑛杵三十臺、混汞場及青化收
金場等ノ設備アリ大正三年十二月以降青化收金場
ニ接續シテ泥鑛收金場ヲ設ケタリ大正三年中、開鑿
工程、延長八千二百六十五尺ニ達シ近年事業ノ擴張
ヲ示ヤリ大正三年中、收入ヲ細別スレハ左ノ如シ

混汞製鍊ニ依ル地金
青化製鍊ニ依ル地金

ニ、六九、三六、七、四、七
四、七、〇、五、二、七、四、七、三

鮮人可徴る掘鑛水車收入

一八、九、六、四、八、四

附属鑛山收入

一、五、七、二、四、八、〇

分所收入

二、七、二、二、四、〇、三

甲岩鑛山收入

六、九、四、六、五

在庫品前期より繰越

一、〇、五、〇、四、六、八

合計

七、七、一、九、六、二、四、〇

大正三年中操業ニ要セシ一切ノ費用ハ四十五萬四千九百六十二円二十五銭ニシテ差引三十萬六千九百九十九円九十五銭ノ純益アリト謂フ

役員ハ支配人ホーンバレーガース以下外國人十七人内地

人三人朝鮮人四人リ勞役者七百六十名ヲ算ス

五金

位置 忠清北道槐山郡曾坪面清塘面
鑛業人 英國會社(ウーエー・ゴールド・イン・スリ・マイン)

大正三年六月三十日前一箇年鑛產價額 五四〇三五円〇〇

大正三年六月三十日前一個年、開鑿延長、豎坑道

及鑛押坑道合セテ二千六尺其ノ他五千六百七十三尺合

計七千六百七十九尺アリ、搗鑛場、大正二年七月十九日工

事ニ着手シ十月末落成シ十二月ヨリ始業ニタリシカ

搗鑛機ニ缺點アリ種々ノ故障ニ遭遇セリテ之ヲ撤

廢ニ新ニ米國ヨリ取寄セタル新式十杆立搗鑛

機ヲ以テ之ニ代ヘ大正四年三月ヨリ運轉ヲ開始セリ青

七製鍊場「大正三年九月一日ヨリ開業セリ」

本礦山鑛石一噸當採鑛及製鍊ノ費用「一箇月一千

噸ヲ處理スルノト假定シテ、如シト謂フ

種別

一噸當費用

開坑費用

三四六〇

採鑛費用

二四〇〇

混永製鍊費用

三四一〇

青化製鍊費用

一四〇〇

計

九四七〇

本會社「資本金約七十四萬四千圓」ニテ本店ヲ倫敦

ニ支店ヲ朝鮮ニ設ケ役員ニ支配人「エチ、エス、ワイゴン」以
下外國人三人朝鮮人二人勞役者約五十人ナリ

六 金銀銅鐵礦

位置黃海道長洲郡樂道面梨那連井面
礦業人 山林藤右エ門

大正三年中ノ產額

金 一〇、一五五匁
銀 一、六〇九匁
五、四七四匁
一、二六〇匁

本礦山第三三三ノ礦區、明治四十一年八月一日ノ許可ニ係

リ大正元年十月二十四日元礦業權者増田正丈ヨリ本權

利者ノ經營ニ移リ大正元年十二月十二日該礦區ヲ増區

スルト共ニ隣接地ニ第二四四ノ礦區ノ許可ヲ得在

來、礦區ト合併經營行ハルニ至リ

探礦及製鍊 現時尙探礦ノ時代ナルヲ以テ閉鑿

如キモ輕易簡便ヲ主トシ專ラ手掘ニ依リ鑛孔ヲ穿テ
爆藥ヲ用ヒ掘進セリ創業以來現時ニ至リ探鑛坑道
凡坑井ノ總延長ハ四千七八尺ナリ

探鑛ニ依リテ得タル鑛石ハ坑内ニ於テ手選ヲ爲シ製
鍊場ニ送り混汞及青化法ニ依リ收金ス

事務所及製鍊所ハ長洲郡樂道面十五里洞ニナリ

掘鑛裝置ハ四百五十封度十挺立掘鑛機及之ニ要
スル十八馬力瓦斯發動機碎鑛機各一臺並クイスタ

ー淘汰盤ヲ据付テ青化製鍊裝置ハ徑十加尺深

サ四尺角形コンクリート製滲出槽三個ヲ基座トセシ

設備ヲ以テ試製鍊ニ着手セシカ結果良好ナリシヲ以
テ更ニ洩出槽二個ヲ増設シ尙本年ハ泥礦處理爲
空氣攪拌電氣收金法ヲ採用シ之ニ伴フ諸般ノ
設備ニ着手ノ稔定ナリト云フ

役員ハ内地人九人鮮人十四人計二十三ナリ礦主雜夫一
百四十四人ヲ使役セリ

交通及運搬 西南一里半ニ長洲邑アリ日常用
品ノ供給及通信ハ之ニ依ル西南三里半長洲河北
岸ニ碑洩浦アリ此ノ間道路平坦重^土大貨物ノ運搬
ニ適シ鎮南浦及仁川ヨリ帆船ノ便アリ又南方六里ノ

海岸ニ德洞港アリ 鎮南浦仁川間ノ定期郵船寄港
地ナリ

七 鐵

位置 黃海道安岳郡龍門面安岳面天山面
鐵業 麻生鐵業合資會社

大正三年中ノ產額

五六七・噸

七六九〇月六日

本礦區ハ明治四十年九月十二日ノ許可ニ係リ元礦業權
者麻生音波ヨリ麻生昇外一名ニ讓リ渡シ大正二年九月
十六日本權利者ノ怪當ニ移シ採礦所ハ第一号山第二
号山第三号山及第五号山ノ四箇所ニ分ル採掘ハ露
天掘ト坑道掘ヲ併用シ選礦ハ手選ナリ

第三号山ハ近來湧水多量ニシテ品位劣等且ツ多量

ノ黄鐵礦ヲ随伴シ到底緣行ニ堪ヘサルヲ以テ大正三年
五月限リ採礦ヲ中止シ其ノ他ハ皆緣行中ニシテ第一蹄
山及第二蹄山ニ横置双筒捲揚機ウヲシントン型唧筒
及原働機トシテ直立舶用汽罐各一台完ヲ備フ

坑内運搬ノ方法ハ各水平坑道ニ十二封度軌條ヲ敷設
シ礦石ハ水製約一噸積礦車ヲ手押ニテ斜坑迄運搬
シ斜坑ヨリ捲揚機ニ依リ坑外ニ搬出ス

各採礦所ヨリ河岸貯礦場ニ至ル距離ハ一哩乃至二哩ニ
テ水製一噸積礦車合計一百台ヲ以テ人力ニ依リ原
礦ヲ貯礦場ニ運搬シ人力ヲ五十噸乃至八十噸ノ解

船二千隻(統計一千二百噸)積載し潮流、干満時ヲ

利用シテ貯礦場ヨリ約七哩載寧江支流東倉浦河
ヲ下リ大同江鉄島ニ碇泊セル會社所屬ノ汽船ニ移載
シハ機幡製鐵所ニ輸納ス

役員ニ支配人藤本元次郎以下二十三人アリ
礦夫四百零
六人ヲ使役セリ

ハ鐵 位置黃海道殷栗郡北下面道里面
礦業ノ農商務省(經營相當者富田儀作)

大正三年中、産額 五、六、五、一噸 九、八、二、四噸

採礦ハ露天掘ニシテ特種ノ設備ナリ選礦ハ手選ナリ現
場ヨリ海岸金山浦迄ハ輕便鐵道ニテ搬出シテ同所ヨリ海

路約四哩ヲ距ル中継貯鑛場タル青洋島迄解船ニテ
輸送假リ陸揚ヲ爲シ本船寄島ノ際更ニ解船ニ依リテ
本船ニ移載シ八幡製鐵所ニ送り製鐵ノ原料トス

九鐵位置 黃海道載寧郡左里面三叉江面
鑛業 農務省(陸軍省)西嶺鑛部

大正三年中ノ産額 六七七六九噸 一〇五六〇七円

採鑛掘露天掘ニシテ選鑛ハ手選ナリ但漸次採掘ハ深部
ニ進ミシラソテ捲揚機械ニ依リ鑛物ノ搬出方法ヲ圖リ
現場ヨリ載寧江岸迄輕便鐵道約一哩四千五鑽間ヲ
人力ニテ運搬シ同所ヨリ下流約二十哩ノ鐵島錨地迄解
船ニテ輸送シ本船ニ移載シ八幡製鐵所ニ送り製鐵

原料トス

十里鉛

位置、咸鏡南道永興郡長興面
山下善三郎

大正三年中、産額

五〇九〇、〇〇斤

五〇、九〇〇円

鑛層、狀態ニ依リ坑道掘ト露天掘ヲ併用ス採掘シテ

儿里鉛素鑛、儘販賣ス

本鑛山生産品、大部分内地ヲ經テ歐洲ニ輸出スルモノナルカ

時局發生後一時輸出杜絶シタルニ依リ採掘ヲ休止シタレ

トモ爾後幾許モナク輸出ノ途開クルニ至レリ

十一、魚焰炭

位置

平安南道大同郡江東郡一面
朝鮮總督府

大正三年中、産額

無煙炭

二、五四五噸

六、一三八、一〇円

六、九六五噸

五、八五九、九〇円

採炭、寺洞及高坊山、二箇所ニ區分シ寺洞、三坑ニ二十馬
力乃至二十三馬力、電氣兩鼓胴撈揚機各一台ヲ備ヘ風
坑ニ一分間三万一千六百立方呎、排氣ヲ爲シ得ル二十三馬
力ノシロツ式電働扇風機ヲ備ヘ高坊山ニ十馬力並流
兩鼓胴撈揚機各一台ヲ備ヘ風坑ニ一分間一万九千立方呎、
排氣量アル十馬力ノシロツ式電働扇風機ヲ備フ運
炭、寺洞採炭場ニ於テ、切羽ヨリ負入箱ニテ軌道片盤
ニ運ビ炭車ニ入シ坑外ニ撈揚ケテ貯炭場ニ運フ高坊山採
炭場ニ於テ、切羽ヨリ貯炭場迄、寺洞ト同様ニテ貯炭
場ヨリ二十馬力ノエンドスロープ及二十五馬力ノ「ブライヘンド」

式複線架空鐵道^索ニ依リ美林駅ニ運ッ而シテ寺洞駅
及美林駅ヨリ鐵道貨車ニ續江ニ大部今、鎮南浦ニ輸送
シ更ニ汽船ニ依リ德山海軍煉炭製造所ニ供給シ一部
煉炭ニ製造シ若クハ粉炭、儘民間ニ賣却ス寺洞ニ於テ
ハ原動力トシテ二百五十馬力汽罐^{三台及二音馬}一臺ヲ備ヘ發電場ニ百
五十キロワット三相交流發電機及十五キロワット勵磁機二臺
アリ煉炭工場ニ百馬力、單汽筒汽機一臺アリテ十時間
五十瓩^{及湯水即商用半馬力}煉炭ヲ製造ス尙金剛石試錐機修理工場用十五
馬力誘導電動機並唧筒七臺電話機五十個ヲ備ヘ
其他修理工場、鑄物工場及木工工場アリ高坊山ニ於テ

ハ原動力に全部蒸気汽機ニシテ四十馬力一台二十五馬力三
台十五馬力二台ヲ備ヘ唧筒ハ總テ「ウオシント」型ニシテ六
台ヲ備フ煉炭ハ「ヒツチ」製、外需要者ニ於テ價格低
廉ナルヲ希望スル爲試ニ特種ノ粘土入ヲ製造セ之ヲ試焚
セシ二本煉炭ハ「ヒツチ」製、如キ燃燒上、臭氣及煤煙ナク
價格稍低廉ナルヲ以テ大ニ需要者、希望ニ適シ製品ノ
賣行頗ル良好ナリ

十二 石炭

位置 平安南道安州郡立石面
鑛業人 明治鑛業株式會社

大正三年中ノ産額

一四、四二六噸

六〇、四二九円

開鑛方法ハ柱房法ニシテ二本ノ主要斜坑ト左右一條ノ軌

道布設坑道トテ何レモ人力ニ依リ掘進開鑿ス炭層南
西方ニ傾斜シ平均十一度三十分ノ傾度ヲ有ス原動機ハ二八
八馬力コルシエニ式汽罐三台軍汽甬横置汽機一台ノ設
アリ排水用トシテ十四吋及十吋「スペンシヤルポンプ」各二台ヲ坑
内ニ設ニ据付排水ニ從事セリ運炭ニ主要運搬坑道本部
及片盤ニ六十二封度軌道ヲ布設シ容量七百五十斤入炭
車ニ積込ミ人力ニ依リ軌道上ヲ本部迄運搬シ捲揚汽機
ニ依リ坑口迄曳揚ク坑口ヨリ清川江支流平湖川岸岐山里
ニ至ル運搬道路ハ曲折迂回シ石炭運搬ニ適セザリシヲ以テ新
ニ直通運搬道路ヲ開通シ之ニ六十二封度軌道ヲ布設シ牛力

依リ半噸入炭車數函ヲ連結曳引セシメ岐山里船積場
於テ約十石積、解船ニ移載シ各地ニ輸送ス陸路市場
ノ運炭方法トシテ坑所ヨリ京義線萬城駅ニ至ル輕便
軌道ヲ布設スルノ必要アリ目下之ヲ設計中ナリ

十三砂金

位置

平安南道平原郡自德面龍興面東部面
鎭野 係一即

大正三年中ノ産額

七〇、五九、五九

二九、三三、一五

採取地ニ重ニ水田ニシテ稀ニ畑地ヲ交ヘ砂金地表二十尺乃至三十
五尺下ニ俗ニ甘土ト稱スル黄色又ニ青色ノ粘土ヲ交フル砂
礫層中ニ存在ス大正三年一月八日より德太ト稱スル朝鮮人請
負人、使用セシ鑛夫ヲ收容シ直營採取作業ヲ開始シ其

洗鑛法ハ在來、朝鮮式洗鑛法ニ改良ヲ加ヘ淘汰收
金ト大正三年十二月末日現在、直營鑛夫ニ七百十人
採取許可地内一部、採取ハ德大ニ許シ德大、配下ニ屬シ
元軍ト稱スル一等鑛夫ヨリ一箇月金八分人夫ヨリ一日二分
徴收ス土地ハ德大ニ於テ土地所有者ヨリ買収又ハ借地スルモ
ニテ大正三年十二月末日現在、德大使用、鑛夫ハ二百八十
一人ナリ

名 称	寺 内 正 毅 文 書
標 題	間島問題關係

分 類 番 号	
	439
	28

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

開島關係

開島上新條約
領事裁判權
意見

第十八号

拜啓

炎暑之候、候々成、
以不憂、此書、
故、早、知、上、陳、以、貴、
要、核、一、別、紙、
通、一、意見、書、以、
本、科、迄、提出、
以、付、一、紙、以、
下、水、が、一、実、日、
目、下、郡、守、原、誠、
之、日、迄、多、忙、也、
如、此、所、以、後、

寸暇を初用して

赴きしところ

はくち一帯に大体

の方針を固くし

の要記述を

もし男は先次分

二次の方針を採る

こととおかしく

定員を減らし

市町村自治体所

に赴きしところ

以信之
同山石堅之時
結智閣下二事
之二回由目方
之去際陶瓦中
界之堅硬者
唐見者亦以此
揮棄之者
之取：簡易之
統次之太簡係
之故每子此方
之注意之事
之了界之

お笑覧。得る水
交更ふ下石に
點より追て上
申あけ
第一次及第二次は
外務省と同意に
かきもち何等かの
形式として本村に
領事館に現在以
上、密接に
いふことが出来
小都府に

暑中道 泊る程

周知の時と見計る

閑島を渡り去遷

乃か板しる現現

查の如く出徳する

小産支るる事

小 子貝

七月一日

符白次来

兒玉島長岡下

篠田治策提出

河内水

間島ノ状態改善ニ関スル意見

篠田 治策

總督

三

河内水 河内水 河内水 河内水 河内水



明治四十年八月間島ニ統監府派出所ヲ置キ韓民
保護ニ着手スルヤ清國政府モ亦大官及多數ノ兵
真巡警ヲ派遣シテ對抗的施設ヲナシ幸毎ニ派出
所ヲ壓迫シ動モスレハ事端ヲ惹起セシメタル
モ派出所真ハ上司ノ訓令ヲ守リ隱忍自重ノ態度
ヲ執リ此等ノ妨碍ヲ排除シテ着々韓民保護ノ實
ヲ擧ケ韓民亦翕然トシテ帝國官憲ノ保護ニ信賴
シ且ツ韓國カ數十年來解決シ能ハサリシ間島ノ
領土權所屬問題モ帝國ノ威力ニヨリ解決スルニ
至ルハヤナ喜ヒツツアリシカ明治四十二年八月
安奉線改築問題切迫ノ際政府ハ他ノ滿州ニ於ケ

ル諸懸案ヲ解決スル爲交換的ニ間島ノ領土權ヲ
拋棄シテ派出所ヲ撤退シ派出所莫カ二年餘ニ互
ニ辛苦經營ノ效果モ遂ニ水泡ニ歸スルニ至リ
一別冊就監府臨時間島派出所紀要参照
間島問題ヲ解決シタル「間島」ニ関スル協約帝國ニ
保留シ得タル權利ハ

一龍井村局子街頭道溝百草溝ニ領事館若ハ領事
館分館ヲ設クルコト

二間島韓民ノ居住ヲ准シ其ノ所有ノ土地家屋ハ
清國人民ノ財産ト同様ニ保護セラルルコト

三吉長鐵道ヲ會寧ニ延長スルコト

四豆滿江沿岸ニ場所ヲ撰ニ渡船ヲ設テ双方人民

ハ兵舂ヲ携帯スルコトナク自由ニ往來し得ル
コト

等ニ過キス然モ其ノ領土権ハ全然清國ニ讓步シ
豆滿江ナル歴史上ノ名稱スラ圍伺江トシテ清國
ノ主張ニ同意シ殊ニ韓國カ帝國ノ保護ト爲ラサ
ル以前ヨリ清國內ニ有シタル治外法権スラ一清
韓條約ニ依リ相互ニ治外法権ヲ有シタリ一閩島
内ニテハ維持スル能ハスシテ清國地方官ノ裁判
ニ服従シ納税其ノ他一切ノ行政上ノ處分ヲ受ケ
旧來ノ慣習タル伏木及塩ノ輸入ヲ禁マラシ輸入
品ニ對シ^{清國}關稅ヲ課マラシ^{清國}至シリ即チ閩島ヲ
自國^{清國}ノ領土ナリト信シタル韓國ノ見地ヨリスレハ

韓國領土ノ約十分ノ一ヲ清國ニ割讓シタルモノ
ニシテ宗○主權國タル帝國ヨリ見シハ閩東州租借
地ニハ倍シ國防上經濟上決シテ之ニ劣ラサル重
要ナル保護地域ヲ喪失スルモノナリ
而シテ石ノ如キ大讓歩ヲナシ交換的ニ清國ヲシ
テ帝國ニ讓歩セシメタル案件ハ左ノ如シ一端州
ニ関スル協約参照
（一）滿鐵ノ併行線タル新民屯法庫門間ノ鉄道敷設
ハ日本ニ商議スルコト
（二）大石橋營口間ヲ技線ヲ南滿鐵道ノ一部ト認メ
其ノ末端ヲ營口市街ニ延長セシムルコト
（三）撫順煙台炭鑛ノ採掘權ヲ認ムルコト

四安奉線及南滿洲線ノ鑛務ハ日清合辦トスルコ
ト

以上ノ内ハ日清協約ニ南滿洲ト併行スル幹線
又ハ該鉄道ノ利益ヲ害スヘキ枝線ヲ敷設マサル
コトノ約束アリ曰大石橋營口間ノ枝線ハ露國カ
既ニ敷設シ經營セル線路ニシテホーツマウス條
約ニヨリ其ノ權利ヲ承継スヘキモノ曰撫順煙臺
ノ炭鑛ハ全然東清鉄道ノ利益ノ爲メニ經營セラ
レタルモノナルニヨリ本創ツマウス条約及日清
條約ニヨリ當然ニ歸屬スヘキモノニシテ戰後
關東州ニ於ケル外國人私有財産整理委員モ一秋
山參事官モ委員ノ一人ニシテ小官モ亦其ノ末席

ナ 考 文 リ 一 又 亦 所 究 調 査 ノ 上 右 ノ 如 ク 決 定 シ タ
ル モ ノ ニ シ テ 四 ナ 除 キ 殆 ニ ト 問 題 ト ナ ル ヘ キ モ
ノ ニ 非 ス 故 ニ 清 國 カ 帝 國 ニ 讓 歩 シ タ リ ト 調 フ モ
其 ノ 實 ハ 多 ク ハ 既 ニ 當 然 帝 國 カ 亨 有 シ タ ル 權 利
ニ 過 キ ス 世 人 動 モ ス レ ハ 元 來 間 島 問 題 ハ 韓 國 側
ニ 於 テ 理 由 ノ 乏 シ キ モ ノ ア リ 故 ニ 其 ノ 讓 歩 ハ 止
ム ナ 得 リ リ シ モ ノ ナ リ ト 唱 フ ん モ ノ ア ル モ 事 實
ハ 決 シ テ 然 ラ ス ハ 官 ノ 學 術 問 題 ト シ テ ノ 公 平 ナ
ル 研 究 ニ ヨ レ ハ 間 島 ハ 決 シ テ 清 國 ノ 領 土 ニ ア ラ
ス 亦 韓 國 ノ 領 土 ニ モ ア ラ ス シ テ 兩 國 ノ 何 レ ニ モ 屬
セ サ リ シ 中 立 地 帶 ナ リ キ 而 シ テ 中 立 地 帶 ノ 區 域
ハ 間 島 ナ 包 容 シ テ 更 ニ 左 ノ 地 域 ニ 及 ヘ リ

一 南方ハ鴨綠江及ヒ豆滿江ヲ以テ界トスルコト
二 西北方ハ興京ノ東教里ノ地點ヨリ鳳凰城ノ西
ニ至ル邊境ヲ以テ界トスルコト
三 北方ハ輝發河附近ヨリ老爺嶺山脈ヲ以テ界ト
スルコト

四 東方ハ揮春河ト嘎呀河ノ分水嶺即テ老爺嶺ノ
支流ヲ以テ界トスルコト

以上ノ範圍カ兩國ニ屬セサリシ中立地帯ナリシ
コトハ歴史上法理上ノ確實ナル論據アルモ繁ク
辯ケ之ヲ省クハ必要アルハ後ニ提出スル即テ間
島ト同性質ノ地域ハ鴨綠江北方地方ニ及ヒシモ
間島問題ノ當初ヨリ自頭山定界碑ニ「西爲鴨綠東

爲土門^レアルヲ論據トナシ領土權ヲ主張シタルカ
故ニ鴨綠江北方地方ハ爭議ノ中ニ入ラザリキ而
シテ小官モ亦帝國ノ利益ノ爲メニ間島カ韓國ノ
領土タルヘキヲ唱ヘ同僚ト共ニ屢々其ノ證據ト
ナルヘキ材料ヲ調査提出シタルコトアリシモ領
土說ノ論據ニ固ヨリ薄弱ナリシカ故ニ韓國側ノ
主張ノミヲ見テ其ノ理由ノ乏シキヲ唱フンモノ
アリシト雖トモ同時ニ清國側ニテモ其ノ領土說
ヲ維持スヘキ論據ハ極メテ薄弱ナリキ即テ間島
ニ對シテ清韓兩國共ニ對等ノ地位ニ在リ決シテ
獨リ韓國側ノミ理由ニ乏シカリシト謂フ能ハリ
ルナリ故ニ其ノ領土權ヲ確走スルニハ前記中主

地帶ノ一半ヲ清國ニ屬セシメ他ノ一半ヲ韓國ニ屬セシムルヲ以テ最モ公平ナル解決方法ナリト信ス即チ鴨綠江北方地帶ヲ清國領土トセハ豆満江北即チ間島一帯ハ當ニ韓國ニ屬マシムヘキモノナリキ外交ハ時ニ弛張アリ必スシテ理論的ニノミ歸看スヘキモノニ非サルカ故ニ今日間島問題ヲ回顧スルハ死鬼ノ齡ヲ数フルニ同シキモ其ノ損失ハ何シノ日カ之ヲ恢復セサル可カラサルカ故ニ既往ノ事實ト雖トモ之ヲ調査研究ニ以テ新局面展開ノ資料トナスヘク又時機ノ来スヘキアルハ常ニ稅地歩ヲ進ムルノ覺悟アルヲ要ス

明治四十二年間島問題ノ解決シタル際統監府臨

時間島派出所ハ間島ノ領土権ハ例令清國ニ屬ス
ルモ居住民ノ多数ハ帝國政府ノ保護スヘキ韓國
民ニシテ殊ニ間島ハ北韓ト最モ密接ノ關係ヲ有
スルカ故ニ其ノ連絡ヲ有テ統治上適切ノ方法ヲ
講スルノ必要ナルヲ認メ別紙ノ如キ意見ヲ提出
シタルコトアリキ（當時齊藤所長ノ談ニヨレハ
東京ニテ面會ノ際桂總理大臣ハ大体ニ於テ同意
ヲ表セラレタリト）然レトモ右ノ意見ハ韓國併合
ニヨリ國情ニ一大變化ヲ来シ實行ノ遲ニ至ラス
コテ止ミタリ其ノ他間島領事館ニ於テ國交上支
障ヲ来ササル範圍ニ於テ派出所ノ施設ヲ襲踏シ
韓民保護及其ノ發展ヲ企圖スル手段ヲ採ルヘキ

意見ヲ外務當局者ニモ開陳シタリシカ領事館開
設以來今日ニ至ルマデ、經過ヲ看ルニ不幸ニシ
テ其ノ施設ハ消極的ニ失シ朝鮮人ハ日ヲ追フテ
増加スルニ拘ラス其ノ保護ハ殆ニト等閑ニ附セ
ラルルノ觀アリ殊ニ動モスレハ不逞ノ徒、逃避
地トナリ朝鮮統治上甚タ寒心ニ堪ヘサルモノアリ
（最近平安南道ニ於テ一僧侶カ寺有財産ヲ檀
= 横領處分シテ西間島ニ逃レタルモノアリ又職
務執行中ノ一郡書記ニ抵抗シタル一無賴漢カ官憲
何ソ恐ルニ足ラン吾人ハ間島ニ逃レシノミト
豪語シタルモノアリ事小ナリト雖モ^{一部}朝鮮人鬼怨ノ
一端ヲ窺フル足ル）加之朝鮮併合ニヨリ前記間

島ニ関スル協約ニヨル解人ニ對スル支那ノ裁判
權ハ朝鮮ニモ明治二十九年、日清通商航海條約
適用セラルル結果トシテ當然消滅セラルニ拘ラス
今日迄依然トシテ支那ノ法權ヲ行使セシメタル
カ如キ既往數年間其レテ帝國ノ主權ヲ損傷セ
ラルルニ任セタルニ似タリ
日清通商航海條約ニヨリ帝國臣民ハ支那領土内
ニ於テ治^外法權ヲ有ス朝鮮併合ニヨリ間島協約
ニ於テ謂韓民タルモノハ皆帝國臣民トナリ國內法
ニ於テハ内地人ト朝鮮人トヲ區別スル法規アリト
雖トモ國際法上韓民ナルモノ無キニ至レハ明カ
ナリ

又一面ニ於テ間島ニ於ケル支那官憲ハ依然トシ
テ横暴ナル態度ヲ改メス例令ハ内地人ノ旅行者
ヲ誰何シ恐怖ノ念ヲ起サシムル爲内地人ニシテ
間島ニ往来シ事業ヲ企圖スルモノ尠ク数年前ニ
比シ更ニ發展ノ状況ナシ一申村會計検査官ノ直
話ニ昨年同官ヲ間島ニ入りタル際支那官衙前ヲ
通過スル際ニハ必ス誰何シテ名刺ヲ要求シ且ツ
門前ハ下馬シテ徒歩セシメラシタリト帝國官更
ニ對シテスラ尙ホ然リ普通人民ニ對スル態度知ル
ヘキノミ()内地人ハ斯ノ如ク恐怖ト不快トニ堪
ヘス間島ニ發展スルモノ尠キニ反シ朝鮮人ノ増
加ハ著シキモノアリ明治四十二年四月派出所ノ調

查ニヨレハ朝鮮人八萬二千九百九十九人（外ニ
支那人二萬七千三百七十一人）ナリシカ大正ニ
年四月ノ調査ニ關東都督府ノ調査ニヨレハ概數
十四萬人ニシテ四年間ニ約五萬七千人ヲ増加
シ毎年一萬四千入増加ノ割合ナカ故ニ現在ニ
於テハ少クトモ十六萬餘人ヲ算スルハ明カナリ
一鴨綠江北方其ノ他ノ滿州ニ在ル朝鮮人ヲ合ス
レハ大正二年四月關東都督府ノ調査ニヨルニ二
十七萬七千〇四人ヲ算ス故ニ本年ハ既ニ三十萬
ヲ超ユヘク即チ朝鮮ニ永住スル内地入ノ數ト殆
ニト相同シ

此増加ノ趨勢ハ日支新條約ニヨリ居住營業ノ自

由ヲ得公然土地ヲ所有スルヲ得ルニ至リシ故ニ
益々擴大セラルヘク近キ將來ニ於テ南滿州シ
部ハ殆ント朝鮮内地ト同様ナル状態ニ至ルヘ
シ

以上説述マルカ如ク間島ハ朝鮮ト特種ノ關係ヲ
有シ住民ノ大部分ハ帝國臣民ナルカ故ニ之カ統
治ニ關シ適切ナル施設ヲナスハ目下ノ急務ナリ
殊ニ今回ノ日支新條約ニヨリ南滿州ニ於ケル帝
國ノ地位ハ一大發展ノ機運ニ到看シタルカ故ニ
間島ノ狀態ヲ改善スルニハ最モ好機會ナリ日支
新條約中ノ「南滿州及東部内蒙古ニ關スル條約」
ヨリ南滿州ニ於テ帝國ノ獲得シタル權利ハ

一 租借權及鐵道期限、九十九年延長

二 各種商工業又ハ農業經營、爲必要ナル土地ヲ

商租シ得ルコト

三 自由ニ居住往来シ各種ノ業務ニ從事シ得ルコト

ト

四 日本人被告タル場合、^{民刑}訴訟ハ我領事館ニ於

テ裁判セラルルコト

五 日支人間ノ土地ニ関スル民事訴訟ハ兩國ノ共

同審判ヲ受クルコト

六 吉長鐵道ニ関スル根本的改訂

等ニシテ其ノ他覺書ノ交換ニヨリハ鑛山ノ採掘

權ハ鐵道敷設資金ノ先議權ニ政治財政軍事警察

顧問ハ先ツ日本人ヲ僱聘セシムル權ヲ承認セシ
メ土地ノ商租ナル字義ニハ三十箇年迄ノ長キ期
限附ニテ且無條件ニテ更新シ得ヘキ租借ヲ含ム
コトヲ確約セシメタリ而シテ前記條約第八條ニ
ヨリ滿州ニ關スル日支現行各條約ハ此條約ニ別
ニ規定スルモノヲ條ノ外一切従前ノ通り實行ス
ヘキ旨ヲ定メタルカ故ニ間島ニ於テモ新條約ヲ
適用シ尙ホ旧條約ノ利益ヲ併テ享有シ得ヘキニ
至シリ即チ旧條約ハ大部分新條約ニヨリテ改訂
セラシタルモ土地所有權ノ如キハ商租權ト區別
シテ共ニ行使セラルルカ如シ
日支新條約ハ南滿州全部ニ行ハルルモノニシテ

間島ハ其ノ一部ナルカ故ニ特ニ之ヲ他ノ地方ト
區別シテ論スルノ必要ナキカ如キモ、間島ハ前ニ
説明シタルカ如キ關係ヲ有シ且ツ殆ニト朝鮮内
地ト同様ニ朝鮮人多數居住シ朝鮮統治ニ大利害
ヲ有スルカ故ニ最モ嚴密ニ條約上ノ權利ヲ行使
シ積極的ニ鮮人保護ノ實ヲ擧ゲ萬遺算ナキヲ期
セサルヘカラス
因テ此際大要左ノ如キ方針ヲ定メ之カ實行ヲ期
スルヲ最モ緊要ナリト思料ス
一 間島駐在ノ領事ハ（安東領事モ亦同シ）朝鮮
ノ事情ニ通シ法律ノ智識アル者ヲ特ニ任命ス
ルコト

一 従来領事カ朝鮮總督府事務官ヲ兼任シタル制
ヲ改メ總督府事務官ヲシテ領事ヲ兼任セシム
ルコト換言スレハ前項ノ如キ人物ヲ總督府ヨ
リ派遣シテ領事トナスコト
二 會寧ニ覆審法院支廳ヲ置キ間島ヨリノ上訴書
ヲ受理スルノ便宜ヲ計ルコト
三 領事館警察ヲ擴張シ領事裁判權ノ運用ヲ資セ
且ツ非日鮮人ヲ取締ルコト
四 朝鮮ノ新政ヲ了解セシ鮮人有カ者ヲ利用シ間
島鮮人ノ啓蒙ヲ圖ルコト
五 鮮人ノ集團地ニハ學校ヲ設ケ朝鮮内地ト同様
ニ完全ナル教育ヲ施スコト

七、在留舞入ノ異動ヲ明ニシテ其ノ保護ヲ確實ニ

シ支那官民ノ凌虐其ノ他權利ノ侵害ニ對シテ

ハ一步モ譲ラス充分ニ我保護ニ信頼セシムル

ノ手段ヲ採ルコト

八、適當ナル區域ヲ劃シテ朝舞入ノ團體ヲ組織セ

シメ支那ノ主權ヲ害セサル程度ニ於テ自治ニ

類スル制度ヲ行ハシメ領事保護權ノ行使ニ便

ナラシムルコト

九、支那ヲシテ我國ヨリ警察及財政ノ顧問ヲ僱聘

セシメ治安ヲ維持シ及公平ナル課税ヲナサシ

ムルコト

十、膏テ統監府派出所カ着手シタル農事試作場及

商工業調査ヲ續行シ内縣人ヲ指導スルコト
十一 局子街及龍井村ニ商品陳列所ヲ設ケ内縣商品
ノ需用ヲ獎勵スルコト
十二 速ニ吉會鐵道ノ敷設ニ着手シ我々清會線ト連絡
セシメテ間島及北縣ノ開發ヲ計ルコト
以上ノ中第一項第二項ハ從來ノ經驗ニヨリ間島
ノ如キ特種ノ地方ニハ消極的ニ養成セラレタル
普通領事ニテハ不適任ニシテ總督府事務官ノ裏
任モ殆ント有名無實ナリシハ明カナシハ此際特
ニ之ヲ改廢スルノ要アリ領事ノ如キハ露國ノ如
ク現役軍人ヲ以テスルモ可ナリ普通行政官ヲ以
テスルモ可ナリ要ハ其ノ任務ヲ遂行スルニ適當

ノ人物ヲ擧グルニアリ殊ニ普通ノ商埠地ト異リ
廣漢ナル地方ニ散在スル多數ノ自國民ヲ保護シ
領事裁判權ヲ確實ニ行使セシハ容易ノ業ニアラ
ス從來一般ニ支那ニ於ケル帝國領事カ裁判權ヲ
行使スルニ遺憾尠カラサルハ世既ニ定論アリ最
近今井法學博士ノ著書ニ左ノ如キ一節アリ
~~我~~我國ノ領事ハ多クハ司法上ノ學識ナク或ハ稀
ニ之アルモ其ノ經驗ニ至リテハ絶無ニシテ殆
ント正確ノ裁判ヲ爲スコト能ハス殊ニ民事ノ
訴訟ニ於テ然リ是ニ於テ外務大臣モ和解ヲ奨
勵シ彼等亦之ヲ以テ金科玉條トシ偶々民訴ノ
起ルアラハ行政官タルノ地位ニ據テ商事者ヲ

威壓シ唯是和解ヲ強制ス商民之ニ従ハサルト
キハ他日行政上ノ取扱ニ於テ或ハ自己ニ和ア
ラサルヤヲ恐レ之ニ屈服シテ其ノ訴ヲ取下ク
ルニ至ル斯クシテ祇國ノ支那ニ於テ有スル所
ノ領事裁判權ナルモノハ少クトモ民事ニ於テ
ハ條約上ノ空文ナリ余輩天津ノ地ニ在ル六年
亦タ一度モ領事ノ訴ヲ断セシテ聞カス夫レ天
津ハ北支那貿易ノ中心トシテ邦人ノ住スル者
頗ル多ク而モ所謂模範的專管居留地ヲ有シテ
殆ント内地ノ市府ニ異ラス民ニ争ナキ美風カ
将又之ヲ訴フノ途ナキノ致ス所カ爲民間
一般ニ債務ヲ履行セサルヲ以テ賢ナリトシ信

用地ヲ拂ヒ動モスレハ現金取引ニアラスンハ
安ンヤサラムトス商業貿易上ニ及ホス弊害幾
何ソヤ天津ニシテ既ニ然リ他ハ推シテ知ルヘ
キノミ是レ必スシモ其ノ地當局者ノ罪ニアラ
ス我領事裁判制度不備ノ結果ナリ若シ夫レ
刑事ニ至リテハ事ニ臨ンテ放置シ能ハサル性
質ノモノナルカ故ニ固ヨリ裁判権ノ實行ナモ
能ハス然レトモ元來裁判ヲ爲スノ能ニ乏シキ
カ上ニ他國ニ此類ナキ領事ノ獨斷制度ニシテ
其ノ危険謂フ可カラス唐ニ司法ト行政ヲ區別
セサル專斷政治ノ弊害ノ歷々看取スヘキモノ
アルノミナラサルナリ而モ是レ本國ト相遠カ

ラサニ且ツ我外國貿易ノ主要舞臺ニ於ケル今日ノ狀況ナリ云々

朝鮮内地ト接續セル地方ニ於ケル領事裁判ハ此際如上ノ弊害ヲ一掃セサル可カラス新條約實施ノ始メニ於テ特ニ注意ヲ要スル點ナリトス
新條約ハ來ル八月二十六日ヨリ實行セラルルカ故ニ其ノ以前ニ於テ必要ナル準備ヲ整ヘ先ツ第一項乃至第四項ヲ實行シ他ハ遂次之ヲ行フモ可ナリ
尺裁判權ハ必ズ新條約實施ノ當初ヨリ之ヲ實行セサシハ狡猾ナル支那官憲ハ以テ前例トシ累テ他日ニ及ホスコトアルハナリ
寧テ税關監府派出所ヲ間島ニ於ケル韓人ヲ處罰セタル前

裁判権ヲ行使セシトセシ際彼等ハ一二目ヲ
入テ處罰シタル前例ヲ擧ケテ抗争シ遂ニ協約締
結ノ際我政府ハ間島ニ於ケル裁判権ヲ求ヒ其ノ
情カハ朝鮮併合ニヨリ法理上再ヒ治外法権ヲ恢
復シ得タルニ拘ラス之ヲ實行シ得ヌシテ引テ今
日ニ及ヘリ國權ノ墮スル所一小事ト雖トモ等閑
ニ附スヘカラサルハ此類ナリ
第五項乃至第八項ハ如キハ我ニ治外法権ヲ収メ
タル以上ハ其ノ實行次シテ困難ニアラサルヘシ
統監府派出所ハ常テ排日派ヲ鎮壓スル一手段ト
シテ一進會費ヲ利用シ居住民ニ親日思想ヲ鼓吹
セシメ或ハ都社長社長ヲ任命シテ下情ノ上達ヲ

計リテ大ニ效果アリシモ當時清國官憲ハ事ヲ構
ヘテ往々此等ノ親日派ヲ捕縛シ韓民ニ對シテ自
ラ裁判權アリト稱シテ之ヲ處罰シ以テ派出所
事業ヲ妨碍シタルコトアリキ其ノ後領事館カ今
日ニ至ルマデ何等ノ活動ヲナササリシモ亦或ハ
彼ニ裁判權ヲ與ヘタル結果ナリシナラシ新條約
ニヨレハ日韓人カ間島ニ於テ如何ナシ行動ヲナ
スモ支那官憲ハ自ラ之ヲ處罰スル能ハサシカ故
ニ各種ノ方法ニ依リ新附ノ民ヲシテ始メテ聖恩
ニ浴セシムルノ手段ヲ講スルヲ得ハク間島問題解
決ノ際喪失シタル權利ノ一半ハ之ニヨリテ回復
シ得タルハ又必ス此際之ヲ回復セサシム可カラ

サルモノナリト信ス

別紙

北韓經營ニ関スル意見

間島問題ヲ提起シ統監府派出所ヲ間島ニ設置セラルル
初ニ當リ本問題ノ主眼トヤシ所ヲ摘挙スレハ尤ノ如シ
一 間島ノ所屬ヲ決定スルコト

二 在間島韓國臣民ヲ保護スルコト

三 清津ヲ起點トシ會寧及間島ヲ經由シ吉林ニ於テ

吉長鐵道ニ連絡スル鐵道ヲ布設スル權利ヲ獲得

シ日本海ヲ横斷シテ日本北部沿岸ヲ北滿州ニ

連絡シ清津ヲ以テ世界交通ノ一大首點トナスコト

而ルニ今ヤ問題解決シ主要ノ目的ヲ達成スルニ至リタ

ルハ最モ慶賀スヘキ處ナリ

然レトモ間島及北滿州ノ利源ヲ開發シ上部ノ鐵道ヲ
布設先成シ經濟上ノ發展ヲ遂ケンニ尚ホ幾多ノ困
難ヲ凌キ深甚遠大ナル考慮ヲ以テ之ヲ經營テナス
ニ非スニハ其ノ目的ヲ達成シ能ハサルヤ論ヲ待タサルナリ
而シテ一ノ成效ニ直ニ以テ他ノ成效ノ基礎トナシ逐漸其
ノ範圍ノ先成ヲ謀ラサル可カラズ若シ今ニ於テ將來ノ
經營ヲ等閑ニ付スルトキハ當初ノ目的ヲ成就スルコト
難シ

韓國ノ國勢ヲ觀察スルニ地形氣候生産力ノ關係上
政治並經濟ノ狀態ハ南韓及ハ西北沿岸地方ニ於テ
發達シ北韓地方ハ萎靡振ハサルノ實況ニアリ是自然ノ
理勢ナリ是ヲ以テ其ノ首都京城ハ北韓トハ交通甚シク

不便ナル全般ノ關係、於テ適當ノ地位ヲ占ムルモノナリ
而シテ日本ノ韓國ト交通スルニ馬関海峡沿岸地方ヲ
以テ主要地部トシタルコトモ亦當然ノ形勢ナリ近キ將
來、於テ安奉鐵道工事落成セハ以上ノ諸狀態、益
々擴大スル勢ナリ

北韓、其ノ地勢磅礴ニシテ山地多ク政治並經濟狀態
、從來稍ヤ度外視セラレタルノ觀アリシモ之ヲ「ボスニイ」ハ
ツイゴビナレノ拓殖調査書ニ對比スルトキハ尙ホ綿々ト
シテ開發ノ餘地アルカ如シ加之ナラスハ固間島問題
解決ノ關スル日清協約ノ結果古界ニ對シテ公然一新
生面ヲ開キ日本海ニ面シタル本邦海岸地方モ亦將サニ
古界交通上重要ナル關係ヲ生スルニ至リタルハ茲ニ韓國

施政ノ改善指導ニ任スル統監府其ノ交通連絡最モ
不便ニシテ且ツ從來國防ノ外餘リ重要視セラレサリシ
部面於テ大主要ナル新關係ヲ生シ之カ經營ニ任セ
ザル可カラサル機運ニ際會スルニ至シリ

清津、間島ニ對スル出入口ニテ間島問題提起ノ當初
ニ於テ擬定セラレ派出所ノ間島ニ設置セラレタル後理車廳
ヲ設置シ其ノ次年開放セラレタリト雖モ諸般ノ施設ハ未ダ
以テ吾界交通路ノ起矣トシテ計畫セララルハニ非ス又韓國
施政改善ノ目的ヲ以テ觀察使及郡守等ノ下ニ本邦人
官吏ヲ僱用セシメ或ハ各地ニ稅務官ヲ派駐セシメ經營
其ノ緒ニ就キツツアリト雖モ完全ナル實効ヲ奏スルニ其ノ
間尚ホ備ハシリト謂フ可カラス蓋シ此等ハ韓國財政上ノ

狀況ト密接ナル關係ヲ有スルヲ以テ韓國全體ニ對シ
其ノ機關ヲ整備シ且ツ適當ノ人材ヲ配置スルニ高木
多クノ歲月ヲ要スル止ムヲ得サル所ナリ之ニ及シ派出所ノ間
島ニ於テ施設經營ヲナシタル要領ニ和平ノ間ニ問題ヲ
解決スルコトヲ期セサル可カラサルヲ以テ清國ニ對スル政
策上間島ヲ以テ韓國領土ト假定シ完全ナル領土經
營主義ヲ取り極メテ小規模ナカラシム要スル諸機關ヲ
設備シ着々施設スル所アリヒカ協約ノ結果只ク開放地
ニ領事館ニ若シ分館ヲ設置シ領事官ヲシテ條約上ニ
於ケル職務ヲ執行セシムルニ過キサレハ該地方在住韓人
生活狀態ヲ昇進シ感化統一ヲ俟スル殖産的施設
ハ今後之ヲ廢絶セサル可カラサルニ至シル而已ナラス領事

官ハ外務大臣ノ指揮下ニ在ルヲ以テ統監府ハ北韓經營ニ密接ナル關係ヲ有スル該地方ニ付テ外務省ヲ通スルニ非サレハ何等關係スルコト能ハサルニ至シリ

以上ハ關係ヲ以テ之ヲ關東州方面ニ對照スレハ左ノ如シ
一 關東州、在テ都督府ノ下ニ其ノ施設經營ヲ計畫
且ツ監督セラレ滿州開發ニ關シ根柢點タルノ機關
ヲ具備ス

ニ北韓方面ニ在テ、韓國ノ經營ニ任セル統監府ハ一
ノ關係上其ノ位置遠隔ナル爲メ將來古界交通ノ
重要起點トシテ同地方ヲ經營スルノ必要アルニ拘
ラス該地方ニ對シテ當メ嚴密ナル指揮監督ヲ
ナシ難キ缺點ヲ有ス

三、清津及咸鏡北道一圓、將來世界の發展、根據地トシテ充分ナル設備ヲ爲ササル可カラス而ルニ目下、經營ニ固ヨリ其ノ企画・達ヤサルヲ以テ之カ施設機關ヲ構成スルノ必要アリ

四、理事廳、統監府、在膺島領事館、外務省ニ隸屬シ而シテ咸鏡北道觀察使ハ韓國政府ニ直屬シ只ク間接ニ統監ノ指導ヲ受クルニ過キスシテ其ノ隸屬煩ハ區々タリ是レ畢竟目下ノ狀況然ラシムルモノナリト雖モ將來ノ經營ニ付之ヲシテ少クモ連絡統一スル所アラハルノ必要アリ之カ爲ニモ前項ノ機關ヲ特設シ統監ニ直隸セシムルヲ要ス

北韓ノ山地ニシテ生産力少ク從來經營上重要視セラ

レサリシカ實際降ニ於テハ山間、豁谷ハ尚ホ牧畜ニ適シ、諸
金屬、鑛並炭鑛甚カラヌ其他軍港、肉港ヲ設備
シ、交通路ヲ開設シ、且ツ農産地トシテ適當ナル間島ニ於
ケル韓民ノ農業發達ヲ扶掖スル等ノ經營ハ、今更ニ協約
ニ依テ益其ノ必要ヲ増進シ、且ツ成ル可ク速ニ着手スルノ
要アリ而已ナラス、向後間島トハ交通愈頻繁ナルヘシハ
韓清人ノ吸取締法ニ就テモ亦最モ注意ヲ要スルモノ
リ之ヲ上ノ研究ト綜合シテ考量スルモノキハ、北韓ニ特別官
衙ヲ設立シ、一意專心其ノ經營ニ任ヤシムルコトノ益必
要ナルヲ認ム。

以上ノ主旨ニ從ヒ次ノ如キ機關ヲ構成スルヲ可トス
特別官衙並其ノ隸屬官衙ニ具有ヤリシトスル要件

一、特別官衙、長官、統監ニ隸シ、清津並、城津、程津、
廳ヲ管轄スル

二、特別官衙、長官、咸鏡北道觀察使ヲ法規、範、
圍、ニ於テ指揮監督スル權能ヲ有スルコトニ付、韓國
政府ヲシテ委任セラル

三、特別官衙、長官、統監ノ命ヲ奉シ、咸鏡北道全
部、施設計畫ニ任シ、且ツ稅關官吏並、財務官ヲ
統監督スル

四、特別官衙、長官、間島、利源開發ニ関シテ重要
ナル事項ハ統監ニ上申シ、然ラサルモノハ、同地駐在帝國
領事、協議シ、特ニ外交上ニ支障ヲ及ササルヲ度シ、
該地方居住韓民ヲ扶掖スルコトヲ計ス

五特別官衙ヲ設置スヘキ位置ハ清津西方平野ナリ
トス

以上権能ヲ特別機關ニ具有セシムルトキハ概ネ所望ナ
ラスニ足ル若シ韓國政府ナシテ咸鏡北道行政ノ全
部ヲ掌ケテ目下ノ必要ヲ統監府ニ委任セシメ而シテ
之ニ要スル機關ヲ構設スル劃一ナル統治ヲ行フコト
ヲ得ニ其ノ便益之ニ如クナリ

明治四十二年九月

統監府臨時間島派出所長齋藤季治郎

總督

間島及鴨綠江沿岸ニ於テ領事裁判
ト朝鮮總督府裁判トノ關係ニ關スル意見

小沢少将提呈

間島及鴨綠江沿岸ニ於ケル領事裁判ト朝鮮總督府裁判トノ關係ニ關スル意見

圖們江及鴨綠江對岸地方ニ在住スル帝國臣

民殊ニ朝鮮人全部ニ對シ朝鮮民事令及刑事

令ヲ適用シ得ルヤ否ヤノ問題ハ先ツ現行法ノ解釋ト

立法論トノ兩面ヨリ講究スルヲ要ス元來帝國政

府力治外法權ヲ有スル地方ニ於テ帝國領事

官ハ明治三十二年三月法律第七十號領事官ノ

職務ニ關スル制ニ依リ其ノ職務ヲ行フモノニ

シテ同法律第三條ニ在リ規定アリ

領事官其ノ他本法ニ依リテ職務ヲ行フ者

ハ法令及條約ノ規定ニ從テ其ノ職務ヲ行
フヘシ但シ國際法ニ基因スル慣例又ハ駐
在地特別ノ慣例ニ從フコトヲ得

前項ニ依リ難キトキハ命令ヲ以テ特別

ノ規定ヲ設クルコトヲ得

故、領事官カ其ノ司法權ヲ行フニ方リテモ
帝國ノ法令、條約及慣例ニ從フヲ原則ト
為セリ

明治三十八年十一月帝國政府カ日韓協約ニ

依リ韓國ノ外交事務ヲ擔任スルニ方リ明治

四十年五月當時ノ外務大臣ハ治外法權ヲ有スル
我カ在外領事官ニ訓令ヲ發シ其ノ管轄區
域内ニ於ケル韓國臣民ハ總テ帝國臣民ト
同様ニ取扱フコトトシ法令ノ適用ニ付尤ノ如
ク明示セリ

韓國臣民、對之裁判權ヲ行フ、付領事官

ハ實體法及手續法共總テ帝國ノ法規ニ

遵據スヘキコト但シ身分ニ關スル事項ニ付

テハ原則トシテ韓國法規及慣例ニ遵據

スヘシト雖同國ノ法制明確ナラサル現狀ナリ

ヲ以テ其ノ顯著ナル場合ノ外ハ帝國ノ法規

ニ準フコト

韓國併合後ニ至リ帝國政府ハ朝鮮人カ帝

國臣民トナリタルヲ以テ條約又ハ法令上特別

ノ規定アル場合ヲ除クノ外内地人ト同様ニ取

扱フコトニ決シタルモ在外朝鮮人ノ取扱ニ對シ

別段ノ訓令ヲ發セサリシヲ以テ此等ノ一般朝

鮮人ニ對シテハ從來ノ通帝國法令（身分ニ關

スル事項ヲ除ク）ヲ適用スルノ例ヲ改メサルモト

認リルヲ得ヘシ

之ヨリ先キ明治四十一年四月法律第五十二號ヲ發
布シ滿洲ニ於ケル領事官ノ豫審ヲ爲シタル重
罪ノ公判ハ關東都督府地方法院之ヲ管轄シ
其ノ上訴ハ終審トシテ關東都督府高等法院
之ヲ管轄スルコトニ定メラレタリ

明治四十四年三月法律第五十一號ヲ發布シ間島

ニ於ケル帝國領事官ノ豫審ヲ爲シタル死刑・

無期又ハ短期一年以上ノ懲役若ハ禁錮ニ該ル

罪ノ公判ハ朝鮮總督府地方裁判所之ヲ管轄

シ該地方裁判所ノ權限ニ屬スル事項ニ關シ領

事實ノ爲シタル裁判、對スル控訴又ハ抗告ハ
朝鮮總督府控訴院之ヲ管轄シ又區裁判所
ノ權限、屬スル事項、關シ領事官ノ爲シタル
裁判、對スル控訴又ハ抗告ハ朝鮮總督府地
方裁判所之ヲ管轄スルコト、定メラレタリ

是、於テ支那、於ケル領事裁判ニ對スル上級

裁判機關ハ三種ニ分レ第一内地（支那一一般地

方）第二關東（滿洲地方）第三朝鮮（間島）

ノ各裁判機關ニ於テ各別ニ各地ノ領事裁判

ヲ管轄スルコトナレリ尚日支條約ノ結果鴨

緑江對岸間島ヨリ安東ニ至ル一帯ノ地域ニ於

○ニ付テモ、
間島ト同様ノ措キヲ執ルニトス

ケル領事裁判ノ裁者ノ如ク支那ニ於ケル從來

抑

ノ領事裁判ニ特例ヲ開キ其ノ所屬ヲ分割

スルニ至リタルハ時世ノ進運ニ伴ヒ實際ノ要

求ニ應セムカ爲ナルハ言フ俟タサル所ナリ蓋シ

從前ノ如ク支那全土ニ於ケル領事裁判ヲ總テ
長崎地方裁判所及控訴院ニ於テ管轄スル

ノ制度ハ多數ノ帝國臣民滿州ニ居住スル今

日ニ於テ其ノ實行上多大ノ支障アリ是レ特

ニ滿州ヲ他ノ支那地方ヨリ分割シ滿州ニ於テ

ハ領事裁判ハ之ヲ関東都督府地方法院及

高等法院ヲシテ之ヲ管轄セラルコトニ改メ

タル所以ナリ而シテ滿洲ノ地域ヨリ更ニ間島ヲ

ニ對スル管轄權

分劃ニ同地ニ於ケル領事裁判ヲ朝鮮總督

府裁判所ニ移シタルハ是レ亦間島ニ關スル

特殊ノ事情ニ基因シタルヤ勿論ナリ即チ間

島ハ當ニ其ノ地勢上朝鮮ニ近接スルノミナリ

又朝鮮人其ノ住民ノ多數ヲ占メ之ニ加フルニ

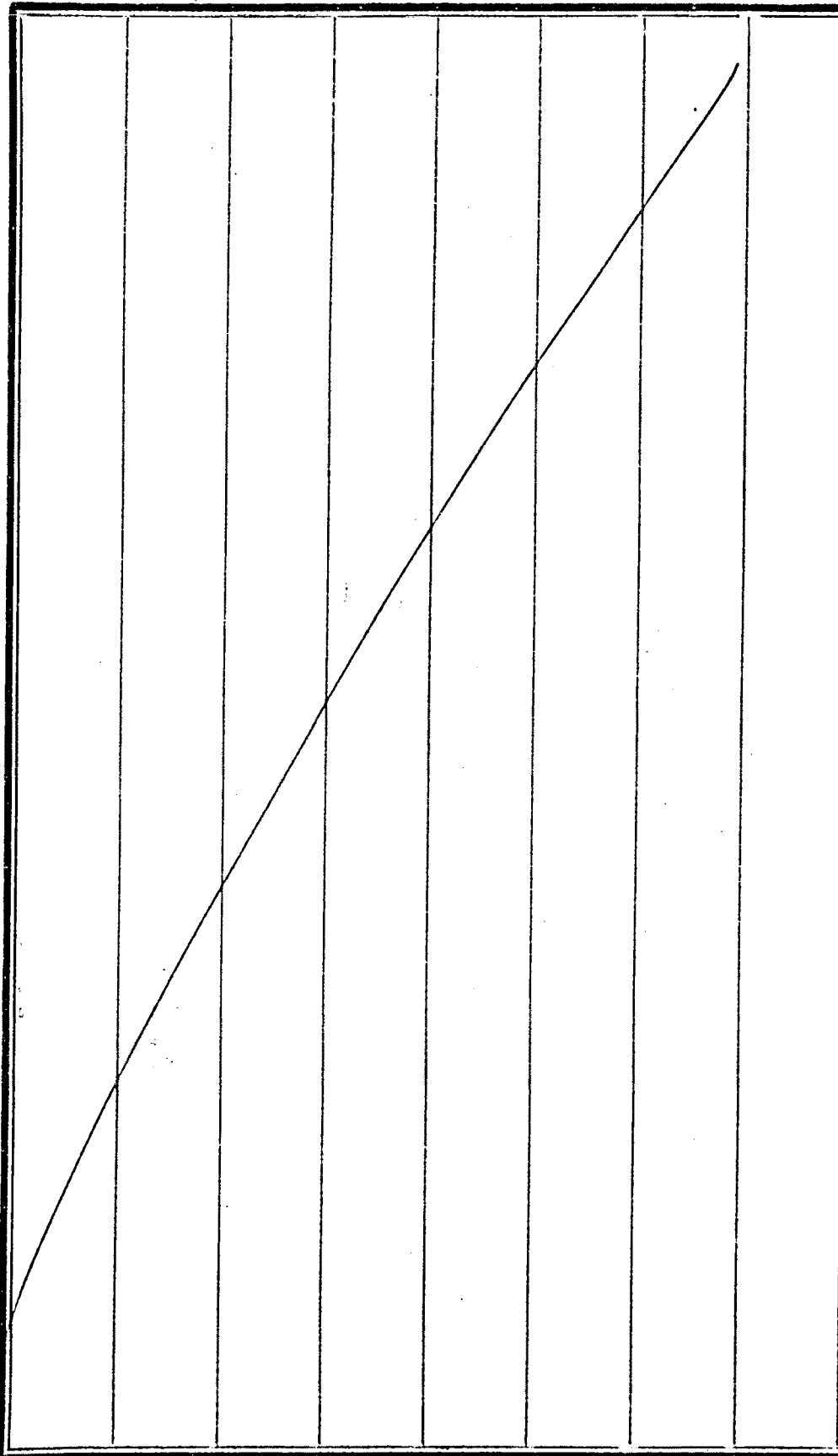
朝鮮地方ト密接ノ關係ヲ有シ其ノ地域住民

共殆ト朝鮮ノ附屬タルノ狀アリ故ニ此ノ地方

、於ケル領事裁判ヲ朝鮮總督府裁判所ノ
管轄ト爲シタルハ固ヨリ當然ノ措置ナリト謂
フヘシ

支那：於ケル帝國領事裁判ノ管轄ヲ三分
スル：至リタル事情上求ノ如シトセハ其ノ法

制ノ旨趣カ各區劃内ノ裁判機關ヲシテ上級



下級ヲ通シ統一ヲ保タシムルニ在ルハ復々疑ヲ

容シサル所ナリ故ニ領事官ノ適用又ハ準用ス

ル法令ト其ノ上級裁判所ノ適用スル法令トハ

實體法、手續法トモ同一ナラサルヘカラス（領事

官所在地ニノミ行ハルル取締規則ノ如キ特

別規定ヲ除クハ勿論ナリ）元來領事官力裁

判權ヲ行フ場合ニ於テハ明治三十二年三月法律

第七十號ニ依リ實體法及手續法トモ帝國

ノ法令ニ從フコトニ定メアリ故ニ一般支那地方

（滿洲ヲ除キタル）ニ於ケル領事裁判ト内地

裁判所トノ關係上何等ノ支吾アルハキ咎古ナシ

又滿洲(間島ヲ除キタル)ニ於ケル領事裁

判ト關東都督府裁判所トノ關係モ畧之

ニ同シ

明治四十二年九月勅令第二百十三號ヲ以テ關

東州裁判事務令ヲ制定シ其ノ依ルヘキ法令

ヲ指定シ其中ニ民法、刑法、民事訴訟法、

刑事訴訟法等ヲ掲ゲタルヲ以テ彼此同一ノ實

體法及手續法ニ依ルヲ得ヘシ間島ト朝鮮

總督府裁判所ノ關係ニ於テモ關東州ト大

差アル、非ス關東州ハ憲法ノ範圍外、在ルノ
理由ヲ以テ勅令ヲ以テ關東州裁判事務取

扱令ヲ制定シ民法、刑法、民事訴訟法、刑事

訴訟法等ニ依ルヘキ旨ヲ規定シタル天朝縣

ニ於テハ特ニ制令ヲ以テ同様ノ規定ヲ設ケ

タルノ差アルノ故ニ前記ノ各地域内ニ於ケル
法令ハ事實上共通ナリトス但タ朝鮮ニ於テ
ハ朝鮮人ニ對シ民事刑事共ニ除外例ヲ設ケ
タルヲ以テ此ノ除外例適用ノ如何ニ依リ彼我
ノ規定ヲ異ニスルノ變態ヲ生スヘシ是レ

間島ニ於ケル領事裁判ト朝鮮總督府裁判所トノ關係ヲ統一スヘキ措置ヲ要スル所
以ナリトス其ノ方法左ノ如シ

第一案

外務大臣ヨリ當該領事官ニ對シ左ノ訓

令ヲ發スルコト

間島及鴨綠江沿岸一帯ノ地域（將來領

事裁判管轄區域トシテ定メラルヘキ地域）

ニ於テ帝國領事官カ豫審ヲ爲シタル

死刑、無期一年以上ノ懲役若ハ禁錮ニ

談ル罪ノ公判並地方裁判所及區裁判

所ノ權限ニ屬スル事項ニ関シ帝國領事

官ノ爲シタル裁判ニ對スル控訴又ハ抗

告ハ相當朝鮮總督府裁判所ニ於テ

之ヲ管轄スルコトニ定メラレタルニ付テハ

朝鮮總督府

法令上相互ノ連聯ヲ保タリカ爲間島及

鴨綠江沿岸一帯ノ地域（名稱ヲ指定ス）

ニ於ケル帝國領事官ハ朝鮮民事令及

刑事令ニ依リ其ノ裁判ヲ爲スヘキ儀

ト心得ヘシ

明治三十二年三月法律第七十號中、「法令」

中ニハ制令ヲ包含スルモノト認ムルトキハ外

務大臣ハ談法律ノ範圍内ニ於テ領事官ノ

依ルヘキ法令ヲ指定スルヲ得ルモノトス制令ハ

朝鮮外ニ及ハストノ説アリ制令カ當然朝

鮮外ニ及ハサルハ勿論ナレトモ内地ノ法律モ亦

當然外國ニ及ハサルユト制令ト異ル所ナレ内

地法令カ帝國領事官ノ管轄地タル外國ニ

及フ所以ノモノハ單ニ前記法律第七十號

ニ帝國法令ニ從フヘキ旨ヲ規定シタルニ由

ル制令モ亦帝國法令ニ相違ナシトセハ詭法
律ニ由リ外國ニ及ビ得ルモノト謂フヘシ唯、

從來政府、於テ其ノ意思ヲ表示セサリシ

ノ故ニ第一案ノ訓令ヲ以テ之ヲ明示セハ

是ルカ如シ然トモ在

第二案

從來ノ慣習上内地法令ノミ行ハシタル外國ニ

新タニ制令ヲ及ボスニ方リ訓令ニテハ十分

ナラストノ懸念アリトセハ在ノ旨趣ヲ勅令ニテ

規定セラルルコト

間島及鴨綠江沿岸一帶ノ地方（其ノ地

域ヲ指定ス）ニ於テハ帝國領事官ハ朝

鮮民事令及刑事令ニ依リ其ノ裁判權

ヲ行フヘシ

前記法律第七十條ノ第三條ハ二項ニ分テ昭

第三案

更ニ概括的ノ法制ヲ便宜トセハ領事官ノ職

務ニ関スル法律第七十號ニ在リ旨趣ヲ以テ

一條ヲ加フルスト

領事官ノ豫審ヲ爲シタル死刑、無期

又ハ短期一年以上ノ懲役若ハ禁錮ニ

該ル罪ノ公判竝領事官ノ爲シタル裁

判ニ對スル控訴又ハ抗告ニシテ内地以

外ノ上級裁判所ニ於テ之ヲ管轄スル

コトヲ定メタルトキハ領事官ハ其ノ上

級裁判所所在地

級裁判所所在ニ行ハルル法規ニ依リ

豫審又ハ裁判ヲ爲スヘシ

間島及鴨綠江沿岸地方ハ固ヨリ憲法ノ

條章ニ依ルヘキ必要ナキカ故ニ第三案ノ

如ク勅令ヲ以テ領事官ノ適用スヘキ法

令ヲ指定スルヲ以テ最適當ノ措置ナリ

ト認め然レトモ中央政府ニシテ勅令ノ發
布ニモ將タ法律ノ改正ニモ應ジ能ハサル
特殊ノ事情アリトセハ最後ノ手段トシテ

朝鮮刑事令ヨリ舊刑法大全ノ刑罰ニ依
ル條項ヲ削除スルコトスヘシ然ルトキハ

細目ニ涉リテハ多少ノ故障ナキニ非サルハ

乙ト雖大體ニ於テハ内地法令ト同様トナル

ヘキヲ以テ領事裁判ト朝鮮總督府裁判

トノ連絡ヲ完ウスルヲ得ヘシト信ス

大正四年九月十日
朝憲機第四三八號

新條約實施後ニ於ケル間島

ノ狀勢

間島ニ於ケル新條約實施後ノ情

勢ニ付テハ都度報告セシ處ナル

モ今回間島派遣將校末松中尉ヨ

リ別紙ノ通取纏以呈報候ニ付御

參考迄呈出候也

以上

本書發送先

總

本

督

政務總監

(總務局長)

陸軍大臣

參謀總長

關東都督

參軍司令官

師團長

憲兵司令官

內閣書記官長

國務次官

外務次官

新條約實施後間島狀勢

第一

一新條約小間島

第二

二日本側態度

一 間島協約下新條約之關係

第三

二 新條約實施之狀況

三 支那側之態度

四 見解

二 道尹附晉省

第

三 支那側音交抗的態度
 四 支那側ヨリ出タル浮說
 五 支那側人對鮮人態度
 六 支那側人懷柔

第

一 學制統一
 二 和龍縣下鄉社以廢合
 三 鮮人歸化運動
 四 移住鮮人
 五 去就
 六 新條約實施對スル鮮人
 悲喜三樣觀測

第

五	七	六			五	四	三	二
間	鮮	鮮		2	ノ	排	移	排
島	人	人	ノ	學	孔	日	住	日
ノ	ノ	ノ	態	制	教	鮮	鮮	鮮
現	流	抵	度	統	會	人	人	人
狀	言	抗		一	ノ	ノ	ノ	ノ
及				=	行	行	請	失
將				對	動	動	願	望
來				ス				搖
				ル				

鮮人

(了)

大天然愈期箇以猶大
實軍嶺其遊月條以平第
施日二ノ燦間約南唯一
地又獨實以猶一滿新入
域西言施ヲ豫太洲平新
道國間ヲ以ヲ部及月條
政政島爲テ與分東大條
ス府實二項ノ部平以
以相對二其條内日間
見至シ至也伊約蒙締島
解澤ヲレ五實調古結
不新ハリ日施印ヲセ
異條當以ヲ後關ヲ
議約初後延二三ノレ

移 以 面 本 府 交 與 正 廳 尹 三
住 間 九 政 中 涉 否 餘 事 爾
鮮 島 月 府 間 案 ヲ デ 日 來
人 協 廿 = 島 上 決 經 決 兩 社
約 三 抗 者 = 也 過 該 國 社
取 日 日 議 新 上 以 ス 也 條 官
扱 抵 延 ヲ 條 レ 問 隨 約 憲
觸 吉 為 約 リ 題 今 實 = ス
後 知 道 ス 適 然 ハ 日 施 於
來 際 尹 ト 用 ル 再 依 後 張
ト 結 究 同 實 = 五 然 業 紛 紛
異 ト 新 時 關 支 中 見 紛 糾
十 十 條 = 決 那 央 解 二 爭
ル シ 約 一 日 政 ノ 何 答 議

處無中旨電飭之
力支那側人態度俄
顏贈書予我法權
直出來得後浪
憚此所尤多故意
語滿流布也錢人
遊蕩之門又其
帝囑不當時初
施外目物與貫徹
議餘地中其當
然其間閱其
茲新於
下硬下
使天
害ヲ
各種暴
人裝
我
來
之
實
論
實
一

勸請直早詩華新並勸
依目抗議中
辦理礦務
其間天其
適宜於
張學良
從前
新
勸
請
直
早
詩
華
新
並
勸
依
目
抗
議
中
辦
理
礦
務
其
間
天
其
適
宜
於
張
學
良
從
前
新
勸
請
直
早
詩
華
新
並
勸
依
目
抗
議
中
辦
理
礦
務
其
間
天
其
適
宜
於
張
學
良
從
前
新

實施 經濟 纔 心 泊 吏 樹 國 心 親 善 院 沮
都 節 錄 八 河 不 祥 中 議 資 料 妙 傑 越
此 外 謂 創 主 止 保 守 現 今 三 流 創 廣
際 越 新 權 行 使 從 更 國 神 英 以 解 讓
際 際 待 所 選 開 高 辦 以 問 繼 新 狀 態 達
以 上 陳 謝 四 才 夫 非 野 日 說 明 信 達
新 朝 世 五 有 關 垣 越 八 洞 新 繼 關 縣 降
錄 約 續 施 令 伴 以 一 般 的 狀 勢

則棟觀議意
 第十一期本側且態度
 此十一年間島協約
 被幾明治四十二年九月四日訂立
 也所謂間島協約
 斜結保赫連
 止及廣際上
 隱消滅
 實施
 覺萬執熟
 自是段
 薩摩島協

領事元旨條ハ解之ガ約
事日ル場約施シ因故ハ
代既ハ合旗行間協舉改
理通方初適期島議別廢
定外國漸仍用日在示此
訓務ヲ我以以留心支テ
令大採起實後費ハ用際
於臣是心那際ハ朝必政
滿球ハ側問一鮮要府キ
矯ハ相訓題律人外建ハ
時在旨文說ハ三箱通當
實間ハ明起就滿対モ告然
出島ハ三ヲ附蒙シ今又ハ
ニ總十國與夕日新ヲトハル

對_ハハ_九 離_ヲ 態_官 來_對 是_是
ハ_商 月_ハ 作_民 一_一 抑_抑
抑_抑 準_準 十_十 演_迷 六_六 間_間
張_張 地_地 見_見 新_新 往_往 圖_圖 朕_朕 帝_帝 斷_斷
狀_狀 外_外 初_初 條_條 旨_旨 却_却 內_內 間_間 國_國 我_我
天_天 延_延 小_小 約_約 大_大 心_心 天_天 天_天 德_德 施_施
執_執 縣_縣 天_天 實_實 災_災 噴_噴 枝_枝 旗_旗 方_方 於_於
行_行 帽_帽 總_總 施_施 至_至 躁_躁 知_知 鋪_鋪 心_心
以_以 山_山 鎮_鎮 年_年 一_一 間_間 不_不 心_心 久_久 新_新
爾_爾 前_前 事_事 狀_狀 事_事 須_須 心_心 昨_昨 心_心 條_條
耕_耕 館_館 況_況 心_心 旅_旅 支_支 心_心 約_約
令_令 難_難 心_心 板_板 南_南 原_原 中_中 味_味 心_心 實_實
狀_狀 人_人 於_於 心_心 難_難 心_心 三_三 心_心 施_施
人_人 心_心 心_心 心_心 力_力 心_心 國_國 心_心 心_心

執行其爲シタルモソモ四名、鮮人
、訴訟受理件數、刑事未決三民事
百五十件、十月初旬に以リ訴訟出
願部件數、大ニ減退シ、同月中旬
に至リ非テ空金、皆無ナルニ狀態
所ナレバ而モ之、濫原因、支那
官憲ハ極力我法權ノ行使ヲ妨害
シ、迫ル官憲、訴訟ヲ提起シタル
モ、以テ忽テ其等不法ノ迫害ヲ
加ヘ、刺撃、言下、級地方官吏、又
シ等

各種條謠言ヲ流布セシメ又タル等
ニ因リテ一般鮮人等不俄ニ危懼シ
テ出訴シ躊躇不決ニ至ル力
爲スルリ
而シテ以テ各件之訴訟因主訴
テ支那官憲全不法審判並其外事
由勝訴見込ナク未だ等其大
部今ヲ右メ居ル力如キ新條約
ノ實相力未だ一般徹底ニ居
テ此等窺見ニ足ルハ又新
提訴ス

何^ニ支^ナ那^ナ官^ナ憲^ナ力^ナ我^ナ新^ナ約^ナ實^ナ施^ナ如^ナキ
 害^ニ努^ナ力^ナ以^ナテ^ナ力^ナヲ^ナ推^ナ測^ナス^ナル^ナヲ^ナ
 新^ナ條^ナ約^ナ廣^ナ施^ナ後^ナ實^ナニ^ナ我^ナ官^ナ憲^ナノ^ナ執^ナ行^ナ
 十^ナ件^ナノ^ナ民^ナ事^ナ訴^ナ訟^ナ六^ナ十^ナ三^ナ件^ナノ^ナ刑^ナ事^ナ
 訴^ナ訟^ナ受^ナ理^ナ新^ナ外^ナ他^ナ何^ナ等^ナ獲^ナ取^ナ所^ナ
 十^ナ件^ナノ^ナ非^ナ弱^ナナル^ナ轉^ナス^ナル^ナ寒^ナ心^ナニ^ナ我^ナ法^ナ權^ナ施^ナ
 行^ナノ^ナ

第三

支那側之態度

一新條約對支那側所

見解

支那側之新條約實施對支那側見

解當初全然間斷新條約

範圍外卜解之居リタルノ

如ク(吉林交涉使内訓)九月三日在龍

井村高商埠分局長ハ總領事ヲ訪

問シ日本警察官力雜居地居住ノ

鮮人討不裁開手續執行
對以間島協約臨新條約
等其以效力差異十以理
ヲ以ヲ異議也申込來レ
同月四日陶道中貴局子衛
至リ九月五日吉林交涉使
島協約尚依然十滿全
為以有スル省電訓了以
外務省ニ請訓臨ヲ苗度
必リニ

以上、對之當時我領事、敢テ經
伺、要寸、餘間、島、是、當然、新條約、
適用、能、ラ、ル、言、明、之、
是、抑、間、島、於、之、新條約、實施、
對、之、日、支、西、國、政、府、之、見、解、力、全、
然、杆、格、也、此、並、事、實、的、言、證、明、
レ、夕、ル、第、二、步、中、少、不、
其、其、二、道、尹、
支、那、側、滿、新、條、約、實、施、時、對、之、九、月、
二、日、三、至、之、迄、詳、細、十、五、日、公、使、任、接、

以 來 詔 本 領 事 館 於 今 大 月 廿 五 日
 斷 訟 一 方 針 道 爭 訟 吉 林 巡 按 使 完 賓
 施 二 和 陶 後 理 心 夕 龍 弓 欽 開 俄 光
 豐 變 為 施 朗 斷 以 三
 隨 行 昭 入 一 二 訟 來 居
 電 前 針 陶 後 理 心 夕 龍 弓 欽 開 俄 光
 月 隨 道 伊 外 交 科 長 日
 吉 林

亦

九 新 執 使 二 一 九
明 狀 狀 狀 狀 狀 狀 狀 狀
計 況 況 況 況 況 況 況 況
或 以 以 以 以 以 以 以 以
期 望 望 望 望 望 望 望 望
現 來 來 來 來 來 來 來 來
住 來 來 來 來 來 來 來 來
太 拉 拉 拉 拉 拉 拉 拉 拉
子 鮮 鮮 鮮 鮮 鮮 鮮 鮮 鮮
合 二 二 二 二 二 二 二 二
對 對 對 對 對 對 對 對

子街百草溝為圖外支那官憲
警又鮮金通訊刻刻新條約
何等間島對効力及新不
以之了以久且瓶官憲
佳々鮮人編村訓令狀人執行等
蜀憲々金以達法行為
趾等孫場合々速々支那官憲
告々々々々布達々々々々
九月廿三日龍龍櫛商埠局
鮮金強盜四名々檢舉
子街審

判廳以護送送外辦舉送高七海審
九月十九日洋清縣春華社居住鮮
人其牛實子力日本官憲均引
狀執執行也上上受罪同地支那
官憲告知並所送上元同地民
兵之入毆打監禁此外條
以上如支那官憲以鮮人對
自國法權行使三憚止外
進天我職權行使方妨害新
則對科桌訴訟關係及有司感者等

ヲ連害ス快ニ至ル館側
九月廿八日
子長至味刺傷被
禁シ以ル
華人人
下巡警
告(領事館)
仁暴衛
任謀
此陳
追害ス快ニ至ル館側
九月廿八日
子長至味刺傷被
禁シ以ル
華人人
下巡警
告(領事館)
仁暴衛
任謀
此陳

九 月 廿 五 日 民 事 事 件
分 館 函 文 日 民 事 事 件
之 事 引 致 次 龍 井 村 商 埠 謁 巡 警
十 月 警 道 和 龍 縣 支 那 巡 警
憲 人 告 訴 對 提 起 龍 井 村 商 埠 謁 巡 警
禁 心 夕 川 總 領 事 館 警 察 官 向 交 涉
七 對 事 知 事 諭 駁 以 小 証 告
罪 鮮 人 今 對 監 禁 財 事 支 那 側 居 地 居 執

行要十校狀 行要十校狀 行要十校狀 行要十校狀 行要十校狀
計計計計計 計計計計計 計計計計計 計計計計計 計計計計計
日拒絶 日拒絶 日拒絶 日拒絶 日拒絶
創創創創創 創創創創創 創創創創創 創創創創創 創創創創創
辛涉 辛涉 辛涉 辛涉 辛涉
受受受受受 受受受受受 受受受受受 受受受受受 受受受受受
立立立立立 立立立立立 立立立立立 立立立立立 立立立立立
學學學學學 學學學學學 學學學學學 學學學學學 學學學學學
人 人 人 人 人
狀狀狀狀狀 狀狀狀狀狀 狀狀狀狀狀 狀狀狀狀狀 狀狀狀狀狀
執執執執執 執執執執執 執執執執執 執執執執執 執執執執執
行行行行行 行行行行行 行行行行行 行行行行行 行行行行行
內內內內內 內內內內內 內內內內內 內內內內內 內內內內內
庇庇庇庇庇 庇庇庇庇庇 庇庇庇庇庇 庇庇庇庇庇 庇庇庇庇庇
隱隱隱隱隱 隱隱隱隱隱 隱隱隱隱隱 隱隱隱隱隱 隱隱隱隱隱
出出出出出 出出出出出 出出出出出 出出出出出 出出出出出
浮浮浮浮浮 浮浮浮浮浮 浮浮浮浮浮 浮浮浮浮浮 浮浮浮浮浮
說說說說說 說說說說說 說說說說說 說說說說說 說說說說說
坊坊坊坊坊 坊坊坊坊坊 坊坊坊坊坊 坊坊坊坊坊 坊坊坊坊坊
支支支支支 支支支支支 支支支支支 支支支支支 支支支支支
害害害害害 害害害害害 害害害害害 害害害害害 害害害害害
訓訓訓訓訓 訓訓訓訓訓 訓訓訓訓訓 訓訓訓訓訓 訓訓訓訓訓

説
一、然、違、法、の、審、判、爲、る、に、
二、自、本、官、憲、の、協、約、ヲ、無、視、シ、
三、獨、害、賠、償、の、責、任、ヲ、
力、以、獨、逸、ハ、支、那、ト、聯、合、シ、
今、後、被、害、者、ニ、對、シ、テ、ハ、相、當、損、
違、法、の、審、判、ヲ、爲、シ、タ、ル、に、
自、本、官、憲、の、協、約、ヲ、無、視、シ、
獨、逸、ハ、支、那、ト、聯、合、シ、
獨、害、賠、償、の、責、任、ヲ、
力、以、獨、逸、ハ、支、那、ト、聯、合、シ、

新日本下開戰案
四被害外致實際
志錄以重罰實日
實勤違法以證夕リ
五日本官憲並訴訟
者小後日悉夕嚴罰
五支那官憲ハ對
十萬リ移住鮮人
利權得喪戰影響
且日支紛糾ハ
新條約實施後ニ
對鮮人態度
提起シタル
發砲威
行

必不務佳鮮人響中心以天惹起
予商キ外豫知以久此毛ハ如ク
新條約成立後移住鮮人實対スル
態度一漸次高壓ヲ捨棄柔ヲ施
力能トス旨至リ得ルハ歴然ト
止テ事實を證信セテ現ニ
實施期ノ急迫セリ八月十六日延
吉縣知事張詒カ管下ニ佈達シ夕
ル左記文要旨ノ新諭告ノ如キ已
往自其ノ例ヲ索ムル能ハサル處

臨先以情通首患官民
政道又吉縣知事張
延吉縣知事張
布告
不
此
左記
謂
方針
表示
對鮮人態度
方針
表示
執
示

教化既隆
副少以政
良三以治
斯軌計著
所歛久首
地芳邑錄
不亟言ア
於今諸種
又尙博義
可殊固規

下時獨艱
改革氣ル
事業ヲ興
其ノ地方
潤苦ヲ知
本懷非久
民隱藉滿
未知名事
隆盛ヲ觀
心誠所與
憂之所興
情二

民今困憊甚矣平時ナルニ於テ
才や故に上下同心協力シテ大
ニ振作シ圖ラサルヘカラス我
管内ニ在住スル父老子弟及商
民人等ニ支那人ニ拘ラス將來
公益條事業及困難ニ情形アラ
何時迄テ其縣署ニ來リテ面
陳劉君々々本知事ハ必ス接見シ
懇相與ヒ誠意ヲ披瀝シ無理人
要求實アラサレハ其ノ意見ヲ

採用實行スヘキニ依リ汝等ハ

努ルヲ此信趣旨ヲ外軀シ何事ヲ

利隱蔽スヘカ事ス本知事ハ庶

政ヲ布置シ其綢繆ニ就ク天候

必益親率各鄉鎮巡歷實地

天視察シ夫暴ヲ除キ良ヲ安シ

茲同視同仁住ヲ示サシト茲

特ニ布告ス

中華民國四年八月十六日

下延吉縣公署記ハ本布告人

月

動	本	計	育	延	辦	人	註
洛	各	校	之	世	辦	吉	訓
縣	約	移	法	道	陰	六	司
知	一	自	往	伊	勤	波	一
事	國	鮮	制	陶	灣	那	防
心	博	以	收	彬	制	側	效
命	制	弘	一	亦	開	側	居
之	始	選	延	晨	統	鮮	之
殆	晉	院	吉	大	之	人	省
卜	結	立	道	劃	懷	柔	之
強	統	學	管	民	柔	之	新
制	一	校	下	墾	柔	力	設
的	之	對	於	民	教	應	之
二	八	對	於	民	教	酬	鮮

施本着手教新辦
 行件手學條至法
 統統統統統統
 一自一自一自
 部部部部部部
 新新新新新新
 條條條條條條
 約約約約約約
 實實實實實實
 施施施施施施
 期期期期期期
 以以以以以以
 後後後後後後
 尚尚尚尚尚尚
 耶耶耶耶耶耶
 蘇蘇蘇蘇蘇蘇
 二二二二二二

其任統一
本件關
外務大臣
本處交那側
附件外務省
令使到對三
下合土之
現佳和龍縣
馬晉(直隸日
縣人)等率
總通二
縣北
陳天(章有文
那人)
鄉社
廢合
下鄉
府
交涉
方訓
移佳
鮮人
學制
統一
間島
總領
事代
理
八月
十六
日

月 初 (自) 龍 縣 知 事 俞 駿 我 內 鮮
與 於 於 地 方 (行) 政 機 關 (面) 事 務 (之) 則
各 社 事 務 辦 事 新 設 之 長 以
下 以 任 命 之 以 率 領 伴 鮮 人 自 國
支 配 下 之 牧 攬 前 面 我 勢 亦 歸
牽 制 和 以 水 然 然
本 廢 合 作 團 上 餘 五 繞 監 府 時 侯
於 收 入 我 官 憲 日 所 傳 命 之 事 以 外
各 社 長 等 日 淘 汰 以 親 友 派 鮮 人
日 羅 致 此 之 自 由 辦 事 鮮 人 之 統 治 也

ト 範 模 擬 比 較 漸 進 他 縣 計 畫 才 力
本 件 賞 賛 漸 進 他 縣 計 畫 才 力
人 員 關 心 陶 道 尹 太

因 二 社 長 以 下 小 組 上 其 全 部
支 那 官 憲 力 謀 興 懷 桑 二 商 談 少
日 以 來 吉 旦 鮮 太 歸 化 運 動 以 來 數 日
鮮 人 懷 柔 策 匪 斷 續 在 焉 子 衛 延 吉

縣 日

勸學新道尹公署
鄭蘭幹等
延吉道尹公署
如建白
爲シタリ
今代南
ル鮮人ニ
使ヤル
重大ナル
鮮人ニ
對令自國
際之
去就
入籍ニ
關シ
簡章
爲設
亦喫緊
對急務
謂以
鮮人
對歸化
方法
補正
入籍
ニ
關シ
簡章
爲設

[illegible]

權ノヲ施ルヤ人九

早増レタルカヲ集メ月曜ト第

實加ハル如ク我初巻一編

施機未成ニテ新旬新移

不關タ否即半條約實施

此ノ日ヤ其信約在對鮮人

外擴本專斷新條疑施正

謂張側實疑約ノ裏真相

自タ有於ハ其間忘在

番名殊テ之奈何實夕

裁殊テ之奈何實夕

判官裁官何實夕

官裁官何實夕

官裁官何實夕

官裁官何實夕

保業ト拵スルハ其利
護ニ大の利居親一本道來
親ニ統ニ威ニ主ク見支般利年ヲ
浴監危壓至ルハ鮮害聞
府外具ハラ鮮標人ハ音
或派軍ニ甚憂ス中人榜間俄ク
出居ル必等シノカ續
我所タキラハ或樂ニ施
時リモスハ論豫日
親代之ソヤニ排ナ測眞
近ニニニ親日リ聞シ否
也於及ル本ニラシ難程
ンテハハノ實鼓カバシ度
ト我テシ及施吹従ト及

「陶日」 行大ニ喜ニ制ス
道本 語ヲ依テ得タル
「尹官」ニ觀注リタルハ免鮮
開憲排測意或モ其意人
晋ノ日ニシテハノ機嚴等
省均鮮居拂憂在運正
等引人ノツラ慮ルニ出テ
狀ノ如クテハ等際ル那
日執勤 只或其會保官
前行搖 管ハシテ護民
一（開 事驩思夕下ノ
般放地 牛喜想リハ不
鮮外） 力ニ境計安法
人及 咸多遇歡堵壓

女二層鮮就見不各二シ等
上勢ノ人キ聞ル所於夕保
日メ注ニ討ヲ日ニケル漸
ハタニ意対議交支會ルヲ
新ルヲ内ス轉ニ換兩合排知新
ハモ排建ル生殊ニ國ハ日鮮ル條
ハノ式ニ取ニ或官指テ鮮ト約
中ノ之締日就憲新人共實
如力態本將ノ條等一施
ク内度官來態約ハ局
現容ニ憲ノ度實三子紛
ニ就ノ行ニ施々街糾
ハ探キ排動就ニ五附ヲ
月查一日ニキ対々近來

我 在 堵 人 戰 或 街 廿
新 等 等 派 方 五
條 三 夕 晏 日 他 注 面 日
約 移 如 謠 意 以
實 住 夕 四 時 言 轉 内 降
施 鮮 爾 奇 味 住 偵 數 九
ノ 人 能 蜀 流 名 月
報 競 布 企 中
一 失 廿 々 部 本 探 旬
度 望 外 來 或 夕 者
到 更 等 道
新 狀 排 日 形 龍
ヤ 態 其 日 支 跡 井 局
一 鮮 開 村 子

般移住鮮人。彼總統監府派出所
時代。於。安塔。得。機運。再
保護。下。非常。希望。囑
會。歡喜。居。外。其。實施。後
旅。我。官。憲。狀。況。依。然
テ。異。心。所。集。越。人。外。越。又。不。負。支。那。側
面。迫。害。請。其。自。度。來。增。我。保。護。機
。整。備。也。如。以。九。月。中。旬
。至。時。既。一。般。鮮。人。我。新。條

約 疑 施 疑 且 出 訴 請 賴 所 躊 躇
不 心 達 華 以 現 式 出 訴 以 爲 各 方
面 異 テ 我 實 施 ハ 狀 態 又 實 地 中 見
聞 却 リ 理 後 難 所 至 ラ 以 爲 ト
恐 以 出 訴 中 止 故 還 夢 夢 者
會 教 ア リ 更 非 同 月 下 旬 至 リ 十 月
多 旬 二 至 リ 支 那 側 一 態 度 至 一 層 強
上 旬 二 至 リ 支 那 側 一 態 度 至 一 層 強
更 ト ナ リ 領 事 館 提 訴 以 夕 ル 鮮
人 不 法 改 打 監 禁 不 能 等 益 所

辛辣可極必來永無以不
辛卡我新條約實施惟聲明金虛言
十少卜評也一般我保護十分
十ラサ正言難不成未至昨月
中旬入以テ處失望ハ結果到底
日本官憲信賴力感能也智也評
スル本與章顯
前項四移住鮮人請願
當局對シ左方如キ請願ヲ為ス我

前呈レ候

前狀月二會寧間島全濟權以下

廿五名以上連署シテ移住鮮人ノ

八日日本領事館ニ訴訟出願シタル

日者官對シ支那官憲給迫害甚外

中シキヲ以テ嚴正ナル保護ヲ願

ト夕キ旨請願書ヲ鈴木領事宛提

出シタリ

二十月二日和龍縣新興坪金利吳

辛然下並八名支那官憲必不法行

三

為
請
願
立
為
總
領
事
院
警
察
官
派
遣

請
願
立
為
總
領
事
院
警
察
官
派
遣

今
明
五
請
日
在
間
萬
各
地
方
鮮
人
代

表
者
當
百
五
十
區
名
連
署
外
上
間

鳴
朝
鮮
人
會
在
龍
井
村
中
經
由
新

條
約
實
施
之
關
不
合
請
願
書
天
總

領
事
院
提
出
之
多
所

五
排
用
鮮
人
之
行
動

孔
教
會
會
會
行
動

在
獨
立
衛
孔
教
會
會
會
行
動
兩
國
新

條約實施
那官憲
為ス
ヲ
二
縣
實
鮮
達
リ
邊
即
恩
本
品
在
關
島
鮮
泰
統
治
權
倍
餘
之
力
擴
張
聲
援
之
居
レ
會
（在龍井村）
新
會
員
數
百
名
當
日
本
側
以
傳
教
及
朝
陣
俞
駿
會
訪
簡
中
照
新
條
約
賦
事
現
九
月
初
旬
和
龍
縣
新
派
員
來
ル
團
教
會
員
該
子
文
機
現
為
各
商
面
飛
躍
煽
勤
會
會
勢
力
扶
植
ヲ
討
會
ル
紛
糾
所
以
ヲ
延

尚ヲ 中 國 領 憲 會 見 袖 手 傍 觀 シ 力
鮮 人 各 種 統 治 權 未 原 自 於 之 附 隨
奪 ヲ 各 種 統 治 權 未 原 自 於 之 附 隨
勸 導 各 種 統 治 權 未 原 自 於 之 附 隨
第 三 次 學 制 統 一 對 於 述 六 次 支 那
會 以 來 注 意 於 統 一 學 制 統 一 對 於 述 六 次 支 那
旬 以 來 注 意 於 統 一 學 制 統 一 對 於 述 六 次 支 那
屬 中 那

尚側關カ法東涉報會
 朝當シスノニヲ三從議
 鮮高テト改措受地學鮮
 地理會交決ヲ要計歸場結私
 歷史見之委員為之服從部教育辦
 教授之承認ヲ得タリト
 關係系天

ハ日 本官憲 文渉 アル 場合 辦 疏
ハ 辞 大 親 ヲ 以 テ 公 認 スル 場 合
但 シ 秘 密 ニ 教 授 スル 者 ハ 之 ヲ 得 ス
許 ス へ 必 ス ト 作 條 件 ニ ヨ リ 妥 協 シ
愈々 其 ノ 實 施 ニ 服 從 スル ニ 至 リ
請 綿 豊 六 鮮 人 生 抵 抗 スル ニ 至 リ
支 那 官 憲 ハ 移 住 鮮 人 ニ 對 シ 若 日
本 官 憲 カ 召 喚 又 ハ 拘 引 ヲ 爲 サ ン
ト 不 火 場 合 ハ 極 力 拒 絶 スル ト 共
其 ノ 由 來 速 ニ 支 那 官 憲 ニ 申 告

然	川	以	蜩	龍	現	ル	人	ス
ル	漸	テ	集	縣	縣	鮮	人	ス
年	ル	拳	シ	豐	甘	人	キ	キ
談	其	銃	來	樂	腹	レ	部	部
被	ハ	ヲ	リ	洞	十	我	布	布
告	目	發	抵	入	時	ニ	連	連
父	的	射	抗	ニ	至	反	シ	シ
家	ヲ	シ	セ	附	縣	抗	攸	攸
族	達	威	ン	近	拘	那	攸	攸
ハ	シ	嚇	ト	部	引	試	攸	攸
直	夕	手	シ	落	狀	シ	攸	攸
三	リ	殺	夕	ノ	ヲ	シ	リ	リ
太	ニ	ル	鮮	執	カ	ト	一	一
拉	ヨ	ヲ	人	行	和	ス	部	部

一	民	一	我	シ	夕	リ	警	子
新	心	如	新	夕	ル	夕	約	巡
條	今	村	條	引	後	ル	有	警
約	尚	流	約	返	十	毛	五	局
實	歸	結	實	陀	リ	既	嘉	二
施	向	紛	施	灰	影	登	小	急
二	妙	故	二	財	リ	二	武	報
对	決	下	関	流	下	時	裝	三
二	也	二	結	言	陽	間	三	夢
陳	新	登	鮮		巡	餘	得	亮
夕	此	起	人		警	ヲ	追	此
日	毛	リ	間		等	經	跡	使
本	了	為	三		ハ	過	也	那
官	所	二	左		空	シ	來	巡

七 警 署 八 側 來 候 心 計 德
 受 領 本 官 如 官 間 島
 警 署 官 憲 何 報 憲 暖 島
 證 是 等 取 就 昧 所 般
 裁 鮮 新 抗 移 於 對
 判 察 條 議 居 鮮 人 證 條 何
 察 訴 出 間 島 為 對 約 等
 機 關 事 件 及 本 從 施 示
 何 來

等ノ擴張施設ナシ唯々記帳登
記シ置クハニシテ何等判
決ナシ

四 日本官憲ハ支那側ニ權利ヲ侵
害セラルレ默視スルハ

政府ノ命ヲ棄シヨリ間島ニ於ケル
利益ヲ放シ

五 日本政府ハ當初ヨリ間島ニ於
キテ新條約ハ支那側ノ反抗スル時

ハ新條約ハ支那側ノ反抗スル時
之ヲ實施シテ反抗スル時

ハ之ヲ實施セサル意思ナシ

六 日本領事館ニ拘禁セラル商埠地

外ノ鮮人被告人ハ早晚支那官

憲ニ引渡サルヘシ

七 日本領事館ニ訴訟ヲ提起スル

モノニ對シ支那官憲ハ其ノ所

有土地ヲ沒收シ退去ヲ命スル

ニ至ルヘシ

第五 間島ノ現状及將來

前各項狀況
施、現狀及支那側ノ態度及移住
鮮人、歸向ノ概要ヲ知ルヘシ
支那側ハ口ヲ「文」涉中ニ藉リ現
新條約ヲ無視シ我實施ニ反抗ヲ
試ミ各種ノ浮說ヲ流布セシメテ
鮮人、我ニ親近スルヲ妨ケ一面
諸種ノ懷柔策ヲ講シテ移住鮮人
ヲ收攬セシムル處ナシ
非可成速ニ相當ノ威威カヲ增加シ

我當
勤
主
張
徹
處
置
出
ツ



日清間協約

日清間協約

明治四十二年九月八日官報

本月四日日清兩國政府代表者ハ
清國北京ニ於テ左ノ協約ニ調印
セリ

大日本國政府及大清國政府ハ
善隣ノ好誼ニ鑑ミ圖們江力清
韓兩國ノ國境タルコトヲ互ニ
確認シ茲妥協ノ精神ヲ以テ一
切ノ辦法ヲ商定シ以テ清韓兩

國ノ邊民ヲ之テ永遠ニ治安ノ

慶福ヲ享受セシメムコトヲ欲

シ茲ニ左ノ條款ヲ訂立セリ

第一條 日清兩國政府ハ圖們

江ヲ清韓兩國ノ國境トシ江

源地方ニ於テハ定界碑ヲ起

點トシ名乙水ヲ以テ兩國ノ

境界ト爲スコトヲ聲明ス

第二條 清國政府ハ本協約調

印後成ルハ速ニ左記ノ各

地ヲ外國人ノ居住及貿易ノ
為開放スヘク日本國政府ハ
此等ノ地ニ領事館若ハ領事
館分館ヲ酌設スヘク開放ノ
期日ハ別ニ之ヲ定ム

龍井村
局子街
頭道溝
百草溝

第三條 清國政府ハ從來ノ通
圖們江北ノ墾地ニ於テ韓民
ノ居住ヲ承認ス其ノ地域ノ

界境ハ別圖ヲ以テ示ス

第四條 圖們江北地方雜居區

域内墾地居住ハ韓民ハ清國

ノ法權ニ服從シ清國地方官

ノ管轄裁判ニ歸ス清國官憲

ハ右韓民ヲ清國民ト同様ニ

待遇スハ納稅其ノ他一切

行政上ハ處分モ清國民ト同

様ナリ

右韓民ニ關係スル民事刑事

一切訴訟事件ハ清國官憲
總於清國法律ヲ按照シ
公平裁判スル日本國領
事官又ハ其委任ヲ受ケ
官吏自由ニ清廷ニ立會
スコトヲ得但シ人命ニ關ス
重案ニ付ハ須テ先
日本國領事官ニ知照スル
モノトス日本國領事官ハ於
テ若法律ヲ按照セズニ判

断セシル廣クハ此トヲ認メタ
心トキハ公正因裁判ヲ期セ
ルカ為別事官吏ヲ派シテ覆
審スヘキコトヲ清國ニ請求
スルヲ得

第五條 圖個江北雜居區域内
ニ於ケル韓民所有ノ土地、家
屋、清國政府ハ清國人民ノ
財産同様ニ完全ニ保護ス
又該江沿岸ニハ場所ヲ撰

ニ渡船ヲ設ケ雙方人民ノ往
來ハ自由タルニ但シ兵器
ヲ攜帶スル者ハ公文又ハ護
照ナクシテ境ヲ越スルヲ得
ズ雜居區域内產出ノ米穀ハ
韓民ノ搬出ヲ許ス尤凶年ニ
際シテ尚禁止スルコトヲ
得ヘク柴草ハ舊ニ依リ照辦
スルニ

第六條 清國政府ハ將來吉長

鐵道ヲ延吉南境ニ延長シ韓
國會寧ニ於テ韓國鐵道ト連
絡スヘシ某ノ音切ハ辦法ハ
吉長鐵道ハ一律タルニ開
辦ハ時期ハ清國政府ニ於テ
情形ヲ酌量シ日本國政府ト
商議ノ上之ヲ定ム

第七條 本協約ハ調印後直ニ
效力ヲ生スヘク統監府派出
所並文武ノ各員ハ成ルヘク

速ニ撤退ヲ開始シ二箇月ヲ
以テ完了スヘシ日本國政府
ハ二箇月以内ニ第二條所開
ノ通商地ニ領事館ヲ開設ス
ヘシ

右證據トシテ下名ハ各其ノ本
國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ
日本文及漢文ヲ以テ作成セル
各二通ノ本協約ニ記名調印ス
ル

明治四十二年九月四日

宣統元年七月二十日

大日本國特命公使

伊集院彦吉

大清國欽命外務部

尚書會辦大臣

梁敦彥

大正四年九月廿二日
參事官室 來

參事官



間島在位鮮人^ニ對ス^ル司法關係件

別紙司法部意見第一項乃至第四項ハ從來
間島^ニ於ケ^ル司法關係及大正四年四月二十四日
滿蒙ニ關スル日支條約ノ結果ヲ記述シタル
モノ^ニシテ之^ニ對シテハ疑義ヲ挾^クノ餘地
ナ^ク第五項^ニ付テハ帝國カ流外法權ヲ
有ス^ル地域タル間島^ニ行ハルル法令ハ特別
ノ規定ナキ限りハ帝國ノ一般法ナ^リト^スハ理
論上明白ナ^リト^スル^ル地點^ニ付テハ明治三十二

年法律第七十號ヲ以テ領事官ノ職務ニ關スル制ヲ規定セリ領事裁判ニ關シテハ同法律第三條ニ「領事官其他本法ニ依リテ職務ヲ行フ者ハ法令及條約ノ規定ニ從テ其職務ヲ行フヘシ」ト規定シ此法令トアルハ固ヨリ帝國ノ法令ニシテ朝鮮ニ行ハルル制令其他ノ法令ニ亦帝國ノ法令ノ一部ナルカ故ニ間島領事官ハ必要ニ應ニ制令ニ基キ間島在在朝鮮人ノ民刑事事件ヲ裁判シ得ヘシトノ論アルヘキニ如何

セシ朝鮮總督府官制第一條ニ總督ハ朝鮮
ヲ管轄ストアリテ總督ノ職權ノ行ハルル範
圍ハ朝鮮ノ地域内ニ限リ又制令權ニ關スル
明治四十四年法律第三十號第一條ニモ朝
鮮ニ於テハ法律ヲ要スル事項ハ朝鮮總督
ノ命令ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得ト規定
シアリテ間島ハ朝鮮總督ノ管轄地域外ニ
屬シ制令其他朝鮮總督ノ命令ハ之ニ及ハ
サルカ故ニ右領事裁判ニ關スル法律ニ掲
ル法令ノ文字中ニハ制令其他總督ノ命令ハ

自ラ之ニ包含スル解釋セサルヲ得ス

更又間島ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル明
治四十四年法律第五十一號第一條ニ「間島
ニ於ケル帝國領事官ノ豫審ヲ為シタル死刑、
無期又ハ短期一年以上ノ懲役若ハ禁錮ニ該ル
罪ノ公判ハ朝鮮總督府裁判所之ヲ管轄
ス」トシ第四條ニ「間島ニ駐在スル帝國領事官
ノ為シタル裁判ノ控訴又ハ抗告ハ朝鮮總督府
裁判所之ヲ管轄ス」トト為シ間島ニ於ケル民
刑事件ニ關スル裁判ノ統一ハ朝鮮總督府裁

判所リシテ之ニ當リシムコトヲ爲シアルカ故ニ總
督府裁判所ニ於テスル裁判ハ制令其他朝
鮮ノ法令ニ依ルヘシト論スルセノアルヘキモ此見解
モ亦當リ得タルモノト云フコト能ハス何トナレハ凡
ソ民事事件ト刑事事件トヲ問ハス一定ノ法
令ニ依リテ其行爲ヲ律シ又、其法令ノ違犯ト
シテ刑罰ニ處セラルスルニ付テハ當人ニ於テ其法
令ヲ遵守スルヘキ義務アルコトヲ前提トス制令其
他總督ノ法令カ間島ニ行ハレ同地ニ於テ内鮮
人ハ之ヲ遵守スルヘキ前提ナクシテ制令其他ニ依

リ裁判せらるへキニ非ス況ニヤ内地裁判所ニ
於テモ外國人ノ身ノ關係等ニ付テハ我民法
等ニ依ラス却テ當該外國人ノ本國法ニ依ルコ
トアリ又我國ニ於テ治外法權ヲ有スル國ニ駐
在スル領事官ハ其職權ニ屬スル事項ニシテ法
律ニ抵触セザル範圍ニ於テハ駐在地^テ對スル
命令ヲ發シ法律規定ヲ要スル事項ニシテ法
律ノ規定ナキトキハ命令ヲ以テ必要ナル規
定ヲ設クルコトヲ得ヘク其違反等ニ關シ滿
洲ニ於ケル領事裁判ノ上訴ハ關東都督

府地方法院に於て之を管轄し其他支那地方に於ける領事裁判、控訴及抗告ハ長崎控訴院及地方裁判所に於て管轄するトあり然るモ左等内地又ハ關東州、裁判所に於て斯る領事裁判ノ上訴抗告等ノ審判ヲ為るニ當リテハ裁判院ノ以テ内地又ハ關東州ノ法令に依り當該地方領事官ノ命令權に依ル法規ヲ無視し得ヘキ理由ナキナリ

間島に於ける民刑一切ノ事件に付てハ制令其他朝鮮總督府ノ法令之ニ適用する能ハ

スレテ悉く内地法ノ之を行ハルルモノトセハ大體
司法部意見第六項ニ列挙シタル如キ結
果ヲ来スヘシ今第六項ニ記述シタル意見解
カ悉く正當ナリヤ否ヤハ暫ク指キ司法部ハ
第七項ニ於テ其不便中最も恐ラヘカヲサルハ鮮
人ノ親族相族又ハ結力關係ニシテ此点ニ付
テハ鮮人ノ私權保護上甚シキ缺陷ヲ生ズヘキ
カ故ニ之カ救済策トシテハ勅令ヲ以テ簡島
在住ノ鮮人ニ適用スヘキ特別規定ヲ設クヘシ
外ナカニヘシト云ヘリ然レトモ勅令ヲ以テ簡島

に於ける朝鮮人、親族、相族及能力關係に付
ける民事令、規定を適用するコト爲るモ、鮮
人の親族、相族等との關する事項、如キリ、軍閥
島に止まる司法部意見の所謂鴨綠江下流
ノ對岸地境其他滿蒙ハ勿論内地に於ける朝
鮮人に付ても同様總て朝鮮人ハ何レノ地に在ルモ
其身分及能力關係等ハ内地ノ民法に依るコト
能ハサレハ依る此点に關する民事上ノ難問題
ヲ解決シ鮮人ノ私權保護ニ缺陷ナカシムヘキ
法規ヲ設ケムトセハ特別ノ法律ヲ以テ朝鮮人

朝鮮人ノ親族相族及能力關係ニ付テハ民法
ノ規定ニ依ラズ民事令ノ規定ノ如ク慣習ニ依ル
トモ規定スル要アルヘク單ニ勅令ヲ以テ間島在
留朝鮮人ニ付テ之ヲ規定シ設クモ之ニテハ不充
分ニシテ朝人私權保護ノ目的ヲ達スル所以ニ
非サルヘシ

然レトモ鮮人ノ親族相族及能力關係ニ付テハ
右ノ如ク帝國政府ニ於テ特別ノ法律ヲ制定セ
ラレストモ我現行法規ノ解釋適用ニ内地朝
鮮臺灣又ハ關東州ノ裁判所ニ於テ朝鮮

總督ノ制令ナル民事令ノ規定ニ依リ審判スヘキ
モノト思考セサルヲ得ス何トナレハ制令カ朝鮮ニ於テ
ハ法律ニ代ハル法規ナルコトハ四十四年法律第三十
号ヲ以テ規定セラル此法律ハ帝國裁判所ニ於
テハ一般ニ之ヲ尊重スヘキモノトス同制令ナル民事令
第十一條ニ民法其他内地ノ法律中能力、親族及
相族ニ關スル規定ハ朝鮮人ニ之ヲ適用セラル此
事項ニ關シテハ慣習ニ依ルトノ明文アリ茲ニ朝
鮮人ト稱スルハ帝國臣民中朝鮮ニ本籍ヲ有
スル朝鮮土著ノ人民ヲ謂ヒ此規定ハ朝鮮人タル

身分ヲ有スル限リハ屬人の性質ヲ有スルモノニ
屬シ刑法其他屬地の性質ヲ有シテ其地ニ安寧
秩序ノミヲ目的トスルモノトハ大ニ其性質ヲ異ニ
カ故ニ徵兵令及召集條例ハ朝鮮ノ地域ニ施行ナキ
ニ拘ラス其規定ハ内地人ニ對スル屬人の性質ナリ
理由ヲ以テ總督府裁判所ハ其違犯者ヲ嚴罰
スルコト爲ラント同シテ朝鮮人々以上ハ法令内
地、臺灣、滿蒙、間島乃至外國ニ在ルニ此制令
規定ニ依リテ當然トシ帝國裁判所ハ朝鮮人
身分關係ニ於テハ此制令ノ規定ニ依リテ裁判ス

へキモノト認ム論者ハ制令ノ效力ハ朝鮮地域外ニ
及ハサルカ故ニ朝鮮人ノ身分能力ニ付テモ制令規
定ハ朝鮮地域外ノ朝鮮人ニ對シテ效力ナシト云
フモ元來個人ノ身分能力關係ハ諸國間ニ於テ
悉ク本國法ニ依ルヲ國際私法ノ通則トシ我國
ノ法例(三十二年法律ニシテ朝鮮ニ施行シラレタ)
テモ人ノ能力及親族、相族ノ關係ハ本國法ニ依ルノ原
則ヲ規定シアルカ故ニ朝鮮人ノ身分及親族、相族
ノ關係ハ法例ノ解釋上其ノ規定ニ趣旨ニ鑑ミ
其個人ノ本籍地タル朝鮮ノ法令ニ依ルヲ至當トス

大審院以下内地裁判所に於ける臺灣に於ける
 律令及朝鮮に於ける制令、效力は臺灣及び朝鮮の地
 域に限り、法令に於ける其審判上は、他に外國法に同一
 視し居るコトナレトモ、刑罰法、如き其地、安寧秩
 序を維持スルコトを主眼トスル法規は、臺灣及び朝
 鮮外に其效力を認むるノ理由ナク、又其必要ナキニ
 拘らず、右等屬人的ナル法規は、臺灣及朝鮮ノ法
 規より外國法同様ニ看做ス以上、法例ノ解釋に
 於ける身分關係等ノ法規上一層其個人在屬地ハ
 法規に依り裁判セサルヲ得サルヘシ以上ノ理由アル

カ故ニ内地裁判所ノ見解如何ニ暫ク措キサラモ
總督府裁判所ニ於テハ朝鮮人ノ能力及親族相
族關係ヲ審判スルニ當リテハ現行法ノ解釋適
用上其朝鮮人カ間島又ハ滿洲在籍者ナルト否ト
ノ別ナク悉ク民事令ノ規定ニ依リ審判スルニ當
然ト思考ス

右見解ヲ正當ナリトセハ司法部意見第六項ニ
掲グル内地法規トノ抵觸ノ不便ハ甚主要ナル點ニ
於テ一掃セラルルカ如シ同項中(イ)謀殺故殺
等ニ付刑法大全ノ規定ニ依リ能ハサルカ如キハ可

法部年来ノ主張トシテ、朝鮮内地ニ於テモ刑事令
 中北朝鮮人ニ關スル刑法大全ノ一小部分ヲ運用
 スルノ例外ヲ必要ナシト認メ其廢止ヲ希望スル所
 也。又、間島其他滿洲ノ朝鮮人ニ内地其他ニ於
 ケル朝鮮人ト同シテ全然刑法ニ依ルトスルモ大ナル
 支障ナカルヘシ。(四)笞刑ノ如キモ元来輕微ナル
 懲役、拘留又ハ罰金科科ヲ本刑トシ笞刑ハ便宜
 之ニ代ユルヲ得ヘキ刑罰ノ一方法ニ屬シ朝鮮ノ
 慣習ニ基キ半島地域内ニ限リタル法則ナル
 カ故ニ内地其他ニ於ケル鮮人ニハ之ヲ適用スル

必要ナキト同シク間島滿洲等ニ於ケル朝鮮人ハ笞刑ニ處セズ各其布刑ニ依リ處罰シテ毫モ差支ナシ(ハ)間島ニ於ケル朝鮮人ニ保安法ノ適用ナキハ稍ニ不便ナルヘシト雖元來保安法ハ光武十一年ノ法律ニシテ朝鮮人ニ之ヲ適用シ内地人ニハ統監府令保安規則カ今日ニ於テモ適用アリ此兩法令ハ元來併合後統一シテ新ナル一制令トシ朝鮮内ノ保安上内鮮人一般ニ適用スヘキ法規ヲ制定スルコト當然ナルモ平島ノ現状ハ未ダ過渡時

代々屬シ右等法令ノ規定ハ集會又ハ新聞雜誌ノ發行ニ關スルカ故ニ之ヲ統一シテ内地ノ法規ヨリモ嚴重ナル制令ヲ作ルハ終ニ問題ヲ生スルノミナリ實益ナキカ故ニ保安法保安規則ノ兩者リ其儘存續シアルノ狀態ニシテ間島ニ於ケル鮮人ニ保安法ノ適用ヲ必要トセハ内地ニ在ル内地人ニ保安規則ノ適用ヲ必要トストムハサルヘカラス然ルニ此兩法令ハ素ト朝鮮地域内ノ保安ヲ維持スルニ必要ナル法令ニシテ全ク屬地的ノ法律ナルカ故ニ今日ニ於

ヲモ帝國領土外之ヲ施行スルノ必要ナキカ
故ニ強ク間島其他鴨綠江下流對岸地
域乃至滿洲之ヲ及ハサレトスルハ其當ヲ得サ
ルノミナリ此等地域ニ内地ノ法律ヲ及フトスレ
ハ治安警察法案如ク治安法ニ比シ取締上大義
ナキ内地法規ノ行ハルアリ又此等地域ニ_{行政の法}
等内地法令及リスルハ領事官ノ明治
三十二年法律ニ依リ其地ニ於テ法律ノ規定
ヲ要スル事項ニ付法律ノ規定ナキトキハ命
令ヲ以テ必要ナル規定ヲ設ケルコトヲ得ヘキカ

故に間島に在住する朝鮮人の對して取締上必要
 なる命令は本府に請求し依りて之を發せしむ其遠
 征の總督府裁判所に於て之を處罰し得
 へし(ホ)記述せん所の朝鮮人の所為を付裁判
 所に於て其慣習を認めん場合^{其慣習}に制令せん民事
 令に依りて之を認めんや將て民法の正條に依りて
 之を認めんやノ論に過キスレテ何れも其慣習
 を認めん点は一なり故に實際上毫も不便ナク
 (ハ)訴訟手續を付ての總督府裁判所の手
 續は固より朝鮮の法規に依ると同時の間島に

於テ、領事裁判ノ手續法ニ依ルハ、間島ニ於
テ、警察官ニ於テ犯罪即決又民事争訟
調停等ハ行ハレズニテ電ニ名支ナシ

以上、理由ニ依リ（間島在任ノ朝鮮人同ニ民刑事件ヲ統轄府裁判所ニ
於テ審判スルニ當リ則チ其地ニ在リテ發生スル事件ハ統轄府ニ依リ審判セシトセハ之カ前提トシ
テ間島ニ於ケル帝國臣民即チ内地人及朝鮮

人ハ制令其他總督府ノ法令ノ下ニ立チ常
ニ其法令ヲ遵守スルキニトテ爲ササヘカラス然

ルニ間島ハ今日未ダ帝國ノ領域ニ非ス又朝鮮
總督ノ統治範圍ハ朝鮮ノ地域ヲ出テサ
ルニ拘ラス制令其他總督ノ命令ヲ間島ニ及ボ

之同地在任、朝鮮人ヲシテ制令其他總督府ノ法

規、下ニ立タシムルハ國際關係モアリテ穩當ナラサル

ヘキノミナラス若シ朝鮮地域ノ統治上其必要アリ

トセハ臺灣、間島ニ止マラス鴨綠江下流對岸

ニ在任スル多數、朝鮮人及内地人ニ付テモ同一ノ

必要アリヘキニ依リ總督府裁判所管轄ヲ擴

張ルニト同時ニ右等地方ノ帝國臣民モ間島

ト同一地位ヲ置クニトテ主張セサレハ其議論ノ

一貫ヲ缺クニ至ンヘシ畢竟スルニ朝鮮ノ法令

ヲ間島ニ及ボスニ非サレハ朝鮮ノ統治ヲ害

スト云フハ國家トシテ又總督トシテ自國領
域ニ對スル自己ノ權力ヲ不充ルナリト謂フニ異
ナラズ何トナレハ自國領土ニ對シテハ絶對權
力ナル主權ノ作用ニ依リ完全ニ統治ニ得ヘク
隣國ノ國境ニ如何ナル騷擾アルモ自國領
土内ニ一歩モ踏入ンコトヲ許サズ自國領域ニ
如何ナル影響アリモ及ホサシメザンコトヲ獨立國ノ
體面上必要トス若シ隣國接壤ノ地域ニ
於テ其要求ニ應セザルトキハ自國兵力ヲモ
派シテ之ヲ掃蕩ニ得ヘキハ國際法ノ通則

自國ノ統治ニ危害ヲ及ボス事ヲ初メタル者ハ自國ニ對シテ必要ナル
力ヲ要スルハ自國ノ領土ニ對シテハ絶對權

ナニヲ以テナリ之ヲ要スルニ日支間ノ滿蒙新

條約ヲ間島ニ及ホシ同地ノ朝鮮人ノ内地人ト

均シク治外法權ノ下ニ立ツコトト爲リ民刑事件

ニ付朝鮮人カ被告ト爲リタル場合ハ内地人

ト同シク領事官ニ於テ裁判シ其裁判ノ控

訴抗告ハ總督府裁判所ニ來ルコトト爲

ス今日ニ於テハ其朝鮮人及内地人^{裁判ハ}現ニ間

島ニ行ハルル内地法及領事官ノ發スル法令

ニ依リ審判スルニ大ナル支障ナク司法部意

見第六項ノ中ニ於テ朝鮮人ノ能力及親族相族

ノ關係ヲ除クノ外ハ朝鮮統治上ニ大ニ關係
ナキカ如シ而シテ此朝鮮人ノ身分關係
ニ付テハ内地法ニ依ラズ民事令ノ規定ニ依
ルヘキコトハ帝國ノ間島ノ朝鮮人ニ限ラズ屬
人的ノ法律トシテ朝鮮人ナル以上ハ何レノ
地ニ在ルモ前述ノ理由ニ依リ帝國裁判
所ハ之ニ依^{裁判ス}ルヘキモノト思考セサルヲ得ス

南滿洲及蒙古ニ関スル

日支條約及附屬公文解釋

也
邊朝新修習社書官稿

第一節 滿蒙ニ於ケル帝國臣民ノ地位

第一項 居住及土地ニ関スル權利

第一款 居住及營業

第二款 土地ニ関スル權利

第二項 警察課税及裁判管轄

第三項 鑛業權利

第四項 鴨綠江對岸及間島ニ於ケル朝鮮人ノ地位

第二節 鐵道

第三節 借款

第四節 顧問及教官

結論

新日支條約ト滿蒙

今回新ニ日支兩國間ニ締結セラル
條約及公文書ニ滿蒙ニ於ケル帝國
臣民ノ居住及土地等ニ關スル權利
鑛山鐵道ニ關スル事項等ニ付現
行ノ條約規定ヲ變更セリ新條約
ノ規定ノ正確ナル意義ニ至テハ更
ニ日支間ニ細目ニ協定成立スルニ非
サレハ之ヲ知ルヲ得サルヲ以テ此處
ニハ大体ニ於テ如何ナル變更ヲ來

セシカラ述フルニ止ム

第一節 滿蒙ニ於ケル帝國臣民地位
第一項 居住及土地ニ關スル權利ニ非

第一款 居住及營業

滿洲及蒙古ニ於ケル帝國臣民ニ從
來開港地（通商場ヲ含ム以下同）及
鐵道附屬地以外ニ於テ居住又營業
スルヲ得ス此等特殊地域以外ニ
商用又ハ游歴ノ目的ヲ以テ旅行
スルニ當リテハ必ス帝國領事官、

下附^{セル}旅券ニ支那地方官憲ノ副
署ヲ得テ之ヲ携行スルヲ要シタル
コト支那ニ於ケル他ノ地方ト異ナル
コトナカリキ然ルニ今回ノ新條約
ハ現行ノ規定ヲ變更シ南滿洲及
東部內蒙古ニ於テ從來ヨリモ廣汎
ナル範圍ニ帝國臣民ノ居住及營
業ノ自由ヲ認メタルカ其ノ範圍及
程度ハ兩地域ニヨリ差異アリ
甲 南滿洲

帝國臣民ハ從來南滿洲ニ於テハ開
港地及鐵道附屬地以外ノ地域ニ
居住營業スルノ權利ヲ認メラルル
コトナカリシニ新條約ハ一定ノ條件ヲ
以テ此等地域上ノ制限ヲ撤去シ帝
國臣民ニ與ラルニ一般的ニ居住往來シ
及高工業其ノ他ノ業務ニ從事スルノ
自由ヲ以テセリ 即チ同條約第三條
ハ「日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ自由ニ
居住往來シ各種ノ高工業其ノ他ノ

業務ニ從事スルコトヲ得ルノ規定ニ
ルモ同條約第五條第一項ニ「日本臣
民ハ例規ニ依リ下附セラレタル旅券
ヲ地方官ニ提出シ登録ヲ受ケ支那
國警察法令及課税ハ服スヘシ」トス
制限ヲ以テ南滿洲全部ヲ開放セ
ルモノト云フヘシ

ハ、東部内蒙古

東部内蒙古ニ關スル規定ハ前掲南
滿洲ニ關スルモノト稍其趣旨異

ニ支那、東部内蒙古其全部ヲ開
放スルニ方ラ、此點點付テハ東部
内蒙古ニ於テ開港地ト其ノ他ノ地
域トヲ區別スル必要アリ
傳、開港地

東部内蒙古ニ於テ、既ニ三ノ開港
地アリ、而シテ内外人ノ居住ニ宛ツ支那
ノ新條約ニ依リ、更ニ幾多ハ開港地
ヲ設定セシムトスルセリ、即チ同條約
第六條、支那國政府ニ成ル財力速

ニ外國人ノ居住貿易ノ為自ラ進
テ東部内蒙古ニ於テハ適當ナル諸
都市ヲ開放スヘキコトヲ約スルコト
ヲ規定シ茲右ノ規定ニ依リテ開放
スヘキ諸都市及商埠章程ハ支
那國政府自ラ之ヲ擬定シ豫メ日
本國公使ニ協議ノ上決定スヘキコ
トヲ附屬公文ニテ約定セルヲ以テ
如何ナル都市ヲ開放スヘキヤハ不
遠而國政府間ニ決定實行セラレハ

之從テ帝國臣民ハ此等開放都市ニ
來往居住ニ貿易ニ從事シ及各種
ノ事業ヲ營ムヲ得ハキハ同地方ニ
於テ既ニ開放セラレタル諸都市南
滿洲及支那、他ノ地方ニ於ケル諸
開港地ニ於ケルト何等差異アルハカ
ラズ即チ日支通商航海條約第四
条ヨリ日本國臣民ハ其ノ家族、雇員及
僕婢ト共ニ現ニ外國人ノ居住貿易
ノ為メ開キ又ハ將來開クハキ所、清

國ノ諸港諸市ニ往來シ、住居シ、高
工業製造業ヲ營ミ又ハ其ノ他一切
合法ノ職業ニ從事シ且其ノ商品
及携帶品ヲ搭載シ前記諸開
港地ノ間ヲ隨意ニ往來スヘク云々
トノ規定ハ當然此等蒙古ニ於ケル
開放都市ニ適用セラルルナリ
只東部内蒙古内地（開放ノ都市ヲ除ク）
ニ在リテハ帝國臣民ハ一般ニ居住往來
ノ自由ヲ有スルモ此ニアラス其ノ營業ニ

関シテモ亦一定、制限ヲ受ケサルヘカラ
 ス即チ新条約第四条ニ「日本國臣民
 ハ東部内蒙古ニ於テ支那國民ト合
 辦ニ依リ農業及附隨工業、經營
 ヲ為サムトスルトキハ支那國政府
 之ヲ承認スヘシ」ト規定セルヲ以テ
 本邦人ハ農業及附隨工業ニ限リ
 日支西國人、共同事業トスル場合ニ
 支那官憲ノ許可ヲ得テ之ヲ經
 營スルコトヲ得ヘキナリ元來帝國政

府ハ當初滿蒙ニ於ケル帝國臣民ノ
權利ヲ同一基礎ニ置カンコトヲ希
望シ日本國臣民ハ滿洲及東部内
蒙古ニ於テ自由ニ居住往來シ各
種ノ商工業其他ノ業務ニ從事
スルヲ得ヘキ旨ヲ提案シタルニ支
那ハ蒙古ノ開放ニ異議ヲ唱ヘタルヲ
以テ終ニ滿蒙ヲ分離シ東部内蒙
古ニ關シテハ開放都市ニ居住スルヲ
得ル外單ニ兩國臣民合辦ニ依ル農

業及附隨工業經營ノ權利ニシテ
認メタルニ至ルハ遺囑ナリト云ハサ
ルヲ得ス然リト雖モ此規定ハ適法
ナル農業及附隨工業ノ目的ノ為ニ
ハ帝國居民ハ開放都市以外ト雖
モ自由ニ居住往來シ或ハ住家工
場其ノ他ノ必要ナル建物ヲ建設償
借シ或ハ此等工業ニ必要ナル材料
等ヲ賣買ニ從事スルハ自由ヲ認
メタルモノト解釋シ得ヘク又此ヲ解

釋

セサルヘカラス蓋シ農業及附隨

工業、寧ロ都市以外ニ於テ經營セ

ラルルヲ常トシ且此等ノ事業ハ

經營ヲ認ムル以上其ノ經營ニ必

要ナル諸般ノ行為ヲ禁止スルヲ理

由ナクシタル

今之ヲ条約ニ規定シ稽テ元郵同条約

第五條第一項ハ

「前三條ノ場合ニ於テ日本國臣民ハ

例規ニ依リテ附セラルル旅券ヲ

地方官ニ提出シ登録ヲ受テ又支

那國警察法令及課税令服則ニ

規定セリ而シテ此ノ規定中「前三条

ノ場合ニ於テ」此及ルハ第二条第三

条及第四条ノ場合ヲ指スモノニシテ

其ノ内第四条ハ帝國臣民カ東部

内蒙古ニ於テ支那人ト一定ノ事業

ヲ合辦ニ依リ經營スル場合ニ關ス

ルモノナルカ故ニ本項ノ規定ハ即チ合

辦事業ヲ經營スル帝國臣民ハ一定

旅券ヲ地方官ニ提出シ登録ヲ受
ケ且地方官ニ察法令及課税ニ服スル
又トテ條件モテ内蒙古内地ニ於
テ居住シ及所定事業ニ従事シ得
ルコトヲ認容セシモノト解釋セサレ
ヘカテ大何ナレハ帝國臣民ニ東部
内蒙古ニ於テ開放諸市ニ居住
且各種ノ業務ニ従事シ得ル權利
該支那ニ於ケル他ノ地方ニ存在スル開
港地ニ場合ト同様ニ般通高條約ニヨリ

既に認めらるる附屬地ニ於テ最モ本條約ニ
規定ヲ待ツル必要ナクハ本條約ニ本
項ニ內蒙古ニ於ケル諸開放都市以
外ノ内地ニ於テ農業及其ノ附隨
工業ヲ經營スルニ當リ之ヲ經營ス
ル必要上帝國臣民ニシテ此等内地ニ居
住スル場合ニ於テ旅券ヲ携行シ登録
受ケ課税及警察法令ニ服從スルハ
ト自起自了明カニセルモノナリト解
セサルヲ得ス

第二款 土地之權利

支那之於帝國臣民、亨有之權利、開港地、其以外之地域、於各異所、

第一 開港地

日支通商航海條約第四條、依之、日本國臣民、現、外國人、居住貿易、為、開、將來開、所、清國、諸港、諸市、往來、其地、於、外國人、使用及占有

ノ為ノ既ニ選定ニ若ハ將來選定セ

ラルヘキ地區内ニ於テ家屋ヲ貸借賣

買シ地所ヲ貸借シ寺院、墓所、病

院ヲ建設スルコトヲ得ヘキカ故ニ開

港地ニ於テ一定ノ居留地ヲ設定セル

モノニ在リテハ其ノ地區ノ借地ニ付各

居留地取極書ニ詳細ノ規定ヲ設

クルヲ常トセリ然レトモ開港地ニ

シテ何等居留地ヲ設定セサルモノニ

在リテハ從來外國人ニ對シ土地ノ

所有ヲ許容シ來リ南滿洲及蒙
古ニ於テハ帝國臣民ハ亦右ノ例ニ倣
ヒ其ノ開港地ニ在ルモノハ居留地内
ニ於テ地區ヲ借地ト居留地以外ノ地
域及居留地ナキ開港地ニ於テ等シ
ク土地ヲ所有スルヲ得タル點ニ如ク
開港地ニ於テ無制限ニ土地所有ヲ
認メタル點ニ蓋シ開港地ニ於テ一定ノ
居留地ヲ設定スル迄ハ暫ラ亦外國
人ハ雜居ヲ許シタルニ彼等ハ漸次

土地ヲ購買スルニ至リ終ニ慣行慣例
一方ニ彼等以外法權ヲ有スルヲ
以テ支那爲諸法全ク服從ヲ強制
スルニ途ナク從テ支那政府ニ於テ
モ此ガル土地所有ヲ全然禁止スル
本可能トアリタル由ルト思考スル
第二開港地以外ノ内地

滿蒙ノ内地ニ在リテハ土地ノ所有ハ
勿論借地ト雖モ毫モ公認セラレズ
ナカリキ然ルニ此ノ狀態ハ新條約

依り稍変更セラルルに至リ

甲 南滿洲

新條約第二條ハ

日本國臣民ハ各種商工業、建物ヲ
建設スル為又ハ農業ヲ經營スル
為必要ナル土地ヲ高租スルコトヲ
得

ル旨ヲ規定セリ而ソ所謂高租ナル文
字ハ同條約附屬公文ニヨリ三十箇
年迄ノ長キ期限付ニテ且無條件

ニテ更新シ得ル租借ノ含ムモノト

解釋スルキヲ以テ事實永代借地

ノ性質ヲ有シ帝國臣民ハ南滿洲

各地ニ於テ各種ノ目的ノ為ニ自由

ニ永代借地ヲナスヲ得ルナリ

茲ニ前記ノ高租ナルモノノ性質ニ付

攻究スルキモノアリ思フニ高租ハ

三十箇年迄ノ長キ期限付ニテ且無

條件ニ更新シ得ル租借ヲ含ム

モノト解釋スルキハ附屬公文ノ明

言セル處ナリト雖モ高租ハ元來支那政府ヨリ租借スルノ意義ヲ有スルヤ否ヤハ問題ヲ生ス若シ高租ハ支那政府ヨリ租借スヘキモノトセハ官有地ヲ高租スル場合何等論ナシ然レトモ私有地ニ至テハ絶對ニ之ヲ高租スルヲ得ストセハ格別若シ然ラステ帝國臣民ハ私有地ヲモ取得レ得ルスレハ其ノ場合ニ於ケル高租ハ如何ナル狀態ニ在ルヘキヤ帝國臣民ノ土地

所有權ヲ認メラレサルヲ以テ箇人ヨリ
私有地ヲ買收スルト同時ニ其ノ所
有權ハ忽チ高租權ニ變スヘキカ或
ハ登錄若ハ他ノ一定ノ手續ニヨリ之
ヲ高租ニ引直スヘキヤ次ニ又高租
箇人ヨリハ租借ヲモ含ムトセンカ土
地所有權者タル支那人ハ即チ其ノ
所有權ヲ保有シ或ハ相續ニ依リ
或ハ賣買等ニ依リ之ヲ他ニ移轉ス
ルヲ得ヘク而シテ高租者タル帝國臣

民ニ在リテモ亦其ハ高租地ヲ他ニ轉
讓渡シ得ヘキヲ以テ其ハ相互ノ關係
ハ移轉日度数及年月ヲ重ヌルニ
從ヒ愈々複雑トナリ或ハ互ニ土地
所有者及高租者ノ何人ナルヲ知
ルヲ得スルヲ終ニ高租ノ方法ナキニ至
ラントス高租ノ正確ナル意義ヲ明
シ及高租ノ手續ヲ須知セラルル為
不遠相當ノ規則制定發布セララルコ
トト信スルヲ以テ茲ニハ單ニ疑問ノ点

ヲ掲記スルニ止ム

乙 東部内蒙古

東部内蒙古ニ関シテハ高祖ニ関スル

規定ナキヲ以テ帝國臣民ハ東部内

蒙古ノ内地ニ在リテハ土地ニ関シ何等

ノ權利ヲ享セサルモノト解釋ス

ヘシ帝國政府ハ帝國臣民ノ營業及

居住ノ自由ト同シク土地ニ関スル權

利ニ付テモ滿蒙同ハ取扱ヲ受ケシ

コトヲ希望シ條約原案ニ於テハ滿

洲及東部內蒙古。於此。各種
高工業上。建物。建設。又。耕作。為
必要ナル土地。人債借權。又。其所有
權ヲ取得スルヲ得。此ハ今ノ規定セ
ンルモ。是亦絕對的ニ支那ノ容
ル所トス。又。東部內蒙古。於
此。農業及附隨工業ヲ經營スル權
利ヲ認メ。此ヲ止。其土地ニ關スル
規定。全然削除セ。此ヲ留テ。之ヲ自來
法ニ規定ス。推テ。皇帝國臣民。內蒙

古ニ於テ農業事業ニ其中心附隨ニ農業ハ爲
財土地ノ要ナル場合ニ當リテハ自己
除名義ヲ以テ土地ヲ所有シ若シ借
地スルコトヲ得スルヤ或モ支那ニ
名義ニヨリ或ハ合辦事業ノ主體
ノ名ニ於テ之ヲ借地又ハ所有セザル
ヘカラス此ノ如キハ實際ニ於テ頗ル
窮乏ナル方法ナルモ條約ノ解釋
トシテ已ムヲ得サルモ上思料セズ
然レモ他ノ方面ヨリ如上ノ規定ヲ

解釋其此三條約中其第二條三
南滿洲國於其土地之高租不
ルコトヲ規定シ第三條ニ南滿洲國
於其居住往來及營業ハ自由ヲ
認メ第四條ニ東部内蒙古ニ於ケル
農業及附隨工業ノ合辦經營ハ
規定シ更ニ第五條ニ至リ其第一
項ニ右等三條の場合ニ於テ警察
法人及課税ハ服スルコトヲ規定シ第
二項ニ民刑訴訟ハ審判ヲ規定シ且

土地：關於訴訟案件

前畧「但土地：關於日本國居民及

支那國國民間、民事訴訟、

支那國、法律及地方慣習、

依、西國、員、派、共同

審判、ス、レ

規定セルヲ以テ、若シ東部、内蒙古

ニ於テハ、帝國臣民、借地、又、土地所

有、權利、有、セ、ス、ト、ス、ル、以、明、記、解、釋

ニ、正、鵠、ヲ、得、タ、ト、セ、ル、以、テ、第、五

条第二項土地訴訟ニ関スル規定ハ
軍ニ南滿洲内地ニ於テ適用セラルヘ
キモノト云ハサルヲ得タ然レドモ東部
内蒙古内地ニ於テ同条約第四條
ニ依リ帝國臣民ニ對シ合辦ニ依リ農
業及附隨工業ノ經營ヲ認容シタル
以上ハ帝國臣民ノ其ノ事業ノ為居住
スルニ付借地借家等ノ問題凡ルヘキ
ニ故ニ帝國臣民ノ支那人間ニ土地
關スル訴訟發生シ得ルモノトモ豫想

然ルモ、信 為 各 事 乎 此 点 三 付 新 明
白ナル解 各 事 與 之 亦 容 易 三 非
依 之 本 問 題 而 付 之 亦 最 有 力 ナル
解 釋 事 待 之 切 矣

第二項 警察、課税及裁判管轄

一、警察、課税

帝國臣民 ニシテ支那開港地ニ在ルモノ
ハ其ノ帝國專管居留地ニ於ケル場
合トモ、此居留地以外ニ於ケル場合
トモ、警察及課税 關與シ受ケル

取扱ヲ異ニセリ 明治二十九年北京
議定書第一條ハ「新開通商中港
場ニ日本專有ノ居留地ヲ置クコト
ヲ妥定シ道路官轄及地方警察ノ
權ハ日本領事ニ專屬スルモノト
規定シ其ノ他帝國專管居留地ニ関
スル多數ノ議定書ニハ「居留地ニ於
ケル道路開通ノ權警察ノ權及ヒ諸
般行政ノ權ハ總テ日本政府ノ官轄
ニ屬スルモノト、意味ヲ有スル規定

ヲ掲ケリ即チ帝國臣民ハ居留地ニ
在リテハ支那ノ警察權及課税ニ服
セサルヲ例トス然ルニ開港地ニ於
テ居留地以外ノ地域ニ在ル者ニ付テ
ハ何等ノ明文存在セサルヲ以テ此カ
ル地域ニ在ル帝國臣民ハ理論上支
那政府ノ警察權及課税權ニ服
スハキモノト云ハサルヲ得然ルニ
事實ハ之ト異ナリ帝國臣民ハ何等
納税ヲ為サス又警察法令ニ服後也

シヨラルルコトナシ是レ蓋シ彼等ハ治
外法權ヲ有シ支那ノ裁判官轄ヲ
受ケサルカ故ニ彼等ニシテ納
税ノ義務ヲ履行セズ若ハ警察法
令ニ違反スルモ之ニ制裁ヲ課シ若ハ
之ヲ強制スルノ途ナキニ由ル然リ而
シテ開港地以外ノ内地。於ケル場合
ニ關シテハ現行日支通商條約中僅
ニ第百六條ニシテ若シ旅行者ニシテ旅券
ヲ携帶セズ又ハ法律ヲ犯スルキハ之ヲ

最寄リ領事官ニ引渡スヘシ但其ノ際
唯必要ノ拘束ヲ加フルルニシテ決
シテ之ヲ虐待スヘカラストノ規定ヲ
設ケタル、然ルニ今ヤ支那政府ハ
帝國臣民ノ滿蒙内地ニ於ケル居住
若ハ土地ニ關スル權利ヲ認メタルカ
故ニ之ヲ代償トシテ新ニ警察法令
課税及裁判權ニ關スル規定ヲ要
求セル、固ヨリ自然ノ勢ニシテ是レ
今回新条約締結ニ當リ支那ノ要

求ヲ基礎トシ其ノ第五条ニ

前三条（南滿洲ニ於テ土地國商

祖シ居住往來シ高工業其ノ他ノ業

務ニ從事シ東部内蒙古ニ於テ司

農業等ハ經營ヲナス場合）ノ場

合ニ於テ日本國臣民ノ例規ニ依リ

下附セラレタル旅券ヲ地方官ニ提

出シ登録ヲ受ケ又支那國警察

法令及課税ニ服スヘシ

トノ明文ヲ設ケタル所以ナリトス此處

一 言スヘキハ開港地ニ於テ居留地外

ニ居住スル帝國臣民ニ對シテハ此ノ

規定カ適用セラレサルコト是レ因リ蓋

シ開港地ニ居住シ得ルハ現行通商

条約ノ規定上當然ノ事柄屬シ本

条約ノ關知スル處ニアラサレハテリ次

ニ右ノ支那國法令及課税ハ支那官

憲單獨ニ決定スルコトヲ得スシテ必

ズヤ豫メ支那官憲ニ於テ帝國領

事官ト協議シテ施行セラルヘキコト

ハ附属公文ニヨリ約セラレタリ故ニ得
来ニ在リテハ南滿洲内地及東部内
蒙古内地ニ在ル帝國臣民ハ帝國
領事官ノ承認シタル支那警察
法令及課税ニ服從スルコトヲ要求
セラレルコトナレリ

尚警察權ニ關シテハ最初帝國政府
ハ從來日支間ニ警察事故ノ發生
ヲ見ルコト多ク不快ナル論爭ヲ醸シ
タルコトモ尠カラサルニ付此際必要ノ

地方ニ於ケル警察ヲ日支合同トスルカ

又ハ是等地方ニ於ケル警察官廳ニ

日本人ヲ僱聘シ以テ一面支那警察

機關ノ刷新確立ヲ圖ルニ資スルコト

ヲ提議シタルモ支那ノ容ルル所トナ

ラサリシ結果終ニ前記ノ規定ヲ設

クルニ至リ且南滿洲ニ関シテハ政治

財政軍事警察等ニ関スル外國顧

問教官ヲ僱聘セムトスルトキハ最先

ニ日本人ヲ僱聘スヘキ旨ヲ支那政

府ヲシテ附屬公文ニヨリ聲明セシムル

ニ止メタリ

只、裁判權

支那ニ於ケル裁判管轄權ニ關シテハ
現行通商航海條約

(一) 支那國ニ在ル日本國臣民ノ身

體、財產ニ關スル裁判管轄權ハ

當該日本國官吏ニ專屬シ(第三十

條)

(四) 支那國人ニ對シ若ハ其ノ財產ニ關

スル民事訴訟ハ支那國官吏ニ於
テ又日本國臣民ニ對シ若ハ其ノ
財産ニ關スル民事訴訟ハ日本國
官吏ニ於テ之ヲ審理判決スヘシ

(第三十條)

ハ支那國ニ於テ犯罪被告人トナリタ
ル日本國臣民ハ日本國ノ法律ニ
依リ日本國官吏之ヲ審理シ其
ノ有罪ト認メタルトキハ之ヲ處
罰スヘク之ト同様ニ支那國ニ

在ル日本國臣民ニ對シ犯罪、被
告トナリタル支那國臣民ニ對シ
テハ支那國官吏カ審理判決及
處罰スル、權利ヲ有ス（第三十

（二条）

トアリ即チ民刑訴訟、被告ノ所屬國
官憲之カ管轄權ヲ有スルモ（間島
於ケル朝鮮人、場合ハ大ニ異ナリ後述スヘ
シ）今回、新條約第五條ハ稍此ノ現
行規定ヲ變更シ南滿洲及東部内

蒙古ニ於テ土地ニ關スル民事訴訟ニ付
新ニ會同審判ノ制ヲ認メタリ同條ニ
曰ク

日本國臣民被告タル場
合ニハ日本國領事官ニ於テ又支那
國國民被告タル場合ニハ支那國官
吏ニ於テ之ヲ審判シ互ニ員ヲ派シ
臨席傍聽セシムルコトヲ得但シ土
地ニ關スル日本國臣民及支那國國
民間ノ民事訴訟ハ支那國ノ法

律及地方慣習ニ依リ兩國ヨリ員
ヲ派シ共同審判スヘシ

將來同地方ノ司法制度完全ニ改
良セラルルトキハ日本國臣民ニ関
スル一切ノ民刑訴訟ハ完全ニ支那
國法廷ノ審判ニ歸スヘシト

故ニ土地關係スル日支西國人間ノ民事
訴訟ニ對シテハ被告ノ所屬官吏ニ於
テ管轄權ヲ有スルコトナク總テ共同
審判ニ附セラルルハ非ズ而シテ日支

兩國交渉中支那政府ハ南滿洲ニ
於テ「日本入ト日本人ト」訴訟及日本
人ト支那人トハ訴訟ニテ土地若ハ
租契ニ關スル爭執ハ支那官憲ノ
審判ニ歸シ日本國領事官ヨリ員ヲ
派シ傍聽スルコトヲ得ヘキ旨ヲ提
案シタルモ終ニ之ヲ排斥シ滿蒙西
地域ニ共通適用セラルヘキ本規定ヲ
設ケタルナリ唯茲ニ疑アルハ右ノ所
謂共同會審ナル制度ノ性質組織

及權限如何ニ在リ即チ共同審判、
判決ハ如何ナル程度及方法ニテ當
事者若ハ其ノ所屬國官憲ヲ拘束
シ得ルヤ將又共同審判員ハ何人ヲ
以テ之ニ宛ツルヤ凡ソ此等ノ事項
ヲ審ニスルハ固ヨリ詳密ナル規定、
發布ニ待タサルヲ得ス

第五項 第三項 鑛業權

從來支那人特殊ノ條約又ハ協
定ヲ以テスルニテサテ外
國人ニ鑛業權ヲ許與スル
以テ其ノ鑛業條例ニハ支
那人又ハ支那國ノ法律ニ依
リテ成立トスル法人ニ限リ
鑛業權ヲ取得シ得ル者ニ規
定シ且支那人ト外國人ト合資
ニ依リ鑛業ヲ經營スル場合

二、外國人々出資額ハ全資
本金ハ十分ハ五ヲ超過セ
ルヲ必要ト爲リ、
日支交渉ニ於テ帝國政府ハ
最初支那國政府ハ南滿洲
及東部内蒙古ニ於ケル
業ハ採掘權ヲ日本國臣民
ニ許與スルノ條項ヲ提議
シ、
修正案中ニ本協約調印、

日ヨリ一箇年以内ニ日本資
本團力東三省南部ニ在リテ
鑛業ヲ經營セムトシテ希望
ナルトキハ既ニ試掘又ハ採
掘ニ着手セラル鑛山ヲ除クハ
外支那國政府ハ該地方ニ於
テ鑛山試掘自特權ヲ一箇
年限リ該資本團ニ附與スル
トシテ承諾ス調査ニタル鑛
山對シテハ其半數ヲ

選擇也之支那鑛業條

例ニ照テ採掘ヲ實行

不_レ出_レコ_トシ_テ許_ス其_レ他_ハハ

各鑛山ハ支那自_ラ處置_シ

行_ハ支_ナ前_ニ規_定シ_テ設_ス

局_ニ奉_テ天_ノ省_及吉_林

省南部ニ於_テ左_ノ記_特

定_ス鑛山_ニ關_ステ_ハ日_本

臣民ニ於_テ之_ノ速_ニ調_査

上_ニ選_定ス_ル節_ハ支_ナ那

國政府試掘又ハ採掘
ヲ允許スハ但シ鑛業條
例確定ニ至ル迄ハ現行辦
法ニ準據スルモノトシ
テ附屬公文ヲ以テ約定スル
ニ至リ故ニ此等一定ノ
鑛山ニ付テハ支那現
行ノ規定ノ例外トシテ帝國
臣民ニ於テ之ヲ經營スル
得ルモノ而シテ其ノ納稅其鑛

業權者、權利義務其

也、事項、付支那鑛業

條例確定、至ルトキハ總

同條例、依リ支配セ

ル

下奉天省

所在地、縣名、鑛種

牛心台、木溪、石炭

田付溝、木溪、石炭

杉松崗、其海龍、石炭

鐵廠

通化

石炭

暖地糖

錦

石炭

鞍山站一帶

遼陽縣日
本溪縣三日

鐵

工

二 吉林省南部

來

山

杉松崗

和龍

石炭

鐵

缸

吉林

石

炭

夾皮溝

樺甸

金

第四項

鴨綠江對岸及間島

於心朝鮮人地位

以上ハ東部内蒙古及南滿洲ニ
於テハ帝國臣民ニ適用セラルハ
キ新條約ノ規定ナリ而シテ朝
鮮人モ亦帝國臣民トシテ等シ
ク此等ノ規定ニ適用シ受クルガ
ト本邦内地人ト何等差異アル
コトナシ即チ彼等ハ東部内
蒙古ニ來往シ農墾及附隨工
業ヲ營ミ又同一目的ヲ以テ
其ノ内地ニ居住シ南滿洲ニ

於此從來如以鐵道附屬地
又開港地之居住スルヲ要
地自由ニ其ノ内地ニ來往ニ土
地ノ商租之各種ノ業務ニ從事
スルヲ得ハ之茲ニ特ニ一言スルキ
ニ鴨綠江對岸國境地方及間島
ニ於テハ朝鮮人ノ地位ナリトス
第一鴨綠江對岸地方ニ於
テハ朝鮮人ノ地位ニ關シテハ
光武三年韓清條約第十二

條、本條約締結後國境貿易
易ラ整理スル為關稅及諸規
則ヲ制定スル既ニ境ヲ越
ヘテ墾土地ヲ有セル者ハ引續キ
其ノ生業ヲ營ムヲ許容セラル
ハ、將來ニ於ケル越境移住ハ
紛爭ヲ避クル為之ヲ禁止スハ、
竝ニ開放スヘキ市場ニ追テ決定ス
ヘトノ規定アリタル之ニ基キ
兩國間ニ何等ノ協定ナカリシヲ

以爲移住及移住民ノ律ニシテ
規則制定セラルルコトナク
事件日起
ル毎ニ兩國憲憲ニ於テ便宜
ヲ措置シ執リ來レリ而シテ
將來
ニ於テ移住人禁令モ亦實行
セラルルコトナク
新ニ移住スル朝鮮
人ニ對シテ時ニ土地ヲ取得スルコト
ヲ禁止シタル場合アリシモ大體
於テ彼等ハ土地ヲ租借ニ關
連
スル事實上重大ナク故障ナ

受少ル事ト夫ク引續キ韓國併合
後今日ニ及ハリ然レトモ法律國土
ニ於テハ彼等ノ地位力極メ弱テ
不安固ナリシヤ言フ候モ其ノ生
活ハ一ニ支那官憲ノ意思ニ左
右セラレ殊ニ地方警察法令及
課税ハ云フニ及ハス其ノ裁判管
轄ニスル無條件ノ服従ヲ要求
セラルルヲ常トセシナリ左ニ今日支
兩國間ニ此等移住民ノ地位及

移住ニ関シ適當ノ取極ヲ為スノ
必要アルハ夙ニ當局ヨリ竭ヘラレ
タル所ナリトス今固締結セラレタル
新條約ニ即チ之ニ依リ彼等ノ地位
ヲ確保シ彼等ニ適用セララルベキ歟言
察法令ノ課税ノ性質ヲ一定シ且裁判
管轄カ原則トシテ帝國領事官ニ在
ルコトヲ明示スルヲ以テ此等移住鮮
人及將來移住セシトスル者ノ地位ハ
實ニ従前ニ比シ顯著ナル差異アル

ニ至レリ

第三條 間島（茲ニ間島ニ所謂圖們江北地方雜居區域ヲ指稱シ南ハ圖們江東ハ嘎呀河西北ハ一帶ノ山脈ニ沿フ定線ヲ以テ劃セル地域ニシテ間島ニ關スル日支協約附屬圖面ニ明示セリ）ニ於テハ曩裏ニ締結セラレタル間島協約ニ依リ朝鮮人ノ地位ヲ確定セリ而シテ右條約ノ規定上朝鮮人ニ關シ間島ヲ商埠地及

墾地ハ兩者ニ分ツテ得ヘシ

甲、商埠地

間島協約ニ依リ支那政府ハ間島ニ於テ龍井村、局子街、頭道溝、百草溝等一定ノ都市ヲ開放シテ商埠地トシ外國人ノ居住及貿易ヲ許容セルヲ以テ朝鮮人モ本邦内地人及外國人ト等シク此等ノ都市ニ來往居住シ其ノ亨有スル權利ニ關シテハ法律上本邦内地人ト異ナル處ナク

引續キ韓國併合後今日ニ及ヒリ

乙 墾地

商埠地以外ノ地域即チ所謂墾地

ニ在リテハ朝鮮人ハ

一、居住ノ自由ヲ認メラル間島協約

第三條ノ規定ニ曰ク

「清國政府ハ從來ノ通圖們江北

ノ墾地ニ於テ韓民ノ居住ヲ兼

准ス

二、土地所有權ヲ享有スルコトヲ得同

條約第五條ニ圖們江雜居區域
内ニ於テハ韓民所有ノ土地、家屋
ハ清國政府ハ清國人民ノ財産
同様ニ完全ニ保護スヘシトノ規定
ニ依リ朝鮮人ハ從來墾地ニ於
テ土地所有ヲ認メラレ其ノ土地
及家屋ニ對シ保護ヲ受ケタル
ナリ

三、次ニ彼等ハ支那ノ法權ニ服從
シ支那地方官ニ管轄裁判ニ歸

ス而々民刑訴訟ニ支那官憲ニ
於テ支那國ノ法律ヲ按照シ公
平ニ裁判スハク日本國領事官
又ハ其ノ委任ヲ受ケタル官吏ハ自
由ニ法廷ニ立會フコトヲ得但シ
人々ニ關スル重案ニ付テハ須ラ
ク先ツ日本國領事官ニ知照ス
ハキモソトス日本國領事官ニ於
テ若法律ヲ按照セシテ判斷
セル廉アルヲ認メタルトキハ公正

裁判期セムカ為別官吏
派シテ覆審スルキコトヲ支那國
ニ請求スルコトヲ得（第四條）
以上規定ニ依リ聞島ニ在リテ
商埠地ニ於ケル朝鮮人ハ帝國
臣民ト同ク取扱フ受クルモ商埠
地外ニ所謂租土地ニ在リテハ支那
ノ裁判官轄權ニ服シ警察法
令及課税ニ服従スルヲ條件ト
シテ以テ地域ニ居住シ且土地

所有權ヲ享有スルコトヲ認メ
タルハモトナリ

今開島ハ南滿洲ノ一部ナリ
トセテ南滿洲ニ關スル新條約
ノ規定ハ鴨綠江對岸地方ニ於
ケルト同様當然開島ニ適用セ
ラレ其ノ結果トシテ現行ノ規
定ハ新條約ノ範圍ニ於テ變
更セラレタルキヤ或ハ開島ハ特
殊ノ地域ニシテ從來特殊ノ條

約ヲ必要トシタルヲ以テ今面ノ
條約ニ依ル一般の規定ノ例外
ヲ為スモノト解釋スハキヤハ疑
問ナリ此點ニ對スル帝國政府
並支那政府ノ見解ハ未タ之ヲ
知ルニ由ナシ唯新條約カ間島
ニ適用セラルルモノトモ左ノ結果
ヲ來スハトモ

不南滿洲ニ關スル條約ニ依レ
公民刑訴訟ハ被告人所屬國

官憲ノ管轄ニ屬スルヲ以テ墾

地ニ於テハ朝鮮人カ被告ト為

リタル場合ニハ從來ノ如キ支

那官憲ノ裁判管轄ニ屬シテ

帝國領事官ノ管轄ニ復歸

スル土地ニ關スル民事訴訟

ニ付テハ共同審判ニ附セラル

ベシ

口朝鮮人ハ從來ノ如ク土地ヲ

所有スルヲ得スニテ將來之

ヲ商組セサルハカラス
ハ朝鮮人ハ從來、如シ支那
官憲單獨ニ決定施行スル
警察法令及課税ニ服従ス
ルヲ要セズ必スヤ帝國領事
官ノ兼認ヲ得タルモノノ適用
ヲ受クハキナリ
此等ノ場合ニ起ルハキ疑問ノ主要ナル
モノ左ノ如シ
ハ從來既ニ朝鮮人カ所有セル

土地ハ今後總ニ商租トシテ

取扱フハキヤ或ハ既得權ト

スルヲ列續キ存在スハキヤ

口既得、土地所有權存在スト

セハ斯ル土地ニ關スル訴訟ハ

管轄ハ從來、如ク支那官憲

ニ在リヤ又ハ商租ノ場合ト同

様共同審判ニ附スハキヤ

ハ斯ル土地所有者ニ對シ適用

スハキ警察法令及課税ハ如何

南滿洲及東部內蒙古ニ関スル
新條約力間島ニモ適用アリト
セハ間島ニ於テ鮮人所有一土地
ニ関スル前記疑問ノ三點ハ日支
兩國ハ交渉ニ依リ容易ニ解決セ
ラルベキモ若シ間島ハ南滿洲ノ
一部トシテニ拘ラス又朝鮮人ハ今
日日本臣民ナルニ拘ラズ又間島協約
ハ南滿洲ニ関スル日支新條約
條例外トシテ其効力ヲ存續ス

新條約ハ開島ニ適用スル也ハ
當ニ同條約ハ法文解釋スル
當ニ得サレトス南滿洲ニ於
テ内地人及朝鮮人開竝ニ朝
鮮人相互開ニ於テ其取扱上
大ナル扞格ヲ来ト延テ帝國政府
ニ於テ抱持セラルル朝鮮統治
政策上大ナル支障ヲ来ササルヲ得
ス何トナレハ開島ト稱スルハ地形
上便宜ノ總稱ニ過スニテ和龍

縣及延吉縣ノ全部ト汪清縣、
一部ヨリ成ル地域ヲ謂ヒ朝鮮人
ハ同地方ニ密集スルニ非スル
三縣ヨリ東ニ連續スル琿春縣
竝西ニ連續スル安圖縣敦化縣
以下十六縣ニ亘リテ居住ト其
總數ハ概算三十萬ニ上リ之カ
約半數ハ所謂間島ニ居住スル
ニトナルカ故ニ間島ハ鴨綠江及
豆滿江ノ對岸ナル朝鮮人居

住地方ノ間ニ今在スルニ拘ラス此
地域ニ在ル朝鮮人ノ間島協約
ニ依ル特別ノ取扱ヲ受ケ西江對
岸一帯ノ地方ニ居住スル朝鮮
人間ニ於テ一部ハ新條約ニ依
リ我法權ノ下ニ立ケ他、一部ハ
支那法權ニ服從セシムルハ固ヨリ
其當ラ得サルノミナラス其朝鮮
人カ一縣ヨリ他縣ニ移ルニ依リテ
彼我異リタル法權ニ服從スルノ

不便勿論所謂朋島內諸縣
上之隣接不儿諸縣東居任朝
鮮人朋之相互錯綜ハ事件若
ハ間島ニ於テハ内鮮人朋ノ訴
訟事件ハ何レハ法權ニ依リ之ヲ
處理スルモ又訴訟事件以外ノ
日常關係ニ於テハ同一紛雜ニ
逢着スル之ヲ解決上非常ナル困
難ヲ来スル之ヲ見ルハ固チ
加之帝國政府ハ韓國併合

際朝鮮人ノ國法上ノ地位ニ付明
治四十三年八月七日ノ閣議ニ於テ
朝鮮人ノ法令又ハ條約ヲ以テ別
段ノ取扱ヲ為スコトヲ定メタル場
合ノ外ハ全然内地人ト同一ノ地
位ヲ有スルコトヲ決定セラレ其所
謂條約トハ將來ニ於ケル一般的
除外例ヲ豫想シタル言非ス當
時邊ニ改訂シ難キ事情アリタ
ル間島協約ノ存在ニタルカ為メ

此除外例ヲ指シタルモノニシテ初ヨ
リ條約ヲ以テ朝鮮人ニ差等ヲ
設ケトスルハ趣旨ニ非ス歐米各
國ニ於テモ其ノ殖民地又ハ保護
國人民ニシテ外國ニ居住スル者ニ
對シテハ母國民同様ノ保護ヲ與
フルヲ常トセリ況ンヤ朝鮮人ノ如
キ帝國政府ハ之ニ内地人同様ノ
取扱ヲ爲ス者ニ對シ支那ニ於テ
内地人ト異ナレバ地位ニ置キ又鴨

緑江及豆満江對岸ニ居住スル
 同一朝鮮人間ニ前述ノ如キ差等
 ナ設ケントスルハ意ニ在外朝鮮人
 間ニ惡感ヲ來スベキニ止ラス在朝
 鮮全般ノ人民ヲシテ帝國ノ誠
 意ト感信トラ疑ハシメ統治上ニ
 甚カラサル影響ヲ及ボスノ虞ナシ
 トセス又況ニヤ間島ハ朝鮮ニ接
 壤スルト我法權ノ之ニ及ハサル間
 係トニ因リ從來我政策ニ悞焉

タル朝鮮人ハ之ニ移住スル者多ク殊ニ近來露國ニ於テ帝國ニ好意ヲ表シ朝鮮人ハ取締ヲ嚴重ニ爲シタル爲メ不逞ノ朝鮮人ハ朋島ニ集合シ同地ヲ排日運動根據地ト爲ス状態ナルニ拘ラス鴨綠江及豆満江對岸ナル他ハ一帯ニ於ケル朝鮮人ハ之ヲ我法權ノ下ニ置キ獨リ朋島ハ朝鮮人ヲ除外スルノ結果ト爲シ於テ

公平生帝國ノ政策ニ不滿ヲ抱
外ハ朝鮮人カ間島ヲ排日運動
策源地トスルノ氣勢カ一層
助長スルニ至ルキカ故ニ元來間島
ハ鴨綠江及豆滿江對岸ナル一
帶ノ地方ハ一部トシテ固ヨリ南
滿州ノ一部ナルコト疑ナク又今日
朝鮮人ハ日本國臣民ナルノ事實
ニ徴シ南滿州及東部内蒙古
ニ關スル日支條約ハ當然間島ニ

於ヶル朝鮮人ニモ適用ヤリト之問
島協約中當時韓國ト支那
國トノ國境ヲ確定シタル第三條
ノ如キハ國ヨリ土地ノ領有及其
境界ニ關スル國際協約ナルカ故ニ
國際法上他ノ條約ヲ以テ之ヲ變更
更セサル限り其有效ニ存續スルキ
第四條ノ如キ韓民ノ管轄及法
權ニ關スル規定ハ新條約ニ依リ
當然消滅シタルモノト解釋スル

之適當トスルニ付、明治三十八年日支間滿洲
ニ関スル條約第十一條ニ「滿韓
國境貿易ニ関スル相互ニ最惠
國ノ待遇ヲ與フヘシト」ノ規定アリ
此ノ規定竝既ニ述ビタル國境地
方ニ於テハ移住民ノ地位及狀態
ヲ考慮シ國境貿易ニ関シ何等
必要ナル取極ヲナスノ必要アルハ
此ノ點ニ付テハ他日研究ノ機會

アルコトラ信スルモノナリ

新條約第八條ハ「滿洲ニ関スル
日支現行各條約ハ本條約ニ別ニ
規定スルモノノ外一切従前ノ通り
實行スヘシ」ト規定スルヲ以テ以
上述ハタル各事項ニ関シテハ果タ
シテ如何ナル點ニ付現行規定カ新
條約ニヨリ変更セラルルヤヲ決ス
ルハ慎重ノ研究ニ待タサルヘカ
ラスト信ス

第四節 鐵道

一 南滿洲鐵道及安奉鐵道

南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約
第一條ニ「兩締約國ハ旅順大連ヲ
租借期限並南滿洲鐵道及安奉
鐵道ニ關スル期限ヲ何レモ九十箇
年ニ延長スルキコト」ヲ約ニ附屬
公文ニテ「南滿洲鐵道還付期限
西曆二千年三月一日至リ滿期
トナルモノ
尚其ノ原條約第一條ニ記載セラル

轉開始自ヨリ三十年後支那
國政府於年買戻スル得ル一節
之ヲ無效トスル又安奉鐵道期
限ハ西曆二十七年ニ至リ滿期トス
ハ中旨ヲ規定スル

二吉長鐵道及吉會鐵道
南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約
第七條ニ曰ク

一南支那國政府ハ從來支那國ト各
外國資本家トノ間ニ締結シタル

鐵道借款契約規定事項ヲ標準
ト爲シ速ニ吉長鐵道ニ關スル諸
協約該契約ノ根本的改訂ヲ行
フニキコトヲ欲ス

將來支那國政府ニ於テ鐵道借
款事項ニ關シ外國資本家ニ對
シ現在ノ各鐵道借款契約ニ比
テ有利ナル條件ヲ附與シタルトキ
ハ日本國ノ希望ニ依リ更ニ前記
吉長鐵道借款契約ノ改訂ヲ行

名へる上

然ルニ支那政府ハ開島ニ関スル協
約第六條ニヨリ将来吉長鉄道ヲ
延吉南境ニ延長シ韓國會寧ニ於
テ韓國鉄道ト連絡スルヲ其ノ一切ハ
辦法ニ吉長鉄道ト一律タルニ關
辦ハ時期ハ清國政府ニ於テ情形
ヲ酌量シ日本國政府ト商議ノ上之
ヲ定ムルニキ旨ヲ約セラル以前掲
吉長鉄道ニ関スル諸協約迄契約根

本の改訂ヲ行フトキハ吉會鐵道ニ關
スル辦法モ亦自ラ之ニ伴ヒ變更セ
ラルヘキモノトス

三、終ニ鐵道ニ關シテ支那國政府ハ
將來南滿洲及東部内蒙古ニ於テ
鐵道ヲ敷設スル場合ニ自國ノ資
金ヲ以テスヘク若シ外資ヲ要スル
トキハ先ツ日本國資本家ニ借款ヲ
高議スルモノトシ越旨ヲ附屬公文ニテ
聲明セリ

第三節 借款

借款ニ関スルハ前節鉄道ニ関スル
借款ニ外同シテ附屬公文ニヨリテ支
那國政府ハ南滿洲及東部内蒙古
地方ノ各種税課（但シ既ニ支那中
央政府借款ヲ擔保トナレル塩税関税
等ノ類ヲ除ク）ヲ擔保トシテ外國
ヨリ借款ヲ起サムトスルトキハ先ツ
日本國資本家ニ商議スヘキコトヲ
聲明セリ

第四節 顧問及教官

支那國政府ハ將來南滿洲ニ於テ
政治財政軍事警察等ニ関スル
外國顧問教官ヲ僱聘セムトスルトキ
ハ最先ニ日本人ヲ僱聘スヘキ旨ヲ
附屬公文ニヨリ聲明セリ

最初帝國政府ノ目的ハ支那中央
政府ニ政治財政及軍事顧問トシテ
有力ナル日本人ヲ僱聘セシヤルニ在
リタルヲ以テ提議内容セラレシテ

前記ノ如ク畢ル南滿洲ニ於ケル顧
問ニ付優先權ヲ有スルニ至リシナリ

結

論

論上全然支那

以上新條約之基礎上セル滿蒙
對於帝國權利權特ニ帝國臣
民降地位國府叙説スルヲ得タリ從
來本邦具眼人士志ヲ入滿蒙
地ニ舒出ストスル者定住自由
土地ニ關スル權利ニ付何等
條約上ノ保障ヲ享有スルヲ
得ガ事ハ以テ鐵道附屬地若
ハ開港地以外ニ在リ
域ニ於テハ時ニ或ハ支那官
憲ハ迫害

外蒙ムリ或ハ本國ヲ拒絶セラルベシ或
邊土地ヲ對シテハ投資ヲ喪失シ事業
經營上ニ不便ト不安甚ク眞ニ識者
ニ於テ憂慮措カレハカネシヨリ
殊ニ南滿洲ハ各地就中鴨綠江沿
岸ニ於テ幾十萬ノ朝鮮人ノ如
未朝鮮國境ニ最モ近接シ直接朝
鮮總督府ニ權威ノ庇護ニ浴スル
部分ヲ除キ僻遠ノ内地ニ移住ス
ル者ニアリテハ事實上全然支那ノ

國權ニ服従ヲ要求セラレ帝國官憲
其威力ヲ以テ西北到底彼等各地
位ヲ安んずル手段ヲ求メ苦
シシ外左ハ内蒙古鞏固ヨリ列國
ノ目シテ帝國ノ勢力圏トナセル南滿
洲ニ於テは各種ノ施設ヲ完全ニ企
劃スルニ殆ト不可能ニ至リ徒ニ口滿
蒙開港ノ必要ヲ唱フ者モ其行動之
伴ニテ得テハ憾々リトナリ今ヤ滿
蒙ニ於テハ帝國ノ勢力ヲ樹立シ經

濟的利益ヲ進捗せしめ、機運ハ未
ニ帝國臣民ハ滿蒙ハ内地ニ居住
ルヲ得ル其要何處地ニ在ル哉治外
法權ハ特權ハ屬人給ニ追隨スル
ナラス帝國領事官ノ承認セサル
ト課税ニハ斷然テ服從セサルコト
ルノ權利ヲ有スル生命財産ハ是
ヲ安固ナルヲ得ヘク事業經營ハ利
便ハ是レヨリ各方面ニ求メ得
ルナリ

今新條約、本年六月八日調印、
日ヨリ直ニ效力ヲ生シタルト雖モ帝
國臣民ノ居住往來課税土地高租等
ニ關スル條項ハ支那國政府ニ於テ諸
般ノ準備ヲ整フル必要上同條約
調印後三ヶ月間其ノ實施ヲ延期ス
ヘキコト附屬公文ニテ約定セラレタル
カ故ニ該期間、終ニ至ル迄ハ依然
現状ヲ持續スルモノト云フヘシ
然リト雖モ翻テ考フルニ此ノ條約

上ノ利權ハ事實之ヲ保護シ且遺

憾ナク之ヲ利用セシムル機關アルニア

ラサレハ終ニ其ノ效果ナキニ終ラントス

思フニ東部内蒙古ニ於テ開放セラル

ヘキ哉多ク都市ニハ必スヤ帝國領

事館ノ設置ヲ見ルニ至ルヘク此クテ

帝國ノ利益ト帝國臣民ノ權利ハ充

分擁護セラレルルヲ得ヘキナリ南滿

洲ニ在リテモ亦其ノ内地樞要ノ都

市ニ支那政府ハ承諾ヲ得テ領

事館ヲ設置スルハ刻下ノ急務ナリ
ト云ハサルヲ得ス就中移住鮮人ノ
集團ヲ成セル主要ナル各地点ニ帝
國警察官及憲兵隊ヲ常駐セシムル
ハ彼等ノ保護及取締ノ上ニ於テ極
メテ有效ナル手段ナルノミナラス彼
等ニ對スル諸般ノ施設モ亦領事
館所在地ト共ニ此等ノ地矣ヲ根
據トシテ企画實行シ得ルノ便宜アリ
然リ而シテ西江沿岸一帯ノ地方ニ對

シテハ此ノ点ニ付特別ノ考慮ヲ費
 ヤササルヘカラサルモノアリ今此等ノ地域
 ニ於ケル朝鮮人ハ現ニ其ノ数三十萬
 ト稱セラル而モ殆ント彼等ノ全部ハ
 未タ朝鮮ニ對スル新政ノ本義ヲ
 悟ラス時ニ空想ニ驅ラレテ排日ノ
 行動ニ奔ル者アリ或ハ未タ蒙昧ノ
 域ニ踰躐シテ文化ノ惠澤ニ浴セサル
 者アリ彼等ヲ統御シ彼等ヲ指
 導シ以テ忠良ナル帝國臣民トシテ

滿蒙ニ於ケル帝國ノ勢力ニ一大寄
與ヲナサシムルハ獨リ新條約ノ趣
旨ヲ貫徹スル上ニ必要ナル措置ナル
ノミナラズ韓國併合ノ目的ヲ遂行
スル上ニ於テモ亦極メテ大切ナル事
柄ト云ハサルヲ得ズ依テ潛ニ思フニ
越境朝鮮人等カ其ノ居住セル邊
境地方ニ於テ有スル事實上ノ勢力
ハ其ノ根底頗ル深キモノアリ寧ロ
此等ノ地域ハ朝鮮領土ノ延長ナリト

解スルニ依リ始メテ彼等ニ臨ムヘキ

正當ナル方策ヲ得ヘシト而シテ此ノ見

地ヨリスレハ此等ノ地域ニ於ケル朝鮮

人ニ對シ恩威以テ彼等ヲ制御シ彼

等ヲ指導シ彼等ヲシテ帝國ノ忠

良ナル臣民タルヲ自覺セシムルノ手

段方法ニ至テハ朝鮮總督府ノ治下

ニアル朝鮮人ニ對スルト何等ノ差

異アルヘカラスン茲ニ朝鮮總督府當

局ニ於テ此ノ基礎ニヨリ迅速ニ政

究スル、必要アル二三ノ事項ヲ掲ケ以
テ本文ヲ結ハントス

一、帝國領事館及分館ヲ設置スヘ
キ主要ナル都市ニ研究

二、警察署及憲兵隊駐在地点ノ研究

三、鮮滿帝國警察官憲及憲兵隊ノ

共同動作及相互ノ聯絡就中其ノ

人員ノ配置等ニ關スル便宜方法

四、支那警察顧問僱聘

五、不良鮮人ノ退支處分及其ノ實

行、場合ニ於ケル滿鮮帝國官憲
相互、聯絡

六、領事裁判ト本府裁判所ト、關係
七、教育機關、設置

八、産業開發上、施設

九、金融機關、設置

十、醫療救恤等ニ關スル事項

十一、本府迄領事官、事務上、聯絡

大正四年九月十三日 朝憲機第三五二號



移住鮮人ノ提訴件數増加ニ
関スル件

間島派遣將校ヨリ次ノ報告アリ

タリ

司法部長官

八月二十五日以来日支新協約

實施ニヨリ移住鮮人ノ日本官

憲ニ対シ民刑事ニ関スル提訴

シ有ス者激増シ來リ是力内

容左ノ如シ

一

提訴ノ狀況

今次新協約ニ依リ一般鮮人

・對シ裁判權ノ日本ニ歸屬

シタル狀況ハ風聞等ニヨリ

殆ト周知スルニ至リタル結

果商埠地附近在在鮮人ハ續

續出願スルニ至リタルモノ

ニ至リ今試ニ八月二十六日

以降九月三日ニ互リ間島日本

總領事・於テ受理シタル件

數及以審判紙ノ如シ
尚僻邊ノモハ新協約ノ内
客及實施ヲ確知セサル者多
ク刺入地方支那官吏及親支
派鮮人等ノ新協約力何等間
島ニ効力ヲ及ボスヘキモ
ニアラサル旨力説スルニ依
リ是カ實施ノ真否ヲ疑ヒ居
レリ今後我官憲ノ決裁状況
ヲ周知スルニ至ラハ大多數

二

提訴者ヲ見ルニ至ルヘシ
提訴鮮人ノ老評
提訴シタル鮮人ハ我官憲、
於テ未タ機關ノ擴張ヲ爲サ
サル尙事件ノ決定長引キ滯
在ノ經費等ヲ空費スルニ至
ルヲ嘆ク者アリ又民事々件
ノ如キ判決ノ執行ニ關シ日
本官憲ニシテ如何ニ之ヲ確
實ニ執行シ又保障セントス

三 意見

ル中支那人間トノ係争事件
ノ如キ是等執行及保障ノ確
實トナサル限り却テ反撥的
迫害ヲ招クニ至ルヤソ保セ
スト杞憂ニ居レリ

以上ノ状況ニヨリ此ノ際速
ニ是等ニ対スル設備ヲ整ヘ
劈頭第一歩ニ於ケル我利権
ノ實施ト咸嚴シ保ツハ焦眉

、急務卜恩料入

以上

本書發送先

總督

政務總監

(總務局長)

陸軍大臣

參謀總長

關東都督

軍司令官

師團長

憲兵司令官

內閣書記官長

內務次官

外務次官

日本總領事。於。受理件數及內容

受理
月日

內

容

八月二十三日

証書喪失。依。貸借取消。件

同 二十七日

金錢貸借關係。件

同

家屋建築工事委任。關。件

同 三十日

支那官憲。罰金立替不拂。關。件

同

牛支換取庚方請求。件

同

牛竊盜犯告訴。件

同

食塩密輸入。關。件

九月一日

恐喝取財。關。件

九月一日

毆打傷害。關。件

同

不當請求金取消。關。件

同

詐取金返還請求。件

同

強奪牛返還請求。件

同

藥代辦償方請求。件

九月二日

奪取粟取庚請求。件

同

食塩密輸。付監禁者放免方交涉願。件

同

不法監禁者放免方交涉願。件

同 三日

不法徵稅。關。件

同

面取庚請求。件

間嶋在住鮮人ニ對スル司法關係

一、明治四十二年九月四日ノ日清協約ニ依リ圖們江
北方墾地内ニ鮮人カ自由ニ居住シ得ルコトヲ認
メ龍井村、同子街、頭道溝、百草溝ヲ除ク以
外ノ雜居區域ニ居住スル鮮人ハ支那ノ法權ニ
服スルコトヲ約定セリ

二、明治四十三年八月二十九日條約ニ因リ鮮人ハ日本
臣民タル身命ヲ取得セルモ此ノ協約ハ依然トシ
テ其ノ效力ヲ保有セリ

三、大正四年五月二十五日南滿州及東部内蒙古ニ關

スル條約第五條ニ依リ該地方ニ發生セル民刑
訴訟事件ニシテ日本臣民カ被告タルモノハ日本
領事之ヲ裁判ス一キコトヲ定メ（土地ニ關スル訴訟ニ
付特例アリ）此ノ條約ハ間嶋居住ノ鮮人ニ付
テモ適用アリト解セラルル結果前記日清協約
中之ニ及スル部分ハ其ノ效力ヲ失フニ至レリ

四、從テ間嶋居住ノ鮮人ニシテ將來（イ）刑事事件

ニ付被告ト爲リタル場合、（ロ）民事事件ニ付

内地人、支那人又ハ外國人ヨリ被告トシテ訴ヘラレ
タル場合、（ハ）鮮人相互間ニ於ケル民事訴訟

ハ總テ日本領事ノ裁判ヲ受クルストナリタル
モノトス（土地ニ關スル日支兩國民間ノ民事訴訟ハ
兩國官吏ノ共同審判ニ付セラル）但シ間嶋ノ内局
子街外ニ箇所ノ開放地ニ居住スル鮮人ニ付テハ
本来日本ノ裁判權行ハレタルモノニシテ本條約
ニ因リ初メテ此ノ結果ヲ生シタルモノニ非ラス

五、間嶋ニ在ル鮮人ハ其ノ數頗ル多キヲ以テ朝鮮
トノ關係自ラ他ト異ルモノアリト雖法律上ノ見
地ヨリ之ヲ觀レハ同シク是レ帝國カ海外法權
ヲ有スル地域ノ一ニシテ間嶋領事ノ行使スル裁

判權ハ特別ノ規定アルモノヲ除クノ外ハ帝國カ

治外法權ヲ有スル他ノ地域ト同シク本國即チ

内地ニ行ハルル一般法ニ從フヘキコト勿論ナリトス

乃チ鮮人ニ對シテモ日本臣民ニ對スル普通法

トシテ日本法權ノ及フ範圍内ニ於テハ當然日本

臣民ニ追隨シテ其ノ效力ヲ有スル内地ノ刑法

刑事訴訟法民法商法民事訴訟法（特ニ除外

シタルモノハ之ヲ除キ）ヲ適用スヘキモノトス朝鮮ノ制

令、府令ハ限地的法令ニシテ朝鮮内ニ限り其ノ

效力ヲ有スルニ過キサルコトハ疑ヲ容レサル所ナルヲ

以テ間嶋ニ在ル鮮人ニ對シ其ノ適用ナキコト最モ
明白ニシテ鮮人カ内地ニ居住シ又ハ支那若ハ暹羅
ノ如キ帝國カ治外法權ヲ有スル國ニ居住スル場
合ニ於テモ之レカ適用ナキニ同シキナリ

六、間嶋居住鮮人ノ裁判ニ付朝鮮ノ法令ヲ適用
セサルコト上述ノ如シトセハ果シテ如何ナル結果ヲ
生スヘキヤ其ノ主要ナルモノヲ考フルニ

イ朝鮮刑事令ニ依レハ鮮人ノ犯シタル、謀殺、故
殺、尊屬親長殺、強盜強姦、強盜強姦、
強盜ノ諸罪ニ付テハ舊韓國刑法大全ノ刑

律ヲ用井且類似ノ所為アルトキハ引律比附シ
 テ所罰スルコトヲ得ルニ拘ラス此ノ規定ヲ適用
 スルコト能ハスシテ内地ノ刑法ニ依リ處断セサル
 一カラサルヲ以テ刑ノ輕重ト犯罪ノ構成條件
 トニ多少ノ差異ヲ生スルヲ免レス

口内地法ハ管刑ヲ認ナサルヲ以テ朝鮮管刑令ノ
 如ク鮮人ニ對シ管刑ヲ科スルヲ得ヌ但ス其ノ
 本刑タル懲役、拘留、又ハ罰金ニ處セサルヘカ
 ラス

ハ保安法ノ適用ナキカ為同法規定ノ所為就中

政治ニ關シ不穩ノ言論、動作ヲ爲シ又ハ他人ヲ煽動教唆或ハ使用シ又ハ他人ノ行為ニ干涉シ因リテ治安ヲ妨害セル者アルモ之ヲ保安法ニ因リ處罰スルコトヲ得ス但シ此ノ内或種ノ所爲ニ付テハ治安警察法ノ適用アリ

ニ朝鮮民事令ノ適用ナキ結果鮮人ノ能力、親族及相續ニ付テモ朝鮮ノ慣習ニ依ルコトヲ得ス凡テ民法ノ規定ニ從ハサル一カラス

ホ又鮮人相互間ノ法律行為ニ付テ公ノ秩序ニ關セサル規定ト異ナル慣習アル場合ト雖常ニ

此ノ慣習ニ依ルコトヲ得スシテ單ニ民法第九十二條所定ノ場合ニ制限セラルルモノトス

ハ訴訟手續ニ付朝鮮ニ於テ特ニ設ケタル除外例譬々ハ犯罪即決ニ関スル件民事争訟調停ニ関スル件其ノ他民事令刑事令中ニ存スル幾多ノ変例ハ何レモ施行セラレサルヲ以テ手續ノ簡省迅速ヲ計ルニ付多少ノ不便ナキヲ得ス

七、以上ノ中實際上不便ナルハ保安法ノ適用ナキコトナリ又最モ忍ノヘカヲサルハ鮮人ノ親族、相續又ハ

能力關係ニ付内地法規ヲ適用スル點ニシテ之カ
爲民事上種々ノ難問題續出シ鮮人ノ私權保護
上甚シキ缺陷ヲ生スヘシ而シテ之カ救濟策トシテハ
勅令ヲ以テ間嶋在住ノ鮮人ニ適用スヘキ特別規
定ヲ設クルノ外ナカラム（間嶋ハ帝國憲法ノ施行地域
外ナルヲ以テ憲法ノ法律事項ト雖勅令ヲ以テ規定
スルヲ得一キハ勿論ナリ）然レトモ之ヲ鴨綠江下流ノ
對岸ニ居住スル鮮人ニ對シ現ニ内地法規ヲ適
用シテ怪マサルニ想到セハ果シテ法制局ニ於テ勅令
ノ發布ニ同意スヘキヤ頗ル疑ナキヲ得ヌ

附言

明治四十四年法律第五十一號（間嶋ニ於ケル領事官
ノ裁判ニ關スル件）ニ依リ朝鮮總督府裁判所ノ
管轄ニ屬シタル犯罪事件ニ付同裁判所力適
用スルキ實體法規ハ間嶋ニ行ハルル法規ナルカ爲
朝鮮ニ施行セラルル法規ナルヤハ一ノ疑問ニ屬ス
ルカ如シト雖仔細ニ之ヲ研究スレハ事理自ラ明
白ニシテ疑ヲ容ルルノ餘地ナキヲ知ルヘシ惟テニ
犯罪ハ制裁ヲ附シタル法規違反ノ行爲ナルヲ以
テ間嶋ニ於ケル犯罪ハ間嶋ニ行ハルル法規ニ適

及シタルモノナラサルハ論ナク此ノ理論ハ其
ノ裁判管轄ノ所屬如何ニ依リ變更ヲ来スコトナ
シ而シテ間嶋ニ行ハルル法規ハ其ノ被告カ内地人
ナル場合ハ勿論朝鮮人ナル場合ト雖内地法規
ナルコトハ本文説明セル所ノ如キヲ以テ總督府裁
判所ノ適用スヘキ法規モ亦内地法規ナルコト勿論
ナリトス人或ハ朝鮮總督府裁判所カ朝鮮ニ施
行セラレサル法規ヲ適用スル權限ナキコトヲ難スル
アラソ何リ和ラム前記法律第五十一條カ總督府
裁判所ニ間嶋ニ行ハルル法規ヲ適用スヘキ權限

ニ交シ

ヲ與ヘタルコトヲ、若^ニ及之總督府裁判所ニ於テ朝
 鮮ニ施行セラルル法規ヲ適用スヘキモノトセハ其ノ
 適用法規ハ間嶋領事ノ適用シタル法規ト相
 異ルヲ以テ控訴ノ提起ニ因リ領事ノ裁判ハ常
 ニ取消ヲ免レサルノミナラス間嶋ニ行ハルル法規ト
 朝鮮ニ施行セラルル法規ト其ノ規定ノ内容ヲ
 異ニスル場合ニ於テハ救フヘカラサル奇怪ナル
 結果ヲ生スヘキハ説明ヲ要セサルヘシ